㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第286集

石　墨　遺　跡

（沼田チェーンベース地点Ⅰ）

関越自動車道沼田チェーンベース（沼田ＩＣ～月夜野ＩＣ）
設置事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

日　本　道　路　公　団
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

石墨遺跡(沼田チェーンベース地点Ⅰ)正誤表

- P28　3号土坑6行目　(誤)2類　→　(正)3類
- P28　4号土坑9行目　(誤)2類　→　(正)3類
- P38　包含層左段2･3行目　(誤)3･6･7類　→　(正)2･3･5･6類
- P45　10号住居右段5行目　(誤)3･4号ピット　→　(正)1･2号ピット
- P48　観察表No.4　(誤)簾縄文　→　(正)簾状文
- P114　下部キャプション　(誤)竜掘り方　→　(正)掘り方
- P118　下部キャプション　(誤)竜掘り方　→　(正)掘り方
- P120　29号住居左段3行目　(誤)5.21 × 4.14 m　→　(正)3.87 × 3.05 m
- P121　観察表No.1　(誤)笹切り　→　(正)糸切り
- P129　観察表No.2　(誤)口縁部右回転　→　(正)底部右回転
- P133　観察表No.9　(誤)横方向横撫で　→　(正)横方向篦撫で
- P137　観察表No.1　(誤)底部右回転　→　(正)底部回転
- P137　観察表No.2　(誤)回転削り　→　(正)回転篦削り
- P151　1号掘立柱建物左段4行目　(誤)P6　→　(正)P4
- P157　観察表No.16　(誤)燒し焼成　→　(正)全面に燒し状の吸炭
- P166　観察表No.5　(誤)燒し焼成　→　(正)全面に燒し状の吸炭
- P168　2号掘立柱建物右段2行目　(誤)Eライン　→　(正)Bライン

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第286集

石墨遺跡
ISHI ZUMI

（沼田チェーンベース地点Ⅰ）

関越自動車道沼田チェーンベース（沼田ＩＣ～月夜野ＩＣ）
設置事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

日本道路公団
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

昭和60年10月、東京都と新潟県を結ぶ関越自動車道が全線開通し、太平洋と日本海を結ぶ重要幹線としてその機能を果たすこととなりました。しかし利用が増えるとともに、積雪時におけるチェーン規制等での渋滞が問題化し、日本道路公団は沼田市内に下り方面のチェーンペース(チェーン装着所)を新設することとなりました。

この場所は、関越自動車道の本線工事に伴い沼田市教育委員会が発掘調査した「石墨遺跡」の南隣接地にあたるため、日本道路公団東京第三管理局から委託を受けた財群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成11・12年度に発掘調査を、平成12年度に整理を実施しました。

今回の発掘調査の結果、縄文時代前期、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良時代、平安時代の集落をはじめ、古墳時代後期の水田やそれらに伴う土器など多くの遺物が出土しました。

特に古墳時代の水田は、沼田市で2例目の発見であり、平坦地の小谷地を利用してつくられていました。当時も厳しい気候であったと思われる沼田地方での農業経営や農業技術を知る上で重要な発見といえます。また、弥生時代後期の住居は、古墳時代へと変貌していく混沌とした時代を明らかにする上で貴重な資料を提供してくれています。これらの成果は、沼田市教育委員会が調査した「石墨遺跡」の成果と併せてみることで、さらに沼田地方の原始・古代が明らかになっていくことを確信しています。

最後になりますが、日本道路公団東京第三管理局、同高崎管理事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、沼田市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行まで終始ご協力を賜りました。心から感謝の意を表すとともに、発掘調査に携わった担当者、作業員の方々の労をねぎらい序と致します。

平成13年3月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　小　野　宇　三　郎

例　　言

1．本書は関越自動車道沼田チェーンベース設置に伴う、石墨遺跡(沼田チェーンベース地点Ⅰ)の発掘調査報告書である。石墨遺跡(沼田チェーンベース地点)はⅠ及びⅡ遺跡に分かれるが、Ⅰ遺跡を㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団が、Ⅱ遺跡を沼田市教育委員会が担当した。平成13年3月25日までの刊行物における「石墨遺跡(沼田チェーンベース地点)」は「石墨遺跡(沼田チェーンベース地点Ⅰ)」に変更する。

2．本遺跡は沼田市石墨町字新田割2034番地他に所在する。

3．事業主体　日本道路公団東京第三管理局

4．調査主体　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

5．調査期間　平成11年5月10日～平成12年3月31日(平成11年度)
　　平成12年4月1日～平成12年6月30日(平成12年度)

6．調査組織

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

事務担当

常務理事兼事務局長	赤山容造	調査研究第2部長	水田　稔(平成11年度)
調査研究第2部長	能登　健(平成12年度)	管理部長	住谷　進
調査研究第5課長	西田健彦(平成11年度)	調査研究第6課長	相京建史(平成12年度)
総務課長	坂本敏夫	総務課総務係長	笠原秀樹
総務課経理係長	小山建夫	総務課係長代理	須田朋子　吉田有光
総務課主任	柳岡良宏　岡嶋伸昌(平成11年度)　森下弘美(平成12年度)		
総務課主事	片岡徳雄	嘱託員	大澤友治
事務補助員	吉田恵子　並木綾子　今井もと子　内山佳子　若田　誠　佐藤美佐子 本間久美子　北原かおり　狩野真子　松下次男　浅見宜記(平成11年度) 吉田　茂　蘇原正義(平成12年度)		

調査担当

主幹兼専門員	井川達雄(平成11年12月まで)　井野修二(平成11年11月まで)　洞口正史
主任調査研究員	新井英樹(平成11年度)
調査研究員	齊藤幸男(平成11年12月まで)　西原和久(平成12年度)
作業員	田中八千代　永町勝子　原澤満仲　平井恒子　水野さかゑ　小田島ふじの 小松原傳吉　関　清　丸山三代子　高山日出夫　峰川三七三　篠田貞子 平井　登　薗田　要　櫛渕　長　金子くみ子　三次てる子　木樽千代 内海範子　加藤延郷　星野ふみ子　笛木誠一　樋口　章　小林繁次　本木泰子 高田晴美　福田美津代　桑原　博　羽鳥正夫　田村貞子　大竹貞次　勝又　勝 高橋郁代　矢代安治　綿貫あけみ　田中こう　柏井英子　根岸美佐子 井口勇三　小林昌代　今井三郎　中澤輝子　串渕春江　岡嶋　勇　清水一郎 鈴木　隆　鈴木美枝子　横坂初美　田村美津枝　原　文江　竹野谷一哉 原　修平　市村里江子　金井清美　金井美佐子　牧野丈夫　松井照子

及川カネ子　安原ケサエ　白井宏明　齋藤恵美子　高橋美代子　岡村光子
松井京子　岡村はま江　横坂眞美子　都筑由加里　吉澤恵子　加藤卯三郎
諸田富士雄　広田春枝　林　八郎　広橋良和　石坂　恵　綿貫久一　星野静子
小杉　清　田村伸行　増田恵美子　小野悦子　深津常夫　吉田聡美
(以上平成11年度)
倉品節子　吉澤文子　中島祐子　生方麻由巳　菅沼容子　田辺トミ子
田代祐子　高橋武男　深代福太郎　根岸孝之　山田幸子　戸部有子　樹下友子
篠崎政夫　山田秋利　武井康夫　松村和恵　茂木明美　江尻加代子　高橋勇作
名渕真理子　竹之内すみえ　木村千鶴　秋山貞好　杉本京子　石川幸代
藤井桂子　(以上平成11・12年度)

7．整理主体　財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

8．整理期間　平成12年4月1日～平成13年3月31日

9．整理組織

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

事務担当

常務理事兼事務局長	赤山容造	調査研究第1部長	水田　稔
管理部長	住谷　進	資料整理課長	西田健彦
総務課長	坂本敏夫	総務課総務係長	笠原秀樹
総務課経理係長	小山建夫	総務課係長代理	須田朋子　吉田有光
総務課主任	柳岡良宏　森下弘美	総務課主事	片岡徳雄
嘱託員	大澤友治		

事務補助員　吉田恵子　並木綾子　今井もと子　内山佳子　若田　誠　佐藤美佐子
本間久美子　北原かおり　狩野真子　松下次男　吉田　茂　蘇原正義

整理担当

調査研究員	齊藤幸男	嘱託員	浅井良子
補助員	茂木範子　牧野裕美　小渕トモ子　飯田文子　船津博子		

10．本報告書作成の担当者は次のとおりである。

編　集　齊藤幸男

執　筆　V－3・VI－6　洞口正史(㈱群馬県埋蔵文化財調査事業団　主幹兼専門員)
灰釉陶器観察表　大西雅広(同　主幹兼専門員)
自然科学分析は本文中に執筆者名を記載。
上記以外　齊藤幸男

遺構・遺物図面整理、図版作成等
浅井良子　茂木範子　牧野裕美　小渕トモ子　飯田文子　船津博子

遺構写真　井川達雄　洞口正史　井野修二　新井英樹　齊藤幸男　西原和久

遺物写真　佐藤元彦(同　主幹兼係長代理)

遺物保存処理　関　邦一(同　係長代理)　土橋まり子(同　嘱託員)　小材浩一　高橋初美(同　補助員)

11．分析・委託

炭化種実同定・炭化樹種同定　株式会社 パレオ・ラボ

石材鑑定　飯島静男氏(群馬地質研究会会員)

テフラ分析・プラントオパール分析　株式会社 古環境研究所

鍛冶関連遺物分析　赤沼英男氏(岩手県立博物館主任専門学芸調査員)

墨書土器釈読　高嶋英之氏(群馬県立歴史博物館学芸員)

空中写真撮影・測量・遺構図トレース　株式会社 測研

12. 本遺跡出土遺物及び記録資料の一切は㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団で保管している。

13. 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の諸氏並びに機関に有益な指導、助言、協力を賜った。記して感謝の意を表したい。(敬称略)

石村崇史　井上慎也　角張淳一　小池雅典　薩見和広　佐藤麻美　大工原　豊　福田貫之　三宅教気

宮下昌文　月夜野町教育委員会　沼田市教育委員会

凡　　例

1. 調査区には国家座標(日本平面直角座標系第Ⅸ系)に基づき5m間隔のグリッドを設定した。X＝74.000km台、Y＝−69.000〜−70.000km台である。

2. 北方位は真北を示す。

3. 本書で使用した地図は以下のとおりである。

「石墨遺跡(沼田チェーンベース地点Ⅰ)位置図」　20万分の1地勢図「日光」「宇都宮」「長野」「高田」

「遺跡分布図」　5万分の1地形図「追貝」「沼田」「四万」「中之条」

「石墨遺跡(沼田チェーンベース地点Ⅰ)全体図」　沼田市都市計画図№2

4. セクション図・エレベーション図中の石は斜線で示す。また、土器には「P」と記した。

5. 遺構図・遺物図の縮尺は原則として以下のとおりである。

住居・掘立柱建物・土坑・陥し穴　1：60　　炉・竈・鍛冶炉　1：30　　水田　1：150

溝　1：200　　土器・土錘以外の土製品・縄文以外の礫石器・石鏃・石核・素材剥片　1：3

大型土器　1：6　　縄文礫石器　1：4　　石鏃・石錐・尖頭器・楔形石器　4：5

鉄製品・煙管・鉄滓・鈴・石製品・石匙・打製石斧・部分研磨石器・スクレイパー・勾玉・土錘　1：2

6. 遺構図・遺物図で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。

焼土・土器の赤色塗彩・石器磨面　　須恵器の吸炭部分

黒色土器の黒色部分　　灰釉陶器の施釉部分

羽口のガラス化部分

7. 遺構図中の「P」はピット、「●」は土器、「■」は石器、「▲」は鉄製品、「△」は鉄滓を表す。

8. 石器実測図中の記号は、「P」＝押圧剥離により調整されたと推定される部分　「D」＝直接打撃により調整されたと推定される部分　「M」＝使用によると推定される微細な剥離が連続的に認められる部分、「▼」打点の位置、を表す。

9．遺物写真の倍率は原則として遺物図の縮尺に近づけたが、この限りでない。

10．本文の記載方法は以下のとおりである。

「位置」はその遺構の含まれる全グリッドを記した。グリッド名はグリッド南東の国家座標下3桁をX-Yの順に記した。「重複」は重複する遺構の新旧関係を「旧→新」で示した。竪穴住居の「形状」は、方形・隅丸方形・長方形・隅丸長方形・台形に分類して記した。「規模」は遺構確認面の上端で計測した。竪穴住居の「面積」は下端を1：30図上でプラニメーターにより3回計測した平均値を記した。方位は炉付設竪穴住居・掘立柱建物は長軸の、竈付設竪穴住居は竈(東竈)が付設された壁の、それぞれ真北から右回りの角度を記した。

11．土層注記の含有物の表現は、「微量」(　＜5％)「少量」(5＜15％)「やや多量」(15＜30％)「多量」(30＜50％)「粒」(　＜2㎝)「ブロック」(2㎝＜　)を目安とする。

12．遺物観察表の記載方法は以下の通りである。

出土レベルの数字は竪穴住居床面もしくは遺構底面からの高さを表し、単位は「㎝」である。ピットからの出土は「P」と表記した。法量の単位は「㎝」、重量の単位は「g」とし、残存のものは「＋」を、推定のものは(　)内に記した。胎土中の砂粒はその径により「細砂」(　＜0.5㎜)「粗砂」(0.5＜2.0㎜)「細礫」(2.0＜5.0㎜)を目安とする。

13．掲載石器一覧表における法量の単位は「㎝」、重量の単位は「g」である。

14．本文中で使用したテフラの記号は以下のとおりである。本文記述の中で必要なものについては(　)内に降下年代を示した。

浅間粕川テフラ　Kk(1128年)
榛名二ツ岳伊香保テフラ　FP(6世紀中葉)
浅間板鼻黄色軽石　YP
浅間板鼻褐色軽石群　BP
浅間白糸軽石　Sr
榛名二ツ岳渋川テフラ　FA
浅間C軽石　As-C
浅間草津黄色軽石　YPk
浅間荻生軽石　Hg
姶良Tn火山灰　AT

15．本文中で使用した石器・石材の略表記は以下の通りである。

槍先形尖頭器→槍先　有茎尖頭器→有尖　楔形石器→楔形　スクレイパー→Sc　打製石斧→打斧
リタッチドフレイク→RF　部分研磨石器→部研　素材剥片→素剥
黒曜石→黒曜　チャート→Ch　硬質頁岩→硬頁　黒色安山岩→黒安　珪質岩→珪質　流紋岩→流紋
黒色頁岩→黒頁　細粒輝石安山岩→細輝　ホルンフェルス→ホルン　安山岩→安山　石英閃緑岩→石閃
凝灰岩→凝灰　雲母石英片岩→雲石　緑色凝灰岩→緑凝

目　次

口　絵
序
例　言
凡　例

I　発掘調査と遺跡の概要
1．調査に至る経緯と経過 …… 1
2．遺跡の地理的・歴史的環境 …… 2
3．基本層序 ……11

II　旧石器時代の遺物
1．概　要 ……12
2．遺　物 ……12

III　縄文時代の遺構と遺物
1．概　要 ……13
2．出土土器・石器の分類 ……13
3．竪穴住居 ……15
4．陥し穴 ……25
5．土　坑 ……28
6．包含層 ……31
7．遺構外出土遺物 ……32
8．出土遺物について ……38

IV　弥生時代の遺構と遺物
1．概　要 ……45
2．竪穴住居 ……45
3．遺構外出土遺物 ……54

V　古墳時代の遺構と遺物
1．概　要 ……55
2．竪穴住居 ……55
3．水　田 ……64

VI　奈良・平安時代の遺構と遺物
1．概　要 ……67
2．竪穴住居 ……68
3．掘立柱建物 ……151
4．溝 ……154
5．土　坑 ……159
6．鍛冶炉 ……160
7．遺構外出土遺物 ……165

VII　その他の遺構と遺物
1．竪穴住居 ……167
2．掘立柱建物 ……168
3．溝 ……173
4．土　坑 ……175
5．遺構外出土遺物 ……175

VIII　自然科学分析
1．炭化材の樹種同定 ……176
2．炭化種実の検討 ……187
3．土層とテフラ ……195
4．プラント・オパール分析 ……201
5．鉄関連遺物の組成からみた
　鉄器製作活動について ……205

IX　まとめ ……220

写真図版
報告書抄録

付図
遺跡全体図（1/500）

Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要

1．調査に至る経緯と経過

群馬県沼田市にタイヤチェーン装着場建設が具体化したのは平成7年6月であった。建設予定地全域が周知の埋蔵文化財包蔵地の石墨遺跡であったことから、日本道路公団東京第三管理局高崎管理事務所は群馬県教育委員会と遺跡の取扱いに関する事前協議を行った。その結果、工事着手前に発掘調査を実施し、消滅する埋蔵文化財を記録に残すこととなり、当事業団が発掘調査を担当することになった。

ところが、装着場建設に併せて沼田市道である高速道路側道の拡幅工事も行われることになった。そこで、発掘調査の効率化の観点から日本道路公団の経費負担による調査区域と、沼田市の負担で同市教育委員会が調査する区域を面積案分により調整し、東側に当事業団の調査区域を寄せることとした。

これらの調整結果をまとめた「関越自動車道沼田チェーンベース(沼田IC～月夜野IC)設置事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を、日本道路公団東京第三管理局長、群馬県教育委員会教育長、当事業団理事長の三者で平成11年5月10日付けで締結し、発掘調査に着手することになった。

平成11年5月10日より試掘調査を開始し、竪穴住居、溝、土坑などの遺構を確認した。5月19日よりローム漸移層またはローム層上面を遺構確認面として表土掘削を開始し、6月22日より本調査に着手した。1区中央谷地はFP二次堆積層が広がっていたためにこの上面で止め、7月1日よりこの層を除去して遺構確認作業を行った。6区東半は用地買収が難航したため平成12年度に調査することとした。1区東西の尾根より調査を開始し、3・4・5・7・2・6区と調査対象区を拡大した。10月1日から縄文時代以降の調査が終了した箇所より順次旧石器の試掘調査を行い、12月15日より埋め戻しを開始、12月20日に試掘調査・埋め戻しともに終了した。降雪のため12月22日に一旦調査を中断し、平成12年3月3日に再開、1区西端の農道部分を調査し3月24日に終了した。3月30日より6区東半の表土掘削を開始し、4月4日より本調査に着手、5月中に縄文時代以降の調査を終了し、6月に旧石器の試掘を行い、6月30日に全ての調査を終了した。

石墨遺跡(沼田チェーンベース地点Ⅰ)調査区図

2．遺跡の地理的歴史的環境

本遺跡は群馬県北部の沼田市石墨町に所在する。市域の中央付近、沼田市街地の北約2.5kmに位置し、遺跡の北隣には関越自動車道が東西に走る。沼田市を含めた利根・沼田地方は南の赤城山・子持山などによって関東平野から隔てられ、北を三国山脈・日光白根山などに囲まれた一つの地域圏を形成し、そのほとんどを山地が占める。

冬季は寒冷多雪で、特に郡北部では夏より冬の降水量が多い。沼田市内の降雪はそれほどでないが、冬の気温は－10℃を下回る。

沼田市の大部分は武尊山・迦葉山・三峰山・子持山・赤城山などに囲まれた盆地にある。本遺跡はこの盆地の北端に位置し、北に三峰山と金・水晶を産出する戸神山を望む。東を小沢川、西を四釜川に画され、本遺跡から南南西２kmの、両河川が合流する地点に向かって半島状にのびる台地上に立地する。現状は畑であるが、発掘の結果、小さな埋没谷が幾筋か南北に走っていることがわかっている。小沢川は遺跡付近で南から西へ流れを変えるが、この両岸から戸神山にかけてはやや低くなっており、現在でも台地内で最も広い水田地帯である。このほか、四釜川段丘下に川筋に沿って認められる。地質は、更新世に形成された段丘堆積物である。周辺には三峰山に鮮新世の利根溶結凝灰岩と中新世のデイサイト質凝灰岩などから成る三峰山層、先第三紀の蛇紋岩類、中新世で戸神山付近の緑色凝灰岩などから成る後閑層などが分布し、遺跡の南には中新世の薄根川凝灰岩層、更新世の泥岩・礫岩を主とする沼田湖成層などが認められる。

利根・沼田地域の遺跡は平野部に比べて多くなく、過去20年ほどで開発された関越自動車道や上越新幹線に集中している。表及び地図に、何らかの形で報告されているものを中心に平安時代までの遺跡をまとめた。

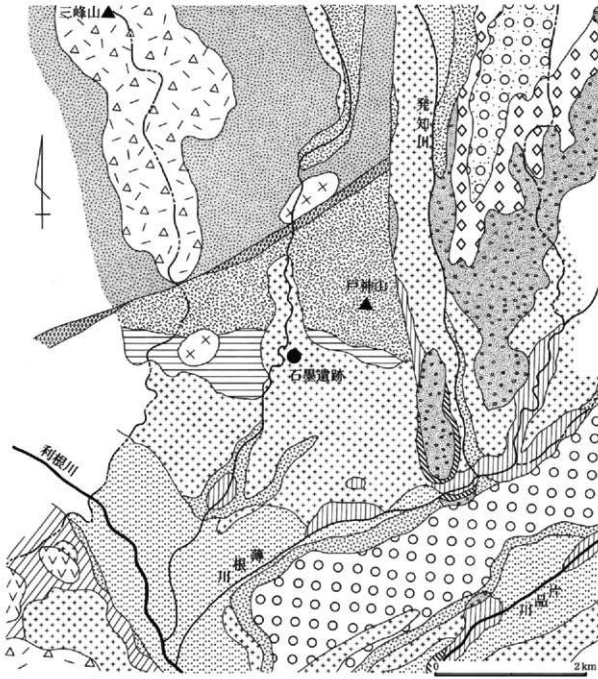
旧石器時代は後田遺跡・善上遺跡・大竹遺跡・小竹Ａ遺跡・長井坂城遺跡などがある。三峰山南麓に分布が集中し、ＡＴ降下以前の資料が多いのを特徴とする。

縄文時代の遺跡は分布密度が高く、山地以外全てに認められ、なかでも前期から中期が多い。草創期は乾田Ⅱ遺跡・日影平遺跡の隆起線文系・多縄文系土器片が出土しているのみである。早期は石墨遺跡・戸神諏訪遺跡・中棚遺跡などで押型文・撚糸文・条痕文土器などが出土している。これらを伴う明確な遺構は極めて少ない。前期になると遺跡の数が急激に増加し、後田遺跡・石墨遺跡・中棚遺跡などで住居の調査が行われている。石墨遺跡の前期土器は花積下層式などが多く、本遺跡とはやや様相が異なる。中期は寺入遺跡で加曽利Ｅ式土器を出土する住居の変遷が辿れるほか、土器や土製品などから東北・新潟方面との交流が考えられる。後・晩期になると遺跡数が減少する。寺入遺跡で住居と土坑が検出され、土器や石器から中部山岳地方や東北地方との交流が伺える。また、矢瀬遺跡で住居や配石墓が、深沢遺跡で配石遺構が調査されており、未調査であるが新治村役場周辺で晩期土器の採集報告がある。

弥生時代の遺跡はほとんどが後期であり、沼田盆地周辺の河岸段丘上に分布する。中期では岩陰の洞窟を利用した再葬墓である八束脇洞窟遺跡、竪穴住居が検出された上津地区遺跡群・寺谷遺跡、再葬墓が検出された川額軍原Ⅰ遺跡がある。また、糸井宮前遺跡では遠賀川系の土器が出土している。後期では利根・沼田地域で30遺跡以上確認されているが、なかでも日影平遺跡や観音堂遺跡は環濠集落として知られる。土器はほとんどが樽式土器であるが、文様の崩れた終末期と考えられるものも多く、平野部との編年上興味深い。町田小沢Ⅱ遺跡の竪穴住居から炭化米が出土しているが、水田は見つかっていない。

古墳時代前期の集落は、石墨遺跡・戸神諏訪遺跡・糸井宮前遺跡などで検出された。その立地は弥生時代後期を引き継ぐものと思われる。また、これら集落に対応する古墳は確認されておらず、石墨遺跡や

石墨遺跡(沼田チェーンベース地点Ⅰ)位置図



現河床堆積物・段丘礫層　段丘堆積物　沼田礫層　沼田湖成層

発知泥流　岡谷火砕流　無斑晶グループ　天神グループ

ひん岩　利根溶結凝灰岩層　デイサイト　薄根川凝灰岩層

三峰山層　灰層　後閑層　蛇紋岩類

遺跡周辺地質図(「沼田市史　自然編付図」より作成)

沢口遺跡などにみられる周溝墓のみを築造していた可能性が高い。前期から中期に続く集落は見つかっておらず、石墨遺跡・戸神遺跡でも一時途絶える。森下中田遺跡では中期から後期以降に続く集落から良好な資料が得られており、至近の水田や古墳と併せて一つのモデルを構築できる可能性がある。これ以外には寺谷遺跡などで数件調査されているのみである。後期になると再び遺跡が増加し、師遺跡・後田遺跡・師西部遺跡などで集落が検出された。その分布は三峰山麓や片品川と利根川の合流点付近に集中している。この間に位置する四釜川右岸から片品川にかけては本遺跡を含めた石墨遺跡が比較的大規模で、ほかに稲荷遺跡・岡谷十二遺跡などがわずかに認められるにすぎない。周辺の台地上に未調査の遺跡が広がっている可能性があるものの、石墨遺跡とは小沢川の対岸にあって古墳時代前期までほぼ同様の内容をもつ戸神諏訪遺跡が衰退し、石墨遺跡の集落が再開されることは興味深い。当該期の水田は今回確認された本遺跡・下川田平井遺跡・糸井臼久保遺跡・糸井太夫遺跡で検出されている。小谷地や段丘のわずかな平坦面を利用したものであり、このような地形の調査が増加すれば類例も増えていくであろう。後期古墳は利根川と赤谷川の合流点付近、利根川左岸の三峰山麓、薄根川中流域、利根川と片品川の合流点付近など、水系ごとにいくつかのグループをなして分布する群集墳として主に現れ、6世紀後半から7世紀末の築造である。代表例である奈良古墳群は現在16基残存しており、馬具や石製品などの出土をみた。埴輪を樹立する古墳は少ないが、このうち沢口遺跡1号墳は6世紀前半頃の築造で、利根・沼田地域においては極めて珍しい帆立貝形古墳である。鏡石古墳は同じ頃の築造であるが墳丘と主体部の構築法が榛名山東麓にみられる積石塚のそれと類似しており、利根・沼田地域南部と平野部の関わりが伺える。石墨遺跡と結びつく古墳群は不明確であるが、発知川右岸の峰山西麓に点在する古墳が考えられる。

律令制下の利根・沼田地域はほぼ同様の郡域に「利根郡」が置かれ、「渭田」「男信」「笠科」「呉桃」の4郷に分かれていた。「渭田」は薄根川右岸から三峰山麓にかけて上推量されており、本遺跡もこの中に含まれると思われる。郡衙は昭和村森下に「御門」の地名があることや、布目瓦の出土をみることからこの地に当てる意見もあるが、詳しいことは分かっていない。奈良時代の遺跡は、理由は不明だが古墳時代後期や平安時代と比べて少ない傾向がある。また、大釜遺跡など傾斜がきつく本来集落には適さない場所にも新たに集落が展開した。さらに戸神諏訪遺跡にも集落が再開し、周辺の遺跡と併せて一つの地域的拠点となっていった。このことは戸神諏訪遺跡などで見つかった平安時代の寺院や、地域周辺から丸鞆・石帯・奈良三彩の出土をみること、墨書土器などの文字資料が集中することから裏付けられる。特に寺院は墨書土器から「宮田寺」と呼ばれていたことが判明し、一堂のみの「郷の寺」と考えられ、寺院や信仰に関する文字資料と合わせて地域への仏教の普及を考える上で重要である。東原遺跡や北貝戸遺跡など山間地でも平安時代の集落が検出されており、立地の拡大が読み取れる。月夜野町には月夜野古窯跡群として把握されている須恵器窯が支群をなして分布しており、地域一帯の製品供給源であった。藪田遺跡や藪田東遺跡などでは粘土採掘坑や工房が検出されており、月夜野古窯跡群を支えた須恵器工人の存在を示している。

【参考文献】

塚田　光、芝崎　孝、戸田哲也　「群馬県・新治村「役場遺跡」と出土品について」 考古学雑誌 56-1　1970

「石墨遺跡」 沼田市教育委員会　1985

「群馬県史　通史編1」 群馬県　1990

「下川田下原遺跡　下川田平井遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1993

「沼田市史　自然編」 沼田市　1995

「沼田市史　資料編1」 沼田市　1995

「沼田市史　通史編1」 沼田市　2000

周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	概要	文献
1	石墓遺跡(旧田ノチェーンベース地区Ⅰ)	本報告	本報告書
2	北貝戸遺跡	諸磯ｃ竪穴住居1　土坑15、平安竪穴住居3	「関越自動車道(新潟線)水上町埋蔵文化財発掘調査報告書」 水上町教委　'85
3	川上遺跡	縄文早～中土器、平安土坑1	「関越自動車道(新潟線)水上町埋蔵文化財発掘調査報告書」 水上町教委　'85
4	乾田遺跡	縄文敷石住居1	「日本考古学年報」12　'64
5	乾田Ⅱ遺跡	縄文草創～後期土器・石器	「乾田Ⅱ遺跡」 水上町教委　'78
6	東原遺跡	縄文諸磯ｂ竪穴住居1　縄文土坑47、平安竪穴住居7	「東原遺跡」 水上町教委　'85
7	小仁田遺跡	縄文早期～中期土器　諸磯ｂ竪穴住居19　諸磯ｃ竪穴住居1　十三菩提竪穴住居3　縄文前期土坑213	「関越自動車道(新潟線)水上町埋蔵文化財発掘調査報告書」 水上町教委　'85
8	上石倉遺跡	縄文前期土坑1　縄文土坑2、平安竪穴住居1	「関越自動車道(新潟線)月夜野町埋蔵文化財発掘調査報告書」 月夜野町教委　'85
9	今泉遺跡	縄文早期土坑1	「関越自動車道(新潟線)月夜野町埋蔵文化財発掘調査報告書」 月夜野町教委　'85
10	和名中遺跡	縄文前期竪穴住居1　中期竪穴住居1　縄文陥し穴83　配石1、古代以降掘立柱建物5　土坑17　溝1　配石1	「関越自動車道(新潟線)月夜野町埋蔵文化財発掘調査報告書」 月夜野町教委　'85
11	源氏遺跡	縄文諸磯ｂ竪穴住居1　縄文陥し穴11　土坑13	「関越自動車道(新潟線)月夜野町埋蔵文化財発掘調査報告書」 月夜野町教委　'85
12	前中原遺跡	縄文早期竪穴4　前期竪穴住居4　縄文土坑22、平安竪穴住居1　土坑1	「十二原遺跡　大原遺跡　前中原遺跡」 ㈱群埋文　'82
13	前田原遺跡	縄文早・中～後期土器、平安竪穴住居2	「深沢遺跡　前田原遺跡」 ㈱群埋文　'87
14	深沢遺跡	縄文早～後期土器　加曽利E2竪穴住居1　後期土坑64　配石48　配石墓1、平安竪穴住居2	「深沢遺跡　前田原遺跡」 ㈱群埋文　'87
15	梨の木平遺跡	縄文加曽利E4敷石住居1、弥生中期土坑5、平安竪穴住居1	「梨の木平遺跡」 群馬県教委　'77
16	梨の木平Ｃ遺跡	平安竪穴住居3(墨書)　土坑5	「町内遺跡Ⅰ」 月夜野町教委　'91
17	藪田遺跡	縄文早～後期土器、弥生後期竪穴住居1、平安竪穴住居10(田・丸鞆)　粘土採掘坑11　土坑1　溝2	「藪田遺跡」 ㈱群埋文　'85
18	藪田Ｂ遺跡	平安竪穴住居2　土坑4	「町内遺跡Ⅰ」 月夜野町教委　'91
19	藪田東遺跡	平安竪穴住居8　粘土採掘坑11　土坑6　骨破砕出土遺構1	「藪田東遺跡」 ㈱群埋文　'82
20	矢瀬遺跡	縄文後期後半～晩期竪穴住居　配石墓	
21	洞Ⅰ遺跡	縄文中期土器、平安竪穴住居1	「洞Ⅰ・洞Ⅱ・洞Ⅲ遺跡」 ㈱群埋文　'86
22	洞Ⅲ遺跡	縄文早～中期土器片、平安竪穴住居5　土坑・粘土採掘坑6	「洞Ⅰ・洞Ⅱ・洞Ⅲ遺跡」 ㈱群埋文　'86
23	月夜野古窯跡群	藪田Ａ支群(藪田遺跡・藪田東遺跡)を除くＳ世紀末～10世紀の須恵器焼成窯７支群	「利根郡月夜野町洞窯跡発掘調査報告」月夜野町教委　'73・85
24	宮地遺跡	縄文早期竪穴住居1　前期竪穴住居1　縄文土坑15	「関越自動車道(新潟線)月夜野町埋蔵文化財発掘調査報告書」 月夜野町教委　'85
25	大竹遺跡	旧石器、縄文前期竪穴住居2　縄文土坑33、弥生中期土坑1、平安竪穴住居10(周書)　小鍛冶1　土坑2	「関越自動車道(新潟線)月夜野町埋蔵文化財発掘調査報告書」 月夜野町教委　'85
26	小竹Ａ遺跡	旧石器、縄文土坑8	「関越自動車道(新潟線)月夜野町埋蔵文化財発掘調査報告書」 月夜野町教委　'85
27	小竹Ｂ遺跡	縄文土坑1	「関越自動車道(新潟線)月夜野町埋蔵文化財発掘調査報告書」 月夜野町教委　'85
28	下牧小竹遺跡	縄文無系竪穴住居3　諸磯ｂ竪穴住居5　縄文土坑114、古墳後期竪穴住居1	「下牧小竹遺跡」 ㈱群埋文　'92
29	高平遺跡	縄文陥し穴2、平安竪穴住居2	「関越自動車道(新潟線)月夜野町埋蔵文化財発掘調査報告書」 月夜野町教委　'85
30	八束群遺跡	弥生中期円都墓	「群馬県史　資料編2」 群馬県　'86
31	門前Ａ遺跡	縄文前～中期土器、古墳後期竪穴住居8、奈良竪穴住居3　平安竪穴住居5	「関越自動車道(新潟線)月夜野町埋蔵文化財発掘調査報告書」 月夜野町教委　'85
32	大友館址遺跡	旧石器、縄文前期竪穴住居3　縄文土坑21、平安竪穴住居2　掘立柱建物5　土坑5	「三峰神社裏遺跡　大友館址遺跡」 月夜野町教委　'86
33	梅田古墳群	古墳後期群集墳	
34	善上遺跡	旧石器、縄文前期竪穴住居15　縄文土坑286、古墳後期竪穴住居1　円墳2	「善上遺跡」 月夜野町教委　'86
35	三峰神社裏遺跡	旧石器、縄文前期竪穴住居13　縄文土坑91、古墳後期円墳1　土坑1、平安竪穴住居1(墨書)　掘立柱建物1	「三峰神社裏遺跡　大友館址遺跡」 月夜野町教委　'86
36	師西部遺跡	弥生後期竪穴住居7、古墳～平安竪穴住居108　掘立柱建物3　方形周溝墓5	「沼田市史　通史編1」 沼田市　'00
37	師遺跡	古墳後期竪穴住居84、奈良・平安竪穴住居4(墨書)	「師遺跡・鎌倉遺跡」 ㈱群埋文　'89
38	京塚古墳	古墳後期　円墳1	「群馬県史　資料編3」 群馬県　'81
39	金山古墳群	古墳中期竪穴住居1　古墳後期古墳4	「大泉遺跡　金山古墳群」 ㈱群埋文　'83
40	後田遺跡	旧石器、縄文前期竪穴住居9、古墳後期竪穴住居246、奈良竪穴住居36、平安竪穴住居24(墨書・周書)	「後田遺跡(旧石器編)」「後田遺跡Ⅱ」 ㈱群埋文　'87・88
41	厚原古墳群	古墳後期群集墳	
42	上牌地区遺跡群	縄文要塞　配石、弥生中期竪穴住居　後期竪穴住居3、古墳～平安集落　古墳　方形周溝墓　掘立柱建物	「年報」9　㈱群埋文　'90 「沼田市史　通史編1」 沼田市　'00
43	村主遺跡	縄文陥し穴16　土坑1、奈良竪穴住居18　土坑1、平安竪穴住居16　小鍛冶1	「大原Ⅱ遺跡　村主遺跡」 ㈱群埋文　'86

No.	遺跡名	概要	文献
44	大原遺跡	縄文前～後期土坑6、弥生後期竪穴住居4、平安竪穴住居1	『十二原遺跡　大原遺跡　前中原遺跡』 ㈱群埋文 '82
45	大原Ⅱ遺跡	縄文陥し穴22　土坑4、弥生後期竪穴住居3	『大原Ⅱ遺跡　村主遺跡』 ㈱群埋文 '86
46	十二原遺跡	縄文中期土器、弥生後期竪穴住居1、古墳前期竪穴住居1 平安竪穴住居1	『十二原遺跡　大原遺跡　前中原遺跡』 ㈱群埋文 '82
47	十二原Ⅱ遺跡	縄文前期竪穴住居4　中期竪穴住居7　縄文配石遺構1 土坑14　陥し穴4	『三後沢遺跡　十二原Ⅱ遺跡』 ㈱群埋文 '86
48	三後沢遺跡	縄文前期竪穴住居5　中期竪穴住居2　縄文土坑9　陥し穴4、弥生後期竪穴住居7	『三後沢遺跡　十二原Ⅱ遺跡』 ㈱群埋文 '86
49	三後沢C遺跡	縄文陥し穴・土坑10、平安竪穴住居1	『町内遺跡Ⅱ』 月夜野町教委 '93
50	三後沢D遺跡	縄文前期・弥生後期竪穴住居10　土坑16	『町内遺跡Ⅱ』 月夜野町教委 '93
51	下津十二原遺跡	縄文前期竪穴住居2　土坑38	『町内遺跡Ⅱ』 月夜野町教委 '93
52	諏訪遺跡	縄文前～後期土器　縄文陥し穴・土坑46、弥生後期竪穴住居1	『城平遺跡　源訪遺跡』 ㈱群埋文 '84
53	城平遺跡	縄文竪穴住居1　土坑5	『城平遺跡　源訪遺跡』 ㈱群埋文 '84
54	政所・真妻古墳群	古墳後期群集墳	
55	沢口遺跡	弥生後期竪穴住居16、古墳～平安集落　古墳　方形周溝墓　掘立柱建物　製鉄炉　土坑	『年報　9』 ㈱群埋文 '90 『沼田市史　通史編1』 沼田市　'00
56	観音堂遺跡	弥生後期竪穴住居35(環濠集落)　溝1　周溝墓4、古墳1	『稲荷遺跡』 沼田市埋蔵文化財発掘調査班 '93
57	稲荷遺跡	古墳後期竪穴住居5、平安竪穴住居3　溝3	
58	恩田古墳群	古墳後期群集墳	
59	佐山向原遺跡	縄文早期～中期土坑38	『佐山向原遺跡(佐山南部地区遺跡群)』 沼田市教委　'97
60	上光寺遺跡	縄文堀之内～加曽利B敷石住居1　堀之内敷石遺構1 中～後期土坑14　後期炉2　埋設土器3、弥生後期竪穴住居2、平安掘立柱建物2	『上光寺遺跡(発知南部地区遺跡群)』 沼田市教委　'96
61	寺入遺跡	縄文早期土器　加曽利E1竪穴住居5　加曽利E2竪穴住居4 加曽利E3竪穴住居5　中～後期土坑25　縄文配石2	『寺入遺跡』 沼田市教委　'87
62	宇楚井・原町古墳群	古墳後期群集墳	『沼田市史　資料編1』 沼田市　'95
63	大釜遺1号墳	古墳後期円墳1	『大釜遺1号墳』 沼田市教委　'85
64	大釜遺跡	奈良竪穴住居4、奈良・平安土坑3　井戸1、平安竪穴住居25	『大釜遺跡・金山古墳群』 ㈱群埋文　'83
65	石墨遺跡	縄文早期原石器　早期縄しず9　花積下層竪穴住居1、弥生後期竪穴住居10　土坑高3　円形周溝墓3、古墳前期竪穴住居11　後期竪穴住居14、奈良竪穴住居1、平安竪穴住居48　掘立柱建物4　小鍛冶2	『石墨遺跡』 沼田市教委　'85
66	戸神吉田遺跡	弥生後期竪穴住居2、古墳前期竪穴住居1	『戸神吉田遺跡』 沼田市教委　'88
67	戸神御訪遺跡	旧石器、縄文諸磯a竪穴住居2　縄文土坑48、弥生後期・古墳前期　竪穴住居70、奈良竪穴住居3、平安竪穴住居91(墨書・刻書・石帯)　寺院1　掘立柱建物32　溝1　井戸3	『戸神御訪遺跡』 ㈱群埋文　'90
68	戸神御訪Ⅱ遺跡	縄文早期土器　竪穴住居1　陥し穴19　土坑6、弥生後期土坑1、古墳前期竪穴住居2　後期竪穴住居1　平安竪穴住居46(墨書・線刻軒瓦)　掘立柱建物6　寺院関連建物1　溝3	『沼田北部遺跡群Ⅰ(戸神御訪Ⅱ遺跡)』 沼田市教委　'92
69	戸神御訪Ⅲ遺跡	縄文早～中陥し穴5　土坑4、平安竪穴住居57	『戸神御訪Ⅲ遺跡』 沼田市教委　'93
70	戸神御訪Ⅳ遺跡	縄文早期土器　縄文土坑2、古墳前期竪穴住居3、平安竪穴住居13(墨書・皇朝銭)	『沼田北部地区遺跡群Ⅲ　戸神御訪Ⅳ遺跡』 沼田市教委　'94
71	戸神御訪Ⅴ遺跡	古墳前期竪穴住居2、奈良竪穴住居1、平安竪穴住居44(墨書)　掘立柱建物13	『沼田北部地区遺跡群Ⅳ　戸神御訪Ⅴ遺跡』 沼田市教委　'95
72	岡谷十二遺跡	縄文竪穴住居3　陥し穴6　土坑12、古墳後期竪穴住居3、平安竪穴住居6　掘立柱建物1	『沼田北部地区遺跡群Ⅴ』 沼田市教委　'96
73	町田小沢遺跡	弥生後期竪穴住居3、平安竪穴住居13(三彩・丸鞆・墨書)　水田2	『町田小沢遺跡』 沼田市教委　'90
74	町田小沢Ⅱ遺跡	弥生後期竪穴住居3(杵)　溝1　土坑1、古墳中期竪穴住居1、平安竪穴住居4(墨書)　小鍛冶1　掘立柱建物5	『町田小沢Ⅱ遺跡』 沼田市教委　'94
75	町田上原遺跡	縄文陥し穴1、奈良・平安竪穴住居18　掘立柱建物5　溝1	『沼田北部地区遺跡群Ⅴ』 沼田市教委　'96
76	岡谷毛勝遺跡	奈良・平安竪穴住居10	『町田手古又遺跡・岡谷毛勝遺跡(沼田北部遺跡群Ⅵ)』 沼田市教委　'97
77	町田十二原遺跡	縄文早期土器　縄文竪穴住居2　土坑1、古墳前期竪穴住居2　後期竪穴住居7、奈良・平安竪穴住居40　土坑1	『沼田北部地区遺跡群Ⅱ(町田十二原遺跡)』 沼田市教委　'93
78	町田手古又遺跡	縄文中期竪穴住居7　土坑1、奈良平安竪穴住居32　掘建柱建物1	『町田手古又遺跡・岡谷毛勝遺跡(沼田北部遺跡群Ⅵ)』 沼田市教委　'97
79	土塔原遺跡	弥生土坑、古墳竪穴住居、平安竪穴住居5(墨書)	『沼田市史　資料編1』 沼田市　'95
80	秋塚古墳群	古墳後期円墳12	『秋塚古墳群Ⅰ～Ⅲ』 沼田市教委　'91・92・94
81	高野原遺跡	弥生後期竪穴住居2　土坑2、古墳前期竪穴住居5　後期円墳4、平安墓坑4	『門前橋詰・舟海戸遺跡　高野原遺跡』 ㈱群埋文　'89
82	奈良田向遺跡	弥生後期竪穴住居3、平安竪穴住居12　小鍛冶1	『奈良地区遺跡群(奈良田向遺跡)』 沼田市教委　'91
83	峰山古墳群	古墳後期群集墳	
84	岡谷西原遺跡	阿玉台土器・石器	『沼田北部地区遺跡群Ⅴ』 沼田市教委　'96
85	奈良原遺跡	縄文前期前半竪穴住居8、弥生後期竪穴住居7、平安竪穴住居2	『奈良地区遺跡群(奈良原遺跡)』 沼田市教委　'91

No.	遺　跡　名	概　　要	文　　献
86	下宿浦遺跡	縄文中期陥し穴４　土坑９、FP以降掘立柱建物４	「下宿浦遺跡」　沼田市教育委員会　'96
87	鎌倉遺跡	縄文早～中期土器　縄文陥し穴２、弥生後期竪穴住居９　土坑３	「飯道遺跡・鎌倉遺跡」　飯郷理文　'89
88	愛宕山古墳群	古墳後期群集墳	
89	清水遺跡	古墳前期竪穴住居１	「沼田市史　資料編１」　沼田市　'95
90	鎌倉台遺跡	縄文前～中期陥し穴３　土坑13	「鎌倉台遺跡」 沼田市埋蔵文化財発掘調査団　'90
91	諏訪原遺跡	弥生後期竪穴住居８、古墳後期竪穴住居８、奈良・平安竪穴住居２	「沼田市史　資料編１」　沼田市　'95
92	追薙古墳	古墳後期円墳１	「追薙古墳(旧利根村第８号古墳)」 沼田市教委　'89
93	下原Ⅰ遺跡	縄文陥し穴４　土坑１	「沼田市史　資料編１」　沼田市　'95
94	沼須古墳群	古墳後期群集墳	「沼田市史　資料編１」　沼田市　'95
95	宮塚遺跡	縄文前期竪穴住居２　縄文土坑５	「沼田西部地区遺跡群Ⅲ」　沼田市教委　'94
96	上川田下原遺跡	縄文竪穴住居１、弥生後期竪穴住居10、平安竪穴住居16(墨書)	「沼田西部地区遺跡群Ⅲ」　沼田市教委　'94
97	赤坂遺跡	縄文前期陥し穴１　土坑31　後期土坑１、弥生後期竪穴住居２　平安竪穴住居５　小鍛冶４　溝１	「沼田西部地区遺跡群Ⅱ赤坂遺跡 青戸田遺跡」 沼田市教委　'92
98	天上遺跡	縄文陥し穴３	「沼田西部地区遺跡群Ⅲ」　沼田市教委　'94
99	青戸田Ⅱ遺跡	縄文早期土器　前～中期竪穴住居16　陥し穴２　土坑16、平安掘立柱建物１	「沼田西部地区遺跡群Ⅱ赤坂遺跡 青戸田遺跡」 沼田市教委　'92
100	青戸田Ⅲ遺跡	縄文黒浜竪穴住居１　縄文陥し穴約30、弥生後期竪穴住居１、平安竪穴住居２	「沼田西部地区遺跡群Ⅲ」　沼田市教委　'94
101	青戸田Ⅲ遺跡	縄文竪穴住居１　陥し穴４　土坑７	「沼田西部地区遺跡群Ⅲ」　沼田市教委　'94
102	中原遺跡	縄文竪穴住居５　土坑29、平安竪穴住居３　小鍛冶１	「沼田西部地区遺跡群Ⅲ」　沼田市教委　'94
103	掩遺跡	縄文前期竪穴住居１　中期竪穴住居１　縄文陥し穴７　土坑17　平安掘立柱建物２	「沼田西部地区遺跡群Ⅰ　掩遺跡」 沼田市教委　'90
104	塚田古墳群	古墳後期群集墳	
105	下川田平井遺跡	縄文陥し穴１　土坑１以上、弥生後期竪穴住居15　土坑１、古墳中期竪穴住居２　後期木田、古代水田、平安竪穴住居13　水田	「下川田下原遺跡　下川田平井遺跡」 飯郷理文　'93
106	下川田下原遺跡	縄文早～後期土坑66以下	「下川田下原遺跡　下川田平井遺跡」 飯郷理文　'93
107	日影平遺跡	縄文草創期土器　縄文陥し穴６、弥生後期竪穴住居約30(環濠)	「沼田市史　資料編１」　沼田市　'95
108	屋形原古墳群	古墳後期群集墳	「沼田市史　資料編１」　沼田市　'95
109	下清水遺跡	縄文加曽利Ｅ竪穴住居４	「上久屈地区遺跡群」　沼田市教委　'93
110	上久屈機場遺跡	弥生後期竪穴住居２　溝状１	「上久屈機場遺跡」　沼田市教委　'88
111	橋場・十二反遺跡	弥生後期竪穴住居２、古墳後期円墳２	「上久屈地区遺跡群」　沼田市教委　'93
112	内手遺跡	縄文陥し穴１	「内手遺跡」　川場村教委　'81
113	寺谷遺跡	縄文阿玉台竪穴住居１　加曽利Ｅ竪穴住居４　ｍＦ４　縄文竪穴住居Ⅰ　土坑14　埋甕２、弥生中期竪穴住居１　後期竪穴住居１、古墳中～後期竪穴住居４　古墳土坑２　祭祀１、平安竪穴住居１	「寺谷遺跡(図版編)」　白沢村教委　'81
114	橋詰遺跡	縄文諸磯竪穴住居１、弥生後期竪穴住居２、平安溝１(墨書)	「門前橋詰・舛海戸遺跡　高野原遺跡」 飯郷理文　'89
115	舛海戸遺跡	弥生後期竪穴住居１、古墳前期竪穴住居１、平安竪穴住居１	「門前橋詰・舛海戸遺跡　高野原遺跡」 飯郷理文　'89
116	天神古墳群	古墳後期群集墳	
117	生品古墳群	古墳後期群集墳	
118	貝野瀬中泉坂ノ上遺跡	縄文陥し穴560	「貝野瀬中泉坂ノ上遺跡」　昭和村教委　'94
119	糸井宮前遺跡	縄文有尾・黒浜・諸磯竪穴住居98　前期土坑306　後期土坑１、弥生中～後土器、古墳前期竪穴住居35　後期竪穴住居８、平安竪穴住居26(墨書)	「糸井宮前遺跡Ⅰ」「糸井宮前遺跡Ⅱ」 飯郷理文　'85・86
120	中棚遺跡	縄文早～後期土器　前期竪穴住居30　土坑132、弥生後期竪穴住居４　古墳前期竪穴住居１、平安竪穴住居15(墨書)	「中棚遺跡」　昭和村教委　'85
121	糸井太夫遺跡	縄文後～晩期竪穴住居１　敷石住居３、古墳後期水田　円墳１	「糸井太夫遺跡」　昭和村教委　'95
122	糸井臼久保遺跡	古墳後期水田(糸井太夫と同一水田)	「昭和村村内遺跡Ⅰ」昭和村教委　'96
123	久呂保中学校裏古墳	古墳後期円墳１	「群馬県史　資料編３」　群馬県　'81
124	森下中田遺跡	縄文陥し穴１　土坑１、古墳中～後期竪穴住居19、奈良竪穴住居19　平安竪穴住居44(丸鞆・墨書)	「森下中田遺跡」　昭和村教委　'98
125	松木古墳	古墳後期円墳１	「昭和村村内遺跡Ⅰ」　昭和村教委　'96
126	川額軍原Ⅰ遺跡	縄文中期土坑１、弥生中期再葬墓１、古墳後期円墳17、奈良・平安　竪穴住居１　鍛冶遺構７	「川額軍原Ⅰ遺跡」　昭和村教委　'96
127	川額軍原Ⅱ遺跡	古墳後期水田	「川額軍原Ⅱ遺跡」　昭和村教委　'93
128	鍛石古墳	古墳後期円墳１	「鍛石古墳発掘調査報告書」 群馬県教委　'74
129	長井坂城	田石器	「中棚遺跡」　昭和村教委　'85

遺跡分布図
2km

3．基本層序

本遺跡は、主に北から南に尾根状にのびる3本の台地と、その間にはさまれた谷状の低地から成る。基本となる土層は両者ともXI層(ローム漸移層)以下は同一であるが、X層以上は台地において土砂の攪乱及び流出が大きい。下に示した基本土層図は中央谷地における土層を基にモデル化したものであり、土層注記の中に必要に応じて台地部の状況を記述した。なお、遺跡の南に隣接する拡張区(試掘区)ではAs-C混層、FA混層がテフラ分析により検出された。ここでは記述しないので、「VIII－3　土層とテフラ」を参照されたい。

I．表土。

II．黒褐色土層。Kkを含む。台地部において、XI層(ローム漸移層)まで浅い箇所はFP・Kk混層となり、本層をもってXI層に達する。遺構の分布する箇所の多くがこれに該当する。

III．Kkの2次堆積層。III～VIII層まで台地部では認められない。

IV．暗褐色土層。FPを含む。

V．黒褐色土層。FPを含む。

VI．FPの2次堆積層。

VII．暗褐色土層。

VIII．黒褐色粘質土層。

IX．暗褐色粘質土層。

X．暗灰褐色粘質土層。台地部では認められない。

XI．暗褐色ローム漸移層。

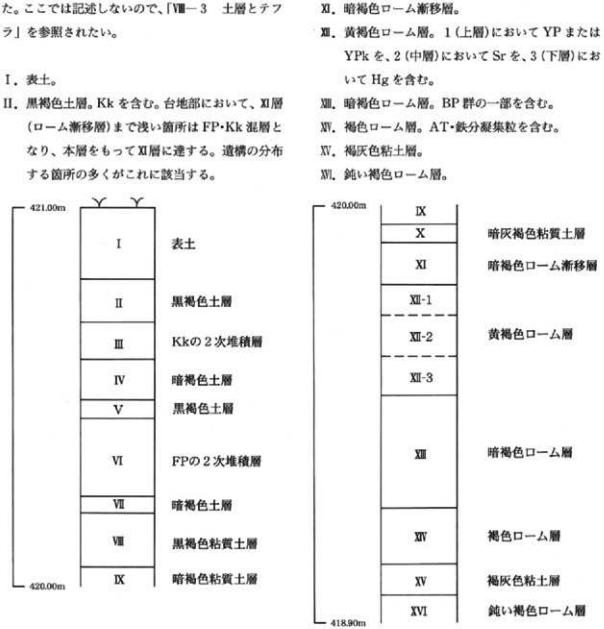
XII．黄褐色ローム層。1(上層)においてYPまたはYPkを、2(中層)においてSrを、3(下層)においてHgを含む。

XIII．暗褐色ローム層。BP群の一部を含む。

XIV．褐色ローム層。AT・鉄分凝集粒を含む。

XV．褐灰色粘土層。

XVI．鈍い褐色ローム層。



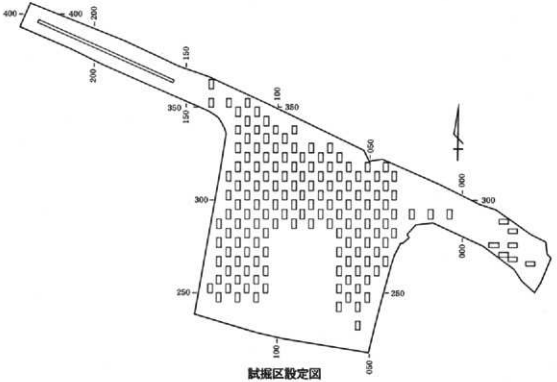
基本層序図

II　旧石器時代の遺物

1．概　　要

縄文時代までの遺構調査終了後、国家座標を基に南北５m、東西2.5m（４区西半～５区では幅２m、長さ60mの１ヶ所、６区では南北2.5m、東西５m）の試掘区を千鳥状に設定し、XVI層上面まで掘り下げるグリッド調査を行った(PL.２)。ただし、中央谷南側では水田確認面のすぐ下でXV層となるため、試掘区を設定しなかった。

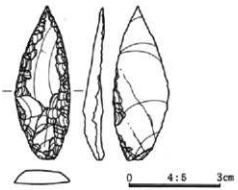
調査の結果遺物は出土しなかったが、この調査以前に、遺構確認面としていたローム漸移層（XI層）中から槍先形尖頭器が１点採集された。



試掘区設定図

2．遺　　物

採取遺物のため詳細な出土位置、出土状態等は不明である。槍先形尖頭器は暗オリーブ褐色のチャート製で最大長5.1cm、最大幅1.9cm、最大厚0.6cm、重量5.3gである。縦長剥片を素材とし、周縁部に腹面側から押圧剥離を施して木葉形状の器体を作り出す。打面及びバルブは除去されている(PL.51)。



旧石器時代出土遺物

Ⅲ　縄文時代の遺構と遺物

1．概　　要

縄文時代の遺構は竪穴住居1軒、陥し穴6基、土坑12基である。この他包含層1地点を調査した。1区東台地を中心に遺跡の東を流れる小沢川への傾斜地にかけて立地しており、これより西へは分布しない。なお、本線部分の調査では前期の住居が小沢側への傾斜地(6区北側)に立地するほか、陥し穴が調査区全域に分布している。

竪穴住居(7号住居)は出土土器から縄文時代前期中葉と考えられ、東尾根の中央付近に立地する。

陥し穴は東尾根中央付近と6区傾斜地に分布する。長軸の方向は概ね等高線に平行するが、6号陥し穴のように明らかに直行するものもある。規模は長さ2m、幅1m程で底部にピットを伴うものが3基(1・2・4号)確認された。遺物は出土しなかったが、埋没土はⅧ・Ⅸ層を主体としている。4号陥し穴は7号住居に隣接することから陥し穴と住居の時期が異なる可能性がある。

土坑は東尾根の南側に集中する。規模は比較的大型のもの(1～7・9・10号)と小型のもの(12・13号)があり、大型のものには断面フラスコ状のもの(3・4・6・7号)を含む。3・4・6・7・8・9号からは土器が出土し、縄文時代前期中葉と考えられるが、埋没土は全てⅧ・Ⅸ層を主体としていることから、他のものも縄文時代に属すると考えられる。

包含層は遺跡南側の東尾根から中央谷地にかけての傾斜地、220-075・225-070～075Gに位置する。やや散漫ながらⅧ・Ⅸ層から前期の土器、石器が集中して出土し、住居等の遺構を想定して発掘したが確認出来なかったため、包含層として扱った。その他、土器・石器がⅦ～Ⅸ層を中心に調査区のほぼ全域より出土し、草創期と思われる有茎尖頭器などが確認された。

2．出土土器・石器の分類

①土器の分類

本遺跡出土土器は文様構成等により以下のように分類した。その多くは前期中葉に属する。胎土に3～6類は繊維を、9類は雲母を含む。

1類：貝殻沈線文系土器
2類：条痕文土器
3類：関山Ⅱ式土器
4類：有尾式土器
5類：黒浜式土器
6類：縄文施文土器群
7類：加曽利E3式土器
8類：勝坂式土器
9類：阿玉台式土器

②石器の分類

本遺跡出土石器は以下のように分類した。その分類法・項目については中野谷松原遺跡における一連の作業に基づいている。概念規定・実践方法については大工原　豊　1996「(2)石器」『考古学雑誌』82-2安中市教育委員会　1998『中野谷松原遺跡』などに詳しい。

石鏃

Ⅰ形態：凹基無茎
Ⅱ形態：平基無茎
Ⅲ形態：平基有形

に大別され、Ⅰ・Ⅱ形態には

a：大型のもの
b：小型のもの

に細別できる。

スクレイパー

調整技術の相違から3形態に大別する。

Ⅰ形態：押圧剝離による調整と推定されるもの。片面調整のⅠU形態と両面調整のⅠB形態に細別され

る。B形態は刃部側面がジグザグになるものが多い。両面に調整が認められても調整手法が片面のものはU形態に分類した。

Ⅱ形態：直接打撃による調整と推定されるもの。片面調整のⅡU形態と両面調整のⅡB形態に細別される。

Ⅲ形態：使用痕または調整による微細な剥離が縁辺の1/3以上連続して認められるもの。これ以外のものはリタッチドフレイクとした。片面調整のⅢU形態と両面調整のⅢB形態に細別される。

石匙

スクレイパーに準じる。ⅠU・ⅠB・ⅢBが存在する。平面形状により4形態に細分する。

1形態：横長の器体で垂直に幅広の摘みが付く。

2形態：横長の器体で斜めに幅広の摘みが付く。

3形態：横長の器体で斜めに細身の摘みが付く。

4形態：縦長の器体で垂直に幅広の摘みが付く。

打製石斧

製作技法から2形態に大別する。

Ⅰ形態：基本的に水平持ち片面調整技法による急角度剥離で整形したもの。平面形は撥形・短冊形。

Ⅱ形態：基本的に垂直持ち両面調整技法による階段状剥離で整形したもの。

磨石

手に持てる大きさで扁平な面に磨面が確認でき、かつ凹みのないもの。形状により2類に分類する。

Ⅰ形態：円形のもの。

Ⅱ形態：楕円形のもの。

凹石

手に持てる大きさのもので、扁平な面に凹みの確認出来るもの。磨石に準じて形状から4類に大別し、磨面の有無及び磨面と凹みの前後関係から3類に細別する。

Ⅱ形態：楕円形のもの。

Ⅲ形態：棒状のもの。

Ⅳ形態：四角形のもの。

Ⅴ形態：不定形のもの。

a形態：磨面→凹みのもの。

b形態：凹み→磨面のもの。

c形態：凹みのみのもの。

部分研磨石器

主に楕円形で扁平な河川礫に研磨痕の確認出来るもの。研磨痕の部位により2類に分類する。

Ⅰ形態：縁辺部に研磨痕のあるもの。

Ⅱ形態：縁辺部と扁平面に研磨痕のあるもの。

敲石

敲打痕のみ観察できるもの。

磨石に準じて3類に分類した。

Ⅱ類：楕円形のもの。

Ⅲ類：棒状のもの。

Ⅴ類：不定形のもの。

石材分類表

石材系列	石　材	石　材　の　特　長
Ⅰ類　剥離最適系列	黒曜石 チャート 硬質頁岩 黒色安山岩 玉髄 ・赤碧玉 ・褐色碧玉 珪質岩 ・珪質頁岩 ・珪質凝灰岩 ・珪質変質岩 流紋岩(硬質)	・硬質で粘度が少ない ・剥片剥離に最も適する ・剥離面は極めて平滑で、エッジは鋭利

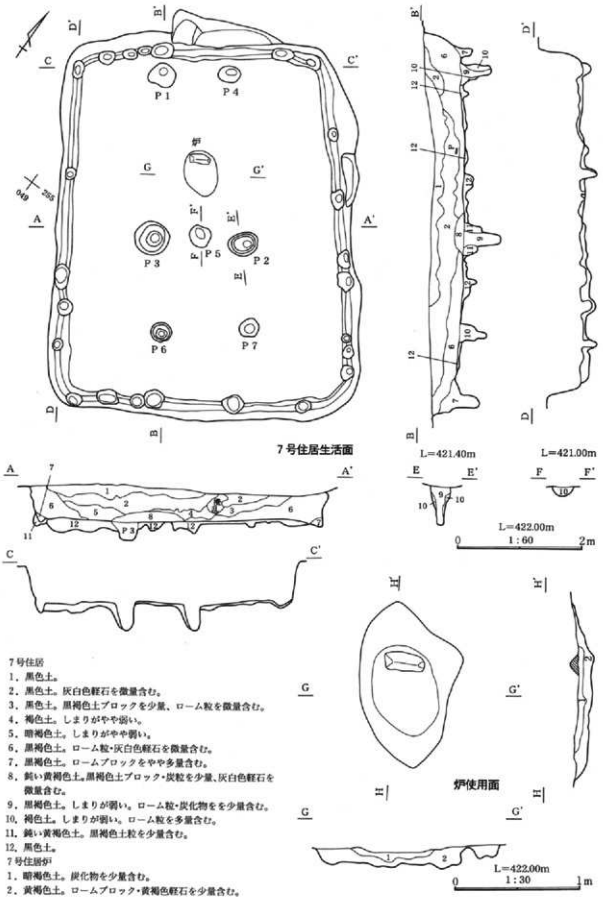
石材系列	石　材	石　材　の　特　長
II類　剝離適合系列	頁岩類 ・黒色頁岩 ・砂質頁岩 細粒輝石安山岩 ホルンフェルス	・多少軟質で、やや粘度がある ・剝離に適する ・剝離面はやや平滑で、エッジはやや鋭利
IIIａ類　剝離不適系列	安山岩類 ・粗粒輝石安山岩 ・灰色安山岩 ・変質安山岩 石英閃緑岩	・やや軟質で、粘度がある ・剝離に不適である ・割れ面は粗面で、エッジは鋭利でない ・耐火性に富む
IIIｂ類　剝離不能系列	砂岩類 ・砂岩 ・凝灰質砂岩 凝灰岩類 ・溶結凝灰岩 ・細粒凝灰岩 ・デイサイト質凝灰岩	・軟質で粘度がない ・剝離に極めて不適である ・割れ面は極めて粗面で、エッジはやや鋭利
IV類　節理系列	結晶片岩類 ・雲母石英片岩	・硬質な部分と軟質な部分があり、粘度はややある ・節理で剝離に方向性があり、やや不適である ・剝離面の鋭利さは方向に左右され、一定でない
V類　緻密質系列	緑色岩類 蛇紋岩 蛇灰岩	・緻密質で比較的硬質で、粘度もある ・剝離にあまり適さない ・剝離面は粗面で、エッジはやや鋭利
VI類　その他	緑色凝灰岩 礫岩	・比較的希少な、多種多様な石材

3．竪穴住居

7号住居(PL．3・51～55)

位置　250・255－040・045　**重複**　北壁と東壁で楕円状の掘り込みを検出した。土坑が存在した可能性があるが切り合い関係は不明である。埋没土はFPを含まない黒色土で、底面は北壁で6cm、東壁で14cm床面より高い。北壁では掘り込みから住居にかけて床面直上から深鉢(№13)が出土した。**形状**　南壁より北壁が短い隅丸台形。　**規模**　6.04×4.73m　**面積**　25.6㎡　**方位**　35°　**埋没土**　住居中央付近にロームと思われる黄褐色土(8層)が床面直上に堆積していた。由来は不明である。　**床面**　確認面から65cm下で床面となる。特に貼床を施さず、掘り方を黒色土で埋め戻して全体に平坦な床面とする。

壁溝　幅2～15cm、深さ10cm前後で全周する。壁溝内に沿って不等間隔にピットを検出した。規模は径15～35cm、深さ20～50cmである。　**炉**　住居中央やや北寄り、1～5号ピットに囲まれる位置に設置。不整形の掘り方を掘削し、埋め戻して形状を整えた地床炉である。規模は長さ70cm、幅50cmほどで、断面三角形の川原石を枕石として北側に据える。炉床表面に薄く灰が分布していた。　**柱穴**　長軸に沿って7基検出した。規模はP1　45×37×39cm　P2　48×36×31cm　P3　56×52×51cm　P4　35×24×36cm　P5　36×32×14cm　P6　31×31×50cm　P7　32×29×26cmである。5号ピットは住居中央に位置し、深さが他と比べて半分以下であることから、やや性格が異なると予想される。　**遺物**　前期中葉を中心に土器・石器が出土した。　**掘り方**　床面から2～20cmほどで掘り方面となる。炉以外では東西の壁際が不整形に10cmほど深く掘り込まれているが、凹凸はあるものの全体には平坦に掘削している。

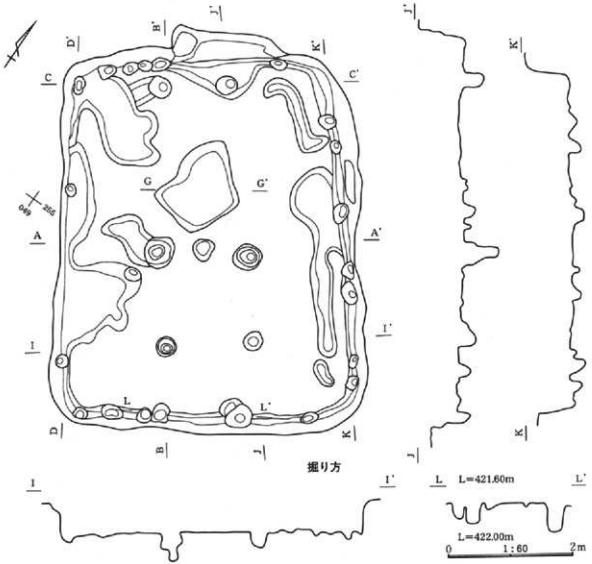


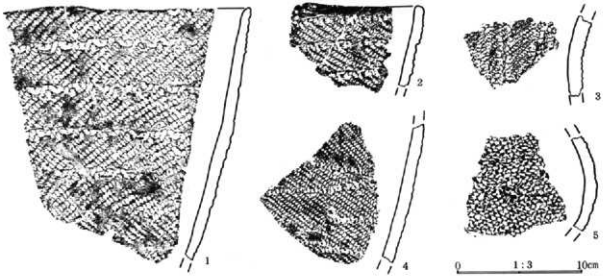
7号住居

1. 黒色土。
2. 黒色土。灰白色軽石を微量含む。
3. 黒色土。黒褐色土ブロックを少量、ローム粒を微量含む。
4. 褐色土。しまりがやや弱い。
5. 暗褐色土。しまりがやや弱い。
6. 黒褐色土。ローム粒・灰白色軽石を微量含む。
7. 黒褐色土。ロームブロックをやや多量含む。
8. 鈍い黄褐色土。黒褐色土ブロック・炭粒を少量、灰白色軽石を微量含む。
9. 黒褐色土。しまりが弱い。ローム粒・炭化物をを少量含む。
10. 褐色土。しまりが弱い。ローム粒を多量含む。
11. 鈍い黄褐色土。黒褐色土粒を少量含む。
12. 黒色土。

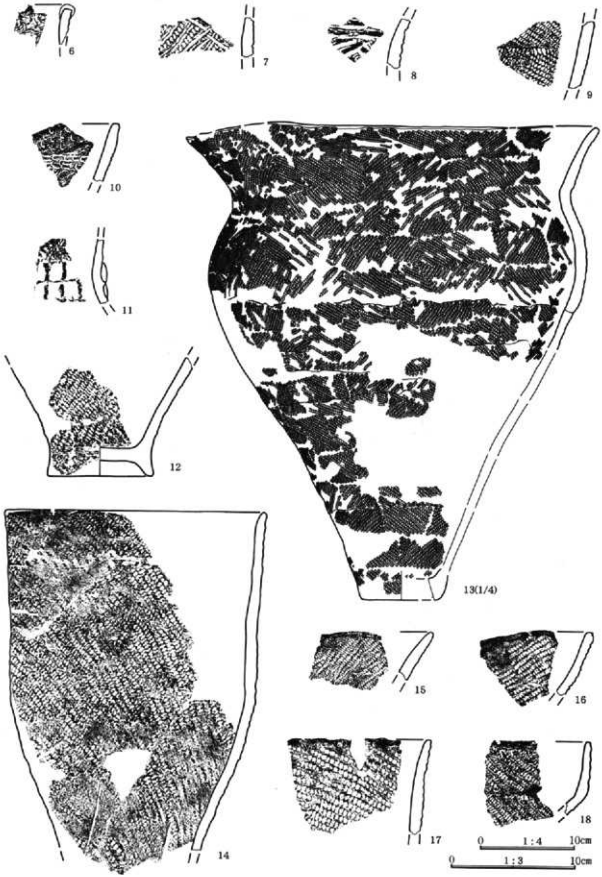
7号住居炉

1. 暗褐色土。炭化物を少量含む。
2. 黄褐色土。ロームブロック・黄褐色軽石を少量含む。

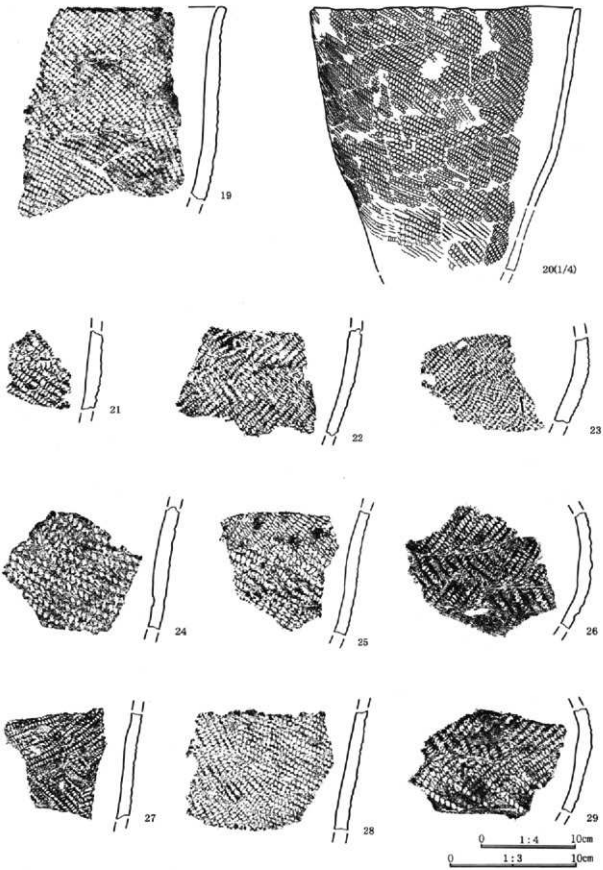

D
M
J
K
C
C'
G
G'
A
A'
I
I'
L
L'
D
M
J
K
J
K
J
K
掘り方
I
I'
L
L=421.60m
L'
L=422.00m
0
1:60
2m


1
2
3
4
5
0
1:3
10cm

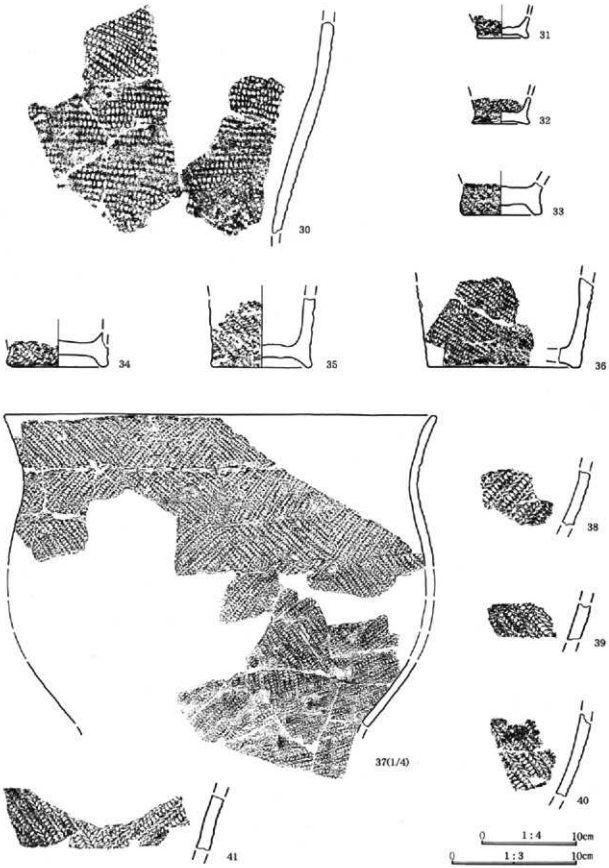
7号住居出土遺物



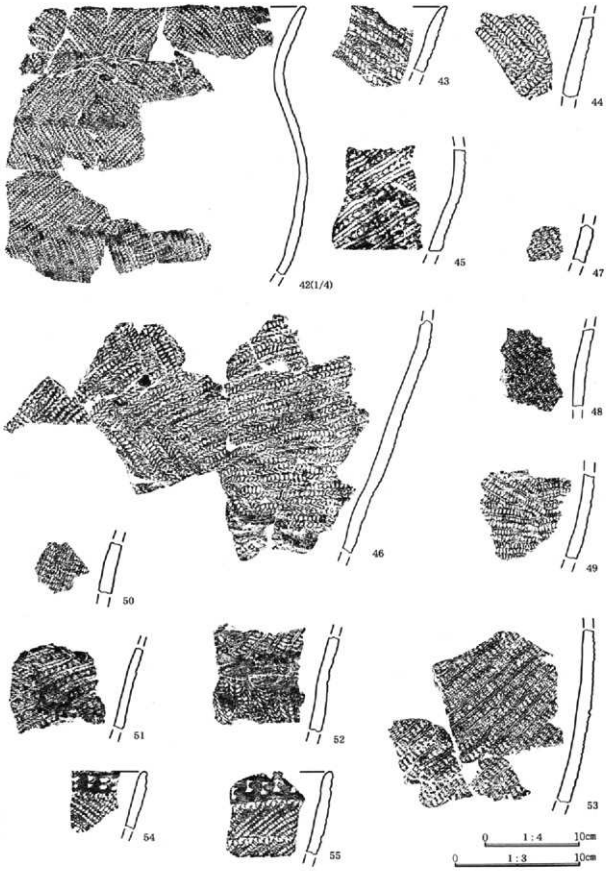
7号住居出土遺物



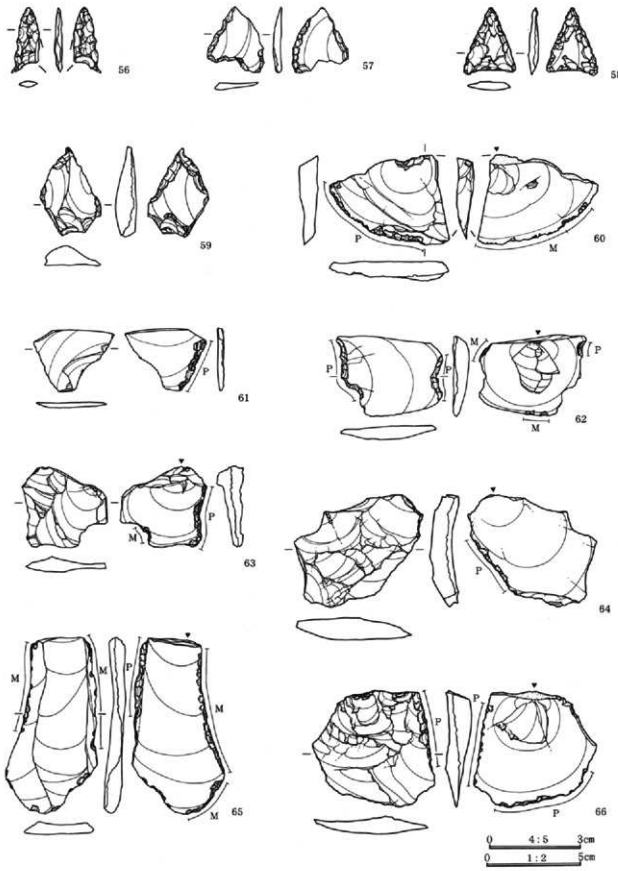
7号住居出土遺物



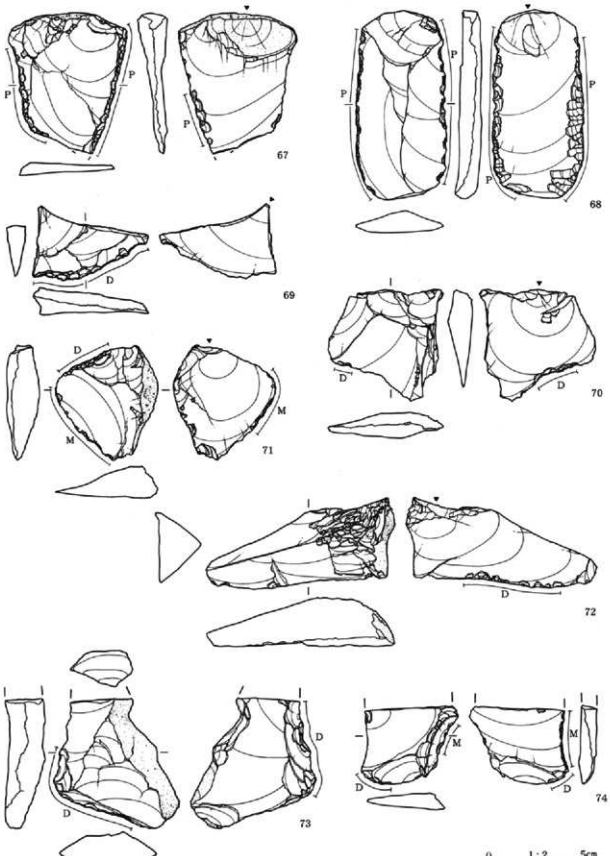
7号住居出土遺物



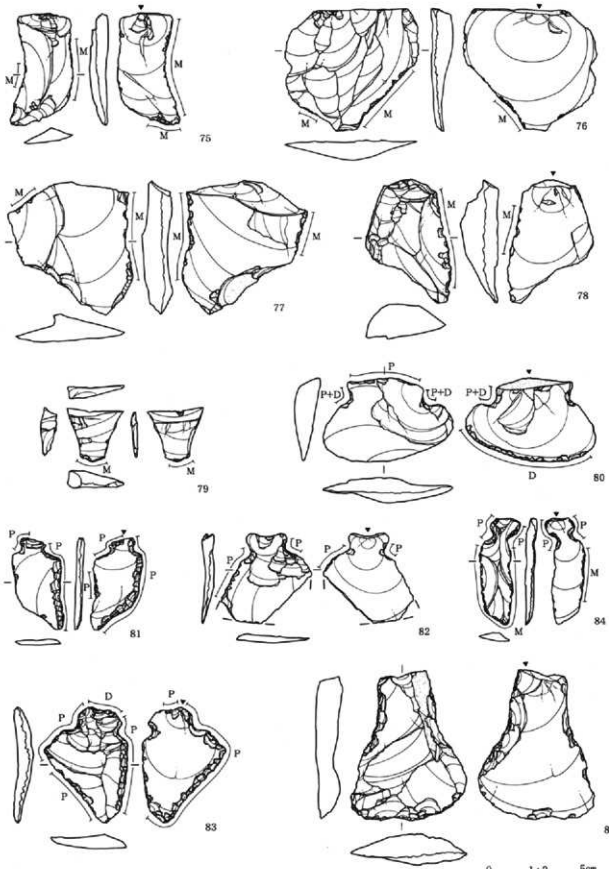
7号住居出土遺物



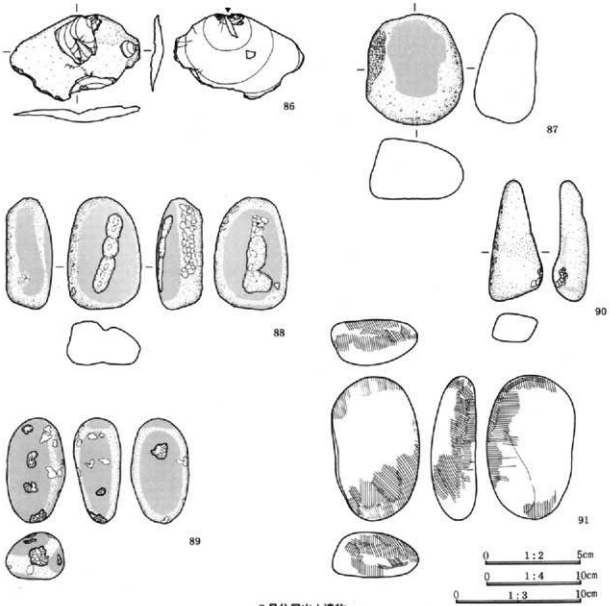
7号住居出土遺物



7号住居出土遺物



7号住居出土遺物

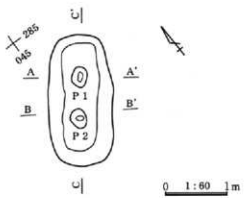


7号住居出土遺物

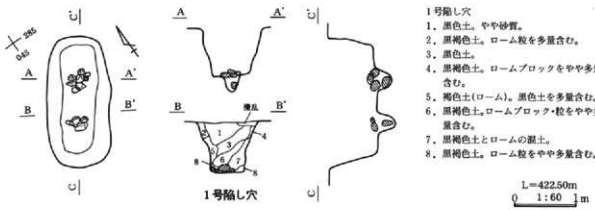
4．陥し穴

1号陥し穴(PL. 4)

位置 280−040・045 **重複** なし。 **形状** 長楕円形で断面は台形状を呈する。底面にピットを2基設けて礫を配置する。 **規模** 207×103×78cm P1 34×26×29cm P2 30×25×28cm **埋没土** ローム含む黒褐色土を主体とする。 **遺物** なし。 **所見** 埋没土から縄文時代のものと考えられる。

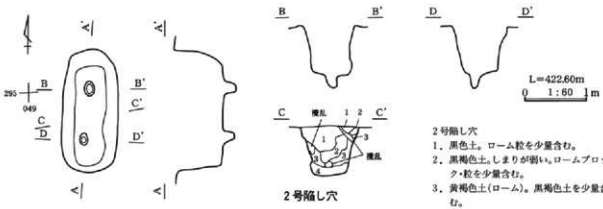


1号陥し穴



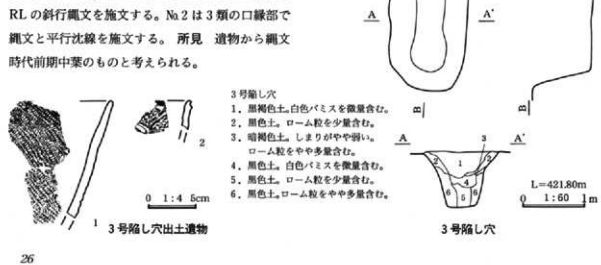
2号陥し穴(PL. 4)

位置　290・295—045　**重複**　なし。　**形状**　長楕円形で断面台形状を呈する。底面にピットを2基設ける。　**規模**　194×92×80cm　P1　24×17×18cm　P2　19×15×19cm　**埋没土**　ロームを含む黒色土を主体とする。　**遺物**　なし。　**所見**　埋没土から縄文時代のものと考えられる。



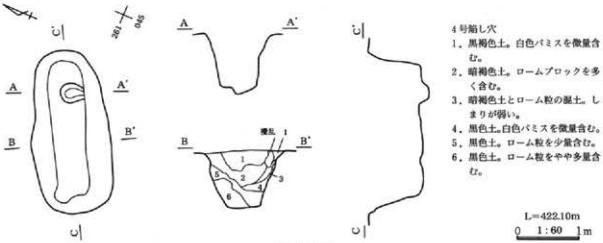
3号陥し穴(PL. 4・5・55)

位置　245—045　**重複**　なし。　**形状**　長楕円形で断面台形状を呈する。　**規模**　222×125×100cm　**埋没土**　ロームを含む黒色土を主体とする。　**遺物**　縄文土器が2点出土した。№1は6類で0段多条RLの斜行縄文を施文する。№2は3類の口縁部で縄文と平行沈線を施文する。　**所見**　遺物から縄文時代前期中葉のものと考えられる。



4号陥し穴(PL．5)

位置　260—045　**重複**　なし。7号住居に隣接する。**形状**　長楕円状で断面台形状を呈する。底面にピットを1基設ける。　**規模**　259×127×96cm　ピット39×32×16cm　**埋没土**　ロームを含む黒色土を主体とする。　**遺物**　なし。　**所見**　埋没土から縄文時代のものと考えられる。



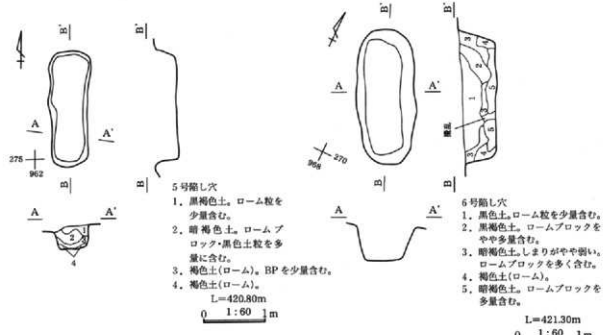
4号陥し穴

5号陥し穴(PL．5)

位置　270・275—960　**重複**　なし。　**形状**　長楕円形で、壁面は比較的直に立ち上がる。　**規模**　182×66×38cm　**埋没土**　上層はロームを含む黒色土を、下層は崩落したロームを主体とする。　**遺物**　なし。　**所見**　埋没土から縄文時代のものと考えられる。

6号陥し穴(PL．5)

位置　270—965　**重複**　なし。　**形状**　長楕円形で、断面台形状を呈する。　**規模**　212×96×54cm　**埋没土**　ロームを含む黒色土を主体とする。　**遺物**　なし。　**所見**　埋没土から縄文時代のものと考えられる。

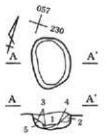


5号陥し穴　　6号陥し穴

5．土　坑

1号土坑(PL. 5)

位置　225—055　**重複**　なし。　**形状**　楕円形で底面は中央に向かって緩やかに窪む。　**規模**　80×60×28cm　**埋没土**　黒色土主体で下層にロームを、上層に炭化物を含む。　**遺物**　なし。　**所見**　埋没土から縄文時代のものと考えられる。

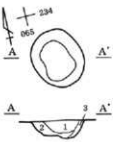


1号土坑
1．黒色土。炭化物粒を少量含む。
2．黒色土。ロームブロックを少量含む。
3．黒褐色土。
4．黒褐色土。しまりが弱い。ローム粒をやや多量含む。
5．暗褐色土。しまりが弱い。ロームブロック・粒を少量含む。

L=421.60m
0　1:60　m
1号土坑

2号土坑(PL. 5)

位置　230—060・065　**重複**　なし。　**形状**　楕円形で壁面はなだらかに立ち上がる。　**規模**　92×78×28cm　**埋没土**　黒褐色土主体で下層にロームを含む。　**遺物**　なし。　**所見**　埋没土から縄文時代のものと考えられる。

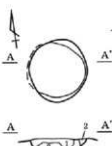


2号土坑
1．黒褐色土。
2．黒褐色土。ローム粒を少量含む。
3．純い黄褐色土(ローム)。しまりがやや強い。黒褐色土粒を少量含む。

L=421.50m
0　1:60　m
2号土坑

3号土坑(PL. 6・55)

位置　245—060・065　**重複**　なし。　**形状**　円形で断面フラスコ状を呈する。　**規模**　上端100×92cm　下端92×88cm　深さ56cm　**埋没土**　ロームを含む黒褐色土を主体とする。上層と下層に炭化物を含む。　**遺物**　縄文土器の破片が11点出土した。№1は2類で縄文と平行沈線を施文する。　**所見**　遺物から縄文時代前期中葉と考えられる。

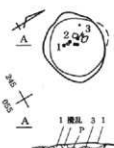


3号土坑
1．黒色土。炭化物を微量含む。
2．黒褐色土。ロームブロックをやや多量含む。
3．暗褐色土。ローム粒を少量含む。
4．黒褐色土。炭化物・ローム粒を少量含む。
5．暗褐色土と黒色土の混土。
6．暗褐色土。ローム粒を少量含む。
7．暗褐色土とロームブロックの混土。
8．黒褐色土。ローム粒・炭化物を少量含む。
9．黒褐色土。ローム粒を少量含む。

L=421.70m
0　1:60　m
3号土坑

4号土坑(PL. 6・55・56)

位置　245—050・055　**重複**　4号土坑→1号掘立柱建物　**形状**　円形で断面フラスコ状を呈する。
規模　上端114×97cm　下端96×94cm　深さ53cm
埋没土　ロームを含む黒色土を主体とする。　**遺物**　上層から中層において縄文土器の破片、石器凹石・剥片が出土した。№1・2は6類で0段多条RLの斜行縄文、№3は6類で0段多条RL・LRの羽状文、№4は2類で縄文と平行沈線を施文する。　**所見**　遺物から縄文時代前期中葉と考えられる。



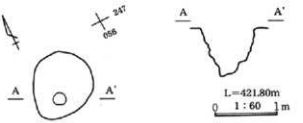
4号土坑
1．黒色土。
2．黒褐色土とロームブロックの混土。
3．黒色土。しまりが弱い。ローム粒を少量含む。
4．黒褐色土。
5．黒褐色土。ローム粒を少量含む。
6．黒褐色土。ロームブロックの混土。
7．黒色土。しまりがやや強い。
8．黒色土。ローム粒を少量含む。
9．黒色土。しまりがやや強い。やや粘質。

L=422.00m
0　1:60　m
4号土坑

5号土坑(PL. 6)

位置　245—055　**重複**　5号土坑→1号掘立柱建物

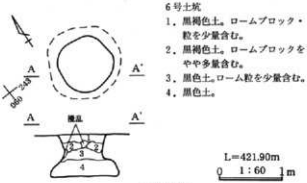
形状　楕円形で底面が狭い。 **規模**　112×96×80cm **埋没土**　ロームブロック・粒を含む黒色土を主体とする。　**遺物**　なし。　**所見**　埋没土から縄文時代と考えられる。



5号土坑

6号土坑(PL. 6・56)

位置　245−055　**重複**　なし。　**形状**　円形で断面フラスコ状を呈する。　**規模**　上端92×90cm　下端122×118cm　深さ67cm　**埋没土**　黒色土主体で下層以外にロームを含む。　**遺物**　縄文土器の破片、石器スクレイパーが出土した。土器は全て6類で№1は0段多条RL・LRの羽状文、№2は異条斜行縄文、№3は0段多条RLの斜行縄文を施文する。　**所見**　遺物から縄文時代前期中葉と考えられる。

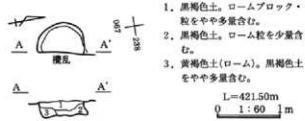


6号土坑

6号土坑
1．黒褐色土。ロームブロック・粒をややを多量含む。
2．黒褐色土。ロームブロックをやや多量含む。
3．黒色土。ローム粒を少量含む。
4．黒色土。

7号土坑(PL. 6・56)

位置　235・065　**重複**　なし。　**形状**　東半をトレンチで破壊してしまったが、円形と思われる。北側において断面フラスコ状を呈する。　**規模**　径76cm　深さ22cm　**埋没土**　ロームを含む黒褐色土を主体とする。　**遺物**　下層より縄文土器の破片と石器スクレイパーが出土した。土器は摩滅が顕著で時期が捉えられなかった。　**所見**　遺物及び埋没土から縄文時代のものと思われる。

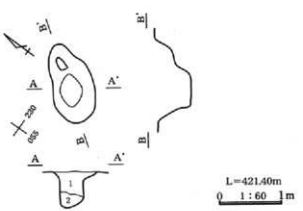


7号土坑

7号土坑
1．黒褐色土。ロームブロック・粒をやや多量含む。
2．黒褐色土。ローム粒を少量含む。
3．黄褐色土(ローム)。黒褐色土をやや多量含む。

8号土坑(PL. 7)

位置　225・230−050　**重複**　なし。　**形状**　楕円形で中段をもつ。　**規模**　128×60×56cm　**埋没土**　黒色土を主体とし、下層にロームを含む。　**遺物**　縄文土器の破片が1点出土したが、摩滅が顕著で時期が捉えられなかった。　**所見**　遺物及び埋没土から縄文時代のものと考えられる。



8号土坑
1．黒色土。
2．黒褐色土。ロームブロックをやや多量含む。

8号土坑

9号土坑(PL. 7・56)

位置　230−050　**重複**　なし。　**形状**　楕円形で底部は水平に、壁は垂直に近い。　**規模**　80×54×78cm　**埋没土**　上層は黒色土、下層はロームを主体とする。　**遺物**　縄文土器の破片と石器剥片が1点ず

つ出土した。№1は6類で0段多条RL・LRの羽状文を施文する。 **所見**　遺物から縄文時代前期中葉と考えられる。

10号土坑

位置　225―050　**重複**　なし。　**形状**　楕円形で中段をもつ。　**規模**　72×50×32cm　**埋没土**　ロームを含む黒色土を主体とする。　**遺物**　なし。　**所見**　埋没土から縄文時代のものと考えられる。

12号土坑(PL. 7)

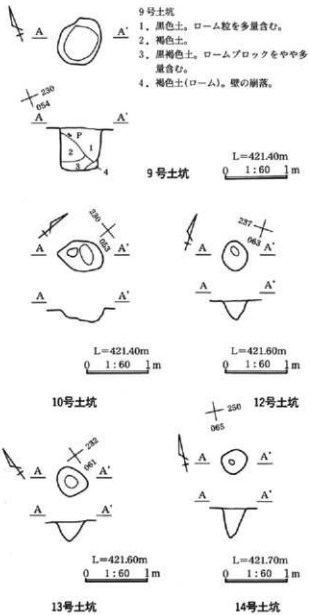
位置　235―060　**重複**　なし。　**形状**　円形で断面は三角形を呈する。　**規模**　48×41×29cm　**埋没土**　黒色土。　**遺物**　なし。　**所見**　埋没土から縄文時代のものと考えられる。

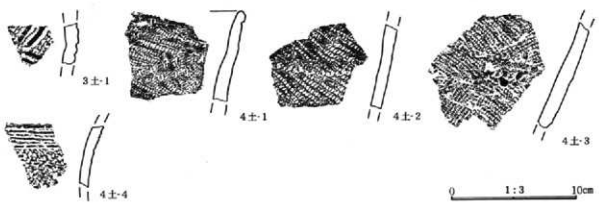
13号土坑(PL. 7)

位置　230―060　**重複**　なし。　**形状**　円形で断面は三角形を呈する。　**規模**　50×46×35cm　**埋没土**　ロームを少量含む黒褐色土。　**遺物**　なし。　**所見**　埋没土から縄文時代のものと考えられる。

14号土坑

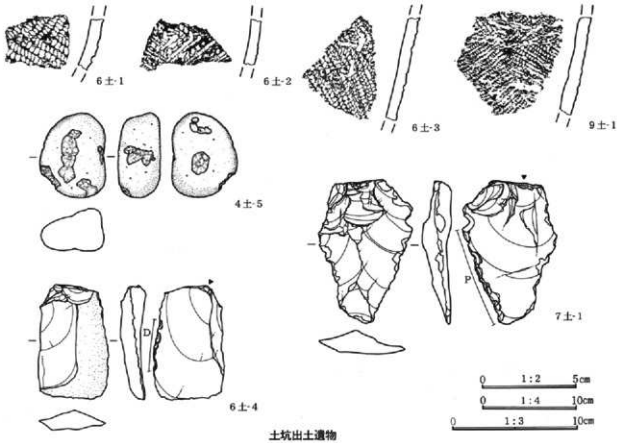
位置　245―060・065　**重複**　なし。　**形状**　円形で断面は三角形を呈する。**規模**　40×38×45cm　**埋没土**　ロームを少量含む黒色土。　**遺物**　なし。　**所見**　埋没土から縄文時代のものと考えられる。





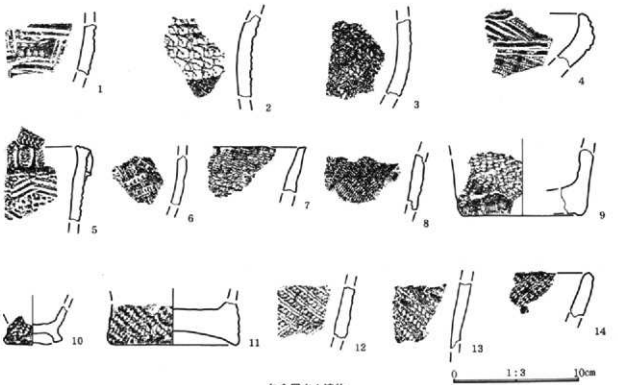
土坑出土遺物

5. 土坑　6. 包含層

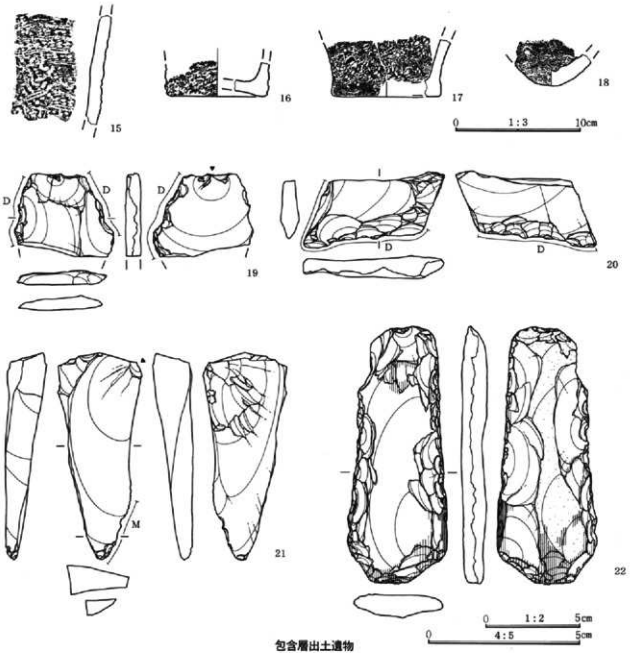


土坑出土遺物

6. 包 含 層(PL.56)



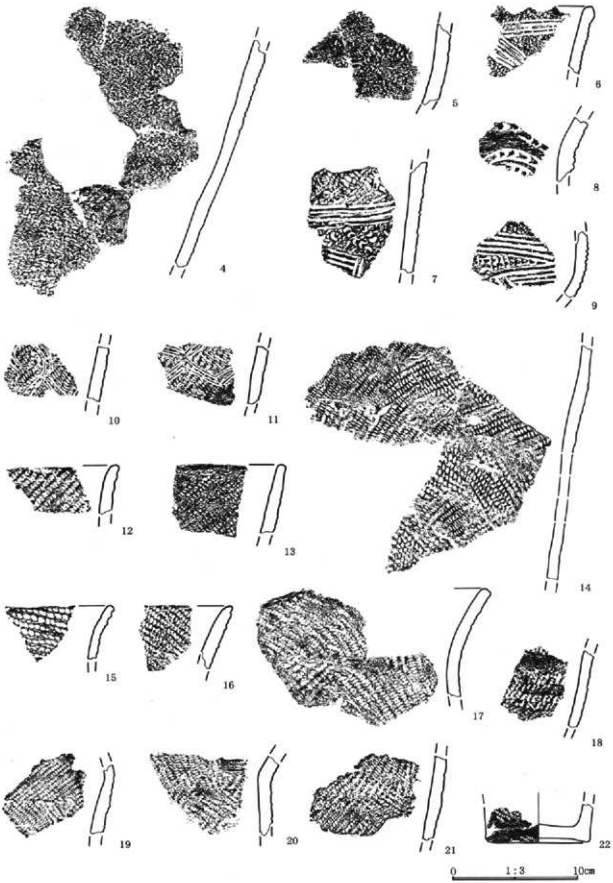
包含層出土遺物



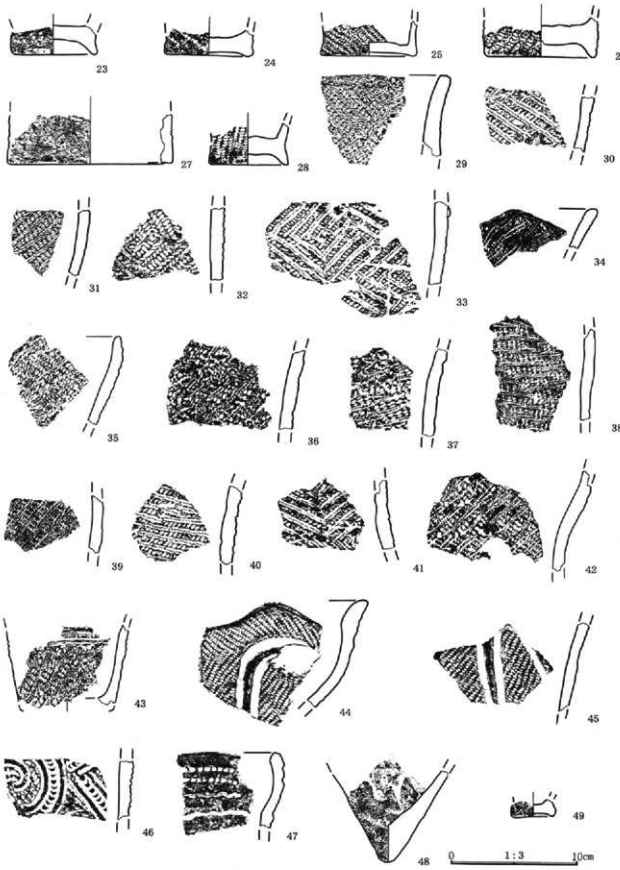
包含層出土遺物

7．遺構外出土遺物(PL.56～59)

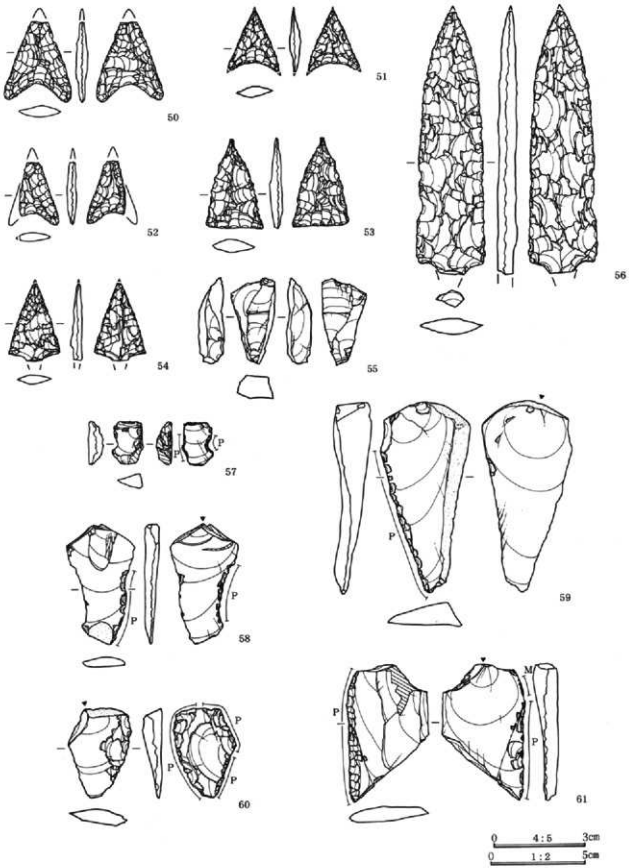
遺構外出土遺物



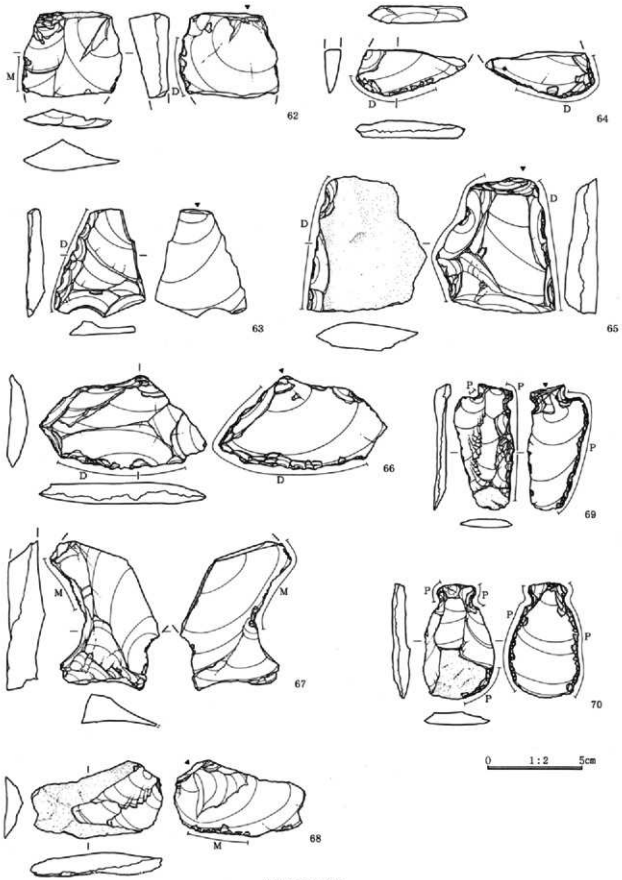
遺構外出土遺物


23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
0
1:3
10cm

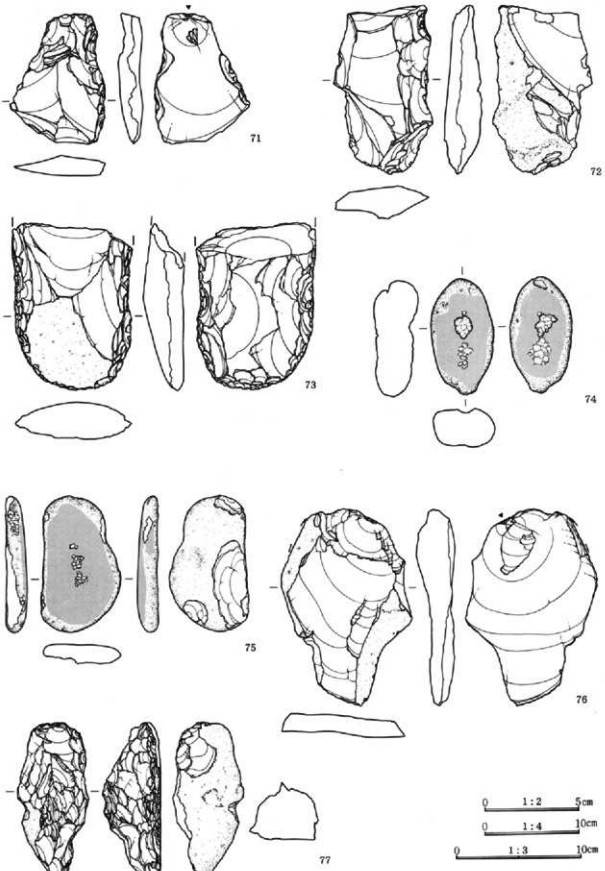
遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物

8．出土遺物について

①土器

7号住居

出土土器の分類別重量は表1の通りである。3・4・5・6類が出土し、その多くは型式が特定できない6類である。施文は前期中葉のものと考えられ、この時期の土器を主体的に出土する遺構といえる。

№1～9は3類のものである。№1～5・9は末端ループ状で№2・4・9はRLの、そのほかはLRの斜行縄文である。№6はRLの斜行縄文を施文し、口縁部に粘土を貼って一文字状に摘み上げる。№7は異条斜縄文と平行沈線を、№8は平行沈線を施文する。№10は4類で山形の口縁部に爪形文と平行沈線を施文する。№11は5類で格子状の突帯をもつ。№12～55は6類である。№12・13は0段多条RL・LRの羽状文、№14～36は0段多条RLまたはLRの斜行縄文である。№37～46は異条斜縄文を施文する。うち、№37・41・42・44・46は羽状文である。№47～53は附加条縄文である。№54・55は口縁部に竹管による刺突を施し、№55は末端ループ状である。

陥し穴

3号陥し穴から2点出土した。№1は6類で0段多条RLの斜行縄文を、№2は3類で縄文と平行沈線を施文する。

土坑

3・4・6・7・8・9号土坑から出土した。3号土坑№1は3類で縄文と平行沈線を施文する。4号土坑№1・2は6類で0段多条RLの斜行縄文、№3は同じくRL・LRの羽状文、№4は3類で縄文と平行沈線を施文する。6号土坑№1～3は6類である。№1は0段多条RL・LRの羽状文、№2は異状斜縄文、№3は0段多条RLの斜行縄文を施文する。9号土坑№1は0段多条RL・LRの羽状文を施文する。

包含層

出土土器の分類別重量は表1の通りである。3・6・7類が出土し、その多くは6類であることから前期中葉の土器が主体的に出土するといえる。

№1～3は3類で、№1は縄文と平行沈線を施文する。№2は末端ループ状、№3は組み紐文である。№4～6は5類である。№4は突帯と平行沈線、№5は同じく突帯と平行沈線で突帯間と口縁上面に爪形文を施文する。№7～17は6類で、№7～10は0段多条RL・LRの羽状文、№11は斜行縄文、№12・13は異条斜縄文、№14～17は附加条縄文である。№18は2類で前期初頭と考えられる。

遺構外

№1～7は3類である。№5までは組み紐文、№6・7は縄文と平行沈線を施文する。№8は4類で円弧状に爪形文を配する。№9は5類で縄文・突帯・平行沈線、№10・11は5類で縄文と平行沈線を施文する。№12～28は6類で0段多条RLまたはLRの斜行縄文で、№19は羽状文、№28は撚糸である。№29～33は6類で異条斜縄文、№34～43は6類で附加条縄文である。№44・45は7類で縄文と沈線を施文する。№46は8類で縄文・爪形文・沈線を、№47は9類で沈線・平行沈線・連続刺突文を施文する。№48は1類で、無文だが早期中葉田戸式かと思われる。№49は6類で摩滅が顕著である。

②石器

遺跡から出土した石器類(石器・剥片・石核・原石)の個数及び重量は表2のとおりである。7号住居は先に「①土器」でみたとおり、出土土器の時期がほぼ一定であるため、同時に出土した石器は前期中葉の石器組成の1例を示すといえる。本住居出土石器類は石器86点(素材剥片2点を含む)に対して剥片293点、重量でも剥片が石器の1/3近くと剥片が多いことを特徴とする。石材別(表4)にみると黒色頁岩が圧倒的に多いことを特徴とし、黒曜石がないなど石材系列Ⅰ類は少ない。このことは遺跡全体に対しても同様である。後に述べるように石鏃やスクレイパーⅠ形態などをⅠ類以外の石材で製作しているものも多く存在し、何らかの理由で入手量が少なかったⅠ類に替わって付近で豊富に入手できるⅡ類の黒

色頁岩を多用したとみられる。器種別(表3)ではスクレイパーが全出土石器数の半数近くを占め、これ以外の器種はさほど多くない。また凹石8点に対して磨石・敲石はそれぞれ2・3点であり、これは凹石の定義が後2者の機能も兼ねることにもよろう。これらの石器に対応する石皿は1点である。石核及び石製品等は出土しなかった。

石鏃(表5)

全部で13点出土した。7号住居出土のものは8点で、うち6点は調整から石鏃製作途中で一部が欠けたりしたと思われる未製品である(№57・59)。完形品では7号住居でⅠb形態・Ⅱb形態が1点ずつ、遺構外ではⅠa形態1点、Ⅰb形態2点、Ⅱa形態1点、Ⅲa形態1点である。未製品では7号住居№59がⅠ形態となった可能性がある。ほかの未製品の基部は、平坦あるいはやや張り出しており、この部位に対する最終的な調整は行われていない模様である。石材では黒色安山岩1点、珪質頁岩4点、珪質変質岩・玉髄・石英・チャート各1点、黒色頁岩4点で、黒曜石がなく、珪質岩とともに押圧剥離に最適とはいえないⅡ類の黒色頁岩を多用していることが傾向として認められる。遺構外№54は基部にタール状の物質が付着していた痕跡がある。

石錐

包含層より1点出土した。黒色頁岩の剥片を素材とし、打面の端部に打点が位置する。端部に微細な剥離により短い錐を作り出し、もう一方の端部は幅広でハンドルとしての機能を持つ。

有茎尖頭器

遺構外より1点出土した。黒色頁岩の剥片を素材とする。草創期のものと思われる。

楔形石器

遺構外より1点出土した。両極技法で剥離される。使用痕は観察できず、楔として用いられたかは不明。

スクレイパー(表6～9)

7号住居から47点、包含層から11点、その他から53点の計111点出土した。Ⅲ形態が最も多く、Ⅰ～Ⅲ類ともにU形態が多い。石材は全体に黒色頁岩が多いが、Ⅰ・Ⅲ形態では珪質岩などⅠ類も一定数存在する。ただしⅡ類では1点のみである。

Ⅰ形態　7号住居から14点(7号住居出土スクレイパーの29.8%、以下同じ)、その他から11点出土した。7号住居のU形態は11点(23.4%)とB形態の4倍近い。形状は縦長のものが多く、石材はⅠ類も認められるが黒色頁岩が主体といえる。遺構外№57はいわゆるノッチで、剥片も含めた本遺跡出土の全石器中で唯一の黒曜石製である。遺構外№60は石鏃の未製品の可能性がある。

Ⅱ形態　7号住居から8点(17.0%)、その他から31点出土した。7号住居・住居外ともにU形態のものが多い。形状は縦長が多いが7号住居出土のものは長幅比が比較的まとまっている。石材は黒色頁岩が主体で89.7%を占める。6号土坑№4は打面の端部に打点が位置する。

Ⅲ形態　7号住居から25点(53.2%)出土し、スクレイパーの過半数を占める。住居外からは22点出土した。7号住居・住居外ともにU形態のものが多く、Ⅲ形態の80%近い。形状は縦長が最も多いものの方形や横長も多く認められ、形状をあまり問わずに適する縁辺を使用したとみられる。石材は黒色頁岩が主体だが、珪質岩などのⅠ類も7号住居で32%と一定数認められることも、上記の傾向と一致する。

石匙(表11)

7号住居から6点、遺構外から2点の計8点出土した。7号住居にⅢ形態があるほかはⅠ形態で、Ⅱ形態のものはない。Ⅰ形態は前期に、Ⅱ形態は中期にみられることから時期的特徴と考えられる。石材は黒色頁岩が主体である。平面形状別では

1形態：7号住居№80　1点

2形態：7号住居№81～84、遺構外№69　5点

3形態：7号住居不掲載　1点

4形態：遺構外№70　1点

となる。最も多いのは2形態であり、前期中葉の特徴と一致する。3形態の1点は摘みの背面側のみに調整が施され、前期後半にみられる摘み全面に調整が及ぶものとはやや異なる。4形態は東北の前期に

多くみられ、その模倣とも考えられる。

リタッチドフレイク(表10)

剝片の縁辺1/3以下に微細な剝離が観察されるものをリタッチドフレイクとした。スクレイパーⅢ類に近い。実際に使用されたかは不明である。図示していないが、7号住居から5点、住居外から7点出土した。7号住居出土のものは全て横長剝片で、黒色頁岩3点、珪質岩2点、住居外は横長剝片2点、黒色頁岩6点、珪質岩1点である。

打製石斧(表12)

7号住居と包含層から各1点、遺構外から5点の計7点出土した。Ⅰ形態は7号住居と遺構外から5点である。いずれも小型で、重量も100g以下のものが多い。7号住居№85・遺構外№71を含めた3点は平面形が左右非対称で、遺構外不掲載の1点を除いて側縁部にも刃部機能が考えられるが、いずれも摩耗痕は認められない。刃部は全て片面調整で、側縁部は片面・両面の両方が認められ、縁辺は鋭利である。石材は黒色頁岩4点、黒色安山岩1点である。Ⅱ形態は包含層・遺構外の各1点である。石材はそれぞれ黒色頁岩・細粒輝石安山岩で、どちらもⅡ形態の要素である両面調整による階段状剝離が顕著である。包含層№22は摩耗痕が観察できるが縁辺側の摩耗度が高く、刃部再生によるとみられるリダクションが認められる。

磨石

6点出土し、石材は全てⅢ類である。7号住居からはⅠ・Ⅱ形態各1点ずつ出土した。不掲載のⅡ形態は凝灰質砂岩製で長さ12.5cm、幅8.1cm、厚さ4.3cm、重量570gである。2点とも欠損・被熱の痕跡はない。包含層から1点、遺構外からは3点出土した。全てⅡ形態で、石材は包含層がデイサイト質凝灰岩、遺構外が石英閃緑岩2点、ひん岩1点で、全て欠損している。また、石英閃緑岩製のうち1点は被熱していた。

凹石(表13)

7号住居から8点、包含層から1点、その他から3点、計12点出土した。7号住居出土のもののうち、石材ではⅢa類が8点中5点を占める。形状ではⅡ形態が5点と最も多い。ついでⅢ形態2点、Ⅴ形態1点で、Ⅰ及びⅣ形態は出土しなかった。凹みのあり方はa形態4点、b形態2点、c形態1点である。二つの形態を合わせると、Ⅱa・Ⅱb・Ⅲaが2個体ずつとなる。Ⅱ形態の2点は欠損していたが、7号住居以外も含めて被熱の痕跡のあるものはなかった。図示したもの以外の重量はⅡ形態254g、Ⅲ形態511g、Ⅴ形態640gである。

敲石

7号住居及び遺構外からⅡ・Ⅲ・Ⅴ類が各1点の計6点出土した。7号住居不掲載分のものはⅡ類凝灰質砂岩製、長さ11.9cm、幅5.9cm、厚さ2.7cm、重量228g、Ⅴ類凝灰質砂岩製、長さ14.1cm、幅6.5cm、厚さ4.6cm、重量410gである。6点全て欠損、被熱の痕跡はない。

部分研磨石器

7号住居から3点出土している。不掲載のものはⅠ類珪質頁岩製、長さ6.2cm、幅4.9cm、幅3.9cm、重量202g、Ⅰ類変質安山岩製、長さ7.9cm、幅3.8cm、厚さ1.6cm、重量74gである。№91は端部に主軸と平行又はやや斜め方向に、側縁部には主軸と直行方向に擦過痕が明瞭に残る。Ⅰ類の2点は端部に主軸平行方向の擦過痕が観察できる。いずれも欠損、被熱の痕跡等はない。

石皿

図示していないが、7号住居より1点出土した。1/4程度の破片である。床面直上の出土で、凝灰質砂岩製、径約10cm、厚さ3.5cm、重量466gの扁形で、原型は扁平な円形と思われる。作業面側は磨面状となり、中央付近がやや窪む。

素材剝片

打製石斧の素材となり得る大型のものを抽出した。7号住居・遺構外とも各2点ずつの出土で、石材は全て黒色頁岩である。7号住居№86は横長剝片で、もう1点は打面の端部に打点が位置する。どちらも打製石斧Ⅰ形態の素材に成り得ると考えられる。遺構外のものはどちらも原礫面を打点とし、側縁部に

も原礫面を残す。打製石斧Ⅰ・Ⅱ形態で素材となり得ると思われる。

石核

包含層から2点、遺構外から5点の計7点出土した。遺構外№77は珪質頁岩、他は黒色頁岩である。大きさは5～13cmほど、重量は56～380gで、形状は長幅比1:1に近いもの2点、横長のもの4点、縦長のもの1点である。中型、小型剥片用と思われる。

原石

図示していないが、7号住居から1点、遺構外から2点の計3点出土した。7号住居のものは流紋岩で半面に原礫面を残す。長さ14cm、幅11cm、厚さ4cm、重量620gである。遺構外のものは流紋岩・珪質頁岩各1点である。

剥片(表14)

7号住居からは293点、3061.3g出土した。黒色頁岩が圧倒的に多いことは、石器の傾向と一致する。

表1　土器分類別重量

	3　類	4　類	5　類	6　類	不　明
7号住居	913.8g	23.8g	18.5g	17625.1g	606.7g
包含層	196.1g	―	69.8g	3250.7g	424.2g

表2　石器類個数・重量組成

	7号住居		包含層		その他		全体	
	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数計	重量計(g)
石器	84	8857.4	15	705.6	84	5857.8	183	15420.8
剥片・素剥	295	3212.7	5	44.6	56	1580.1	356	4837.4
石核			2	454.5	5	1240.7	7	1695.2
原石	1	620			2	799.9	3	1419.9
合計	380	12690.1	22	1204.7	147	9478.5	549	23373.3

表3　石器器種別個数・重量組成

器種	7号住居		包含層		その他		全体	
	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数計	重量計(g)
石鏃	8	9.1			5	5.8	13	14.9
石錐			1	17.3			1	17.3
槍先					1	5.3	1	5.3
有尖					1	13.5	1	13.5
楔形					1	3.6	1	3.6
Sc	47	1486.7	11	291.1	53	2031.0	111	3808.8
RF	5	162.8			7	139.7	12	302.5
石匙	6	82.9			2	35.0	8	117.9
打斧	1	64.9	1	120.2	5	476.8	7	661.9
凹石	8	3624.0	1	187.2	3	1182.1	12	4993.3
磨石	2	1620.0	1	89.8	3	1484.1	6	3193.9
敲石	3	937.0			3	480.9	6	1417.9
石皿	1	466.0					1	466.0
部研	3	404.0					3	404.0
素剥	2	151.4			2	519.8	4	671.2
石核			2	454.5	5	1240.7	7	1695.2
原石	1	620.0			2	799.9	3	1419.9
計	87	9628.8	17	1160.1	93	8418.2	197	19207.1

表4　石器石材別個数・重量組成

		7号住居		包含層		その他		全体	
石材系列	石材	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数計	重量計(g)
Ⅰ	黒曜					1	2.4	1	2.4
	Ch	2	6.3			2	6.9	4	13.2
	硬頁	3	9.5			1	6.1	4	15.6
	黒安	6	75.2	2	10.0	8	211.7	16	296.9
	玉髄	4	6.0					4	6.0
	碧玉	8	7.6	2	25.8	4	16.2	14	49.6
	珪質	57	667.8	2	22.1	22	869.0	81	1558.9
	流紋	1	620.0			1	527.9	2	1147.9
Ⅱ	黒頁	259	4318.7	14	869.8	90	4322.6	363	9511.1
	砂頁	1	127.8					1	127.8
	細輝	1	91.1			3	211.8	4	302.9
	ホルン	1	0.6					1	0.6
Ⅲa	安山	6	3032.4	1	187.2	6	581.7	13	3801.3
	石閃	1	321.1			2	824.1	3	1145.2
	ひん岩					1	660.0	1	660.0
Ⅲb	砂岩	5	1963.0			3	394.5	8	2357.5
	凝灰	23	678.5	1	89.8	1	389.2	25	1157.5
Ⅳ	雲石	1	511.1					1	511.1
Ⅴ	緑凝	1	253.4					1	253.4
	礫岩					1	452.7	1	452.7
	石英					1	1.7	1	1.7
計		380	12690.1	22	1204.7	147	9478.5	549	23373.3

表5　石鏃形態別石材組成

形態	個数	7号住居				遺構外			
		石材							
		Ⅰ			Ⅱ	Ⅰ		Ⅱ	Ⅵ
		珪質	黒安	玉髄	黒頁	珪質	Ch	黒頁	石英
Ⅰa	1						1		
Ⅰb	3				1	2			
Ⅱa	1								1
Ⅱb	1		1						
Ⅲa	1							1	
未	6	3		1	2				
計	13	3	1	1	3	2	1	1	1

表6　スクレイパー形態別石材組成

形態	個数	7号住居				包含層		その他						
		石材						石材						
		Ⅰ		Ⅱ		Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ				Ⅱ		Ⅲa
		珪質	黒安	黒頁	細輝	碧玉	黒頁	黒曜	珪質	黒安	硬頁	黒頁	細輝	安山
ⅠU	20	4		7			1	1	1			6		
ⅠB	5			3					2					
ⅡU	28			6	1		3					18		
ⅡB	11			1			3			1		4	1	1
ⅢU	38	6	1	14		1	2		3		1	10		
ⅢB	9	1		3			1					4		
計	111	11	1	34	1	1	10	1	6	1	1	42	1	1

表7　7号住居出土 Sc Ⅰ長幅比

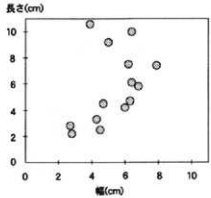


表8　7号住居出土 Sc Ⅱ長幅比

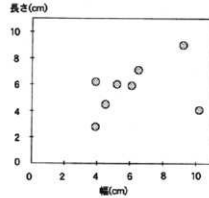


表9　7号住居出土 Sc Ⅲ長幅比

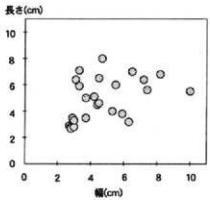


表10　7号住居出土 RF 長幅比

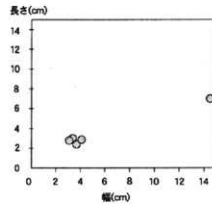


表11　石匙形態別石材組成

形態	個数	7住	遺構外	
		石　材		
		Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ
		黒頁	珪質	黒頁
ⅠU	6	4	1	1
ⅠB	1	1		
ⅢB	1	1		
計	8	6	1	1

表12　打製石斧形態別石材組成

形態	個数	7号住居	包含層	遺構外		
		石　材				
		Ⅱ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	
		黒頁	黒頁	黒安	黒頁	細輝
Ⅰ	5	1		1	3	
Ⅱ	2		1			1
計	7	1	1	1	3	1

表13　凹石形態別石材組成

形態	個数	7　号　住　居					包含層	遺構外		
		石　材								
		Ⅲa		Ⅲb	Ⅳ	Ⅴ	Ⅲa	Ⅲa	Ⅲb	Ⅵ
		安山	石英	砂岩	雲石	緑凝	安山	安山	凝灰	礫岩
Ⅱa	3			1		1				1
Ⅱb	2	2								
Ⅱc	2		1						1	
Ⅲa	2	1			1					
Ⅴa	1							1		
Ⅴb	1						1			
Ⅴc	1	1								
計	12	4	1	1	1	1	1	1	1	1

表14　7号住居出土剥片石材別個数・重量組成

	石材										計
	Ⅰ						Ⅱ		Ⅲb		
	Ch	硬頁	黒安	玉髄	碧玉	珪質	黒頁	ホルン	砂岩	凝灰	
点　数	2	3	4	3	8	40	208	1	1	23	293
重量(g)	6.3	9.5	53.0	2.7	7.6	261.1	1973.2	0.6	68.8	678.5	3061.3

掲載石器一覧表

7号住居

番号	器種	分類	石材	長さ	幅	厚さ	重量	番号	器種	分類	石材	長さ	幅	厚さ	重量
56	石鏃	Ⅰb	黒頁	1.1	0.9	0.2	0.5	74	Sc	ⅢU	黒安	4.0	5.3	0.9	21.3
57	石鏃	Ⅰb	珪質	2.0	1.9	0.3	0.8	75	Sc	ⅢU	黒頁	5.9	3.3	0.7	12.7
58	石鏃	Ⅱb	黒安	2.2	1.7	0.2	0.9	76	Sc	ⅢU	黒頁	6.4	7.2	1.0	40.7
59	石鏃	未製品	玉髄	2.9	2.0	0.6	3.3	77	Sc	ⅢU	黒頁	7.0	6.5	1.4	56.3
60	Sc	ⅠU	黒頁	4.7	6.3	1.0	27.3	78	Sc	ⅢB	黒頁	6.5	4.5	2.0	46.1
61	Sc	ⅠU	黒頁	3.3	4.3	0.3	5.1	79	Sc	ⅢB	珪質	2.8	3.0	0.8	3.9
62	Sc	ⅠU	黒頁	4.2	6.0	0.8	19.8	80	石匙	ⅠU	黒頁	4.5	6.8	1.1	31.3
63	Sc	ⅠU	珪質	4.5	4.7	1.4	10.2	81	石匙	ⅠU	黒頁	4.8	2.8	0.4	6.0
64	Sc	ⅠU	珪質	5.8	6.8	1.2	47.3	82	石匙	ⅠU	黒頁	4.8	4.8	0.4	9.8
65	Sc	ⅠU	黒頁	9.2	5.0	0.9	37.2	83	石匙	ⅠB	黒頁	6.0	4.4	0.8	19.0
66	Sc	ⅠU	黒頁	6.1	6.4	1.1	40.6	84	石匙	ⅢB	黒頁	5.6	2.0	0.5	5.0
67	Sc	ⅠB	黒頁	7.5	6.2	1.6	48.3	85	打斧	Ⅰ	黒頁	7.8	6.0	1.6	64.9
68	Sc	ⅠB	黒頁	10.0	6.4	1.2	73.3	86	素剝	—	黒頁	6.8	10.3	1.1	58.3
69	Sc	ⅡU	黒頁	6.2	3.9	1.0	21.1	87	磨石	Ⅰ	安山	11.4	10.0	6.9	1050.0
70	Sc	ⅡU	黒頁	5.9	6.1	1.3	36.9	88	凹石	Ⅱa	砂岩	11.8	7.7	4.9	630.0
71	Sc	ⅡU	黒頁	6.0	5.2	1.7	46.4	89	凹石	Ⅱb	安山	11.0	6.1	5.0	454.8
72	Sc	ⅡU	黒頁	4.1	10.2	2.3	82.6	90	敲石	Ⅲ	黒頁	12.7	5.6	3.6	298.2
73	Sc	ⅡB	黒頁	7.1	6.5	2.1	89.8	91	部研	Ⅱ	頁岩	7.6	4.6	2.3	127.8

土坑

番号	器種	分類	石材	長さ	幅	厚さ	重量	番号	器種	分類	石材	長さ	幅	厚さ	重量
4土-5	凹石	Ⅴa	安山	8.8	7.2	4.5	340.2	7土-1	Sc	ⅠU	黒頁	7.4	5.0	1.5	41.1
6土-4	Sc	ⅡU	黒頁	6.0	3.8	1.0	27.0								

包含層

番号	器種	分類	石材	長さ	幅	厚さ	重量	番号	器種	分類	石材	長さ	幅	厚さ	重量
19	Sc	ⅡB	黒頁	4.3	5.3	0.8	23.6	21	石錐	—	黒頁	6.9	2.7	1.0	17.3
20	Sc	ⅡB	黒頁	6.3	5.5	1.0	34.3	22	打斧	Ⅱ	黒頁	13.2	5.3	1.3	120.2

遺構外

番号	器種	分類	石材	長さ	幅	厚さ	重量	番号	器種	分類	石材	長さ	幅	厚さ	重量
50	石鏃	Ⅰa	Ch	2.6	2.3	0.4	1.6	64	Sc	ⅡB	黒安	2.4	5.7	0.9	12.9
51	石鏃	Ⅰb	珪質	2.0	1.7	0.3	0.7	65	Sc	ⅡB	黒頁	7.1	6.2	1.7	80.7
52	石鏃	Ⅰb	珪質	2.1	1.3	0.3	0.6	66	Sc	ⅡB	黒頁	4.9	8.8	1.0	48.8
53	石鏃	Ⅱa	石英	3.0	1.8	0.4	1.7	67	Sc	ⅢB	黒頁	7.5	6.2	1.6	52.6
54	石鏃	Ⅲa	黒頁	2.5	1.7	0.4	1.2	68	Sc	ⅢU	黒頁	6.1	6.0	1.1	28.2
55	楔形	—	頁岩	2.9	1.5	0.8	3.6	69	石匙	ⅠU	珪質	6.5	3.5	0.6	13.1
56	有尖	—	黒頁	8.7	2.2	0.6	13.5	70	石匙	ⅠU	黒頁	6.1	3.7	0.9	21.9
57	Sc	ⅠU	黒曜	2.3	1.6	0.8	2.4	71	打斧	Ⅰ	黒頁	7.0	5.0	1.2	41.1
58	Sc	ⅠU	黒頁	6.6	3.5	0.7	15.7	72	打斧	Ⅰ	黒頁	8.8	5.1	1.8	88.6
59	Sc	ⅠU	黒頁	10.1	4.8	1.7	64.3	73	打斧	Ⅱ	細輝	8.9	6.3	2.1	141.4
60	Sc	ⅠB	黒頁	2.9	2.0	0.6	3.9	74	凹石	Ⅱa	礫岩	12.3	6.5	4.5	452.7
61	Sc	ⅠB	黒頁	7.3	4.4	1.2	33.8	75	敲石	Ⅱ	砂岩	14.4	8.4	2.0	281.2
62	Sc	ⅡU	黒頁	4.5	5.3	2.1	42.7	76	素剝	—	黒頁	15.6	10.2	2.2	330.0
63	Sc	ⅡU	黒頁	5.7	4.8	0.8	25.3	77	石核	—	珪質	5.6	12.5	4.5	322.7

Ⅳ　弥生時代の遺構と遺物

1．概　　要

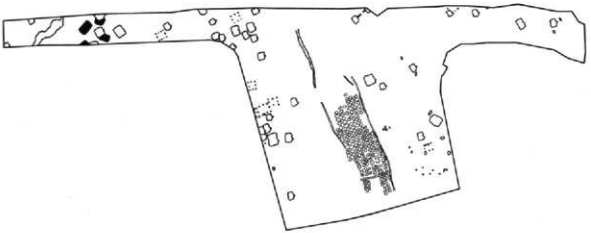
竪穴住居4軒を検出した。いずれも樽式3期(飯島克巳・若狭徹　1988「樽式土器編年の再構成」信濃40-9)を中心とした土器を出土することから、この時期のものと考えられる。分布は5区中央のわずかに高まりを見せる尾根上に集中する。本線部分における当該期の住居は遺跡西側の四釜川寄りに集中し、この尾根の続きに3軒、谷をはさんで西側の尾根に7軒が分布する。本遺跡のものもこれらと一連の集落展開であり、更に南へ広がる可能性がある。

周辺の遺跡も含めて集落の生産基盤に関わる遺構は検出されていない。古墳時代後期と思われる水田が検出された1区中央谷地に可能性があるが、鉱滓区で行ったプラントオパール分析では、As-C混層及びFA混下層において良好な結果が得られなかった。このような小谷地のほか、遺跡北東の戸神山麓の現水田地帯や四釜川の段丘崖下などの可能性が考えられるが、現段階では不明である。

住居の規模が完全に把握できたものは10号住居のみで、11号住居はほとんどを調査区外に残し、13・15号住居は平安時代の竪穴住居と重複している。平面長方形で4本柱または6本柱を主体とし、炉は入り口と反対側の柱穴間やや外側に位置するなど、当該期通有の構造である。

遺物は土器を中心に多く出土したが、遺棄されたものは少ない。11号住居で土製勾玉が、13号住居で胴部下半を欠いて転用された甕が出土した。10・13号住居からは炭化材が出土し、火災住居と考えられる。

そのほか、1区西尾根より西側から微量ながら樽式土器及び石器が採集された。



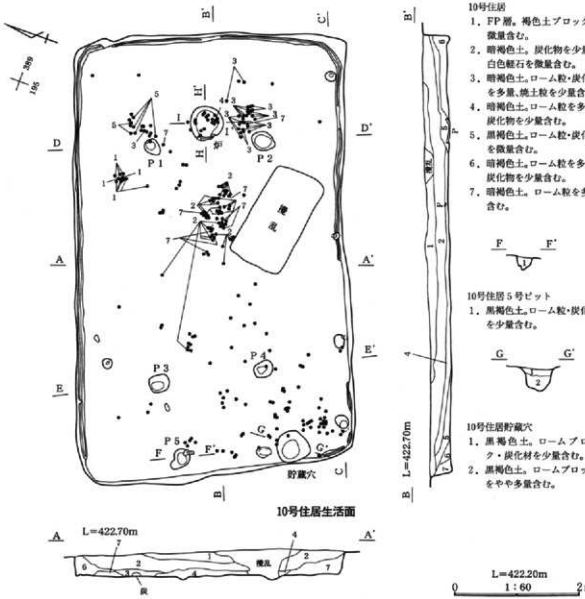
弥生時代遺構分布図

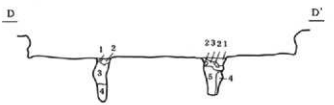
2．竪穴住居

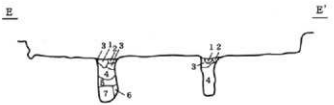
10号住居(PL.7・8・59)

位置　380・385—190～200　**重複**　なし。　**形状**　長方形。壁が比較的直線をなす。　**規模**　7.17×4.27m　**面積**　32.1㎡　**方位**　66°　他の弥生住居と軸が異なる。　**埋没土**　上層にFPが堆積。不純物は少ないが、1次堆積かは不明。中層以下はFPを含まない。　**床面**　確認面から39cm下で床面となる。ローム層を平に掘り込み、そのまま床面とする。部分的に焼土化した面が西壁及び西壁付近の床面に多い。　**壁溝**　南壁西半から西壁を除いて幅2～10cm、深さ1～7cmで巡る。　**炉**　3・4号ピットの中間、やや東壁寄りに設置。径約52cm、深さ約8cmの円形

の地床炉である。西側角にやや深い掘り方を設け、扁平な円礫を横向きに立てて枕石とする。反対側使用面付近に土器破片が分布。　**貯蔵穴**　西壁南寄りに設ける。規模は径約50cm、深さ38cmの円形。　**柱穴**　9基検出した。1～4号ピットが主柱穴で、ほぼ対角線上に並び、住居平面形と相似形をなす。規模はP1　28×22×65cm　P2　38×28×66cm　P3　33×27×58cm　P4　30×26×61cmである。5号ピットは38×24×24cmで平面形状が主軸方向に長く、主柱穴より浅い。入り口施設に関するものと思われるが、対称する位置からピットは検出できなかった。南壁沿いに位置する4基は径10～20cm、深さ40～50cmの規模をもち、いずれもロームブロック混じりの黒色土で埋没していた。　**遺物**　樽式の壺・高杯が出土した。炉とその周辺、中央部、貯蔵穴周辺に分布するが4層上面への廃棄が多く、床面直上は少ない。炭化材はNo.15が床面直上から、ほかは床面から1～10cmほど浮いており、全体に放射状に分布する。No.8にほぞ穴状の加工がみられた。樹種はクリのほかニレ属・コナラ属が認められる。　炉埋没土からコムギ・イネの炭化胚乳を検出した。　**掘り方**　なし。**備考**　炭化材の出土状況から火災住居と考えられる。







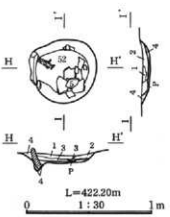
10号住居1号ピット
1．鈍い褐色粘土。
2．暗褐色土。ロームブロックをやや多量含む。
3．明褐色土。ロームブロックを多量、鈍い黄褐色粘土粒を少量含む。
4．明褐色土。ロームブロックを多量、黒色土粒を少量含む。

10号住居2号ピット
1．極暗褐色土。ロームブロック・炭粒・焼土粒を少量含む。
2．ロームブロック。
3．黒褐色土。ロームブロックを微量含む。
4．褐色土(ローム)。黒色土粒を少量含む。
5．黒褐色土。ローム粒を多量含む。

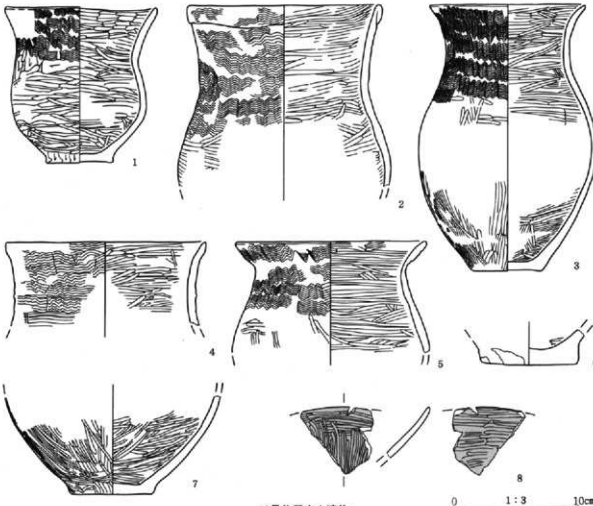
10号住居3号ピット
1．暗褐色土。炭粒をやや多量、ローム粒・焼土粒を少量含む。
2．黒褐色土。ローム粒・焼土粒を少量、炭粒を微量含む。
3．極暗褐色土。ローム粒・焼土粒・炭粒を少量含む。
4．褐色土(ローム)。黒色土粒を少量、炭粒を微量含む。
5．褐色土(ローム)。黒色土粒を微量含む。
6．明褐色土。ロームブロックを多量、黒色土粒を少量含む。
7．暗褐色土。しまりが弱い。黒色土・炭粒を少量含む。

10号住居4号ピット
1．黒褐色土。ローム粒・焼土粒・炭粒を少量含む。
2．鈍い褐色粘土。
3．暗褐色土。ローム粒をやや多量含む。
4．暗褐色土。ロームブロックを多量含む。

10号住居出土炭化材分布図



10号住居9[7]
1．黒褐色土。ローム粒を微量含む。
2．黒褐色土。ローム粒・焼土粒・炭粒を微量含む。
3．黒褐色土。ローム粒を少量含む。
4．黒褐色土。3層よりやや暗い。ローム粒を少量含む。



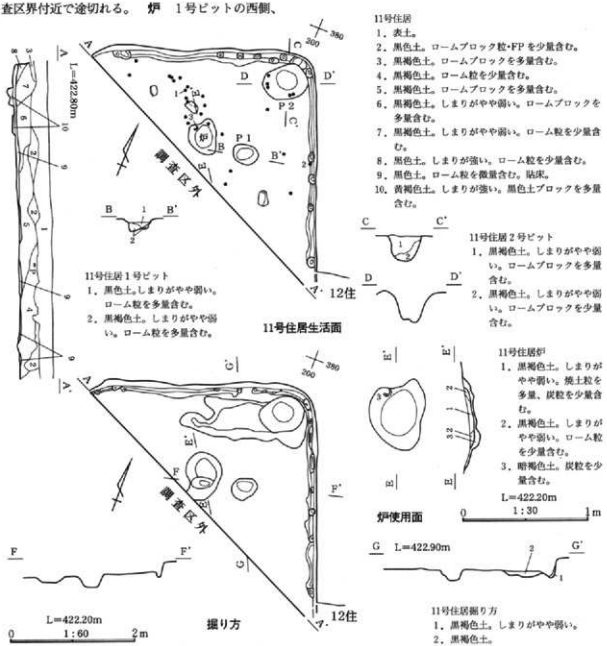
10号住居出土遺物

10号住居遺物観察表

番号	種別器種	出土レベル	法量	胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態備考
1	弥生土器 甕	＋8～22	口径(12.2) 底径 3.4 器高 12.3	①粗砂、細礫 ②普通 ③純い褐7.5YR5/4	小型で口縁部が短い。外面　胴部上半に部分的に赤彩。口縁部～頸部6本単位波状文、胴部上位・最下位部分的に削りを残す。胴部中位以下横方向篦磨き、底部雑な篦磨き。 内面　口縁部～胴部横方向篦磨き、底部雑な篦磨き。	口縁部5/8欠。
2	弥生土器 甕	床面直上～＋19	口径 15.4 底径 — 器高 14.4+	①粗砂、細礫 ②普通 ③にぶい黄褐10YR4/3	1段の複合口縁。外面　口縁部～胴部上位8本単位の波状文、胴部中位以下横方向篦磨き。 内面　全面横方向篦磨き。	口縁部～胴部中位1/2残。
3	弥生土器 甕	＋5～18	口径 12.4 底径 5.6 器高 21.0	①粗砂 ②良好 ③橙7.5YR6/6	外面　口縁部～胴部上位9本単位波状文、胴部中位縦・横方向篦磨き、胴部下位縦方向篦磨き、底部篦磨き。 内面　口縁部～胴部主に横方向篦磨き、底部篦磨き。	胴部中位欠。
4	弥生土器 甕	炉＋2	口径(16.0) 底径 — 器高 6.7+	①粗砂、細礫 ②普通 ③純い黄橙10YR6/4	外面　口縁部5本単位波状文、頸部5本単位以上2連止め簾縄文。 内面　横方向篦磨き。	口縁部1/4残。
5	弥生土器 甕	＋17～25	口径(15.1) 底径 — 器高 8.8+	①粗砂、細礫 ②良好 ③オリーブ黒5Y3/1	口縁部短く、強く外反。外面　口縁部～胴部上位7本単位波状文、胴部中位縦・横方向篦磨き。 内面　全面横方向篦磨き。	口縁部1/2、胴部上半1/4残。
6	弥生土器 甕	＋15	口径 — 底径 7.4 器高 2.7+	①粗砂 ②普通 ③純い黄褐10YR4/3	外面　胴部最下位笠撫で状の盛り上がり、底部撫で。 内面　篦磨き。	底部残。
7	弥生土器 甕	＋4～11	口径 — 底径 6.4 器高 7.7+	①粗砂、細礫、白色鉱物 ②普通 ③橙7.5YR4/4	外面　胴部縦方向篦磨き、底部篦磨き。 内面　胴部横方向篦磨き、底部撫で。	胴部下半～底部残。
8	弥生土器 高杯	堆積土	口径 — 底径 — 器高 —	①粗砂 ②普通 ③赤10Y4/6	赤彩。 外面　口縁端部横方向・以下縦方向篦磨き。 内面　横方向篦磨き。	口縁部破片。

11号住居(PL．8・9・60)

位置 375−195・200 **重複** 11号住居→12号住居 **形状** 長方形。 **規模** 調査区内で東壁3.58m、北壁3.43m。各壁は直線的で、ほぼ直角に交差する。 **面積** 調査区内で7.7m²。 **方位** −21° **埋没土** FPを含まず、西側から埋没。 **床面** 確認面から24cm下で床面となる。掘削した掘り方面をそのまま使用するが、部分的に厚さ約3cmの貼床を施す。 **壁溝** 幅10〜20cm、深さ5〜7cmで巡り、径10cm、深さ5〜10cmの小ピットが穿たれる。コーナーと調査区界付近で途切れる。 **炉** 1号ピットの西側、やや北壁よりに設置。55×43×13cmの楕円状を呈する地床炉である。炉床は焼土化していた。 **貯蔵穴** 2号ピットは形状・規模から貯蔵穴となる可能性があるが、通常は炉と反対側に設けられるため断定できない。規模は63×53×50cmである。 **柱穴** 1号ピットは、やや浅いものの位置から柱穴となる可能性がある。規模は41×29×19cmである。 **遺物** 樽式甕のほか、炉から土製勾玉が出土。 **掘り方** 床面から3cm前後で掘り方面となる。2号ピットから西を10cmほど掘り窪める。



11号住居出土遺物

11号住居遺物観察表

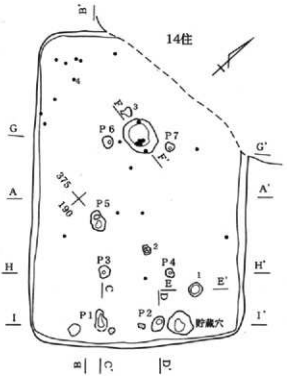
番号	種類器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	弥生土器 甕	＋4	口径(16.0) 底径 — 器高 5.2+	①粗砂、雲母 ②普通 ③にぶい黄褐10YR5/3	1段の複合口縁。 外面　7本単位の波状文。 内面　横方向簡磨き。	口縁部1/4残。
2	弥生土器 甕	＋2	口径 — 底径 5.0 器高 2.6+	①粗砂、雲母 ②普通 ③鈍い黄褐10YR5/4	外面　胴部下位縦方向簡磨き、底部簡磨き。 内面　横方向簡磨き。	胴部最下位～底部残。
3	土製品 勾玉	炉＋2	長さ 2.5 径 1.2 孔径 0.5	①粗砂 ②普通 ③明赤褐5YR5/6	器表がやや摩滅。撫で調整。	ほぼ完形。

13号住居(PL. 9・10・60)

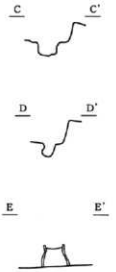
位置　370・375—185・190　**重複**　13号住居→14号住居　**形状**　長方形。　**規模**　5.00×3.40m　**面積**　15.4m²(推定)　**方位**　—56°　**埋没土**　最上層(1層)にのみFPを含む。　**床面**　確認面から32cm下で床面となる。地山のローム層を平に掘り込みそのまま床面とする。　**壁溝**　なし。　**炉**　6・7号ピットの中間、わずか外側に設置。60×53×7cmの地床炉。炉床付近に土器片、炭化材が分布し、一部焼土化。　**貯蔵穴**　2号ピットの脇に42×36×27cmの規模で設ける。　**柱穴**　7基検出した。主柱穴は3・4・6・7号ピットである。住居平面形の対角線上からややずれるが、相似形をなす。1・2号ピットは主柱穴より浅く、形状から壁外方向へ傾けて柱を据えたと考えられ、入り口施設に関するものと思われる。5号ピットは主柱穴より規模が大きく不整形であり、対称位置にピットが検出されないことから、主柱穴とは性格が異なると考えられる。規模はP1 34×18×11cm　P2　25×19×13cm　P3　19×19×54cm　P4　17×12×50cm　P5　34×22×15cm　P6　18×15×62cm　P7　14×13×51cmである。ロームブロック混じりの黒色土で埋没していた。

遺物　樽式壺・甕・台付甕が出土した。貯蔵穴付近に甕の上半部(№1)が床面に正位で据え置かれていたが、器台等に転用したものであろう。炭化材は数点が壁面から床面に立てかけられたような状態で出土。№14～17・28・29は床面直上から、そのほかは1～20cm浮いた状態で出土。丸木状のもの(№15・25)、樹皮を剝いでいないもの(№15)もみられた。樹種はクリが主体である。茅状の炭化物(№19)はススキ属である。　**掘り方**　なし。　**備考**　炭化材の出土状況から火災住居と考えられる。

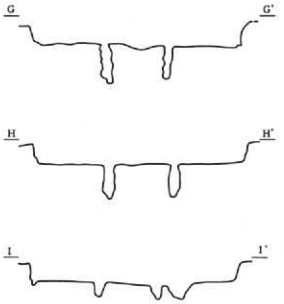
13号住居出土炭化材分布図

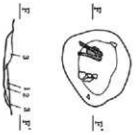


13号住居生活面



13号住居
1．黒色土。FPを少量含む。
2．黒色土。ローム粒を少量含む。
3．黒褐色土。ローム粒を少量含む。下位ほど多い。
4．黒褐色土。ローム粒・焼土粒・炭粒を少量含む。

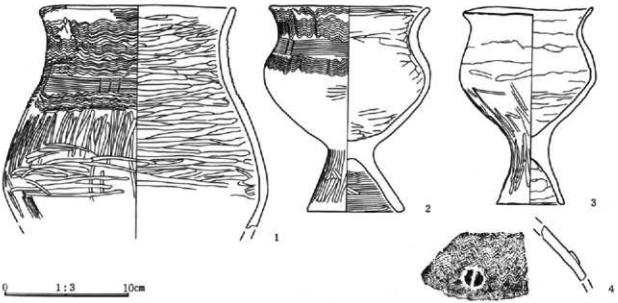




炉使用面

L=422.20m
0　1：30　1m

13号住居炉
1．黒色土。
2．極暗褐色土。ローム粒・焼土粒・炭粒を少量含む。
3．黒褐色土。ローム粒・焼土粒・炭粒を少量含む。



13号住居出土遺物

13号住居遺物観察表

番号	種類器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	弥生土器 甕	＋2	口径 15.4 底径 — 器高 17.5+	①粗砂、細礫 ②良好 ③鈍い黄褐10YR5/4	外面　口縁端部横撫で後口縁部７本単位波状文、胴部上位８本単位３連止め簾状文・波状文・縦方向篦磨き、胴部中位横方向・胴部下位縦方向篦磨き。 内面　横方向篦磨き。	胴部下半～底部欠。
2	弥生土器 台付甕	床面直上	口径 12.4 底径 7.6 器高 16.0	①粗砂、細礫、白色鉱物 ②普通 ③鈍い黄橙10YR6/4	外面　口縁端部横撫で後口縁部８本単位波状文、頸部８本単位２連止め簾状文、胴部上位波状文、胴部中位横方向・胴部下位～台部縦方向篦研き。 内面　口縁部～台部横方向篦磨き、台部横方向刷毛。	胴部下半1/2欠。
3	弥生土器 台付甕	床面直上	口径 10.3 底径 5.2 器高 15.5	①粗砂、細礫 ②普通 ③鈍い赤褐5YR5/4	無文。紐作り痕・粘土貼付痕が残り雑な作り。台部細長く、調きが弱い。外面　口縁部横撫で、胴部中位横方向・下位～台部縦方向篦磨き。内面　口縁部横撫で、胴部上半撫で、胴部下半横方向篦磨き、台部撫で。	口縁部1/2欠。
4	弥生土器 壺	＋35	口径 — 底径 — 器高 —	①粗砂 ②普通 ③橙7.5YR6/6	外面　波状文、縦方向の箆刷突状沈線をもつ円形浮文。 内面　撫で。	胴部上半破片。

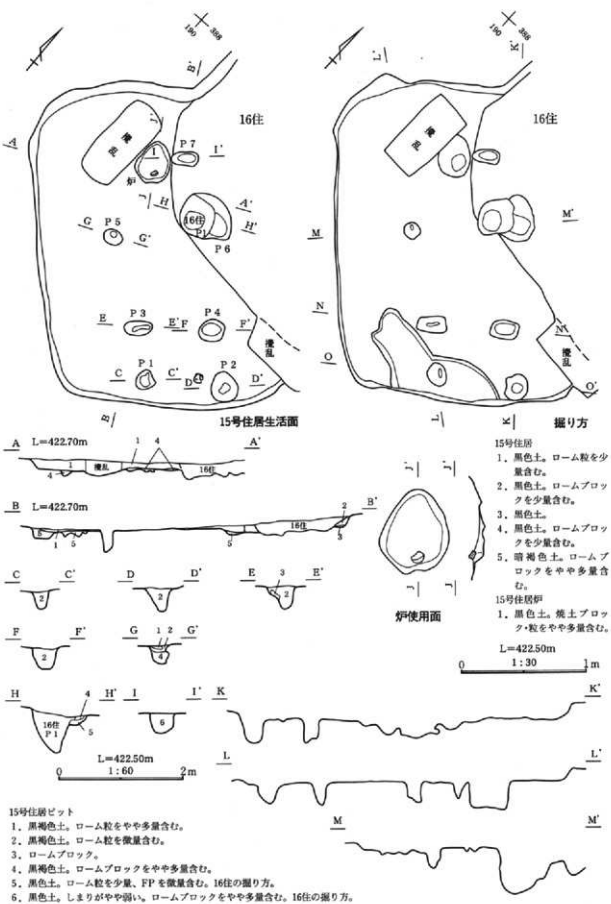
15号住居(PL.11・60)

位置　380・385―185・190　**重複**　15号住居→16号住居　**形状**　隅丸長方形で、短辺がやや膨らむ。

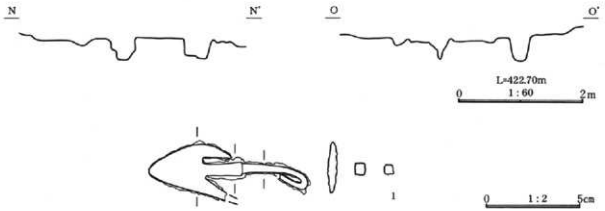
規模　長軸5.17m、短軸3.17m以上。　**面積**　14.4 m²(推定)　**方位**　―44°　**埋没土**　FPを含まない。

床面　確認面から20cm下で床面となる。地山のロームを平に掘削して床面とし、貼床は施さない。小さな凹凸が目立つ。　**壁溝**　なし。　**炉**　7号ピットの脇に設置。64×55×10cmの楕円形の地床炉で炉床は焼土化していた。　**貯蔵穴**　確認できなかった。

柱穴　7基検出した。炉を挟んで7号ピットの反対側に1基存在したと思われる。6号ピットは4・7号ピット間を結ぶラインよりやや外側に位置する。1・2号ピットは位置から入り口施設に関すると思われる。規模はP1　30×32×30cm　P2　48×45×36cm　P3　45×24×35cm　P4　42×37×33cm　P5　31×23×30cm　P6　50×30×16以上cm　P7　42×23×32cmである。3～5・7号ピットは平面形が住居短軸方向にのびる楕円形であり、板状材の使用が想定できる。　**遺物**　ほとんど出土しなかった。1・2号ピット間から凹石が出土したが、紛失してしまった。埋没土中の鉄鏃は16号住居など平安時代の遺構に所属するものと思われる。　**掘り方**　1号ピット周辺が5cmほど落ち込むが、根などによる攪乱の可能性もある。



15号住居ピット
1．黒褐色土。ローム粒をやや多量含む。
2．黒褐色土。ローム粒を微量含む。
3．ロームブロック。
4．黒褐色土。ロームブロックをやや多量含む。
5．黒色土。ローム粒を少量、FP を微量含む。16住の掘り方。
6．黒色土。しまりがやや弱い。ロームブロックをやや多量含む。16住の掘り方。

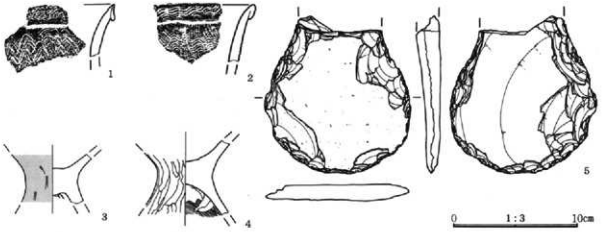


15号住居出土遺物

15号住居遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	法量	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	鉄製品 鏃	埋設土	長さ 8.4　重量 21.8	大根の平根。鏃先は錆化が顕著。茎被元は区となる。右の關抉と茎が曲げられる。	茎尻と關抉端部欠。

3．遺構外出土遺物 (PL.60)



遺構外出土遺物

遺構外出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	弥生土器 甕		口径　— 底径　— 器高　—	①粗砂 ②普通 ③鈍い褐7.5YR4/2	1段の複合口縁。口唇部付近を薄く摘む。 外面　6本単位の波状文。 内面　横方向荒磨き。	口縁部破片。 口唇部欠。
2	弥生土器 壺		口径　— 底径　— 器高　—	①粗砂 ②普通 ③鈍い橙7.5YR6/4	1段の複合口縁。外面　口縁端部横撫で、口縁部縦方向刷毛後6本単位の波状文。 内面　横方向荒磨き。	口縁部破片。
3	弥生土器 高杯		口径　— 底径　— 器高　3.7+	①粗砂 ②普通 ③明赤褐2.5YR5/6	外面　縦方向荒磨き。赤彩。 内面　脚部荒撫で。	杯最下位～脚部上位残。
4	弥生土器 台付甕		口径　— 底径　— 器高　6.0+	①粗砂 ②普通 ③橙7.5YR6/6	器表の摩滅が顕著。 外面　縦方向荒磨き。 内面　台部刷毛後雑な荒磨き。	脚部最下位～台部上半残。
5	石器 石鏃		長さ 12.4　幅 11.5　厚さ 1.7 重量 275.5　石材 細粒輝石安山岩	背面に原礫面をもつ横長剥片を素材とする。一部が折断され、周縁両面を直接打撃で器体を整えて刃部を作る。	

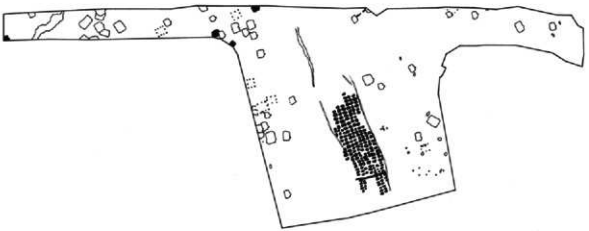
V　古墳時代の遺構と遺物

1．概　　要

竪穴住居4軒のほか、水田を検出した。竪穴住居は全て古墳時代後期に属する。本線部分では前期と後期(FP降下後)の住居が検出されたが、本遺跡では後期(FP降下後)のみの検出である。4軒とも本線部分において後期の竪穴住居が分布する尾根の続きに立地し、更に南へ広がる可能性がある。前期までは小沢川への傾斜地に1軒認められるものの、5区及びその北側に分布が集中していたのに対し、疎らではあるがより東の尾根筋全てに展開していく。1区西尾根に分布する3軒はその一部である。

小沢川の対岸に位置し、弥生時代から古墳時代前期まで集落が続いていた戸神諏訪遺跡では、これ以後奈良時代まで途絶えて周辺に散在する傾向がある。沼田市域における後期集落は検出例も少なく不明な点が多いが、本線部分も含めた本遺跡の後期集落は、小規模ながら戸神山麓における一つの拠点と考えられる。

水田は中央谷地の南半に位置する。擬似水田と考えられ確認状況は極めて悪い。自然地形を利用した極小区画水田であることなどから古墳時代後期のものと推定され、当該期に展開する竪穴住居の生産基盤の一部をこの水田に求めることができる。

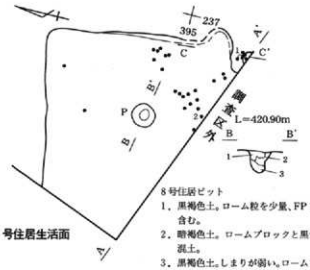


古墳時代遺構分布図

2．竪穴住居

8号住居(PL.11・60)

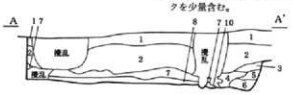
位置　390・395—235，395—240　**重複**　なし。**規模**　調査区内で東壁3.20m、北壁2.58m。　**面積**　7.6m²　**方位**　—17°　**床面**　確認面から4cm下で床面となる。確認面が低いために残存壁高がほとんど無いが、調査区界の壁面で48cm確認した。厚さ約7cmの貼床を施し、全体に平坦である。　**壁溝**　確認できなかった。　**竈**　東壁に設置する。南北に長い楕円状の掘り方を設け、埋め戻して形状を整える。粘土を構築材とする右袖を長さ32cm検出した。燃焼部は長さ約25cm、幅約40cmで壁内に位置する。確認面が低いために検出状況が悪い。　**貯蔵穴**　確認できなかった。調査区外に位置すると思われる。　**柱穴**　調査部分中央にピットを1基検出した。規模は40×36×36cmである。部分調査のため柱穴となるか不明である。　**遺物**　竈の周囲に集中して分布する。土師器甕が出土した。　**掘り方**　床面より約10cm下で掘り方面となる。調査区界中央に長軸70cm以上、深さ33cmの床下土坑を設ける。　**所見**　出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

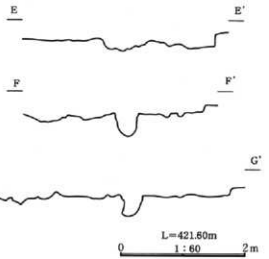


8号住居生活面

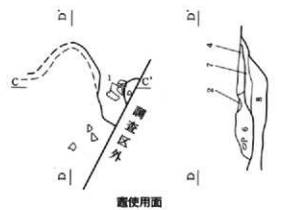
8号住居ピット
1．黒褐色土。ローム粒を少量、FPを微量含む。
2．暗褐色土。ロームブロックと黒色土の混土。
3．黒褐色土。しまりが弱い。ロームブロックを少量含む。

掘り方

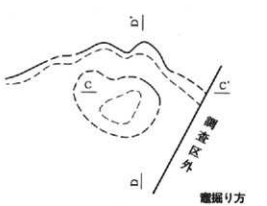




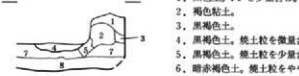
8号住居
1．表土
2．黒色土。FPを少量、Kkを微量含む。
3．黒色土。ロームブロック・FPを微量含む。
4．暗赤褐色土。ローム・黒色土・焼土の混土。
5．黒色土。しまりがやや強い。焼土粒を微量含む。
6．黒色土。ロームブロックを少量含む。
7．黒色土。しまりが強い。FPを少量、ローム粒を微量含む。
8．黒褐色土。ロームブロック・FPを微量含む。貼床。



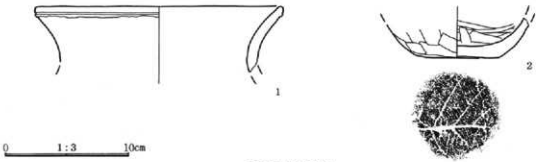
竈使用面



竈掘り方



8号住居竈
1．黒色土。FPを少量含む。
2．褐色粘土。
3．黒褐色土。
4．黒褐色土。焼土粒を微量含む。
5．黒褐色土。焼土粒を少量含む。礫の抜き取り痕。
6．暗赤褐色土。焼土粒をやや多量含む。
7．黒色土。ローム粒・焼土粒を微量含む。
8．黒褐色土。ローム粒・FP・焼土粒を微量含む。



8号住居出土遺物

8号住居遺物観察表

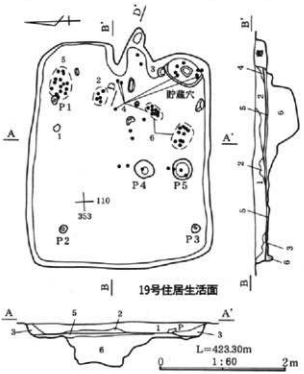
番号	種類器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	土師器 甕	竈埋設土	口径(19.6) 底径 — 器高 5.2+	①細砂、白色鉱物 ②普通 ③鈍い黄橙10YR6/3	外面 横撫で、口縁端部に面をもち、沈線が1条巡る。 内面 横撫で。	口縁部1/4残。
2	土師器 甕	+13	口径 — 底径 6.3 器高 3.2+	①細砂、白色鉱物 ②普通 ③褐7.5YR4/4	外面 体部最下位横方向・以上斜方向荒削り、底部に木葉痕。 内面 横方向荒撫で。	体部下位～底部残。木葉痕。

19号住居(PL.11・12・60・61)

位置 350−105・110 **重複** なし。 **形状** 隅丸長方形。西壁の南側がやや窄まる。 **規模** 3.56×2.90 m **面積** 9.5m² **方位** 9° **床面** 確認面から18cm下で床面となる。厚さ約10cmの締まった貼床を施し、全体に平坦である。 **壁溝** なし。 **竈** 東壁やや南寄りに設置。楕円形の掘り方を設け、黒褐色土で形状を整える。袖は左42cm、右30cm残存していた。燃焼部は長さ48cm、幅32cmで壁内に位置する。煙道は平坦面を経て立ち上がる。 **貯蔵穴** 南東コーナーに設置。規模は長軸62cm、短軸38cmで深さは不明である。 **柱穴** ピットを6基検出した。規模はP1 12×9×17cm P2 14×12×17cm P3 16×13×13cm P4 31×28×16cm P5 径約32cmで深さは不明だが掘り方面には達していない。位置から1～3号ピットが主柱穴になると思われるが、本遺跡内でも際だって小規模である。4・5号ピットは径が大きく、性格が異なると思われる。

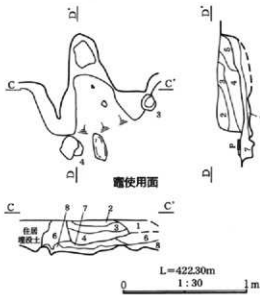
遺物 東半に分布が集中する。土師器杯・甕が出土した。 **掘り方** 床面より約10cm下で掘り方面となる。中央に170×140×50cmの床下土坑を設け、単層で埋め戻して上面に貼床を施す。貯蔵穴の西側に54×36×20cmのピット状の掘り込みを検出した。底面付近から土師器破片が横向きに寝た状態で出土した。上面の貼床層の有無については不明である。

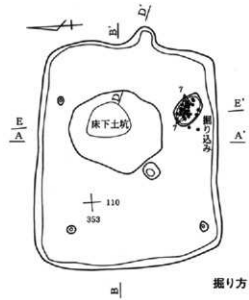
所見 出土遺物から6世紀後葉と考えられる。



19号住居生活面

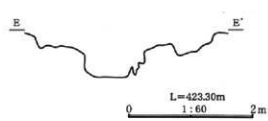
19号住居
1．黒褐色土。ロームブロック・FPを少量含む。
2．鈍い黄褐色土。黒褐色土を少量含む。
3．黒褐色土。ロームブロックをやや多量含む。
4．褐色土。焼土を少量含む。
5．黒色土。しまりが強い。ロームブロックを少量含む。貼床。
6．黒褐色土。ロームブロックを多量含む。

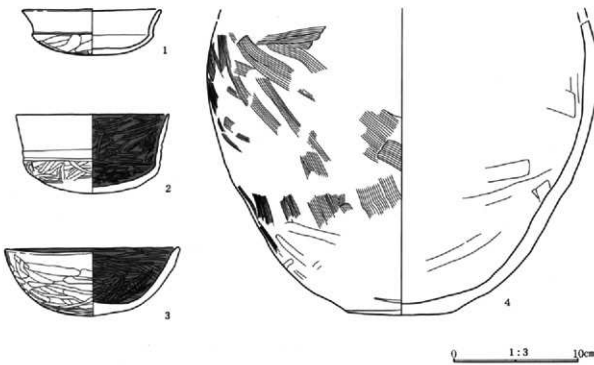




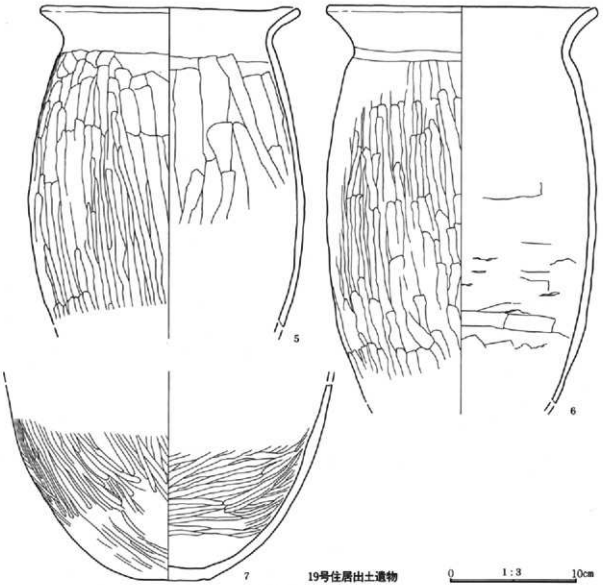
19号住居竈

1．黒褐色土。FP・焼土粒を微量含む。
2．純い黄褐色土。しまりが強い。竈材。
3．純い赤褐色土。焼土粒を多量含む。
4．黒褐色土。FP・焼土粒を少量含む。
5．暗灰黄色土。
6．暗褐色土。袖部。
7．暗赤褐色土。
8．黒褐色土。





19号住居出土遺物



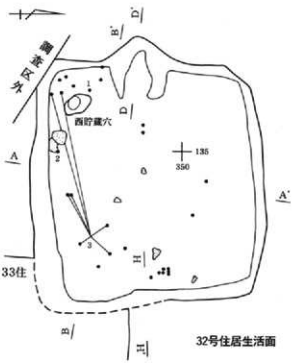
19号住居出土遺物

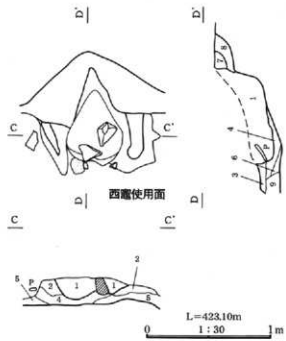
19号住居遺物観察表

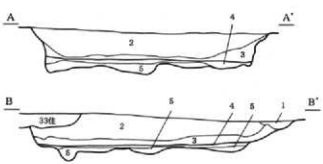
番号	種類 器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	土師器 杯	床面直上	口径 11.0 底径 — 器高 3.6	①細砂、粗砂 ②良好 ③橙5YR7/6	口縁部外反。外面 口縁部刷毛状の工具で左方向の横撫で、体部篦削り、強い稜を有する。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	一部欠。
2	土師器 杯	＋6	口径 12.0 底径 — 器高 6.2	①細砂、粗砂 ②普通 ③外面 鈍い黄橙10YR 6/4 内面 黒N2/0	口縁部が広く、下位に段をもつ。 外面 口縁部横撫で、体部篦削り後篦磨き。 内面 全面に篦磨き。	一部欠。 内黒。
3	土師器 杯	床面直上	口径 13.8 底径 — 器高 5.3	①細砂、粗砂 ②普通 ③外面 鈍い橙7.5YR 6/4 内面 黒 N6/4	丸底から大きく内彎して立ち上がる。口縁内面わずかに面をもつ。外面 篦削り後やや粗い篦磨き。 内面 全面に篦磨き。	1/4欠。
4	土師器 甕	床面直上 ～＋17	口径 — 底径 8.8 器高 23.1+	①粗砂、細礫 ②普通 ③橙5YR6/6	外面 体部中位斜方向刷毛目、下位縦作り痕付近縦方向篦削り。 内面 篦撫で。	体部下半1/2、底部残。
5	土師器 甕	床面直上	口径 20.6 底径 — 器高 24.9+	①細砂、粗砂 ②普通 ③橙5YR6/6	外面 口縁部横撫で、体部上方向篦削り・一部単位が密で篦磨き状。 内面 縦方向篦撫で。	口縁部～体部上半残。
6	土師器 甕	＋4～17	口径 21.4 底径 — 器高 31.1+	①粗砂 ②酸化焔 ③鈍い黄橙10YR5/3	外面 口縁部横撫で、体部上方向篦削り・単位が密で一部篦撫で状。 内面 口縁部横撫で、体部横方向篦撫で。	口縁部～体部下位1/2残。
7	土師器 甕	－1～10	口径 — 底径 6.0 器高 15.4+	①細砂、粗砂、細礫 ②酸化焔 ③鈍い褐7.5YR5/4	外面 斜方向篦削り後斜方向篦磨き。 内面 横・斜方向篦磨き。	体部下半～底部残。

32号住居(PL.12・13・34・61)

位置　345・350—130・135　**重複**　32号住居→33号住居　**形状**　隅丸方形。　**規模**　3.72×3.67m　**面積**　12.1m²　**方位**　—4°　**床面**　確認面より52cm下で床面となる。厚さ3～12cmの貼床を施し、全体に平坦である。　**壁溝**　なし。　**竈**　東壁中央と西壁南寄りに1基ずつ設置。東竈は楕円状の掘り方を埋め戻して形状を整える。袖は検出できなかった。燃焼部は壁内に位置し、3～5層で人為的に埋めている。西竈は楕円状の掘り方を埋め戻して形状を整えるが、燃焼部の奥寄りは掘り方面をそのまま使用する。袖は左41cm、右46cm残存していた。燃焼部は壁内に位置し、長さ46cm、幅44cm、深さ12cmで、底面に角錐状の支脚石を据える。底面と左内壁が一部焼土化していた。　**貯蔵穴**　各竈の南側コーナーに1基ずつ検出した。東貯蔵穴は50×43×36cmで、埋め戻された後上面に貼床を施す。西貯蔵穴は38×32×38cmである。　**柱穴**　確認できなかった。　**遺物**　土師器甕・杯が出土した。　**掘り方**　床面から約10～20cmで掘り方面となる。東竈の西側2ヶ所を10～20cmほど掘り窪める。　**所見**　出土遺物から6世紀後葉～7世紀前葉と考えられる。東西の竈の構築順序は不明だが、東竈は袖の壁から内側を破壊して貯蔵穴とともに燃焼部を埋め戻しており、住居を廃棄する直前には西竈及び西貯蔵穴のみを使用していたと考えられる。

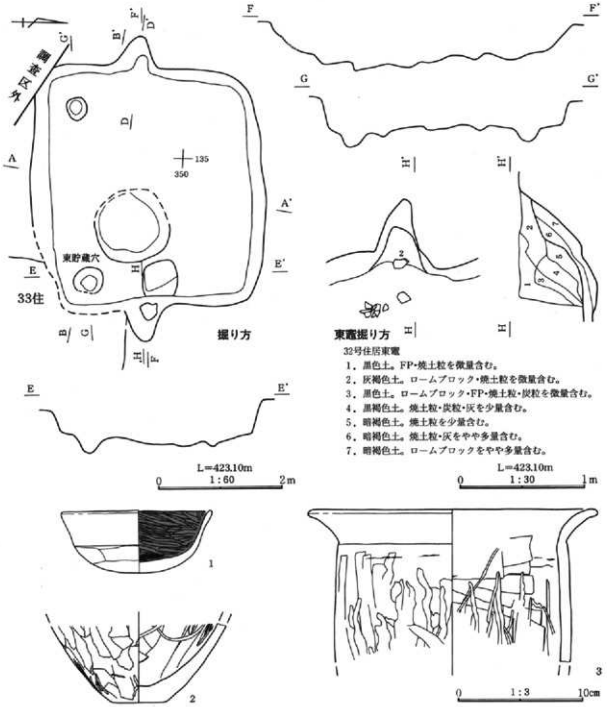






32号住居
1．暗黄褐色土。ロームブロックをやや多量含む。
2．黒色土。FPを少量含む。
3．黒色土。ロームブロックをやや多量、FPを少量含む。
4．黒褐色土。しまりが強い。焼土粒・灰を微量含む。貼床。
5．黒褐色土。ロームブロックを多量含む。

32号住居西竈
1．暗赤褐色土。しまりが弱い。
2．赤褐色土。袖部。
3．黒褐色土。しまりが強い。ローム粒を少量含む。新貼床。
4．黒色土。ロームブロック・焼土粒・炭粒を少量含む。
5．褐灰色土。ロームブロックを多量含む。
6．黄褐色土(ローム)。黒色土を多量含む。
7．黒褐色土。しまりが強い。焼土粒・炭粒を少量含む。
8．暗灰黄色土。ローム粒を少量含む。
9．黒褐色土。焼土粒を微量含む。住居の4層に相当。旧貼床。



32号住居東電

1．黒色土。FP・焼土粒を微量含む。
2．灰褐色土。ロームブロック・焼土粒を微量含む。
3．黒色土。ロームブロック・FP・焼土粒・炭粒を微量含む。
4．黒褐色土。焼土粒・炭粒・灰を少量含む。
5．暗褐色土。焼土粒を少量含む。
6．暗褐色土。焼土粒・灰をやや多量含む。
7．暗褐色土。ロームブロックをやや多量含む。

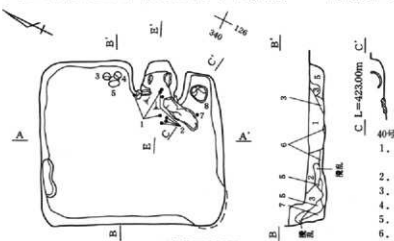
32号住居出土遺物

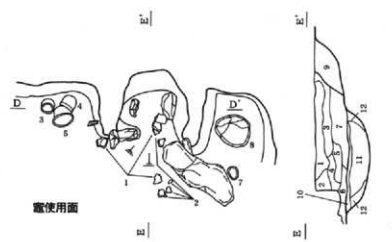
32号住居遺物観察表

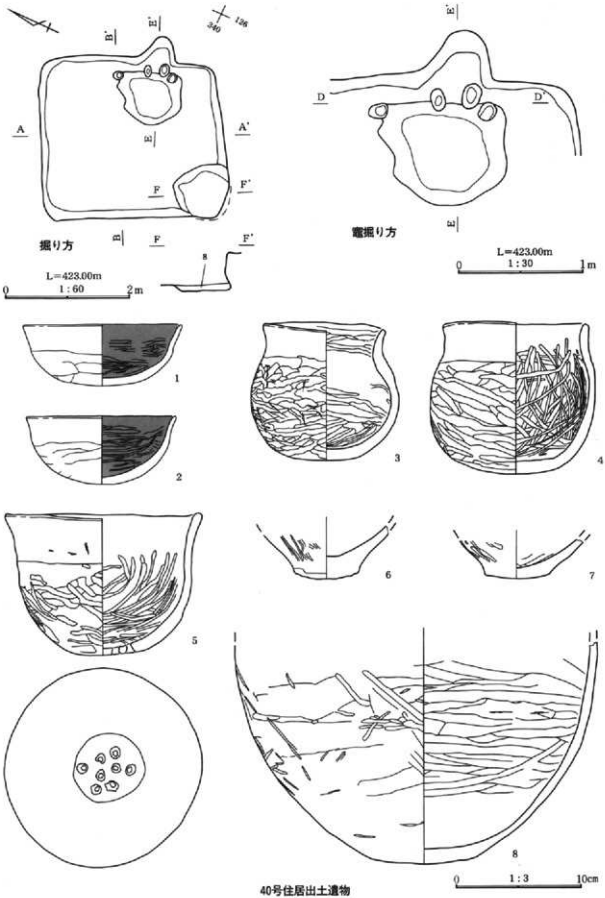
番号	種類 器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	土師器 杯	＋2	口径 11.8 底径 — 器高 4.9	①粗砂 ②普通 ③鈍い黄橙10YR6/4	口縁部と体部を画する稜線が弱い。 外面 口縁部横撫で、体部篦削り。 内面 篦磨き。	口縁部1/4欠。 内黒。
2	土師器 甕	竈使用面直上	口径 — 底径 4.4 器高 6.1+	①粗砂 ②普通 ③鈍い黄橙10YR5/3	外面 体部上方向・最下位下方向篦削り、底部篦削り。 内面 篦撫で後篦磨き。	体部下位～底部3/4残。
3	土師器 甕	＋4～25	口径(22.8) 底径 — 器高 12.0+	①細砂、粗砂 ②普通 ③鈍い黄橙10YR6/4	外面 口縁部横撫で、胴部縦方向篦撫で・一部篦磨き状。内面 口縁部横撫で、胴部左方向篦撫で後縦方向篦磨き。	口縁部～胴部上位1/4残。

40号住居(PL.13・14・61・62)

位置　335・340—125　**重複**　なし。**形状**　隅丸方形。南西コーナーがオーバーハングする。　**規模**　2.92×2.60m　**面積**　6.6m²　**方位**　—22°　**床面**　確認面から48cm下で床面となる。地山ロームを平に掘削し、そのまま床面とする。北壁の北西コーナー付近が長さ約60cm、幅約15cmのテラス状に床面より高い。　**壁溝**　なし。　**竈**　楕円状の掘り方を埋め戻して形状を整える。燃焼部付近は円形に約15cm掘り窪める。袖は左42cm、右50cm残存していた。燃焼部は長さ55cm、幅30cmで壁内に位置し、内壁は掘り方のピットに板状の礫を据えて粘土混じりの土で押さえる。右袖手前床面から天井の構築材と思われる板状の礫が出土した。　**貯蔵穴**　なし。代わりに南東コーナー床面に土師器甕の胴部下半を据えて使用する。　**柱穴**　確認できなかった。　**遺物**　竈付近に分布が集中する。土師器甕・小型甕・杯・甑が出土した。　**掘り方**　南西コーナーを円形に掘り窪める。規模は90×84×10cmである。　**所見**　出土遺物から6世紀後半と考えられる。







40号住居出土遺物

40号住居遺物観察表

番号	種類 器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	土師器 杯	電使用面直上～＋3	口径 12.7 底径 — 器高 5.0	①細砂、粗砂、細礫 ②普通 ③明灰黄2.5Y5/2	外面　口縁部横撫で、体部篦削り。 内面　口縁部横撫で、全面に篦磨き。	1/4欠。内黒。
2	土師器 杯	＋2～3	口径 11.8 底径 — 器高 5.5	①細礫、粗砂 ②普通 ③純い黄橙10YR6/4	稜線が弱い。 外面　口縁部横撫で、体部篦削り。 内面　口縁部横撫で、全面に篦磨き。	口縁部1/4欠。内黒。
3	土師器 小型甕	電使用面直上	口径 9.7 底径 — 器高 10.9	①粗砂、細礫 ②普通 ③褐7.5YR4/3	器肉厚く口縁部外反。外面　口縁部横撫で、胴部篦削り後篦磨き・一部篦撫で状。 内面　口縁部横撫で後篦磨き、胴部下半篦磨き。	口縁部一部欠。
4	土師器 小型甕	電＋2	口径 11.4 底径 — 器高 12.1	①粗砂 ②普通 ③純い黄橙10YR5/3	外面　口縁部横撫で、胴部篦削り後篦磨き。 内面　口縁部横撫で、胴部篦磨き。	完形。
5	土師器 甑	電使用面直上	口径 15.6 底径 — 器高 11.2	①粗砂、石英 ②普通 ③純い黄橙10YR6/4	丸底を呈するが、僅かに平に整える。口縁部外反。底部に円孔を８個有する。孔の外面側周縁は一部剥離。 外面　口縁部横撫で、胴部篦削り後篦磨き、底部篦削り後外面から穿孔。 内面　口縁部横撫で、胴部～底部穿孔後篦磨き。	ほぼ完形。
6	土師器 甕	埋設土	口径 — 底径 5.0 器高 4.1+	①粗砂、細礫 ②普通 ③純い褐7.5YR6/3	外面　胴部篦磨き。 内面　撫で。	胴部最下位～底部1/2残。器表が荒れる。
7	土師器 甕	＋2	口径 — 底径 7.1 器高 3.0+	①粗砂 ②普通 ③純い橙7.5YR6/4	外面底部に丸みをもつ。 外面　胴部篦削り後篦磨き、底部篦削り後撫で。 内面　篦撫で。	胴部最下位～底部残。
8	土師器 甕	＋3	口径 — 底径 8.0 器高 17.3+	①粗砂、細礫 ②普通 ③純い橙7.5YR7/4	外面　胴部横方向篦削り後、斜方向篦磨き、底部篦削り。 内面　横方向篦撫で・一部篦磨き状、底部撫で。	胴部下半3/4、底部残。

3．水　　田 (PL.14･15)

中央谷地の南部一帯で、水田の痕跡が見つかっている。中央谷地は、関越自動車道新潟線本線部分に谷頭があり、今回の発掘調査地点では、北部では未だに狭い谷状となっているが、南に行くに従って、急激に広さを増している。この部分から水田が作られ始めたようである。

水田の痕跡は、FP を混ずる黒色ないし黒褐色土の除去作業を行った後に見いだされたもので、いずれも、畦畔に相当する部分には FP の軽石をほとんど含まない黒褐色の土壌があり、水田面に相当する部分には FP の軽石が含まれている。FP に埋没した水田とも見られたが、この遺跡での FP は、降下堆積層と見られるものが無いことから、見いだされた水田面が旧地表面である可能性は低いものと考えられた。

南部の、240ラインの北に、水田区画をつぶすようなかたちで東西方向に延びる帯状の高まりがあることや、水田面での FP の軽石が比較的深くにまで達していることなどから、見つかった水田痕跡は、降下した FP 軽石をかき混ぜるような状態で、FP 降下後に作られた水田の痕跡であるものと判断した。

各水田面の区画が把握できるもので183区画分がある。中央谷の谷幅ほぼいっぱいに広がっているが、北部では谷幅が狭く、南部で広くなるために、最北部では１面から３面であったものが、南に行くに従って、８面まで、一列あたりの面数を増やしている。このため、東西方向（等高線に沿った方向）の列は比較的揃っているものの、南北方向の列は中途で増えて、揃わない部分を生ずることになっている。一つひとつの区画は小さく、FP に埋没した水田でよく見られる、いわゆる「小区画水田」の形態をとっている。

また、東台地との接合部近くには、南北方向に、谷を縁取るようなかたちで４号溝が延びる。この溝は、Hr-FP の軽石を含まない黒色土で埋没しており、水田への引水に関連する溝であるとすれば、先に述べた東西方向の高まりと共に、FP 降下以前に開田されていた可能性を示すものであろう。

水田全体図

0 1:150 5m

Ⅵ　奈良・平安時代の遺構と遺物

1．概　　要

竪穴住居32軒、掘立柱建物3棟、溝2条、土坑3基のほか、奈良時代と思われる鍛冶炉を検出した。

奈良時代の遺構は8世紀後半の竪穴住居4軒と鍛冶炉2基で、住居は1区西尾根、鍛冶炉は東尾根に分布する。本線部分では7区北側の尾根に、やはり8世紀後半の竪穴住居が1軒検出されている。古墳時代後期に疎らながら遺跡全体に集落が展開したのに比べ、分布域・軒数とも減らしている。このような傾向は周辺の遺跡にもみられ、利根・沼田地域における奈良時代の集落展開は不明な点が多い。31号住居からは羽口・砥石・鉄滓などが出土し、住居中央に焼土を多く含む土坑をもつことから鍛冶に関する施設と考えられる。

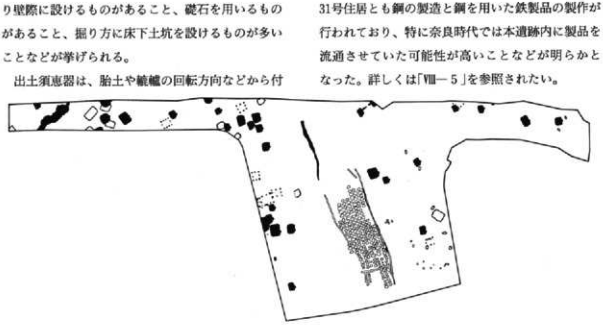
平安時代の住居は28軒検出された。再び遺跡全ての尾根に展開するが、9世紀前半はやや少なく、集落の主体となる時期は9世紀後半以降である。重複は、平安時代に3軒のものが1例であった。

住居構造の特徴として、竈構築材に礫を多用するものが多いこと、柱穴を住居南半などに偏在させたり壁際に設けるものがあること、礎石を用いるものがあること、掘り方に床下土坑を設けるものが多いことなどが挙げられる。

出土須恵器は、胎土や轆轤の回転方向などから付近に位置する月夜野古窯跡群より供給されたと思われるものがある。また、焼成時の歪みの大きい器体が多い。9世紀の杯などの器体全体または一部に、還元焼成の際、燻されて成ったような吸炭のあるものが目立つ。月夜野古窯跡薮田A支群のものに「燻し焼成」が多いといわれるが(月夜野町教育委員会 1985 『月夜野古窯跡群』)、須恵器の窯であることや、燻しと還元の中間とみられる個体も多いことから、燻して吸炭させることを第一の目的とし、それが技法として確立していたのかは判然としない。よって本報告では「燻し焼成」という語は用いなかった。

住居8軒からは墨書土器が16点出土し、「五山」「上」など周辺では石墨遺跡のみにみられる文字を含む。2号住居と38号住居からは銅製の鈴が出土した。

1区東尾根の鍛冶炉であるピット群は、炉の残存状況は悪いものの鉄滓・鍛造剝片・羽口などが大量に出土した。出土遺物の科学分析の結果、鍛冶炉及び31号住居とも鋼の製造と鋼を用いた鉄製品の製作が行われており、特に奈良時代では本遺跡内に製品を流通させていた可能性が高いことなどが明らかとなった。詳しくは「Ⅷ－5」を参照されたい。

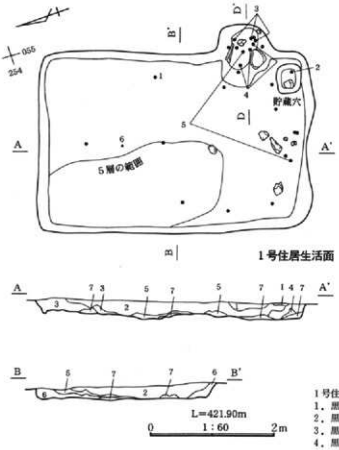


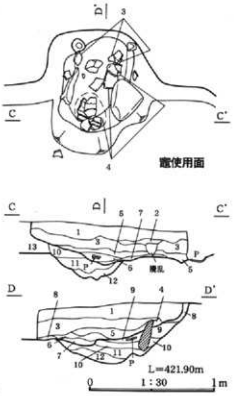
奈良・平安時代遺構分布図

2．竪穴住居

1号住居(PL.15・62)

位置　245・250—055　**重複**　なし。**形状**　隅丸長方形。**規模**　長軸4.36×短軸2.83m　**面積**　12.0㎡　**方位**　30°　**埋没土**　住居の北西側に径2㎝以下の炭化物が集中してみられた(5層)。炭化物を廃棄するため、住居埋没過程の窪みを2次的に利用したものと思われる。　**床面**　確認面から25㎝下で床面となる。明確な貼床は認められず、部分的に地山のロームを利用する。浅い凹凸が全面にみられるものの全体に平坦である。　**壁溝**　確認できなかった。**竈**　東壁南寄りに設置する。袖は確認できなかった。楕円状の掘り方を設け、埋め戻して形状を整える。燃焼部は幅40㎝、長さ65㎝で、壁付近に位置する。円柱状の角礫を掘り方に埋め込んで支脚とする。燃焼部両脇の平な礫は壁面の構築材と思われる。　**貯蔵穴**　南東コーナーに設置する。46×36×12㎝の楕円形である。　**柱穴**　確認できなかった。　**遺物**　須恵器杯・椀・羽釜、鉄鏃が出土した。また、竈燃焼部灰層などからイネ・オオムギなどの炭化胚乳を検出した。　**掘り方**　床面から5～20㎝下で掘り方面となる。中央に床下土坑を検出した。深さ72㎝で上端116×98㎝・中端90×60㎝・下端120×94㎝の断面フラスコ状を呈する。　**所見**　出土遺物から10世紀前半と考えられる。



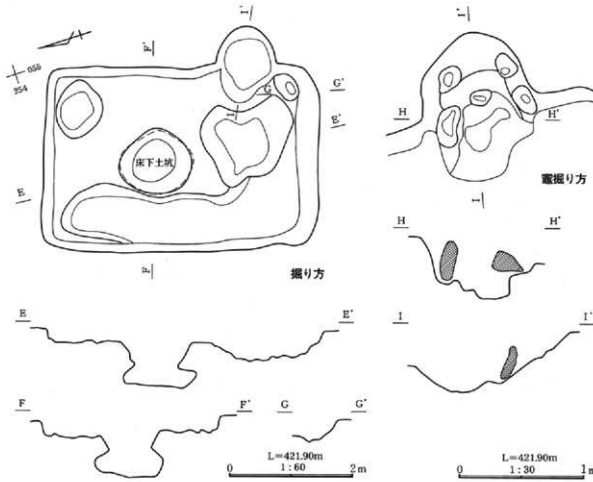


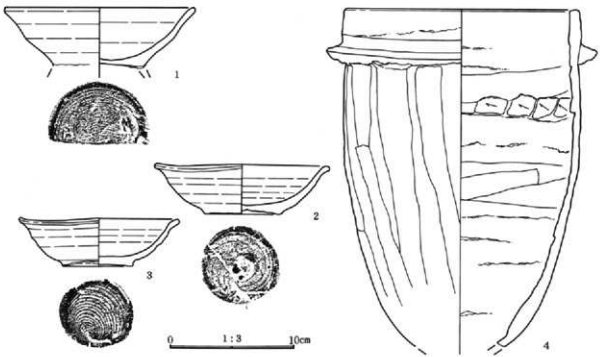
1号住居生活面

1. 黒色土。ロームブロックをやや多量含む。
2. 黒色土。FPを多量、ローム粒を少量含む。
3. 黒色土。FP・炭粒をやや多量、ローム粒を少量含む。
4. 黒褐色土。ローム粒をやや多量、FPを微量含む。
5. 黒色土。炭粒を多量、FPを少量含む。
6. 黒褐色土。ロームブロック・粒をやや多量、FPを少量含む。
7. 黒褐色土。ローム粒をやや多量含む。

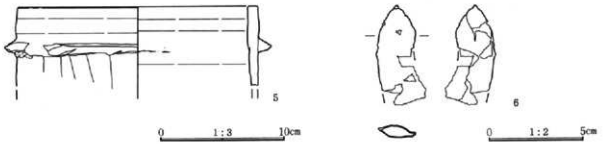
竈

1. 黒色土。焼土粒・FP・Kkを少量含む。
2. 黒色土。焼土粒を少量含む。
3. 黒色土。焼土ブロック・炭化物・FP・Kkを少量含む。
4. 黒色土。焼土ブロックを多量含む。
5. 黒褐色土。しまりが弱い。焼土粒を少量含む。
6. 黄褐色土(ローム)。部分的に焼土化。
7. 灰及び炭化物の集中層。
8. 焼土。
9. 暗褐色土。焼土粒を少量含む。
10. 暗褐色土。焼土粒を多量含む。
11. 暗褐色土。焼土粒・ローム粒をやや多量含む。
12. 暗褐色土。ローム粒を少量含む。
13. 住居の6層。


床下土坑
掘り方
竈掘り方
E
E'
F
F'
G
G'
H
H'
I
I'
L=421.90m
1:60
0
2m
L=421.90m
1:30
0
1m


1
2
3
4
0
1:3
10cm

1号住居出土遺物



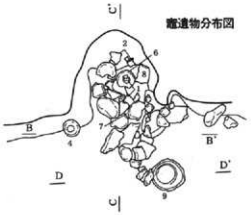
1号住居出土遺物

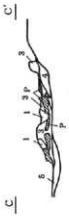
1号住居出土遺物観察表

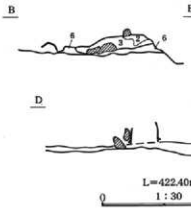
番号	種別器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 椀	＋3	口径(15.0) 底径 — 器高 4.7+	①細砂、粗砂、石英 ②還元焔気味 ③内面 褐灰10YR4/1 外面 明黄褐10YR7/6	外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り、高台両縁貼付け時の雑な回転撫で。 内面 轆轤整形。全体に淡く吸炭。	1/2残。高台欠。
2	須恵器 杯	貯蔵穴 −5	口径(13.6) 底径 6.0 器高 3.9	①細砂、白色鉱物、石英 ②還元焔気味 ③黄褐2.5Y5/3	口縁部強く外反。歪みが強く、やや楕円形を呈す。 外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面 轆轤整形。	体部1/2欠。
3	須恵器 杯	＋1	口径 12.4 底径 5.6 器高 3.8	①粗砂、白色鉱物、石英 ②酸化焔 ③明赤褐5YR5/6	口縁端部強く外反。 外面 轆轤整形、底部右回転糸切り未調整。 内面 轆轤整形。	体部1/2欠。
4	須恵器 羽釜	＋4〜5	口径(18.6) 底径 — 器高 26.4	①粗砂、細礫 ②酸化焔 ③純い黄橙10YR7/4	外面 口縁部横撫で、胴部上方向篦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部横方向篦撫で・上位に一部斜方向篦削り、紐作り痕有り。	口縁部〜体部1/2残。
5	須恵器 羽釜	床面直上	口径(19.0) 底径 — 器高 6.2+	①細砂粒、粗砂粒 ②酸化焔 ③浅黄2.5Y7/3	外面 口縁部横撫で、胴部上方向篦削り。 内面 口縁部横撫で、紐作り痕有り。	口縁部1/4残。
6	鉄製品 鎌	床面直上	長さ 5.2+　幅 2.3+　厚さ 0.6 重さ 4.5		錆による劣化が激しく、中空となる。茎及び側刃部を欠く。	一部欠。分析。

2号住居(PL.16・62・63)

位置　285−040・045　**重複**　なし。**形状**　隅丸長方形。**規模**　3.88×2.86m　**面積**　9.8m²　**方位**　9°　**床面**　確認面から35cm下で床面となる。床面は全体に平坦で、厚さ5cm前後の貼床を施す。**壁溝**　なし。**竈**　東壁やや南寄りに設置。半円状の掘り方を埋め戻して形状を整える。左袖は確認できなかったが、右袖は長さ50cm残存していた。燃焼部は幅・長さ40cmで壁外に位置し、底面中央の地山ロームが焼土化していた。**貯蔵穴**　確認できなかった。**柱穴**　生活面で確認できなかったが、掘り方でピットを6基検出。このうち1〜4号ピットが主柱穴になると思われる。規模はP1　36×36×46cm　P2　42×30×38cm　P3　40×28×43cm　P4　36×31×40cm　P5　31×31×39cm　P6　38×28×41cm。**遺物**　竈を中心に分布する。土師器杯・小型甕、須恵器杯・椀・羽釜などのほか、竈埋没土から銅鈴が出土した。**掘り方**　床面から約5cm下で掘り方面となるが、北西コーナーと中央付近で約20cm掘り込む。中央付近の掘り込み東壁には部分的に白色粘土が数cm貼られていた。**所見**　出土遺物から10世紀前葉と考えられる。

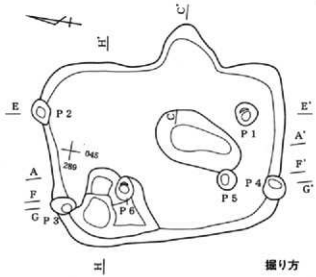


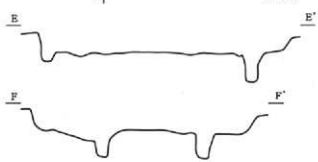


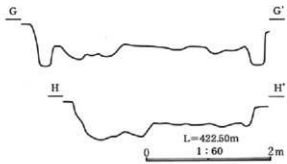


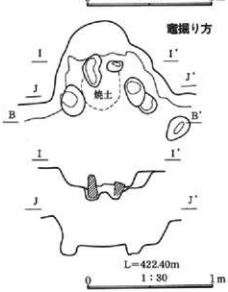
2号住居
1．黒褐色土。しまりがやや弱い。ロームブロックをやや多量、FP を微量含む。
2．黒色土。しまりが弱い。炭化物をやや多量、粗砂・FP を少量含む。
3．黒褐色土。しまりがやや弱い。
4．黒褐色土。ロームブロックを少量含む。
5．暗褐色土。しまりが強い。ローム粒・焼土粒をやや多量含む。貼床。
6．暗褐色土。しまりが強い。ロームブロックを多量含む。貼床。
7．暗褐色土。しまりが弱い。ロームブロックを多量含む。

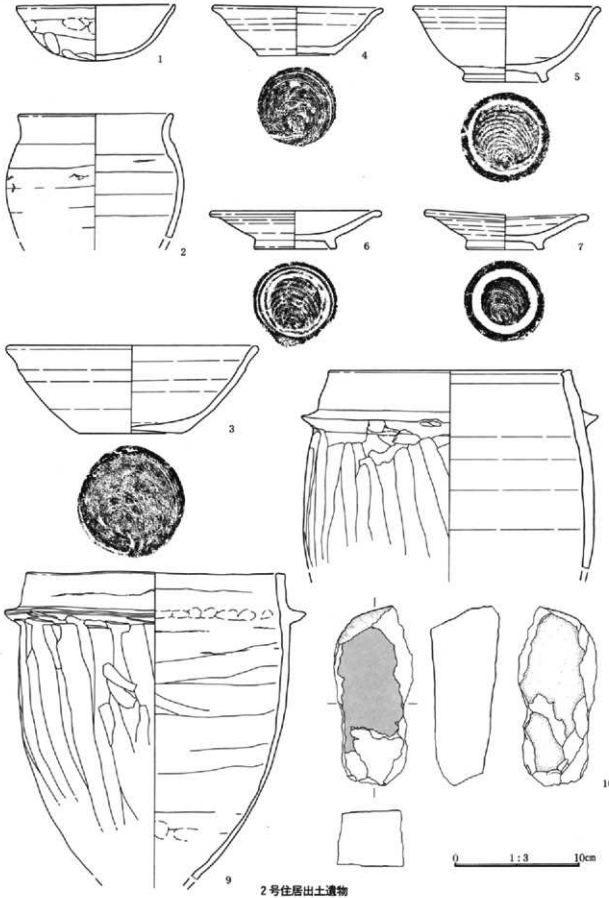
2号住居竈
1．黒色土。しまりが弱い。黄褐色土粒を少量含む。
2．黄褐色土(ローム)。焼土粒を微量含む。
3．鈍い黄褐色土(竈の構築材)。しまりがやや弱い。
4．黒褐色土。焼土粒をやや多量含む。
5．黒褐色土。しまりがやや弱い。焼土粒を多量含む。
6．暗褐色土。



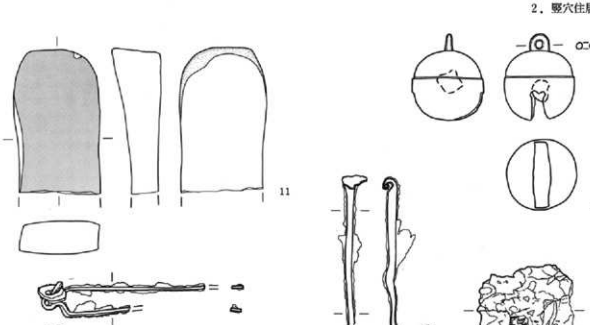








2号住居出土遺物



2号住居出土遺物

2号住居遺物観察表

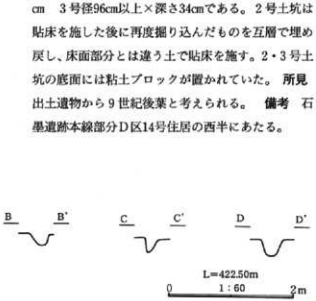
番号	種類 器種	出土 レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	土師器 杯	＋2～5	口径(12.6) 底径 — 器高 4.4	①粗砂、白色鉱物 ②普通 ③鈍い黄褐10YR4/3	外面 口縁部右方向横撫で、体部左方向篦削り、底部篦削り。 内面 体部左方向横撫で。	体部1/2欠。
2	土師器 小型甕	竈使用面 直上～＋6	口径(12.3) 底径 — 器高 10.6+	①細砂、白色鉱物、石英 ②普通 ③鈍い黄橙10YR6/4	口縁別れた「コ」の字状。 外面 口縁部横撫で、体部横撫で。 内面 口縁部横撫で、体部横撫で。	口縁部～体部上半1/2残。
3	須恵器 杯	床直～＋2	口径(20.0) 底径 (8.0) 器高 6.9	①細砂、粗砂、白色鉱物、石英 ②還元焔気味 ③灰白2.5Y8/2	外面 体部横轆整形、底部右回転糸切り未調整。 内面 轆轤整形。	体部1/2欠。
4	須恵器 杯	竈使用面 直上	口径 13.6 底径 6.3 器高 4.0	①細砂、粗砂、白色鉱物、石英 ②還元焔気味 ③鈍い黄褐10YR5/4	口縁部外反。 外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整。 内面 轆轤整形。	完形。
5	須恵器 椀	埋没土	口径(14.8) 底径 (6.8) 器高 5.9	①細砂、白色鉱物、石英 ②還元焔 ③灰黄褐10YR4/2	外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り、高台周縁に高台貼り付け時の回転撫で。 内面 轆轤整形。	体部1/2欠。
6	須恵器 皿	竈＋2	口径(13.6) 底径 (6.5) 器高 3.0	①細砂、粗砂、白色鉱物、石英 ②還元焔 ③灰白10YR7/1	器肉やや厚手。口縁端部水平に引き出す。 外面 轆轤整形、底部右回転糸切り、高台周縁に高台貼り付け時の回転撫で。内面 轆轤整形。	ほぼ完形。
7	須恵器 皿	竈使用面 直上	口径 13.0 底径 6.2 器高 3.1	①細砂、白色鉱物、石英 ②還元焔 ③灰黄褐10YR6/2	口縁端部外方に引き出す。 外面 轆轤整形、底部右回転糸切り、高台周縁に高台貼り付け時の回転撫で。内面 轆轤整形。	体部3/4欠。
8	須恵器 羽釜	＋4～6	口径(19.2) 底径 — 器高 15.5+	①細砂、粗砂、白色鉱物、石英 ②還元焔気味 ③鈍い黄橙10YR6/3	胴部上位から口縁部内弯。 外面 口縁部回転撫で、胴部上方向篦削り。 内面 口縁部回転撫で、胴部回転撫で。	口縁～体部中位1/4残。
9	須恵器 羽釜	竈使用面 直上～＋8	口径 20.5 底径 — 器高 24.0+	①細砂、石英 ②酸化焔 ③浅黄2.5Y7/3	口縁部内短。外面 口縁部横撫で、胴部上方向篦削り。 内面 押圧に指頭圧痕後口縁部横撫で、胴部横方向篦撫で、胴部下位に指頭圧痕。	体部最下位～底部欠。
10	石製品 砥石	床面直上	長さ 14.1 重量 612	幅 6.2 厚さ 5.3 石材 粗粒輝石安山岩	角礫を打ち欠き、形状を整える。	ほぼ完形。被熱。

11	石製品 砥石	床面直上	長さ 7.7+　幅 4.5　厚さ 2.6 重量 130　石材 砥沢石	適度な大きさに加工して使用。端部に自然面を残す。	一部欠。
12	銅製品 鈴	電堀段土	全高 4.5　幅 3.7　紐高 0.9 紐幅 1.0　丸部 0.8～1.5 重量 41.1	外面の段は上半を横方向に削り込み、部分的に薄くなる。内面に段は見られない。丸は不整形で鉄製（鉄痺状）。	一部欠。
13	鉄製品	＋1	長さ 8.9+　幅 2.0　重量 8.1	断面長方形。一端を折り曲げて輪状に、一端を二つ連結。	一部欠。 分析。
14	鉄製品 刀子	＋4	長さ 11.9+　幅 1.2　厚さ 0.2(棟) 0.4(茎)　重量 16.8	鞘・柄の木質が遺存。刃区があるものと思われる。	茎尻欠。 分析。
15	鉄製品 釘	＋6	長さ 8.0+　重量 9.0	端部が巻き込まれる。中途でやや屈曲。	一部欠。
16	鉄堀状痺	＋4	径 5.2+　厚さ 2.6　重量 74.1	全体の1/4が扇状に遺存。	1/4残。分析。

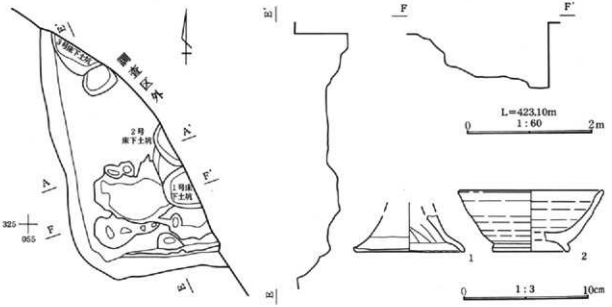
3号住居(PL.17・63)

位置　320・325－050　**重複**　1号溝→3号住居　**形状**　隅丸長方形。　**規模**　調査区内で西壁4.04m、南壁2.24m。　**面積**　調査区内で6.0m²　**床面**　確認面から52cm下で床面となる。厚さ約5cmの貼床を全面に渡って丁寧に施し、全体に平坦である。　**壁溝**　幅約5cm、深さ約4cmで、西壁北側を除いて巡る。　**柱穴**　中央南寄りに3基のピットが検出された。規模はP1　34×26×25cm　P2　26×18×24cm　P3　35×26×32cmである。本線部分を含めてこのほかにピットはなく、柱穴となるか不明である。　**遺物**　土師器台付甕、須恵器椀が出土した。　**掘り方**　床面から20～30cm下で掘り方面となる。住居南半と北西コーナーに3基の床下土坑を検出した。規模は1号径64cm以上×深さ30cm　2号径88cm以上×深さ34cm　3号径96cm以上×深さ34cmである。2号土坑は貼床を施した後に再度掘り込んだものを互層で埋め戻し、床面部分とは違う土で貼床を施す。2・3号土坑の底面には粘土ブロックが置かれていた。　**所見**　出土遺物から9世紀後葉と考えられる。　**備考**　石墨遺跡本線部分D区14号住居の西半にあたる。

3号住居生活面



3号住居
1．表土
2．黒褐色土。FPを多量、ローム粒を微量含む。
3．黒褐色土。ローム粒を多量、FPを少量含む。
4．黒褐色土。ローム粒・FPを少量含む。
5．黒褐色土。しまりがやや弱い。ローム粒を少量、FPを微量含む。
6．黒色土。しまりが弱い。
7．黒褐色土。ローム粒を少量含む。壁溝部。
8．黒褐色土。しまりが強い。ローム粒を少量含む。
9．褐色土(ローム)。黒褐色土をやや多量含む。
10．黒褐色土。褐色土ブロック・焼土粒をやや多量含む。
11．灰黄褐色粘土。
12．褐色土。しまりが強い。黒色土粒を微量含む。貼床。
13．黒色土。ローム粒を微量含む。
14．黒色土。粗砂を少量、ローム粒を微量含む。
15．黒褐色土。しまりが強い。ローム粒を多量含む。
16．黒褐色土。しまりが弱い。ロームブロックを多量含む。
17．黒色土とロームブロックの混土。



3号住居出土遺物

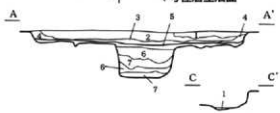
3号住居出土遺物観察表

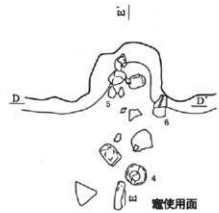
番号	種類 器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	土師器 台付甕	+10~35	口径 — 底径 8.8 器高 2.9+	①細砂、白色鉱物 ②普通 ③純い赤褐5YR5/4	外面 端部横撫で。 内面 斜下方向覆撫で後、端部横撫で。	台部のみ残。
2	須恵器 椀	3号床下土坑－9	口径(11.4) 底径(6.0) 器高 4.8	①細砂、白色鉱物、石英 ②還元焔 ③外面 灰7.5Y5/1 内面 淡白2.5Y8/2	外面 轆轤整形、底部右回転糸切り、底部外縁高台貼り付け時の回転撫で。 内面 轆轤整形。	1/4残。

4号住居(PL.17・63)

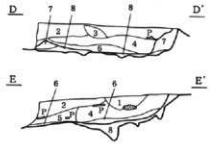
位置 280・285—060・065 **重複** なし。 **形状** 隅丸長方形。南東コーナーが膨らむ。 **規模** 3.52×2.74m **面積** 8.9m² **方位** 11° **床面** 確認面から22cm下で床面となる。黒色土を用いて厚さ1～10cmの貼床を施す。住居中央付近から南側では厚いがほかは薄く、地山のロームをそのまま利用している部分もある。やや凹凸があるが、全体としては平坦である。 **壁溝** 確認できなかった。 **竈** 東壁やや南寄りに設置する。半円状の掘り方を埋め戻して形状を整える。袖は残存状況が悪く、セクションでのみ確認できた。燃焼部は長さ40cm、幅30cmで壁外に位置する。燃焼部中央付近の使用面直上から2点、竈西側の床面直上から1点扁平な礫が出土し、いずれも被熱でぐずぐずに劣化していた。掘り方精査時に礫の抜き取り痕を2ヶ所検出しており、壁面の補強あるいは袖の心材として使用されていた礫と思われ、住居廃棄時に竈が意図的に壊された可能性がある。 **貯蔵穴** 南東コーナー付近に設置。径30cmの円形で深さは5cmである。 **柱穴** 確認できなかった。 **遺物** 土師器小型甕、須恵器杯・椀、刀子が出土した。 **掘り方** 床面から約10cm下で掘り方面となる。中央及び北西コーナーで床下土坑を3基検出した。1号床下土坑は112×106×53cmで互層を成して埋め戻されている。この南側に86×74×26cmの楕円状を呈する2号床下土坑がとりつき、最上層に貼床を施す。3号床下土坑は94×70×36cmの楕円形で南側に中段をもつ。ロームブロック混じりの黒褐色土で埋め戻されるが、貼床に相当する層位はなく、住居内土坑の可能性もある。貯蔵穴の掘り方は楕円形で南壁に向かって張り出し、結果住居平面形の南東コーナーが膨らむ。円形となるよう埋め戻して形状を整えるが底面は掘り方面を使用する。 **所見** 出土遺物から10世紀前葉と考えられる。

4号住居生活面





竈使用面



4号住居

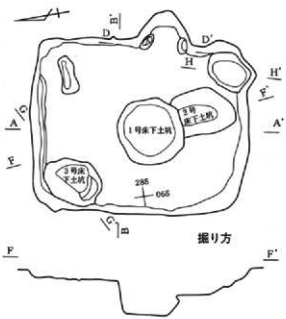
1．黒褐色土。ローム粒をやや多量含む。
2．黒色土。FP・Kk をやや多量、ローム粒を少量含む。
3．黒色土。やや粘質。FP・Kk・ローム粒・焼土粒を少量含む。
4．黒色土。FP・Kk・ローム粒を少量含む。
5．黒色土。ローム粒を少量含む。貼床。
6．黒褐色土。しまりがやや弱い。ロームブロック・焼土粒をやや多量含む。
7．黒色土。しまりがやや弱い。ローム粒を多量含む。

4号住居貯蔵穴

1．黒褐色土。焼土粒を少量含む。

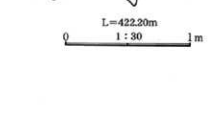
4号住居竈

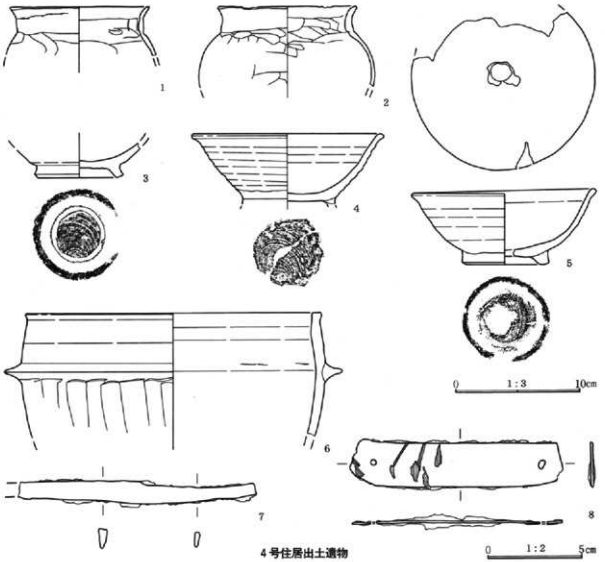
1．褐色粘土。焼土粒を少量含む。
2．黒色土。ロームブロック・FP をやや多量含む。
3．褐色土(ローム)。明褐色粘土ブロックをやや多量含む。
4．黒褐色土。しまりが弱い。焼土粒・炭粒・ロームブロックをやや多量含む。
5．黒色土。しまりが弱い。焼土粒・FP をやや多量含む。
6．黒褐色土。焼土ブロックを多量含む。
7．明褐色土(ローム)。袖部。
8．黒色土。しまりが弱い。焼土粒・ロームブロックを微量含む。



振り方

竈掘り方





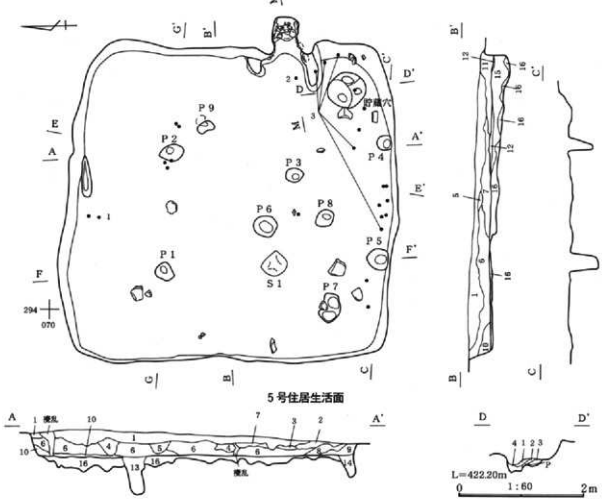
4号住居出土遺物

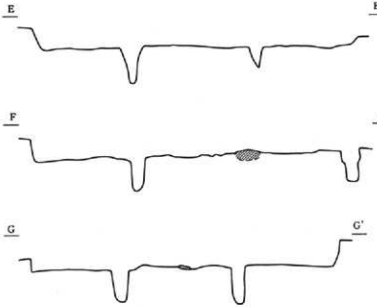
4号住居遺物観察表

番号	種別器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態備考
1	土師器 小型壺	埋設土	口径(11.0) 底径 — 器高 3.8+	①細砂、白色鉱物 ②普通 ③褐色7.5Y4/4	外面 口縁部横撫で、体部左方向箆削り。 内面 口縁端部横撫で、以下左方向箆撫で。	口縁部～体部最上位1/4残。
2	土師器 小型壺	+11～20	口径(11.0) 底径 — 器高 6.4+	①細砂、白色鉱物、石英 ②普通 ③鈍い赤褐5YR5/4	外面 口縁部横撫で、体部左方向箆削り。 内面 口縁端部横撫で、以下箆撫で。	口縁部～体部上位1/4残。
3	須恵器 椀	+15	口径 — 底径 7.0 器高 2.7+	①粗砂、細礫、白色鉱物、石英 ②還元焔気味 ③灰黄褐10YR4/2	外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り、高台両縁貼り付け時の回転撫で。 内面 轆轤整形。	体部最下位～高台残。
4	須恵器 椀	+4	口径 15.3 底径 — 器高 5.6+	①粗砂、白色鉱物、石英 ②還元焔気味 ③鈍い黄橙10YR6/4	口縁端部外反。外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り、高台両縁貼り付け時の被な回転撫で。 内面 轆轤整形。	高台欠。
5	須恵器 椀	+6	口径 14.6 底径 6.8 器高 5.8	①粗砂、細礫、白色鉱物、石英 ②酸化焔気味 ③鈍い褐7.5Y5/4	内面側から横成後穿孔。外面 口縁部回転撫で、体部轆轤整形、底部右回転糸切り、高台両縁貼り付け時の回転撫で。内面 轆轤整形。	体部1/4欠。
6	須恵器 羽釜	+4	口径(23.3) 底径 — 器高 10.8+	①細砂、粗砂、白色鉱物、石英 ②酸化焔 ③鈍い橙7.5Y5/4	全体に内彎。緩やや細長。 外面 口縁部回転撫で、胴部上方向箆削り。 内面 口縁部回転撫で、胴部横撫で。	口縁部～体部上位1/4残。
7	鉄製品 刀子	+16	長さ 12.7+ 幅 1.2 厚さ 0.4(棟) 0.2(区) 重量 10.3		全体に錆化が顕著。棟区をもち、刀身は断面三角形。	切先欠。
8	鉄製品	+6	長さ 11.3 幅 2.3 厚さ 0.2 重量 16.4		扁平なつくりで端部がやや弧を描く。両端に径3mm程の穿孔。一部に木質が遺存。	一部欠。分析。

5号住居(PL.17・18・63)

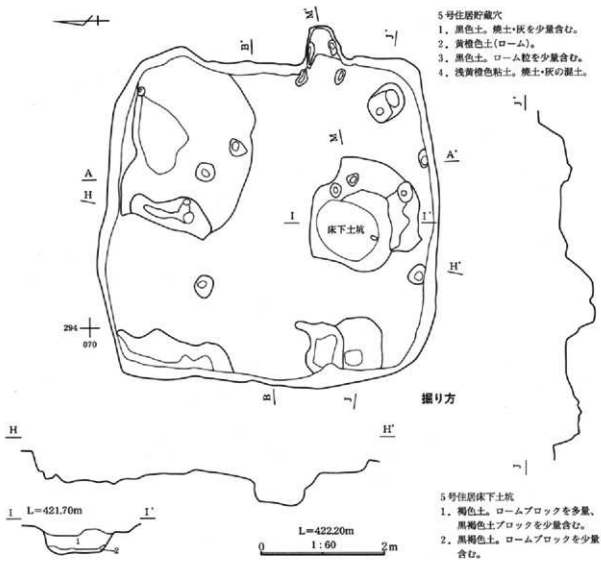
位置　285・290—065・070　**重複**　なし。　**形状**　隅丸方形。　**規模**　5.32×4.88m　**面積**　25.3㎡　**方位**　5°　**床面**　確認面から42cm下で床面となる。特に硬化した面はみられなかった。5cm前後のなだらかな凹凸がやや目立つが全体に平坦である。　**壁溝**　北壁に60×15×7cmの溝状の施設を検出したが、壁溝となるか不明である。　**竈**　東壁南寄りに設置する。半円状の掘り方を埋め戻して形状を整える。袖は左30cm、右75cm残存していた。粘土やローム混じりの黒色土で構築し、扁平な礫を左3石以上、右2石礫に用いて芯材とする。掘り方には左右2ヶ所ずつ礫を据えるピットを設ける。燃焼部は長さ・幅とも約60cmで壁内に位置する。立ち上がり部分には扁平な角礫で補強しており、内面が被熱で赤化している。　**貯蔵穴**　南東コーナー付近に設置する。60×57×24cmの円形で、北側が1段深くなっている。　**柱穴**　9基検出した。規模はP1　32×25×50cm　P2　40×26×58cm　P3　29×23×32cm　P4　25×22×40cm　P5　35×32×47cm　P6　37×33×15cm　P7　45×27×29cm　P8　32×27×49cmP9　25×16×53cmである。このほかS1は床面に埋め込まれ、叩き台石などとしての使用痕もなく位置もよいことから礎石と判断した。主柱はP1～3とS1で受け、南壁際のP4・5は入り口施設に関するものと思われる。P9は軸が傾き、主柱穴とは性格が異なると推測する。　**遺物**　貯蔵穴から南壁にかけて多く分布する。土師器台付甕、須恵器杯、灰釉陶器瓶が出土。　**掘り方**　床面から2～30cm下で掘り方面となる。北西コーナーと西壁沿いを浅く掘りくぼめ、南半中央に190×150×41cmの床下土坑を設ける。　**所見**　出土遺物から9世紀後葉と考えられる。





5号住居

1．黒色土。FP・Kk を少量含む。
2．黒色土。Kk を少量、FP を微量含む。
3．黒褐色土。焼土粒を少量、FP を微量含む。
4．黒褐色土。Kk をやや多量、ロームブロックを微量含む。
5．黒褐色土。Kk をやや多量含む。
6．黒褐色土。ロームブロック・焼土粒を少量、FP を微量含む。
7．黒褐色土。FP・炭化物を微量含む。
8．黒褐色土。焼土粒を少量、FP を微量含む。
9．黒褐色土。ローム粒・焼土粒を多量、FP を少量含む。
10．黒褐色土。しまりがやや弱い。ローム粒・FP を微量含む。
11．黒色土。しまりがやや弱い。ローム粒・FP を微量含む。
12．黒色土。ローム粒をやや多量含む。
13．黒色土。やや粘質。しまりが弱い。(P 2)
14．黒色土。やや粘質。しまりがやや弱い。(P 4)
15．黒色土。ロームブロックを少量含む。
16．黒褐色土。ロームブロックを多量含む。



5号住居貯蔵穴

1．黒色土。焼土・灰を少量含む。
2．黄橙色土(ローム)。
3．黒色土。ローム粒を少量含む。
4．浅黄橙色粘土。焼土・灰の混土。

掘り方

5号住居床下土坑

1．褐色土。ロームブロックを多量、黒褐色土ブロックを少量含む。
2．黒褐色土。ロームブロックを少量含む。

竈使用面

竈掘り方

L=422.20m

0　1:30　m

5号住居竈

1．黒色土。しまりが強い。ローム粒・FP・焼土粒を少量含む。
2．黒色土。しまりが弱い。ローム粒・FP・焼土粒を少量含む。
3．黒褐色土。しまりが弱い。焼土粒・7層の粘土粒を少量含む。
4．明黄褐色土。やや粘質。焼土粒・灰をやや多量、浅黄橙色粘土粒を少量含む。
5．浅黄橙色粘土(袖材)。
6．黒褐色土。やや粘質。ロームブロックを多量含む(袖材)。
7．浅黄橙色粘土。竈材の崩落。
8．黒褐色土。ローム粒を少量含む。

0　1:3　10cm

5号住居出土遺物

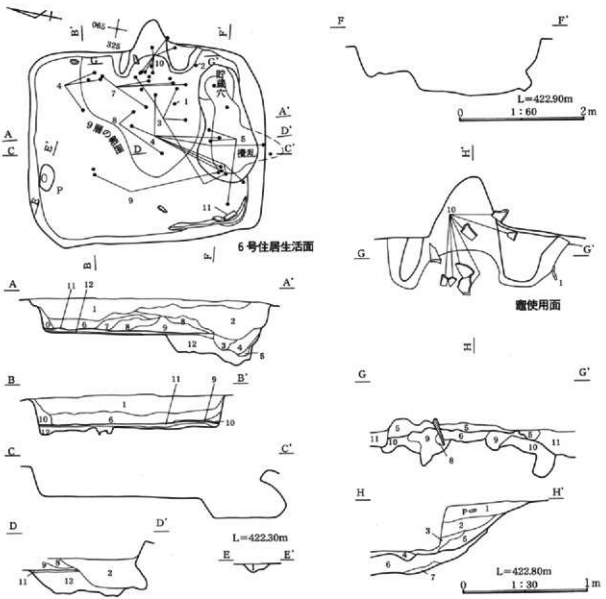
5号住居遺物観察表

番号	種類器種	出土レベル	法量	①釉土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	灰釉陶器 瓶	+18	口径 — 底径 — 器高 —	① — ② — ③灰オリーブ5Y6/2	頸部に近い胴部の小片。外面は灰釉が不均質にかかる。	破片。
2	須恵器 杯	床面直上	口径(13.5) 底径 6.0 器高 4.2	①粗砂、白色鉱物、石英 ②還元焔 ③灰白2.5Y7/1	外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整。 内面 轆轤整形。	体部1/2欠。
3	土師器 台付甕	床面直上 ～+23	口径(11.8) 底径(10.2) 器高 18.0	①細砂、粗砂、白色鉱物 ②普通 ③褐7.5Y4/6	口縁弱い「コ」の字状で器内厚手。外面 口縁部横撫で、体部上位・最下位左方向、中位下方向箆削り、底部箆削り、台部横撫で。内面 口縁部横撫で、体部置撫で。	体部1/4、その他1/2欠。

6号住居(PL.19・64)

位置　320—055、320・325—060　**重複**　1号溝→6号住居　**形状**　南北にのびる隅丸長方形で、南壁がやや膨らむ。**規模**　3.77×3.00m　**面積**　10.4 m²　**方位**　12°　**埋没土**　竈の構築材と思われる土層が竈西側の床面直上に堆積(9層)。住居廃絶時に

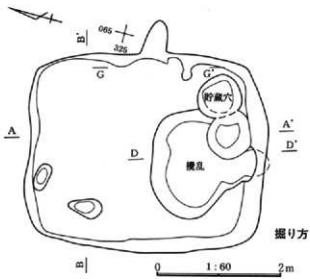
竈を破壊したものと推測。　**床面**　確認面から49cm下で床面となる。厚さ約5cmの貼床を施し、全体に平坦である。　**壁溝**　南西コーナーから西壁にかけて幅5～15cm、深さ約5cmで巡る。　**竈**　東壁ほぼ中央に設置。袖は左41cm、右44cm残存していた。左袖内側に補強用に用いた板状角礫1石が残存していたが、ピット状の掘り方を4ケ所掘削しており、他にも礫を用いていたと思われる。燃焼部は長さ約40cm、幅約60cmで壁内に位置し、煙道は約55°で立ち上がる。燃焼部・煙道部とも掘削した地山の面をそのまま使用している。　**貯蔵穴**　南東コーナーに設ける。径約55cmの円形である。西側と底面が攪乱で破壊されていた。　**柱穴**　北壁際に38×22×14cmのピットが1基検出されたが、柱穴かは不明。　**遺物**　土師器甕、須恵器杯・甕、砥石などが出土した。　**掘り方**　床面から1～10cmで掘り方面となる。特に深く掘り込む箇所はなかった。南側の土坑は床下土坑ではなく2基の攪乱である。1回目(3～5層)は貯蔵穴を切って南壁沿いを、2回目(2層)は1回目の西端を切って北から南へ住居外まで達している。攪乱内外の遺物は接合しており、土層堆積からも2基とも廃絶時からさほど時間を経ずに掘削されたと推測する。　**所見**　出土遺物から9世紀後半と考えられる。

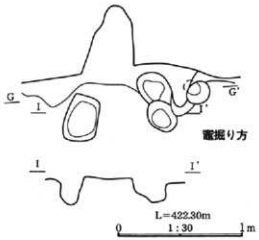


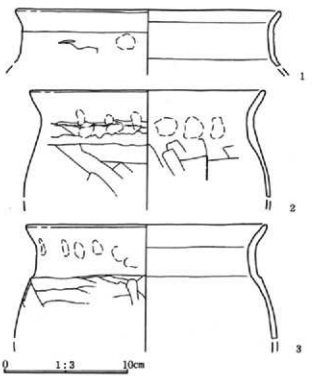
6号住居
1．黒色土。しまりが弱い。FPをやや多量含む。
2．黒褐色土。しまりがやや弱い。ロームブロック・FPをやや多量含む。
3．黄褐色土(ローム)。しまりが弱い。黒色土粒を微量含む。
4．黒色土。しまりがやや弱い。
5．黄褐色土(ローム)。やや粘質。しまりが弱い。黒色土ブロックをやや多量含む。
6．黒色土。しまりがやや弱い。FPを微量含む。
7．黒褐色土。しまりがやや弱い。ローム粒をやや多量、焼土粒を少量含む。
8．黒色土。ローム粒・FPを微量含む。
9．暗褐色土。やや粘質。竈材の崩落。
10．褐色土。しまりが弱い。ロームブロックをやや多量含む。
11．黒色土。しまりが強い。貼床。
12．黒色土。ロームブロックをやや多量含む。

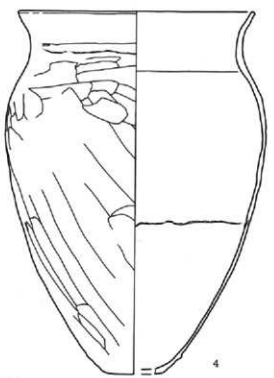
6号住居ピット
1．黒色土。しまりがやや弱い。ロームブロックを少量含む。

6号住居竈
1．黒色土。しまりがやや弱い。FPをやや多量含む。
2．暗褐色土。しまりがやや弱い。炭粒をやや多量、ローム粒・FPを少量含む。
3．黒褐色土。しまりがやや弱い。褐色土ブロックをやや多量、焼土粒を微量含む。
4．黒褐色土。
5．鈍い黄褐色土。しまりが弱い。焼土粒をやや多量含む。竈材の崩落。
6．暗褐色土。焼土粒をやや多量含む。
7．焼土層。地山ロームが焼土化。
8．鈍い黄褐色土。
9．暗褐色土。鈍い黄褐色土粒を少量含む。
10．黒褐色土。袖材。
11．黒色土。しまりがやや弱い。鈍い黄褐色土ブロックをやや多量、焼土粒を少量含む。竈材の崩落。

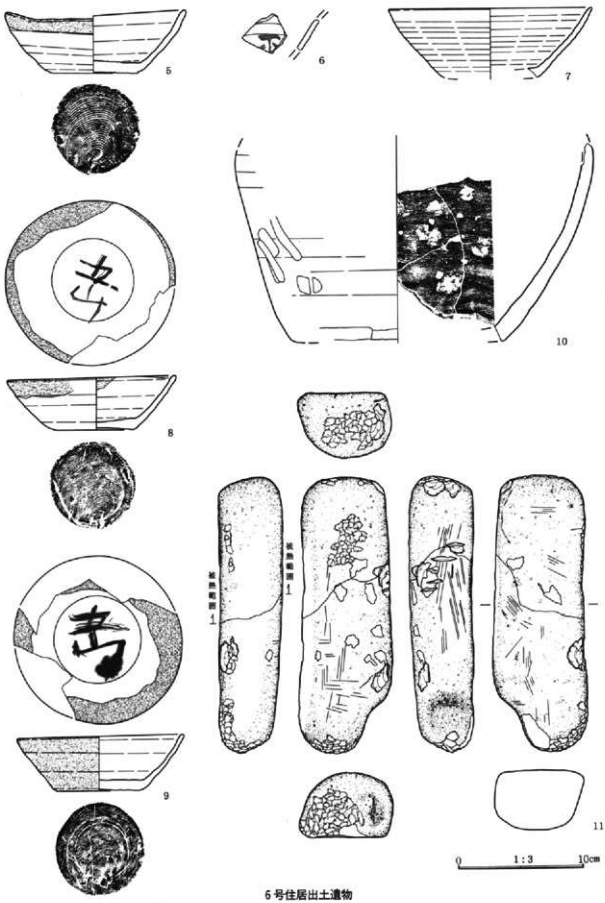








6号住居出土遺物



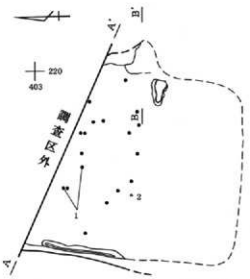
6号住居出土遺物

6号住居遺物観察表

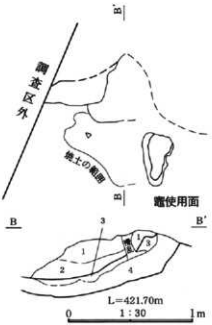
番号	種類器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態備考
1	土師器 甕	＋2	口径(21.0) 底径 — 器高 4.3+	①粗砂、黒色鉱物 ②普通 ③純い赤褐5YR5/4	口縁「コ」の字状。 外面 横撫で・指頭圧痕有り。 内面 横撫で。	口縁部1/4残。
2	土師器 甕	竈使用面直上	口径(18.6) 底径 — 器高 8.4+	①粗砂、黒色鉱物、石英 ②普通 ③明赤褐5YR5/6	口縁弱い「コ」の字状。 外面 口縁部横撫で・指頭圧痕有り、体部左方向箆削り。内面 口縁部横撫で・指頭圧痕有り、体部箆削り。	口縁部～体部上位1/4残。
3	土師器 甕	床面直上～撹乱－28	口径(19.1) 底径 — 器高 9.0+	①粗砂 ②普通 ③橙5YR6/6	口縁「コ」の字状。 外面 口縁部横撫で・指頭圧痕有り、体部左方向箆削り。 内面 口縁部横撫で、体部箆撫で。	口縁部～体部上位1/4残。
4	土師器 甕	＋9～床面直上～撹乱－28	口径 18.6 底径 4.8 器高 28.4+	①細砂、粗砂 ②普通 ③純い褐7.5YR5/3	口縁弱い「コ」の字状。 外面 口縁部横撫で、体部上位左方向箆削り、以下斜下方向箆削り。 内面 口縁部横撫で、体部箆撫で。	口縁部3/4、体部1/4、底部欠。
5	須恵器 杯	床面直上～撹乱－16	口径 14.3 底径 6.8 器高 4.9	①細砂、粗砂、雲母 ②還元焔気味 ③純い黄橙10YR6/4	外面 口縁部張出。体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整。 内面 轆轤整形。	完形。飯田製か。
6	須恵器 杯？	墳後土	口径 — 底径 — 器高 —	①細砂 ②還元焔気味 ③外面 純い褐7.5YR 5/4 内面 黒2.5Y2/1	外面 轆轤整形、「平」？の墨書。 内面 轆轤整形、全面吸炭。	体部破片。墨書。
7	須恵器 杯？	＋1～7	口径(16.0) 底径 — 器高 5.5+	①細砂、粗砂、石英 ②還元焔 ③灰白5Y7/1	体部が直線的に開く。 外面 轆轤整形。 内面 轆轤整形。	体部1/4残。
8	須恵器 杯	＋4～14	口径 13.4 底径 6.3 器高 4.3	①粗砂、細礫 ②還元焔気味 ③橙7.5YR7/6	外面 口縁部張出、体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整。 内面 轆轤整形。底部に「五山」の墨書。	体部1/4欠。墨書。飯田製か。
9	須恵器 杯	床面直上～撹乱－12	口径 13.2 底径 6.5 器高 4.5	①細砂、粗砂、細礫 ②酸化焔気味 ③外面 黒2.5Y2/1 内面 純い黄橙10YR6/4	外面 全面吸炭、体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整。 内面 口縁部張炭、轆轤整形、底部に「五山」の墨書。	体部1/2欠。墨書。飯田製か。
10	須恵器 甕	竈＋1～20	口径 — 底径 16.3 器高 15.5+	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰 N4/0	外面 紐作り後轆轤整形、胴部下位横方向削り。 内面 紐作り後轆轤整形、紐作り時と思われる指頭圧痕有り。	体部1/2残。内外面器表剥離顕著。
11	石製品 砥石凝灰岩	＋3	長さ 21.7 幅 7.5 厚さ 5.1 重量 1270	石材 粗粒輝石安山岩	河原石を使用。側面に擦り面。両端部に打痕。	完形。

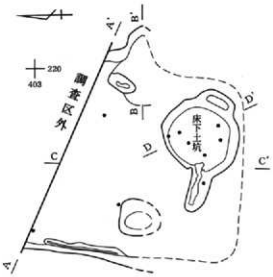
9号住居(PL.19・64)

位置　400－220　**重複**　なし。**規模**　調査区内において南壁・西壁とも3m以上確認した。　**面積**　調査区内で9.6m²。　**方位**　11°　**床面**　確認面から24cm下で床面となる。調査区界の壁面で45cmの深さを確認した。黒色土を用いて、厚さ約5cmの平坦でよく締まった貼床を施す。住居南半は確認面が浅かったため、掘り方のみの検出である。　**壁溝**　西壁において長さ130cm、幅2～5cm、深さ2～7cmの壁溝が検出された。南北で途切れている。　**竈**　東壁に設置する。楕円状の掘り方を埋め戻して形状を整える。袖は右袖が東壁側を除いて長さ40cm検出した。黒色土を用いて構築し、上半は焼土化していた。右袖の北側には炭の混じった焼土が長さ・幅とも40cmほど広がっており、この範囲が燃焼部で壁内に位置すると思われる。煙道は40°で立ち上がる。掘り方面で左袖が想定される位置に礫の抜き取り痕とみられるピットを検出した。　**貯蔵穴**　確認できなかった。　**柱穴**　確認できなかった。　**遺物**　須恵器、杯、鉄椀状滓などが出土した。鉄滓は床上1cmの出土であるが、この他に鉄生産に関する遺物は検出していない。　**掘り方**　床面から約5cm下で掘り方面となる。南西コーナー付近に長さ138cm、幅123cmの床下土坑を検出した。深さは38cm確認したが、確認面が低いため50cm以上あるものと思われる。床下土坑から西に延びる溝状の掘り込み(11層)は床下土坑の埋土を切っており、住居に伴うか不明である。このほか、中央西壁寄りに深さ10cmほどの掘り込みを検出した。　**所見**　出土遺物が少なく詳細な時期は不明だが、平安時代の可能性が高いと推測する。**備考**　石墨遺跡本線部分で対応する住居は検出されていない。



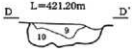
9号住居生活面





9号住居竈

1．暗褐色土。FPをやや多量、焼土粒を少量含む。
2．黒褐色土。FP・焼土粒を多量含む。
3．黒褐色土。しまりがやや強い。焼土粒を多量、FPを微量含む。
4．黒色土。焼土粒を少量、FPを微量含む。



9号住居

1．表土。
2．黒褐色土。Kkをやや多量、FPを微量含む。
3．黒色土。FPをやや多量含む。
4．FP層。黒褐色ブロックを少量含む。
5．黒色土。FPをやや多量、竈寄りに焼土ブロックを少量含む。
6．暗褐色土。FP・焼土粒を少量含む。
7．黒色土。しまりが強い。FPを少量含む。貼床。
8．暗赤褐色土。ロームと黒色土の混土。
9．黒色土。ロームブロック・FPを少量含む。
10．黒色土。ロームブロック・FPを微量含む。
11．黒色土。9・10層より明るい。ロームブロック・FPを少量含む。

0　1：60　2m

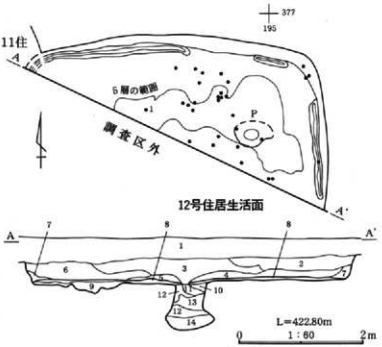
9号住居出土遺物

9号住居遺物観察表

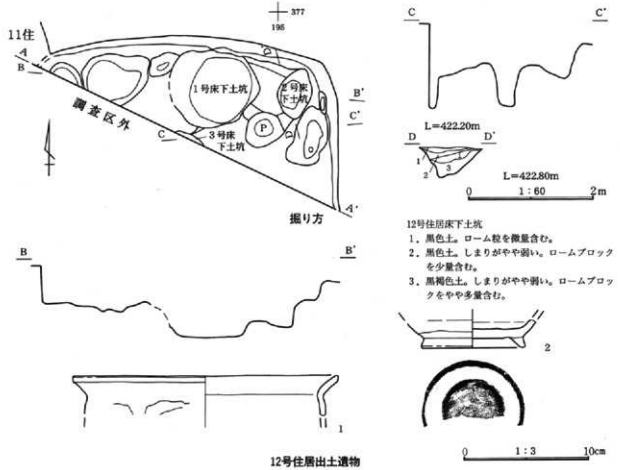
番号	種類器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態備考
1	須恵器杯 7	+17~18	口径(12.6) 底径 — 器高 3.5+	①細砂、粗砂、白色鉱物 ②酸化焔 ③褐灰10YR4/1	外面 轆轤整形。 内面 轆轤整形。	口縁部~体部上半1/4残。
2	鉄鉗形滓	+1	径 10.2+ 厚さ 5.6 重量 486.4	上面に木賃・砂礫付着。		1/4残。

12号住居(PL.19・20・64)

位置　370・375—190・195　**重複**　11号住居→12号住居　**規模**　調査区内で東壁2.45m、北壁4.63m。北壁西側は調査区界付近でコーナーになるものと思われる。　**面積**　調査区内で7.7m²。　**方位**　東壁で—4°　**埋没土**　ロームブロックを多量に含む黒褐色土(5層)が部分的に床面直上を覆って堆積していた。西から東へ細長くのびて調査区外へと続き、最も厚い箇所で20cm以上を計る。上面および層中から土師器甕などの破片が出土した。　**床面**　確認面から33cm下で床面となる。黒色土を用いて厚さ2~10cmの貼床を施すが、全体にやや凹凸が目立つ。　**壁溝**　幅10~15cm、深さ2cmほどで巡る。北壁の一部と北東コーナー及び東壁調査区界付近で途切れ、全周しない。　**竈**　確認できなかった。調査区外に位置すると思われる。　**貯蔵穴**　確認できなかった。調査区外に位置すると思われる。　**柱穴**　1基のみ検出した。規模は63×41×44cmで底面は堅く締まっていた。埋没土は黒色土でロームブロックを少量含む。　**遺物**　土師器甕、須恵器椀が出土した。5層中から出土した土器は小破片が多いものの時間差は認められない。　**掘り方**　床面から約10cm下で掘り方面となる。中央と北東コーナー付近に床下土坑を検出した。規模は1号146×122×59cm　2号79×58×40cm　3号は径54cm以上、深さ72cmである。2・3号は黒色土とロームを用い互層をなして埋め戻されるが、1号は上層が黒色土、下層が黒色土とロームの混土で互層はみられない。1・3号は断面が袋状を呈する。そのほか、壁沿いを楕円状に深さ5~30cmほど掘り窪め、黒色土で整えている。　**所見**　出土遺物から9世紀前半と考えられる。



12号住居
1. 表土。
2. 黒褐色土。ロームブロック・FP・焼土粒を少量含む。
3. 黒色土。ロームブロック・FP・焼土粒を少量、炭粒を少量含む。
4. 黒色土。ローム粒・FPを少量、焼土粒を微量含む。
5. 黒色土。ロームブロックを多量含む。
6. 黒色土。FPを多量、ロームブロックを少量含む。
7. 黒色土。しまりがやや弱い。ローム粒・FPを微量含む。
8. 黒色土。しまりが強い。ロームブロック・FPを微量含む。貼床。
9. 黒色土。しまりがやや弱い。ロームブロック・FPを少量含む。
10. 黄褐色土(ローム)。黒色土ブロックをやや多量、FP・焼土粒を微量含む。
11. 黒色土。しまりがやや弱い。ローム粒・焼土粒をやや多量、FPを微量含む。
12. 黒色土。しまりが弱い。ロームブロックを多量、FPを少量含む。
13. 黄褐色土(ローム)。しまりが弱い。黒色土ブロックをやや多量含む。
14. 褐色土(ローム)。しまりがやや弱い。黒色土ブロックをやや多量含む。



12号住居出土遺物

12号住居遺物観察表

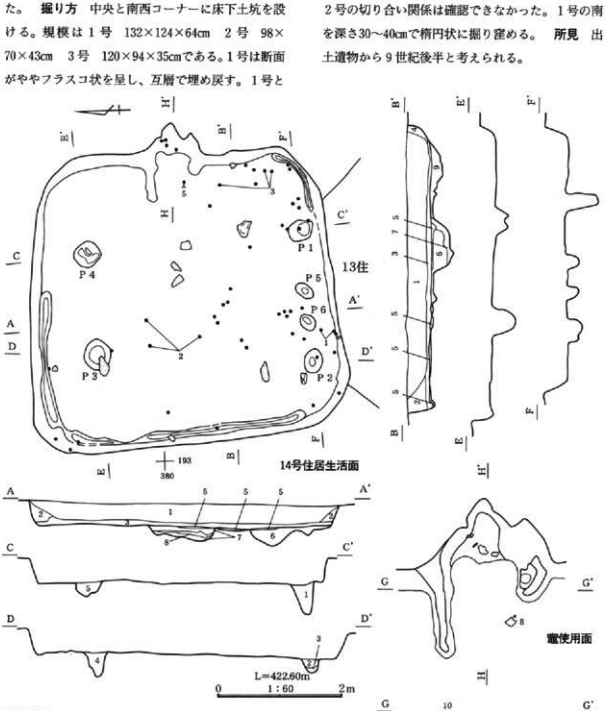
番号	種類 器種	出土レベル	法量	①触土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	土師器 甕	＋6	口径(21.0) 底径 — 器高 3.2+	①細砂、黒色鉱物 ②普通 ③赤褐5YR4/6	口縁部弱いS字状の字状。 外面 口縁部横撫で、体部最上位左方向荒削り。 内面 口縁部横撫で。	口縁部1/4残。
2	須恵器 椀	埋投土	口径 — 底径 8.2 器高 2.2+	①粗砂、白色鉱物、石英 ②還元焔 ③灰白2.5Y7/1	外面 体部横撫整形。底部左回転糸切り、高台両縁貼り付け時の回転撫で。 内面 横撫整形。	体部下位～高台部1/2残。

14号住居(PL.20・21・65)

位置 375・380—185・190 **重複** 13号住居→14号住居 **形状** 東壁が西壁より短い隅丸台形。 **規模** 5.13×4.52m **面積** 21.3m²(推定) **方位** 2°

床面 確認面から36cm下で床面となる。床下土坑など、深い掘り方を設けた上面に厚さ約3cmの丁寧な貼床を施し、そのほかは地山のローム層を平に掘り込んでそのまま床面とする。 **壁溝** 北壁中央から西壁及び南東コーナーに幅8～20cm、深さ5cmで巡る。 **竈** 東壁中央に設置。半円形の掘り方に極暗赤褐色土で形状を整える。袖は左70cm、右31cm残存していた。燃焼部は幅50cmほどで壁付近に位置し、壁外に約30°で立ち上がる。底面が焼土化していた。掘り方精査時に壁体を補強していたと思われる礫の抜き取り痕を6ヶ所検出した。 **貯蔵穴** 確認できなかった。 **柱穴** 6基検出した。1～4号ピットが主柱穴である。いずれも住居の対角線上に並ばず、特に南側の柱穴が壁に近い。5・6号ピットは主柱穴に比べて径が小さく、位置から入り口施設に関するものと思われる。規模はP1 41×33×49cm P2 38×28×21cm P3 49×40×34cm P4 41×40×20cm P5 31×19×23cm P6 26×22×20cmである。 **遺物** 竈付近から南壁にかけて分布が集中する。土師器甕・小型甕、須恵器杯、鉄椀状滓が出土し

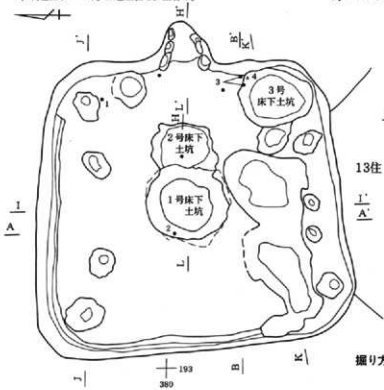
た。　**掘り方**　中央と南西コーナーに床下土坑を設ける。規模は１号　132×124×64cm　２号　98×70×43cm　３号　120×94×35cmである。１号は断面がややフラスコ状を呈し、互層で埋め戻す。１号と２号の切り合い関係は確認できなかった。１号の南を深さ30～40cmで楕円状に掘り窪める。　**所見**　出土遺物から９世紀後半と考えられる。

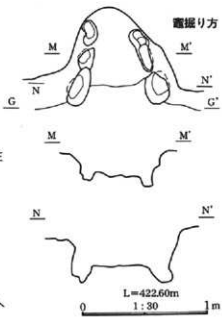


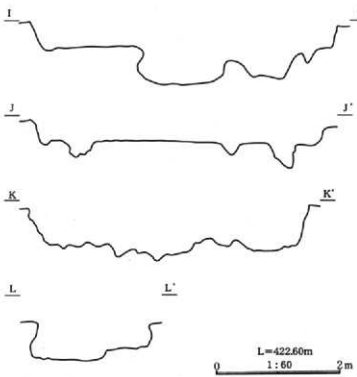
14号住居竈
1．黒褐色土。ローム粒・FP を少量含む。
2．極暗赤褐色土。ローム粒・焼土粒を多量含む。
3．褐色粘土。焼土粒を少量含む。
4．黒褐色土。ロームブロック・焼土粒を多量含む。
5．極暗褐色土。ロームブロック・FP・焼土粒を少量含む。
6．極暗褐色土。ロームブロック・焼土ブロックを多量含む。
7．黒褐色土。ローム粒・FP・焼土粒を少量含む。
8．極暗赤褐色土。ローム粒・焼土粒・炭粒を微量含む。
9．極暗赤褐色土。焼土粒を多量含む。
10．黒褐色土。しまりが強い。ロームブロックをやや多量含む。
11．暗褐色土。ロームブロック・焼土粒を微量含む。
12．黒色土。焼土粒・ローム粒を微量含む。

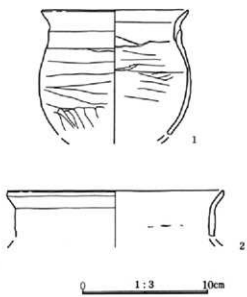
14号住居
1．黒褐色土。ロームブロックを少量、FP を微量含む。
2．黒色土。ローム粒・FP を少量含む。
3．黒褐色土。しまりがやや弱い。ローム粒を少量、FP を微量含む。
4．褐色土(ローム)。黒色土ブロックを少量含む。
5．極暗褐色土。しまりが強い。層状のロームを含む。貼床。
6．暗褐色土。ロームブロックを多量含む。
7．褐色土(ローム)。黒色土粒を少量含む。
8．黒褐色土。ロームブロックを少量含む。
9．黒褐色土。しまりがやや強い。炭粒を微量含む。

14号住居ピット
1．黒色土。しまりが弱い。ローム粒を微量含む。
2．黒色土。しまりが弱い。ローム粒をやや多量含む。
3．黒色土。
4．黒色土。ローム粒をやや多量含む。
5．ロームブロックと黒色土の混土。

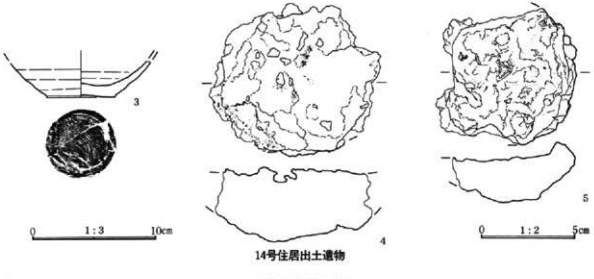








14号住居出土遺物



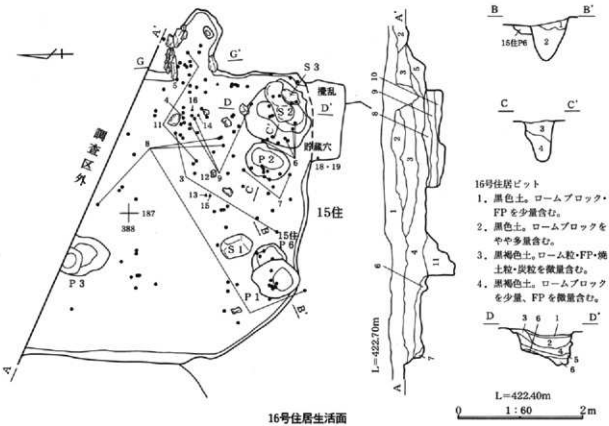
14号住居出土遺物

14号住居遺物観察表

番号	種類 器種	出土レベル	法量	①軸土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	土師器 小型甕	−7〜＋15	口径(11.6) 底径 − 器高 9.8+	①細砂、黒色鉱物 ②普通 ③橙2.5YR6/6	口縁弱いS字状で器内厚手。外面 口縁部横撫で、体部上位左方向・以下右下方向箆削り。内面 口縁部横撫で、体部横方向箆撫で。	口縁部〜体部上半1/4残。
2	土師器 甕	−8〜＋1	口径(16.9) 底径 − 器高 3.6+	①細砂、粗砂 ②普通 ③橙2.5YR6/6	口縁「コ」の字状。外面 横撫で。内面 横撫で。	口縁部1/4残。
3	須恵器 杯	−6〜＋4	口径 − 底径 5.4 器高 2.8+	①細砂、粗砂、白色鉱物 ②還元焔 ③浅黄2.5Y7/3	外面 轆轤整形、底部右回転糸切り未調整。内面 轆轤整形。	体部1/4、底部残。
4	鉄鏃形埴	−2	径 8.1+ 厚さ 3.9 重量 338.0		上面に木質・砂礫が微量付着。	端部欠。
5	鉄鏃形埴	竈＋4	径 7.4+ 厚さ 3.2 重量 203.1		上面に砂礫が少量付着。	一部欠。

16号住居(PL.21・22・65)

位置　385−180，380・385−185　**重複**　15号住居→16号住居　**形状**　南東コーナーが大きく彎曲する。　**規模**　東西4.60m、南北4.50m以上。　**面積**　調査区内で16.7㎡。　**方位**　3°　**床面**　確認面から25cm下で床面となる。調査区界の壁面で30cm確認した。床下土坑など深い掘り方を設けた上面には厚さ2〜15cmの貼床を施す。そのほかは地山のローム層を平に掘削してそのまま床面とする。全体に凹凸のある床面である。　**壁溝**　なし。　**竈**　楕円状の掘り方を設け、埋め戻して形状を整える。袖は残存していなかった。燃焼部は幅50cm、長さ60cmで壁外に位置し、壁体に板状の礫を横向きに立てて補強する。礫の内壁側は被熱で赤化し、燃焼部底面は一部焼土化していた。　**貯蔵穴**　南東コーナーに設ける。規模は径105cm、深さ58cmの隅丸方形である。埋没土の堆積状況から竈方向からの人為的な埋め戻しが考えられる。埋め戻された土層の上面にS 2・3が載せられていた。どちらも扁平な礫である。　**柱穴**　3基検出した。規模はP1　76×61×70cm　P2　70×48×62cm　P3　72以上×63×47cmである。2号ピットは埋没土の堆積状況から人為的な埋め戻しが考えられる。底面中央に礫石の可能性のある平な円礫がほぼ直立した状態で検出された。3号ピットは2段に掘り込まれており、掘り直しも考えられるが、埋没土は同一である。S 1は平な円礫で貼床層内に埋め込まれており、礎石の可能性がある。　**遺物**　竈付近から1号ピットにかけて分布する。須恵器杯・椀・甕・羽釜・短頸壺、灰釉陶器瓶、砥石、鉄製紡錘車、刀子などが出土した。　**掘り方**　床下土坑を3基検出した。規模は1号105×103×55cm　2号120×104×56cm　3号104×72×72cmである。1・2号は断面フラスコ状を呈する。東半は10〜40cmほど全体に掘り窪めている。　**所見**　出土遺物から9世紀後葉から10世紀前葉と考えられる。　**備考**　本線部分B区13号住居の南半にあたる。



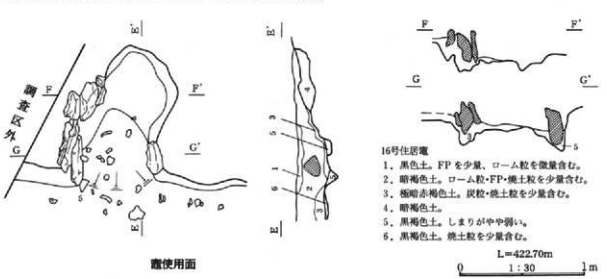
16号住居生活面

16号住居

1．表土。
2．黒色土。Kk をやや多量、FP を微量含む。
3．黒褐色土。FP をやや多量含む。
4．黒色土。ローム粒・FP を少量含む。
5．黒褐色土。焼土粒をやや多量、FP を少量含む。
6．黒色土。ローム ブロック・FP を少量含む。
7．極暗褐色土。ローム ブロックを少量含む。
8．黒色土。しまりが強い。ローム ブロックをやや多量、FP・焼土粒・粘土ブロックを微量含む。貼床。
9．黄褐色土(ローム)。黒色土ブロック・砂岩ブロック(竈材)を少量含む。
10．ロームと黒色土の混土。焼土粒を微量含む。
11．黒色土。しまりがやや弱い。ローム粒・FP を微量含む。P 3 の埋没土。

16号住居貯蔵穴

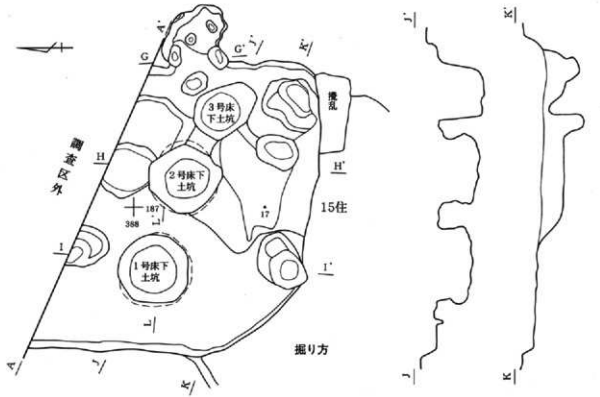
1．黒褐色土。ローム粒・FP 粒を少量含む。
2．暗褐色土。やや粘性。しまりがやや弱い。ローム ブロックをやや多量、FP・炭粒・焼土粒を少量含む。
3．暗褐色土。しまりがやや弱い。焼土粒をやや多量、ローム ブロック・FP・炭粒を少量含む。
4．暗褐色土。しまりがやや弱い。ローム ブロックを少量、焼土粒・炭粒を微量含む。
5．褐色土。やや粘質。しまりがやや弱い。ローム ブロックをやや多量、炭粒を微量含む。
6．暗褐色土。しまりがやや弱い。



竈使用面

16号住居竈

1．黒色土。FP を少量、ローム粒を微量含む。
2．暗褐色土。ローム粒・FP・焼土粒を少量含む。
3．極暗赤褐色土。炭粒・焼土粒を少量含む。
4．暗褐色土。
5．黒褐色土。しまりがやや弱い。
6．黒褐色土。焼土粒を少量含む。



16号住居1号床下土坑

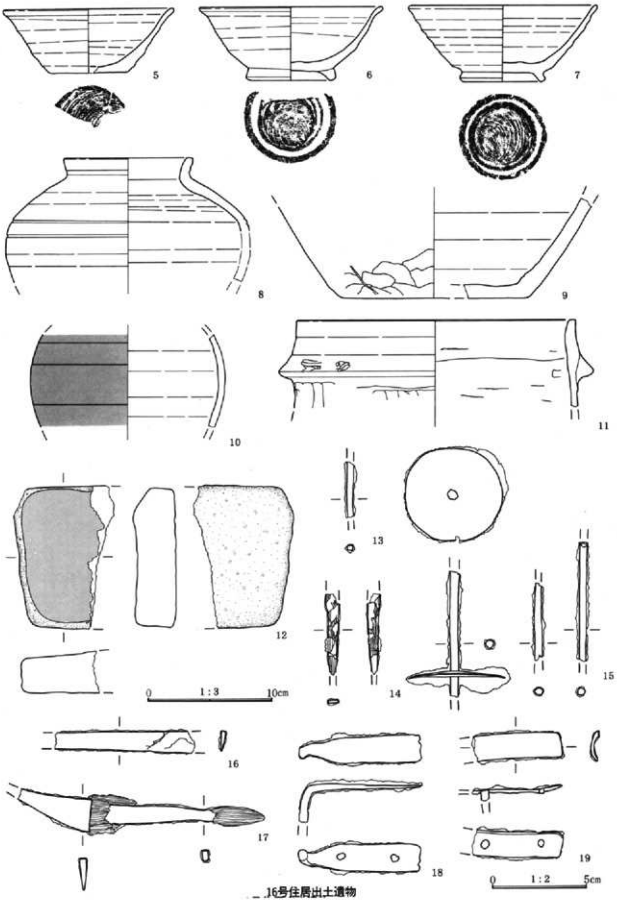
1．暗褐色土。しまりが強い。ロームブロックをやや多量、FP・焼土粒を微量含む。貼床。

2．暗褐色土。しまりがやや弱い。ロームブロックをやや多量、FPを微量含む。

3．ロームブロックと暗褐色土の混土。しまりが弱い。

4．黄褐色土(ローム)。しまりがやや弱い。3層の土をやや多量含む。

16号住居出土遺物



16号住居出土遺物

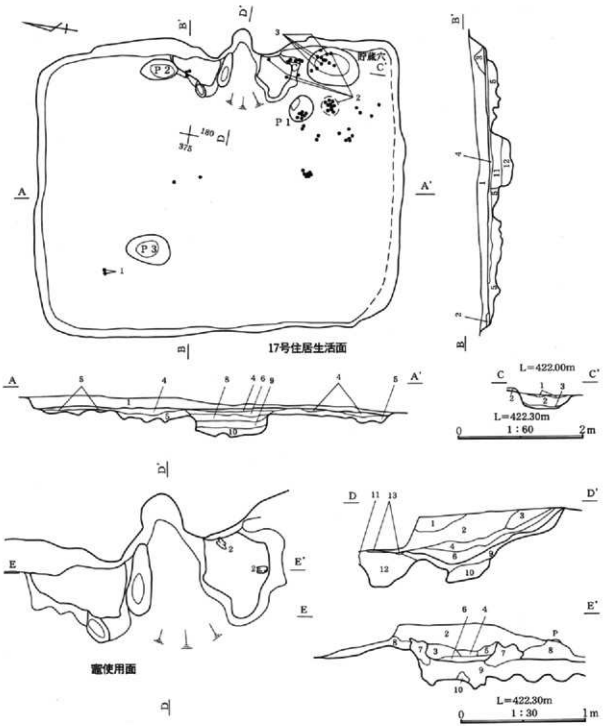
16号住居遺物観察表

番号	種類器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 杯 ?	埋没土	口径 — 底径 — 器高 —	①細砂、粗砂 ②還元焔 ③浅黄2.5Y7/3	外面 轆轤整形、墨書有るが判読不能。 内面 轆轤整形。	破片。墨書。
2	須恵器 杯	埋没土	口径 — 底径 5.6 器高 2.0+	①細砂、細礫 ②還元焔 ③暗灰 N3/0	全面に煤し状の吸炭。 外面 体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整。 内面 轆轤整形。	体部下位～底部残。厳田製か。
3	須恵器 杯	＋3～4	口径(12.9) 底径 7.0 器高 3.8	①細砂、粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰白2.5Y7/1	外面 体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整。 内面 轆轤整形。	体部1/4、底部残。
4	須恵器 杯	＋5	口径(13.0) 底径 6.7 器高 3.8	①細砂、粗砂、細礫 ②還元焔気味 ③暗灰黄2.5Y5/2	口縁端部外反。全面に煤し状の吸炭。 外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整。 内面 轆轤整形。	体部1/2欠。
5	須恵器 杯	＋5	口径(13.4) 底径 6.2 器高 5.1	①粗砂、白色鉱物 ②還元焔気味 ③鈍い黄橙10YR7/3	外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整。 内面 轆轤整形。	1/4残。厳田製か。
6	須恵器 椀	床面直上 ～＋9	口径(14.5) 底径 6.3 器高 5.8	①粗砂、細礫、石英 ②還元焔 ③鈍い黄橙10YR7/2	口縁端部外反。外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整、高台両縁貼り付け時の回転撫で。 内面 轆轤整形。	1/2残。
7	須恵器 椀	＋4	口径(14.6) 底径 6.2 器高 6.0	①粗砂、細礫、石英 ②還元焔 ③灰黄2.5Y6/2	体部直線的に開き、轆轤目顕著。外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り、高台両縁貼り付け時の回転撫で。 内面 轆轤整形。	口縁～体部1/5、底部残。
8	須恵器 短頸壺	＋3～12	口径(10.2) 底径 — 器高 9.8+	①細砂、粗砂、細礫 ②還元焔、竪穴 ③灰7.5Y5/1	外面 口縁部回転撫で、体部轆轤整形、肩部に沈線が2条巡る。 内面 口縁部回転撫で、体部轆轤整形。	口縁部1/2、体部上半1/4欠。
9	須恵器 甕	＋1～5	口径 — 底径 14.4 器高 7.2+	①粗砂、細礫 ②還元焔、竪穴 ③黄灰2.5YR6/1	外面 体部轆轤整形、体部最下位左方向箆削り。底部撫で後一部箆削り。 内面 体部轆轤整形、底部撫で。	底部1/2残。
10	灰釉陶器 瓶	埋没土	口径 — 底径 — 器高 7.3+	①細 — ②細 — ③灰白2.5Y7/1	体部片。外面は厚身にムラのある灰釉がかかり、上部からも流れている。外面は回転箆削り。東濃。	体部中位1/4残。
11	須恵器 羽釜	＋1～4	口径(22.0) 底径 — 器高 6.8+	①細砂、粗砂、細礫、石英 ②還元焔 ③灰黄2.5Y6/2	全体に淡く吸炭。外面 口縁部回転撫で、鍔は厚みがあり上両端とも丁寧な回転撫で。胴部上方向箆削り。 内面 回転撫で。	口縁部～体部最上位1/2残。
12	石製品 砥石	＋7	長さ 11.3 幅 6.3+ 厚さ 3.4 重量 519 石材 粗粒輝石安山岩		扁平な礫を使用。	一部残。
13	鉄製品	床面直上	長さ 3.0 幅 0.4 厚さ 0.3 重量 1.1		断面四角形。両端を欠く。	釘又は鏃の茎か。
14	鉄製品 刀子	床面直上	長さ 4.3+ 幅 0.7 厚さ 0.2 重量 2.0		柄の木質が遺存。	刀身・茎尻欠。
15	鉄製品 紡錘車	＋5	長さ 6.7 軸径 0.3～0.4 弾み車径 5.1 弾み車厚さ 0.3 重量 25.2		弾み車は軸付近が厚く、端部が薄い。	軸両端欠。天地不明、分析。
16	鉄製品 刀子	＋6	長さ 7.4 幅 1.3 厚さ 0.5 重量 6.4		錆化が顕著。断面三角形の平造状。	刀身の一部残。分析。
17	鉄製品 刀子	－8	長さ 13.0+ 幅 1.8(刀身) 1.0(茎) 厚さ 0.3 重量 22.0		刃区をもつ。柄の木質が一部遺存。切先より区付近の幅があり、刀身が反りをもち、断面三角形。	切先尾欠。分析。
18	鉄製品	＋7	長さ 6.5+ 幅 1.8 重量 9.8		扁平な長方形状の板の端部が屈曲し、棒状となる。2ヶ所に鋲が打たれるが錆で表からは観察できない。	一部欠。分析。
19	鉄製品	＋2	長さ 4.9+ 幅 1.6 厚さ 0.2 重量 6.2		断面弧状の長方形板。2ヶ所に鋲が打たれるが、錆で表からは観察できない。	一部欠。分析。

17号住居(PL.23・66)

位置 370・375—175・180 **重複** なし。 **形状** 隅丸長方形。南東コーナーのみ丸くならない。 **規模** 5.86×4.68m **面積** 26.1㎡ **方位** —12° **床面** 確認面から31cm下で床面となる。厚さ2～10cmの貼床を施す。床面は平坦だが、南側が北側よりやや低い。南に下がる小谷地に立地し、南側の確認面が低いために正確な下端が確認できなかった。 **壁溝** なし。 **竈** 東壁中央に設置。楕円状の掘り方を設け、燃焼部をさらに低く掘り込み、ロームと黒色土で埋め戻して形状を整える。袖は左58cm、右68cm残存していた。竈構築土が崩れて袖の両外に堆積していたが、7層のみが本来の袖材である。燃焼部は長さ75cm、幅50cmで壁内に位置する。燃焼部左側の内壁と左袖に補強用とみられる礫の抜き取り痕を検出した。 **貯蔵穴** 竈の南側に設置。規模は84×62×24cmの楕円形で、底面に深さ2cmほど土を貼っている。埋没土は竈の構築土で竈方向から人為

的に埋め戻されている。　**柱穴**　3基検出した。規模はP1　42×36×36cm　P2　60×31×24cm　P3　70×46×28cmである。　**遺物**　貯蔵穴付近に集中して分布する。土師器甕、須恵器杯が出土した。また、竈埋没土からイネ・オオムギ・コムギの炭化胚乳を検出した。　**掘り方**　中央で床下土坑を2基検出した。規模は1号　140×124×36cm　2号　85×80×26cmである。まず床下土坑以外の掘り方を埋めた後に1号土坑・2号土坑の順に掘削して埋め戻し、最後に床面全体に貼床を施している。床下土坑以外の部分は15cmほど掘り窪めるとともに、東壁の竈北側と北西コーナー付近をテラス状に掘り残す。　**所見**　出土遺物から9世紀後葉と考えられる。



17号住居

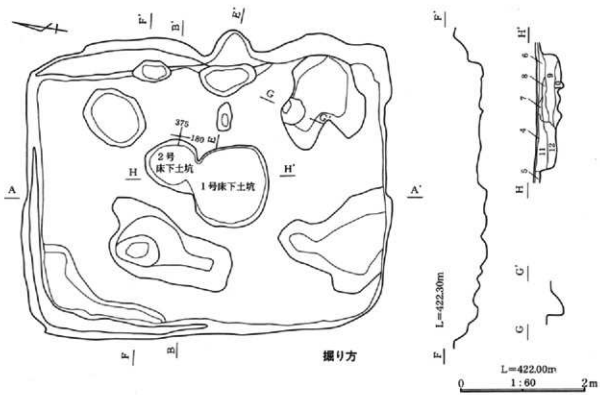
1．黒褐色土。FPをやや多量、ローム粒を少量、焼土粒・炭化物を微量含む。
2．黒褐色土。ローム粒をやや多量、FPを少量含む。
3．褐色土。竈材の崩落。部分的に焼土化。
4．黒色土。ロームブロック・FPを微量含む。貼床。
5．黒色土。ロームブロックをやや多量含む。
6．黒色土。FPをやや多量含む。
7．黒褐色土。ロームブロックを少量、FPを微量含む。
8．黒色土。ロームブロック・FPを少量含む。
9．黒色土。ロームブロックをやや多量、FPを少量含む。
10．黄褐色土(ローム)。黒色土ブロックをやや多量含む。
11．黒色土。ロームブロックを多量、FP・焼土粒をやや多量含む。
12．褐色土(ローム)。焼土粒を多く、黒色土ブロックを少量、浅黄粘土ブロックを微量含む。11・12は2号床下土坑。

17号住居貯蔵穴

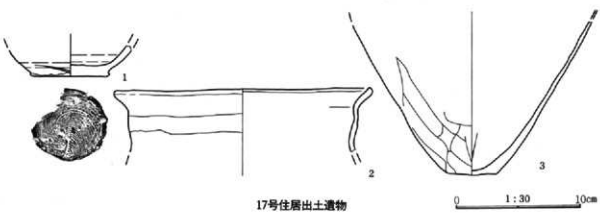
1．黒褐色土。焼土粒・FPを少量含む。
2．暗褐色土。焼土粒・炭粒を少量含む。竈材の崩落。竈の8層に相当。
3．黒色土。しまりが強い。FP・焼土粒を微量含む。貼匠。

17号住居竈

1．黒褐色土。FP・焼土粒を少量含む。
2．黒色土。ロームブロックを少量含む。
3．鈍い黄褐色土。焼土ブロックをやや多量含む。下面は焼土化。竈材の崩落。
4．黒褐色土。焼土粒をやや多量含む。
5．黒褐色土。鈍い黄褐色土粒・焼土粒をやや多量含む。
6．極暗赤褐色土。しまりがやや弱い。焼土粒をやや多量、炭粒を少量含む。
7．黄褐色土。焼土粒を微量含む。内壁面は焼土化。
8．暗褐色土。焼土粒・炭粒を少量含む。竈材の崩落。貯蔵穴の2層に相当。
9．黒色土。しまりがやや弱い。FP・焼土粒を微量含む。
10．明黄褐色粘土。
11．住居の4層に相当。
12．黒色土。ロームブロックをやや多量、FP・焼土粒を微量含む。
13．住居の5層に相当。



掘り方



17号住居出土遺物

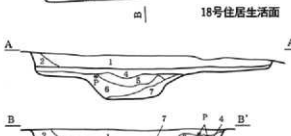
17号住居遺物観察表

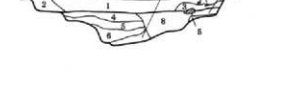
番号	種類 器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 杯	＋8	口径 ― 底径 6.0 器高 2.0+	①細砂、粗砂 ②還元焔 ③灰5Y6/1	外面 体部横ヘラ整形、底部右回転糸切り未調整。 内面 横ヘラ整形。	体部最下位1/4、底部3/4残。
2	土師器 甕	＋1～＋4 竈＋3～16	口径 20.2 底径 ― 器高 4.8+	①細砂 ②普通 ③明赤褐5YR5/6	口縁弱い「コ」の字状。 外面 横撫で。 内面 横撫で。	口縁部1/4残。
3	土師器 甕	床面直上 貯蔵穴― 5～16	口径 ― 底径 3.7 器高 11.9+	①粗砂、黒色鉱物 ②普通 ③赤褐5YR4/6	外面 体部撫削り、底部撫削り。 内面 撫撫で。	体部下半1/4、底部残。

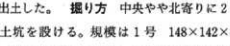
18号住居(PL,23・24・66)

位置 360・365―150・155 **重複** なし。 **形状** 隅丸台形。南壁が北壁より短く、やや膨らむ。 **規模** 3.86×3.15m **面積** 11.6m² **方位** 2° **床面** 確認面より40cm下で床面となる。厚さ5～15cmの貼床を施し、全体に平坦である。 **壁溝** なし。 **竈** 東壁やや南寄りに設置。半円状の掘り方を設け、暗褐色土とロームの混土で形状を整える。袖は左62cm、右24cm残存していた。燃焼部は長さ67cm、幅51cmで壁外に位置する。 **貯蔵穴** 東南コーナーに設置。規模は78×60×22cmの楕円形である。 **柱穴** 3基検出した。いずれも南北の壁面に位置する。規模はP1 36×26×14cm P2 42×36×14cm P3 36×26×11cmで、総じて浅い。1・2号ピットでは柱痕が観察できた。 **遺物** 須恵器羽釜、灰釉陶器小椀が出土した。 **掘り方** 中央やや北寄りに2基の床下土坑を設ける。規模は1号 148×142×38cm 2号 96×84×32cmである。1号床下土坑を掘削して埋め戻し、床面全体に貼床を施した後に2号床下土坑を掘削して貼床をせずに埋め戻す。このほか、南西コーナー付近を約15cm掘り窪める。 **所見** 出土遺物から10世紀前半と考えられる。

18号住居生活面





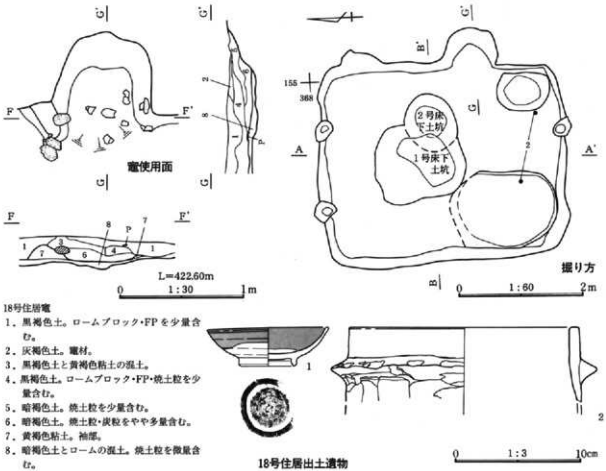


18号住居ピット
1．黒褐色土。ロームブロックをやや多量含む。柱痕。
2．黒褐色土。ローム粒を少量含む。

18号住居貯蔵穴
1．黒褐色土。炭化物・焼土粒を少量含む。
2．黒褐色土。ロームブロック・炭化物・焼土粒を少量含む。

18号住居
1．黒褐色土。ロームブロック・FPを少量含む。
2．黒褐色土。FPを少量、ロームブロックを微量含む。
3．黒褐色土。FP・黄褐色土(竈材)を少量、ロームブロックを微量含む。
4．黒褐色土。しまりが強い。ロームブロック・焼土粒を少量含む。貼床。
5．黄褐色土(ローム)。黒褐色土を多量含む。
6．黄褐色土(ローム)。黒褐色土ブロックを少量含む。
7．黒褐色土。ロームブロックを少量、焼土粒・炭化物を微量含む。
8．暗褐色土。ロームブロックをやや多量、炭化物・焼土粒を少量含む。2号床下土坑埋土。

L=422.60m
0 1:60 2m



18号住居竈
1．黒褐色土。ロームブロック・FPを少量含む。
2．灰褐色土。竈材。
3．黒褐色土と黄褐色粘土の混土。
4．黒褐色土。ロームブロック・FP・焼土粒を少量含む。
5．暗褐色土。焼土粒を少量含む。
6．暗褐色土。焼土粒・炭粒をやや多量含む。
7．黄褐色粘土。袖部。
8．暗褐色土とロームの混土。焼土粒を微量含む。

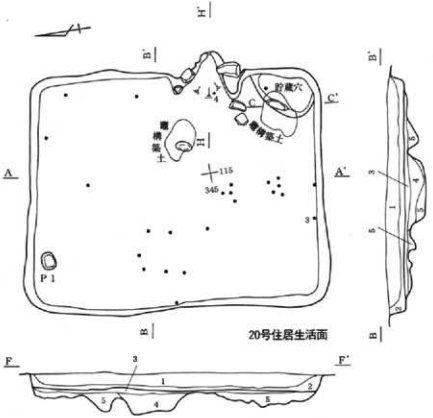
18号住居出土遺物

18号住居遺物観察表

番号	種類器種	出土レベル	法量	①釉土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	灰釉陶器 小椀	＋2～10	口径 9.6 底径 4.1 器高 3.1	① — ② — ③灰白2.5Y7/1	口縁端部は小さく外反。口縁部から体部に灰釉を浸けがけするが、釉は薄くムラもある。高台はやや丸みを有し、端部は摩滅して平滑となる。	体部・高台1/4欠。
2	須恵器 羽釜	－2～11	口径(18.0) 底径 — 器高 5.9+	①細砂、粗砂、雲母 ②還元焔 石英 ③黒褐10YR3/1	鍔端部に凹凸。 外面 口縁部横撫で、胴部最上位上方向箆削り。 内面 横撫で。	口縁部～胴部上位1/4残。

20号住居(PL.24・25・66)

位置　340・345―110・115　**重複**　なし。　**形状**　隅丸長方形。西壁南半がやや狭まる。　**規模**　4.85×3.90m　**面積**　17.5㎡　**方位**　6°　**床面**　確認面から78cm下で床面となる。厚さ約5cmの貼床を施すが、壁付近では全体に平坦である。　**壁溝**　なし。　**竈**　東壁やや南寄りに設置。長軸が南に傾き、壁内より壁外の底面が5cmほど高い台形状の掘り方を設け、黒褐色土で形状を整える。燃焼部は長さ65cm、幅40cmで壁外に位置し、底面に扁平な円礫を敷いて黒褐色土で覆う。煙道との境にも扁平な円礫を立てかける。周囲に竈の構築材だったと思われる円礫や土が分布している。　**貯蔵穴**　南東コーナーに設置。規模は110×64cmで、掘り方底面に土(2・3層)を貼って使用。　**柱穴**　北西コーナー付近に29×22×24cmのピットを1基検出したが、柱穴となるかは不明。　**遺物**　須恵器杯・鉢、刀子が出土した。　**掘り方**　床面から10～25cm下で掘り方面となる。床下土坑3基とピット3基を検出した。規模は1号土坑　120×109×30cm　2号土坑　111×106×40cm　3号土坑　132×91×34cm　P2　46×22×24cm　P3　68×62×32cm　P4　18×18×36cmである。　**所見**　出土遺物から8世紀後半と考えられる。

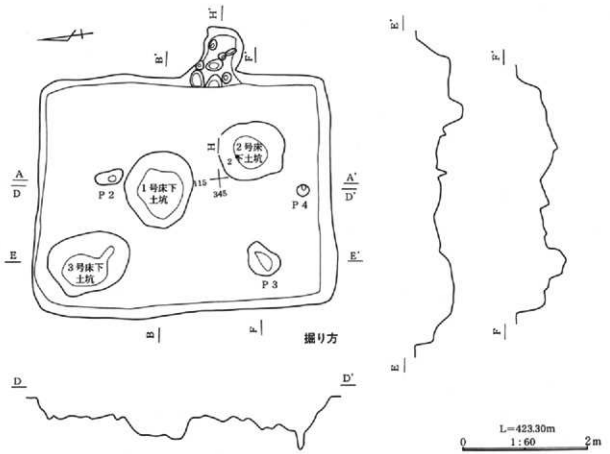


20号住居貯蔵穴

1．褐色土。ロームブロックをやや多量含む。
2．黒褐色土。しまりが強い。白色粘土粒を少量含む。
3．黒褐色土。しまりが強い。ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む。

20号住居

1．オリーブ黒色土。FP をやや多量含む。
2．オリーブ黒色土。ロームブロック・FP・焼土粒を少量含む。
3．オリーブ黒色土。しまりが強い。FP・焼土粒を少量含む。貼床。
4．オリーブ黒色土。ロームブロックをやや多量含む。
5．オリーブ黒色土とロームブロックの混土。



竈使用面

竈掘り方

G' 20号住居竈
1．黒褐色土。FP を微量含む。
2．ロームブロック。
3．黒褐色土。FP・焼土粒を微量含む。
4．鈍い黄褐色土。袖部。
5．鈍い赤褐色土。焼土粒・灰をやや多量含む。
6．黒褐色土。ロームブロックを多量含む。
7．暗褐色土。しまりがやや弱い。焼土粒を微量含む。

L=423.20m
0　1：30　1m

0　1：3　10cm　　0　1：2　5cm

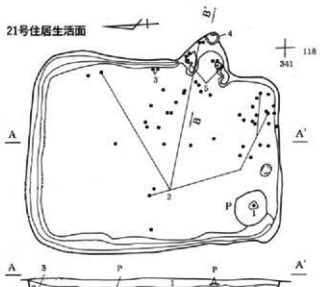
20号住居出土遺物

20号住居遺物観察表

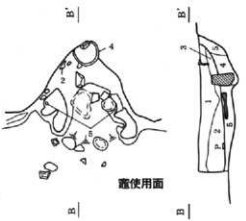
番号	種類器種	出土レベル	法量	①釉土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態備考
1	須恵器 杯	堆積土	口径 — 底径 — 器高 —	①細砂、粗砂、緻密 ②良好 ③外面 明赤褐5YR5/6 内面 黒N2/1	外面 轆轤整形後丁寧な篦磨き、墨書有るが判読不能。 内面 轆轤整形後丁寧な篦磨き、全面吸炭。	破片。墨書。黒色土器。
2	須恵器 杯	2号床下土坑—33	口径 — 底径 6.5 器高 1.2+	①細砂、粗砂 ②遠元焔 ③浅黄2.5Y7/4	外面 右回転糸切り後中央部を残して回転篦削り。 内面 回転撫で。	底部残。
3	須恵器 片口鉢	+22	口径 18.5 底径 — 器高 12.8+	①粗砂 ②遠元焔 ③鈍い黄橙10YR5/3	外面 体部轆轤整形、片口部摘み出す。 内面 轆轤整形。	口縁部～体部1/2残。体部縁下位に擦り痕有り。
4	鉄製品 刀子	竈＋6	長さ 7.0+　幅 1.1(刀身) 0.8 (茎) 厚さ 0.2(刀身) 0.3(茎) 重量 8.8		両区をもつ。刀身断面三角形。	切先・茎尻欠。分析。

21号住居(PL.25・26・66)

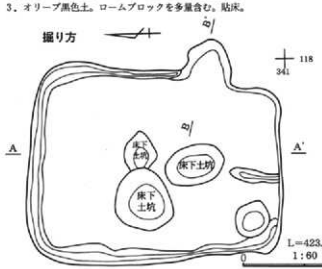
位置 340・345—115・120 **重複** なし。 **形状** 隅丸台形。 **規模** 4.08×3.20m **面積** 12.3㎡ **方位** 4° **床面** 確認面より20cm下で床面となる。厚さ2～20cmの貼床を施し、全体に平坦だが南壁付近に凹凸が目立つ。 **壁溝** 南壁と東壁の竈南側を除いて幅10～30cm、深さ約5cmで巡る。 **竈** 楕円状の掘り方を設け、埋め戻して形状を整える。袖は左25cm、右21cm残存していた。燃焼部は長さ46cm、幅31cmで壁外に位置し、底面のやや下に扁平な円礫を敷き、その奥を深く掘り込んで角柱状の支脚石を据える。煙道は約60°で立ち上がり、東側壁面に礫を貼って上部に礫と羽釜の口縁部を据える。 **貯蔵穴** 南西コーナーに60×50×20cmのピットを検出したが、貯蔵穴かは不明である。 **柱穴** 確認できなかった。 **遺物** 竈とその周囲に分布が集中する。須恵器杯・椀・羽釜、鉄製品が出土した。 **掘り方** 床面から10cm前後で掘り方面となる。中央付近に床下土坑を3基と南壁から北にのびる溝状の掘り込みを検出したが、規模・埋め土等は記録しなかった。 **所見** 出土遺物から10世紀前半と考えられる。

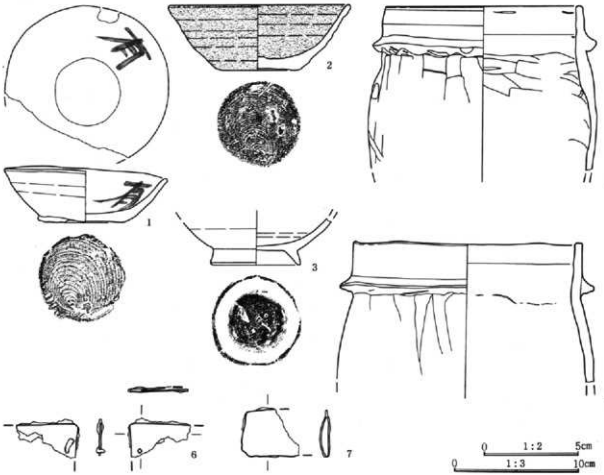


21号住居
1．オリーブ黒色土。しまりがやや弱い。ロームブロック・FPを少量含む。
2．オリーブ黒色土。ロームブロック・FPを少量含む。
3．オリーブ黒色土。ロームブロックを多量含む。貼床。



21号住居竈
1．オリーブ黒色土。FPを少量、ロームブロック・焼土粒を微量含む。
2．オリーブ黒色土。
3．極暗赤褐色土。しまりがやや弱い。
4．灰褐色土。しまりが弱い。
5．黒褐色土。しまりが強い。





21号住居出土遺物

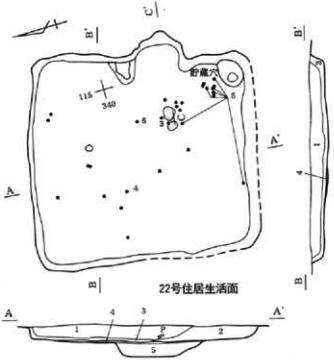
21号住居遺物観察表

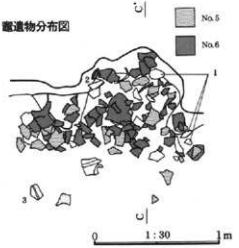
番号	種別器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 杯	ピット内 －6	口径 13.0 底径 6.5 器高 4.4	①粗砂、細礫、石英 ②還元焔 ③純い黄2.5Y6/3	外面　体部輪轆整形、底部雑な右回転糸切り未調整。 内面　輪轆整形、なだらかに立ち上がる。墨書「有」。	体部1/4欠。墨書。
2	須恵器 杯	＋3～22	口径(14.4) 底径 6.8 器高 5.1	①粗砂、細礫、石英 ②還元焔 ③黒10Y2/1	全面に煤し状の吸炭。 外面　体部輪轆整形、底部右回転糸切り未調整。 内面　輪轆整形。	体部1/2欠。
3	須恵器 椀	床面直上	口径 － 底径 7.0 器高 3.4+	①細砂 ②還元焔気味 ③純い黄橙10YR6/3	外面　輪轆整形、底部右回転糸切り、高台は細く外に開き、内縁は貼り付け時の回転撫で。 内面　輪轆整形。	体部下位1/2、底部残。
4	須恵器 羽釜	埋没土	口径 15.5 底径 － 器高 12.7+	①細砂、粗砂 ②還元焔 ③浅黄2.5Y8/3	鍔付近を境に口縁部が立ち上がる。 外面　口縁部横撫で、鍔小さく端部丸い、鍔下端の撫でが雑で削りの当たりが顕著。胴部上方向箆削り。 内面　口縁部回転撫で。胴部左上方向撫で。	口縁部～胴部上位残。
5	須恵器 羽釜	覆＋5～12	口径(18.0) 底径 － 器高 10.9+	①粗砂、石英 ②還元焔 ③純い橙7.5YR7/4	鍔付近を境に口縁部が立ち上がる。 外面　口縁部回転撫で、胴部上方向箆削り。 内面　口縁部回転撫で、胴部撫で。	口縁部～胴部上位1/4残。
6	鉄製品	埋没土	長さ 3.2+　幅 1.8+　厚さ 0.1 重量 1.8		方形状の板。鏽化が顕著で中空となる。	一部残。
7	鉄製品	埋没土	長さ 3.1+　幅 2.4　厚さ 0.2 重量 2.6		方形状の板。鏽化が顕著で中空となる。	一部残。

22号住居(PL.26・66・67)

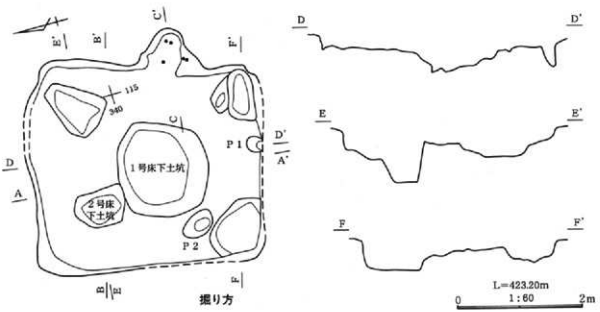
位置　335・340―110・115　**重複**　なし。　**形状**　隅丸台形。南壁が他より短い。　**規模**　3.60×3.42 m　**面積**　11.3㎡　**方位**　16°　**床面**　確認面より20cm下で床面となる。床下土坑を中心に約2cmの貼床を施す。そのほかは地山のロームを平に掘り込んでそのまま床面とし、全体に平坦である。　**壁溝**　なし。　**竈**　東壁やや南寄りに設置。長軸が南に振

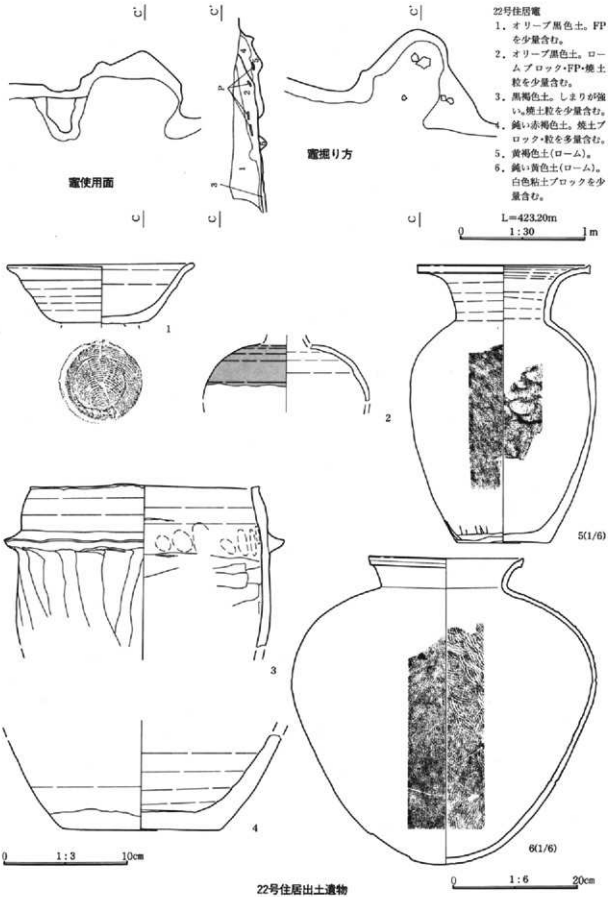
れる長方形状の掘り方を設け、ロームで形状を整える。袖は左で40cm残存していたが、右はおおよその位置が分かる程度であった。燃焼部は長さ40cm、幅45cmで壁外に位置する。 **貯蔵穴** 南東コーナーに設置。規模は48×35×19cmである。 **柱穴** 確認できなかった。 **遺物** 須恵器椀・甕・羽釜、灰釉陶器瓶が出土した。竈に分布が集中するが、須恵器甕などは竈廃棄時に持ち込まれたと推測する。 **掘り方** 床下土坑を2基、ピットを2基検出した。規模は1号土坑 164×156×34cm 2号土坑 84×56×64cm P1 28×25×31cm P2 54×34×11cmである。ほかに北東と南西コーナー付近を10～20cmほど掘り窪める。 **所見** 出土遺物から9世紀中葉と考えられる。





22号住居
1．オリーブ黒色土。FPを少量含む。
2．灰黄褐色土。ロームブロックを少量、FPを微量含む。
3．オリーブ黒色土。FPを微量含む。
4．黒褐色土。ロームブロックを少量含む。貼床。
5．褐色土。黒色土ブロック・粒を少量含む。




竈使用面
竈掘り方
22号住居竈
1. オリーブ黒色土。FPを少量含む。
2. オリーブ黒色土。ロームブロック・FP・焼土粒を少量含む。
3. 黒褐色土。しまりが強い。焼土粒を少量含む。
4. 鈍い赤褐色土。焼土ブロック・粒を多量含む。
5. 黄褐色土(ローム)。
6. 鈍い黄色土(ローム)。白色粘土ブロックを少量含む。
L=423.20m
0　1:30　1m
1
2
3
4
5(1/6)
6(1/6)
0　1:3　10cm
0　1:6　20cm

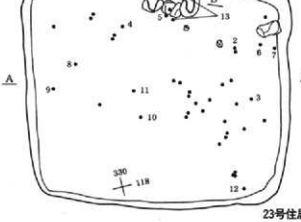
22号住居出土遺物

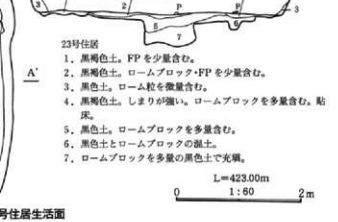
22号住居遺物観察表

番号	種類器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 椀	電使用面 直上～＋1	口径(14.8) 底径 — 器高 4.6+	①粗砂、細礫、石英 ②酸化焔気味 ③鈍い黄褐10YR5/4	口縁部外反。外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り、高台両縁貼り付け時の回転撫で。内面 轆轤整形、なだらかに立ち上がる。	体部1/2、高台欠。
2	灰釉陶器 瓶	電＋3	口径 — 底径 — 器高 4.9+	① ② ③浅黄2.5Y7/3	体部外面上位施釉。束濃。	体部上半1/2残。
3	須恵器 羽釜	＋19～24	口径 18.0 底径 — 器高 12.5+	①細砂、粗砂、石英 ②還元焔気味 ③浅黄2.5Y7/4	全体に内彎して立ち上がる。外面 口縁部回転撫で、鍔端部面取、鍔下端に削りの当たりが顕著、胴部上方向篦削り。内面 鍔裏に指頭圧痕後口縁部回転撫で、胴部篦撫で。細作り痕有り。	口縁部～胴部上位1/2残。
4	須恵器 甕	＋11	口径 — 底径 12.4 器高 7.4+	①細砂、粗砂、細礫 ②酸化焔気味 ③外面 灰白5Y8/2 内面 橙7.5YR7/6	外面 胴部轆轤整形・最下位横方向篦削り、底部撫で。内面 胴部轆轤整形、底部撫で。	胴部下位～底部残。
5	須恵器 甕	電使用面 直上～＋21	口径(26.8) 底径(14.0) 器高 43.8	①細砂、粗砂、細礫 ②還元焔、堅緻 ③灰 N5/1	口縁部に垂直な面をもち、口唇部を摘み上げる。外面 口縁部～胴部轆轤整形、胴部平行叩き後撫で・胴部最下位篦削り後、底部撫で。内面 口縁部～胴部轆轤整形、胴部撫で。	口縁部～胴部・底部縁辺1/4、胴部1/2残。
6	須恵器 甕	電使用面 直上～＋10	口径 24.3 底径 — 器高 48.7	①粗砂、細礫 ②還元焔、堅緻 ③オリーブ黒10Y3/1	口縁端部に2段の面をもつ。鍔部より上に自然釉が濃く付着。外面 口縁部轆轤整形、胴部下位を除き斜格子叩き。内面 口縁部轆轤整形、胴部下位を除き同心円状の当て具痕。	口縁部～体部下位1/2残。

23号住居(PL.27・67)

位置 325・330－110・115 **重複** なし。 **形状** 隅丸長方形。 **規模** 4.24×3.60m **面積** 14.0㎡ **方位** 20° **床面** 確認面から45cm下で床面となる。2～6cmの貼床を施し、全体に平坦である。 **壁溝** なし。 **竈** 東壁中央に設置。半円状の掘り方を設け、黒褐色土で形状を整える。袖は芯とした礫を黄褐色土で包む構造で、左45cm、右55cm残存していた。燃焼部は長さ50cm、幅40cmで壁内に位置する。内壁が部分的に焼土化していた。燃焼部状の礫は内壁や天井を補強していたものと思われる。 **貯蔵穴** 確認できなかった。 **柱穴** 確認できなかった。 **遺物** 土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・椀・蓋が出土した。 **掘り方** 床面から2～20cm下で床面となる。2基の床下土坑と1基のピットを検出した。床下土坑は中央付近と南東コーナー付近に位置し、規模は1号土坑 92×87×42cm 2号土坑 72×58×32cmで、1号は断面フラスコ状を呈する。ピットは中央南寄りに位置し、26×24×15cmである。そのほか深さ20cmほど円形に掘り込み、1号土坑の周囲を幅約24cm、深さ約7cmの溝が巡る。 **所見** 出土遺物から8世紀後半と考えられる。

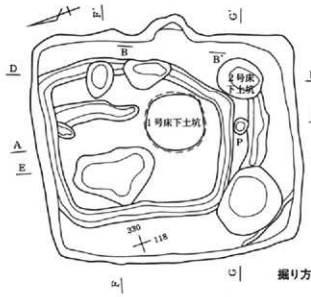




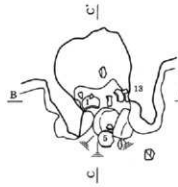
23号住居

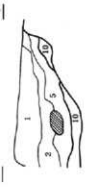
1. 黒褐色土。FPを少量含む。
2. 黒褐色土。ロームブロック・FPを少量含む。
3. 黒色土。ローム粒を微量含む。
4. 黒褐色土。しまりが強い。ロームブロックを多量含む。貼床。
5. 黒色土。ロームブロックを多量含む。
6. 黒色土とロームブロックの混土。
7. ロームブロックを多量の黒色土で充填。

23号住居生活面

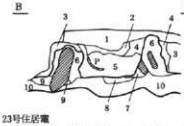


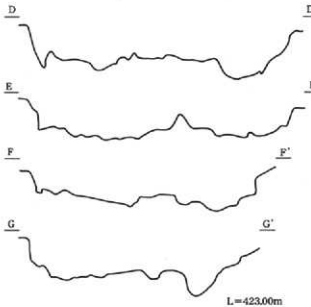
掘り方





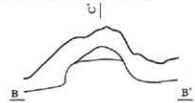
竈使用面



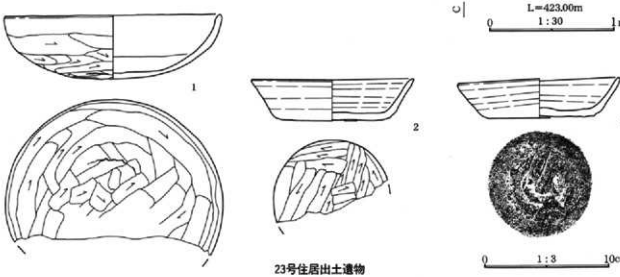


23号住居竈

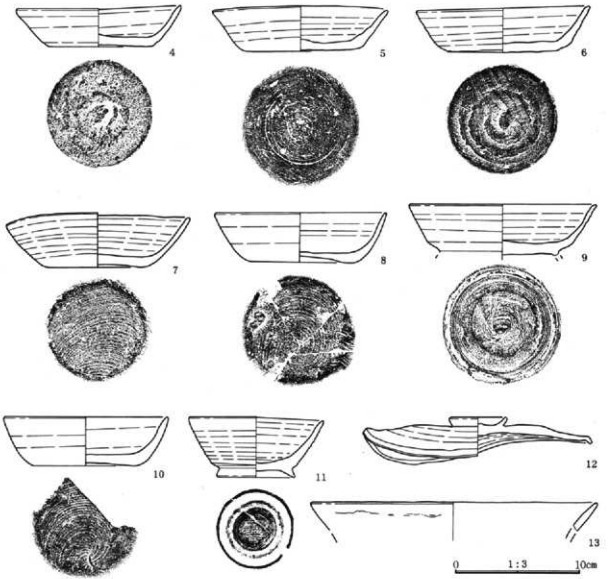
1．黒褐色土。FPを少量、ロームブロックを微量含む。
2．黄灰色土。ロームブロックを多量、焼土粒・灰をやや多量含む。
3．黒褐色土。FPを少量含む。
4．暗灰黄色土。やや結質。竈材の崩落。
5．黒褐色土。焼土粒を少量含む。
6．赤褐色土。竈材が焼土化。
7．暗赤褐色土。灰・焼土の混土層。
8．黄褐色土。ローム粒・灰・焼土をやや多量含む。
9．黒褐色土。ローム粒を少量含む。
10．黒褐色土。ロームブロックを多量含む。



竈掘り方



23号住居出土遺物



23号住居出土遺物

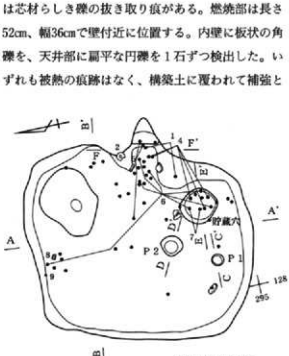
23号住居遺物観察表

番号	器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	土師器 杯	竈＋9	口径 17.0 底径 ― 器高 5.0	①細砂 ②普通 ③純い赤褐5YR5/4	外面 口縁部横撫で、以下箆削り。 内面 口縁部～体部横撫で、底部撫で。	3/8欠。
2	須恵器 杯	＋17	口径 12.8 底径 9.2 器高 3.2	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰7.5Y5/1	外面 体部右回転轆轤整形、底部手持ち箆削り。 内面 右回転轆轤整形。	1/2残。
3	須恵器 杯	＋7	口径 12.8 底径 8.4 器高 3.0	①細砂、粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰7.5Y5/1	外面 体部轆轤整形、底部左回転箆切り後雑な手持ち箆削り。 内面 轆轤整形。	ほぼ完形。
4	須恵器 杯	＋4	口径 13.0 底径 8.5 器高 3.0	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰10Y6/1	外面 体部轆轤整形、底部左回転箆切り後周辺撫で。 内面 轆轤整形。	体部一部欠。
5	須恵器 杯	竈＋24	口径 13.6 底径 9.3 器高 3.6	①細砂、粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰5Y6/1	外面 体部轆轤整形、底部右回転箆削り。 内面 轆轤整形。	体部1/2欠。
6	須恵器 杯	＋2	口径 13.6 底径 8.9 器高 3.5	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰白5Y8/2	外面 体部轆轤整形。底部右回転箆切り後不定方向に雑な手持ち箆削り。 内面 轆轤整形。	ほぼ完形。

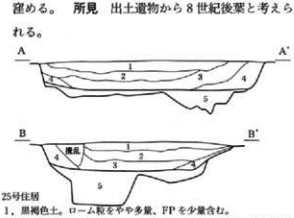
7	須恵器 杯	＋5	口径 14.5 底径 7.7 器高 4.2	①細砂、粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰白5Y8/1	口縁部が歪んでやや楕円状。 外面　体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	体部1/4欠。
8	須恵器 杯	＋5	口径 13.7 底径 8.6 器高 4.0	①細砂 ②還元焔 ③灰白7.5Y8/1	外面　体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	体部1/2欠。
9	須恵器 高台付杯	＋35	口径 14.7 底径 — 器高 4.0+	①粗砂、細礫 ②還元焔堅緻 ③5G5Y6/1	外面　体部轆轤整形、底部左回転糸切り後中央部を残して左回転箆削り、カキヤブリ後高台貼り付け。 内面　轆轤整形。	体部1/2、高台欠。
10	須恵器 杯	＋1	口径(13.0) 底径 (8.4) 器高 3.8	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰白5Y7/1	外面　体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	1/2残。
11	須恵器 椀	＋1	口径 10.7 底径 6.2 器高 4.8	①細砂、粗砂 ②還元焔 ③灰白5Y7/1	小型。外面の轆轤目顕著。高台内側が大きく開く。 外面　口縁部回転撫で、体部右回転轆轤整形、底部回転糸切り、高台周縁貼り付け時の右回転撫で。 内面　右回転轆轤整形。	ほぼ完形。
12	須恵器 蓋	＋30	摘み径4.6 口径 18.0 器高 3.2	①細砂、粗砂、細礫 ②還元焔 ③N7.5Y4/1	環状摘み。外面に自然釉が濃く付着。焼成時の歪みが顕著。外面　右回転轆轤整形、摘み外縁付近右回転箆削り。内面　右回転轆轤整形。	一部欠。
13	土師器 甕	竈＋12～16	口径(22.4) 底径 — 器高 2.2+	①粗砂 ②普通 ③明赤褐2.5YR5/6	口縁「く」の字状。 外面　横撫で。 内面　横撫で。	口縁部1/4残。

25号住居(PL.28・68)

位置　290・295—125　**重複**　なし。**形状**　隅丸方形。各壁が膨らむ。　**規模**　3.50×2.98m　**面積**　8.7m²　**方位**　17°　**床面**　確認面から71cm下で床面となる。貼床を施さずに、掘り方を単一土で埋め戻して床面とする。全体に平坦だが、壁付近がなだらかにやや高くなり、北東コーナーは10cmほど窪む。**壁溝**　なし。　**竈**　東壁やや南寄りに設置。楕円状で壁外が1段高い掘り方を設け、暗褐色土で形状を整える。袖は左25cm、右40cm残存しており、右袖には芯材らしき礫の抜き取り痕がある。燃焼部は長さ52cm、幅36cmで壁付近に位置する。内壁に板状の角礫を、天井部に扁平な円礫を1石ずつ検出した。いずれも被熱の痕跡はなく、構築土に覆われて補強として用いられたと思われる。　**貯蔵穴**　南東コーナー付近に設置。規模は60×54×37cmで、上層には竈から流れ込んだ灰や焼土を含む。出土遺物はすべて埋没土中である。　**柱穴**　ピットを2基検出した。規模はP1　17×19×20cm　P2　36×31×16cmで、柱穴となるかは不明である。　**遺物**　竈と貯蔵穴に分布が集中する。土師器杯・甕・台付甕、須恵器蓋、砥石、刀子などが出土した。　**掘り方**　床面から5～20cm下で掘り方面となる。北東コーナーから北西コーナー及び南壁沿いをテラス状に掘り残し、北西コーナーに170×140×50cmの床下土坑を設ける。南半には貯蔵穴の掘り方の他に西側を20cmほど掘り窪める。　**所見**　出土遺物から8世紀後葉と考えられる。



25号住居生活面

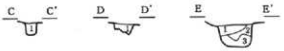


25号住居

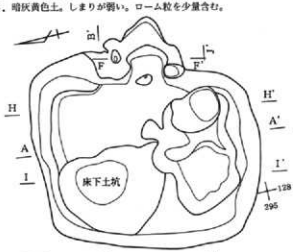
1. 黒褐色土。ローム粒をやや多量、FPを少量含む。
2. 黒褐色土。しまりが弱い。ロームブロックをやや多量、FPを少量含む。
3. 黒褐色土。しまりが弱い。ロームブロック・FPを少量含む。
4. 暗褐色土。ローム粒を多く、FPを微量含む。
5. 黒褐色土。ロームブロックを多量含む。

L=422.20m

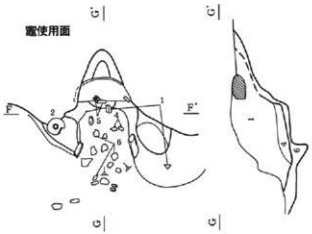
0　1:60　2m

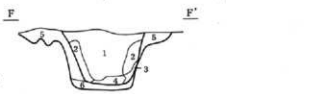


25号住居ピット
1．黒褐色土。ロームブロック・粒をやや多量含む。
25号住居貯蔵穴
1．黄灰色土。灰・焼土粒を少量含む。
2．暗灰黄色土。灰・焼土粒を少量含む。
3．暗灰黄色土。しまりが弱い。ローム粒を少量含む。



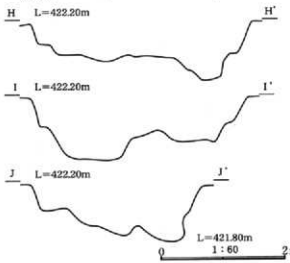
竈使用面



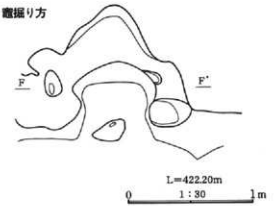


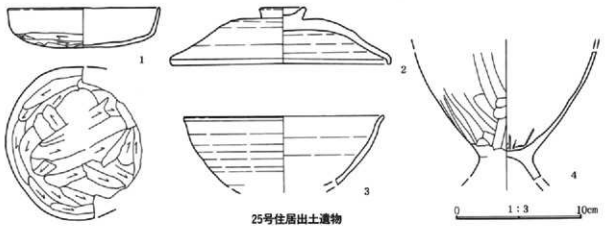
25号住居竈
1．黒褐色土。ロームブロック・焼土粒を微量含む。
2．暗褐色土。ロームブロック・粒をやや多量、焼土粒を微量含む。
3．黄褐色土。竈材の崩落。
4．暗褐色土。焼土粒をやや多量、炭化物を少量含む。
5．暗褐色土。焼土粒を多量、炭化物を少量含む。
6．暗褐色土。焼土粒・灰・炭化物を少量含む。

掘り方

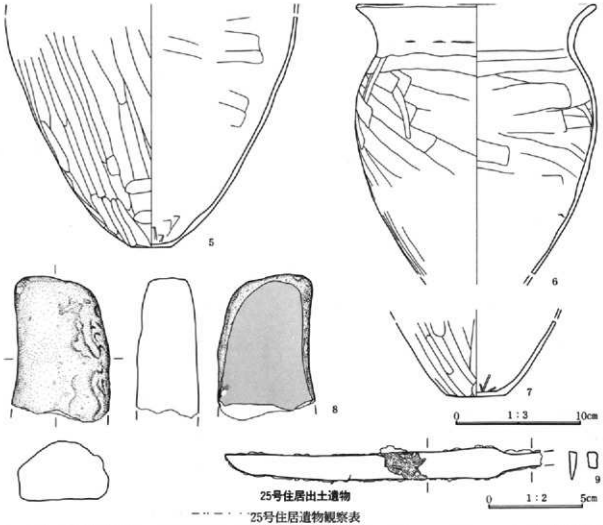


竈掘り方





25号住居出土遺物



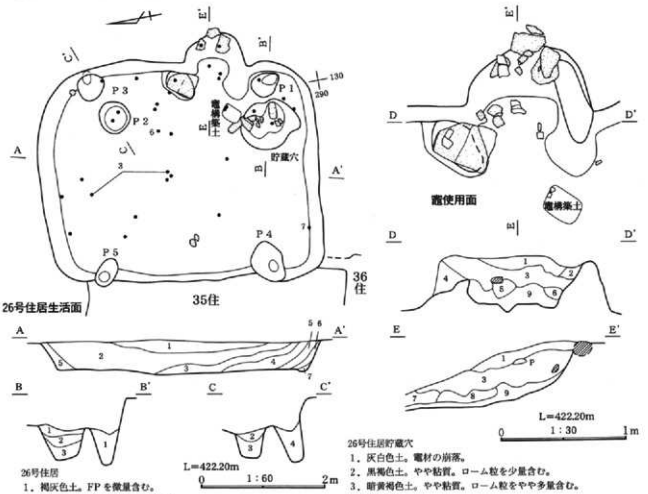
25号住居出土遺物

25号住居遺物観察表

番号	種類器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	土師器 杯	竈+31	口径 12.0 底径 — 器高 3.1	①細砂、粗砂 ②普通 ③褐7.5YR4/4	わずかに丸底。 外面　口縁部横撫で、底部篦削り。 内面　口縁部左方向横撫で、底部撫で。	口縁部1/2欠。
2	須恵器 蓋	竈堆積土	摘み径3.6 口径 17.2 器高 4.4	①粗砂、細礫、中礫 ②還元焔 ③灰 N6/1	摘みは小さく器高がある。器内が全体に厚い。外面　右回転櫛目成形、回転糸切り後中央部を残して径約1/2以内を縦な右回転篦削り、摘み外縁に貼り付け時の回転撫で・糸切り痕を残す。内面　右回転櫛目整形。	ほぼ完形。内面中央に径9.5の重ね焼き痕。
3	須恵器 椀？	堆積土	口径(16.0) 底径 — 器高 5.5+	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰 N5/1	膨らみながら立ち上がり、口縁端部で外反する。 外面　櫛目整形。 内面　櫛目整形。	体部1/4残。
4	土師器 台付甕	竈+6～10貯蔵穴—11～32	口径 — 底径 — 器高 10.0+	①細砂、粗砂 ②普通 ③褐7.5YR4/4	台部の器内が厚い。 外面　胴部下方向篦削り後胴部最下位以下横撫で。 内面　篦撫で。	胴部下位1/4、台部上半残。
5	土師器 甕	+13 竈堆積土	口径 — 底径 3.2 器高 18.0+	①細砂、粗砂 ②普通 ③橙7.5YR6/6	外面　縦方向篦削り。 内面　横方向篦撫で。	胴部下半～底部1/4残。
6	土師器 甕	+7～25 貯蔵穴—19～32	口径(19.0) 底径 — 器高 21.0+	①細砂、粗砂 ②普通 ③鈍い赤褐5Y5/4	胴部上位に最大径をもち、頸部が緩やかに屈曲。 外面　口縁部横撫で、胴部最上位左方向・胴部上半左上方向篦削り。内面　口縁部横撫で、胴部横方向篦撫で。	口縁部～胴部上位1/4残。
7	土師器 甕	貯蔵穴—19～21	口径 — 底径 (4.4) 器高 5.8+	①細砂、粗砂 ②普通 ③鈍い赤褐4/4	外面　縦方向篦削り。 内面　篦撫で。	胴部下位～底部1/4残。
8	石製品 砥石	+12	長さ 11.5+　幅 7.7　厚さ 4.6 重量 658　石材 粗粒輝石安山岩		細長い自然礫の平な面を使用。	一部欠。
9	鉄製品 刀子	+18	長さ 16.8+　幅 1.6(刀身)　0.8(茎)　厚さ 0.4(刀身)　0.5(茎) 重量 31.6		両区をもつ。刀身断面三角形。鞘と思われる木質が一部依存するが、木目方向は不定である。	茎尻欠。 分析。

26号住居(PL.28・29・68)

位置 290—125・130 **重複** 26号住居→35号住居、36号住居とも重複する可能性がある。 **規模** 長軸4.46m、短軸3.22m以上 **面積** 12.2m²(推定) **方位** 6° **床面** 確認面から59cmで床面となる。地山のロームを平に掘削してそのまま床面とし、全体に平坦である。 **壁溝** なし。 **竈** 東壁南寄りに設置。楕円状の掘り方に土を貼って形状を整える。袖はロームを主体に構築し、左45cm、右52cm残存。燃焼部は長さ幅とも約65cmで壁内に位置する。燃焼部奥と立ち上がり面及び左袖上面から出土した礫は、構築材に用いたと推定。また右袖手前床面に構築土が、貯蔵穴埋没土上面に構築材と思われる礫が分布。 **貯蔵穴** 南東コーナーに設置。規模は95×72×54cm。 **柱穴** ピットを5基検出。P1・2・4・5が主柱穴と思われ、壁沿い又は壁を断ち切る位置にある。規模はP1 46×36×60cm P2 50×48×50cm P3 41×42×56cm P4 67×50×77cm P5 46×29×79cm。3号ピットは軸が西に振れる。 **遺物** 須恵器杯・高盤、石製紡錘車が出土。 **掘り方** 床下土坑等は設けていない。 **所見** 出土遺物から9世紀前半と考えられる。



26号住居

1．褐灰色土。FPを微量含む。
2．褐灰色土。やや粘質。ロームブロックを少量含む。
3．純い黄褐色土。ロームブロックを多量に含む。
4．黒色土。やや粘質。
5．黒色土。ロームブロックを少量含む。
6．黒褐色土。ローム粒をやや多量含む。
7．純い黄褐色土(ローム)。

26号住居ピット

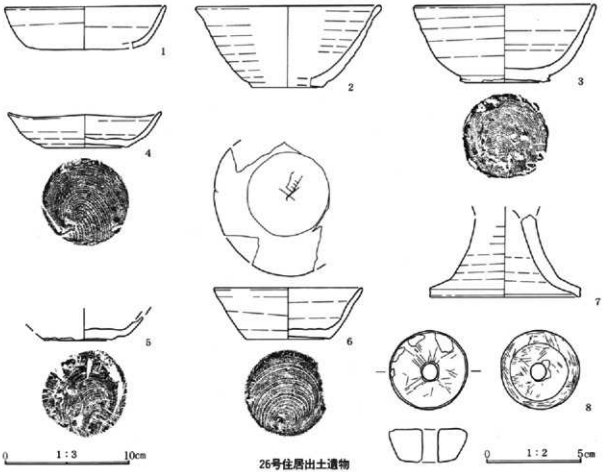
1．暗黄褐色土。ロームブロックを少量含む。
2．暗黄褐色土。ロームブロックを多量含む。
3．暗黄褐色土。ロームブロックを間層に挟む。
4．暗褐色土。しまりが弱い。ローム粒をわずかに含む。

26号住居貯蔵穴

1．灰白色土。竈材の崩落。
2．黒褐色土。やや粘質。ローム粒を少量含む。
3．暗黄褐色土。やや粘質。ローム粒をやや多量含む。

26号住居竈

1．黒褐色土。ローム粒・FPを少量含む。
2．灰黄褐色土。ロームブロックを少量含む。
3．黒褐色土。やや粘質。ロームブロック・FP・焼土粒を少量含む。
4．暗オリーブ褐色土。ローム粒を少量含む。
5．暗オリーブ褐色土。白色粘土ブロックを多量含む。
6．暗灰黄色土。焼土粒を少量含む。
7．黒褐色土。ローム粒・焼土粒を微量含む。
8．黄褐色土。しまりが強い。竈材の崩落。
9．暗褐色土。ロームブロック・焼土粒・灰をやや多量含む。



26号住居出土遺物

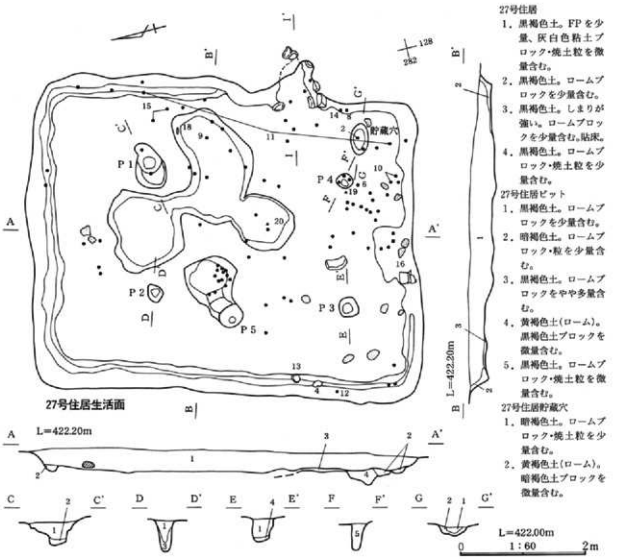
26号住居遺物観察表

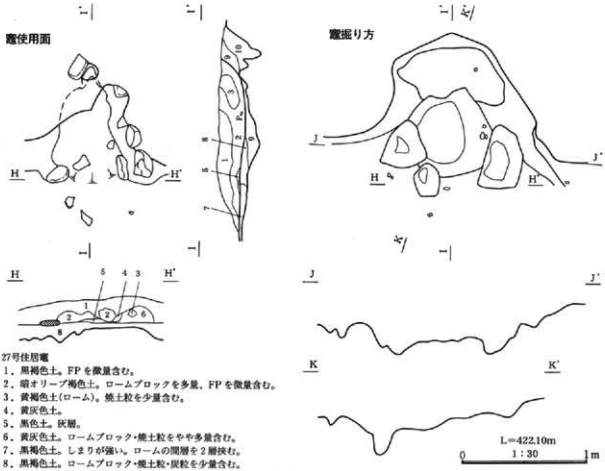
番号	種別器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 杯	埋設土	口径(12.8) 底径(9.2) 器高 3.4	①細砂、粗砂 ②還元焔 ③IR N6/0	外面　轆轤整形。 内面　轆轤整形。	体部1/4。
2	須恵器 杯	埋設土	口径(14.7) 底径(5.7) 器高 6.4	①細砂、粗砂 ②還元焔 ③純い黄橙10YR6/4	轆轤目顕著。外面　体部轆轤整形、底部は摩滅して回転方向不明。轆轤目からむ回転か。 内面　轆轤整形。	1/4残。
3	須恵器 杯	+32～36	口径 14.4 底径 7.1 器高 6.1	①細礫、中礫 ②還元焔 ③IR白5Y8/1	外面　体部轆轤整形、底部厚く残して右回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	体部1/2欠。
4	須恵器 杯	埋設土	口径(12.2) 底径 6.6 器高 2.8	①細砂、粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰黄2.5Y6/2	体部は丸みをもって立ち上がり、器高が低い。 外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	体部1/4,底部残。
5	須恵器 杯	埋設土	口径　— 底径 5.4 器高 1.8+	①細砂、粗砂 ②還元焔 ③IR5Y6/1	外面　体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	体部最下位～底部残。
6	須恵器 杯	+37	口径(11.8) 底径 6.2 器高 4.0	①細砂、粗砂 ②還元焔 ③IR白5Y7/2	外面　体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形、底部中央付近に焼成後の刻書「有」。	体部1/4,底部残。
7	須恵器 高盤 ?	+27	口径　— 底径(12.1) 器高 6.4+	①粗砂 ②還元焔 ③IR5Y6/1	外面　右回転轆轤整形。 内面　右回転轆轤整形。	脚部1/4残。
8	石製品 紡錘車	埋設土	上径 4.1 下径 3.1 孔径 0.8 厚さ 1.8 重量 49.1 石材 絹紋岩		上面に放射状・側面に横方向の擦過痕。	一部欠。

27号住居(PL.29・30・69)

位置　280・285—125・130　**重複**　なし。**形状**　隅丸長方形。　**規模**　6.21×4.98m　**面積**　29.1m²　**方位**　18°　**床面**　確認面から31cm下で床面となる。厚さ約4cmの貼床を部分的に検出。住居中央が2～10cm窪むが、この範囲は床下土坑に一致する。貼

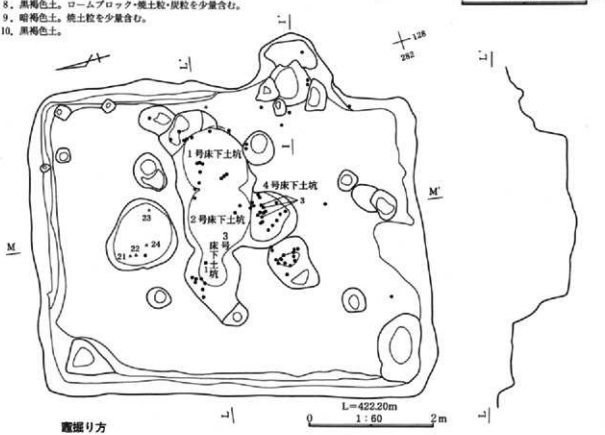
床は認められず、埋め戻しが甘いために踏み込まれて陥没したと推測。南壁中央が周囲の壁と比べてなだらかな斜面となっており、入り口施設に関する構造が考えられる。37号住居に同様の構造が認められる。 **壁溝** 東壁竈北側から南西コーナーまで幅10～30cm、深さ5～10cmで巡る。 **竈** 東壁南寄りに設置。楕円状で燃焼部が10cmほど低い掘り方を設け、埋め戻して形状を整える。袖は左30cm、右15cm残存していた。燃焼部は長さ65cm、幅45cmで壁外に位置する。煙道は45°で立ち上がり、確認面で径14cmのピットとして検出。掘り方面に礫の抜き取り痕が3ヶ所認められ、周囲に分布する礫は構築材として補強用に使用されたと思われる。 **貯蔵穴** 50×29×19cmの規模で南東コーナーに設置。 **柱穴** 5基を検出。全体に南寄りで、5号ピットは2・3号ピットラインの外側に位置する。規模はP1 78×49×36cm P2 31×22×48cm P3 35×33×34cm P4 28×23×41cm P5 38×32×36cm。 **遺物** 床面中央の窪みに多く分布する。土師器小型甕、須恵器杯・椀・羽釜、灰釉陶器長頸瓶、土錘、砥石、鉄製釘、鉄椀状滓などが出土。また、掘り方埋土からイネ・コムギ・ヒエ・アワの炭化胚乳、モモ炭化核、マメ科炭化種子などを検出。 **掘り方** 中央に4基連なった床下土坑を検出。規模は1号 126×120×64cm 2号 径108cm×深さ96cm 3号 径92cm×深さ85cm 4号 径92cm×深さ49cm。 **所見** 出土遺物から10世紀前半と考えられる。 **備考** A・Bラインは床面までのセクションである。



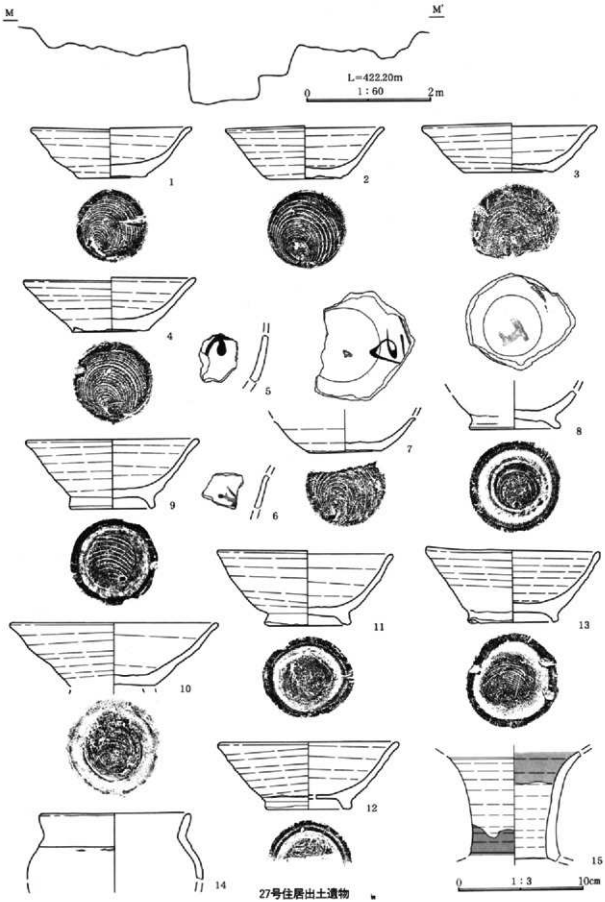


27号住居竈

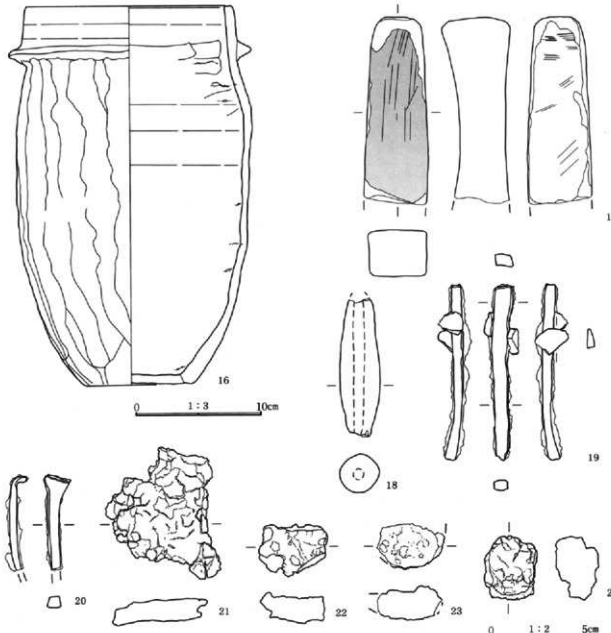
1．黒褐色土。FP を微量含む。
2．暗オリーブ褐色土。ロームブロックを多量、FP を微量含む。
3．黄褐色土(ローム)。焼土粒を少量含む。
4．黄灰色土。
5．黒色土。灰層。
6．黄灰色土。ロームブロック・焼土粒をやや多量含む。
7．黒褐色土。しまりが強い。ロームの間層を2層挟む。
8．黒褐色土。ロームブロック・焼土粒・炭粒を少量含む。
9．暗褐色土。焼土粒を少量含む。
10．黒褐色土。



竈掘り方



27号住居出土遺物



27号住居出土遺物

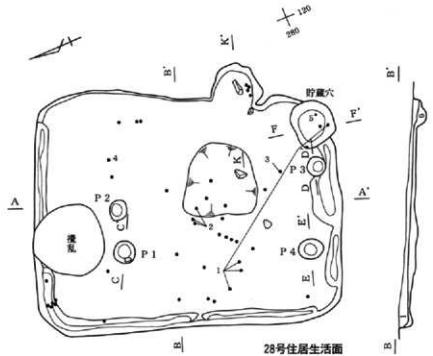
27号住居遺物観察表

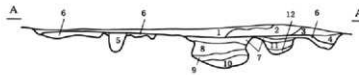
番号	種類 器種	出土 レベル	法量	①触土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 杯	3号床下 土坑−38	口径 12.6 底径 5.2 器高 4.1	①粗砂、白色鉱物、石英 ②還元焔 ③灰白5Y8/1	底部の器肉厚く、内面はなだらかに立ち上がり、口縁部が外反する。外面　体部轆轤整形。底部右回転糸切り未調整。内面　轆轤整形。	体部1/2欠。
2	須恵器 杯	＋3	口径 12.5 底径 5.5 器高 4.2	①細砂、粗砂、石英 ②還元焔 ③純い黄橙10YR6/3	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	体部1/2欠。
3	須恵器 杯	4号床下 土坑−61 〜63	口径 13.6 底径 7.1 器高 3.8	①粗砂、細礫、石英 ②還元焔 ③灰白10YR8/1	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	体部1/2欠。
4	須恵器 杯	＋9	口径 13.7 底径 5.9 器高 4.3	①細砂、粗砂、白色鉱物、石英　②還元焔 ③黄灰2.5Y4/1	底部の器肉厚く、内面はなだらかに立ち上がる。 外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	体部一部欠。
5	須恵器 杯　？	埋没土	口径 — 底径 — 器高 —	①粗砂、石英 ②還元焔気味 ③灰黄2.5Y7/2	外面に墨書、「寺」か。 外面　轆轤成形。 内面　轆轤成形。	体部破片。墨書。

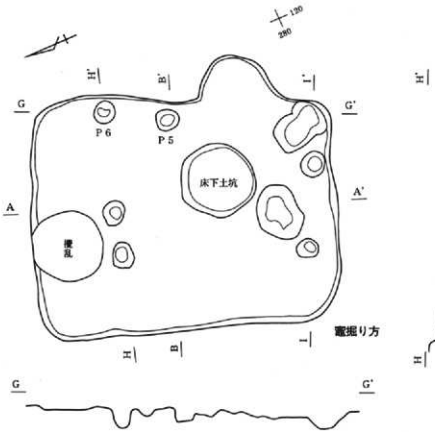
6	須恵器 杯	＋4	口径　— 底径　— 器高　—	①細砂、粗砂、石英 ②還元焔 ③浅黄2.5Y7/3	外面に墨書、判読不能。 外面　轆轤整形。 内面　轆轤整形。	体部破片。墨書。
7	須恵器 杯	埋設土	口径　— 底径　6.0 器高　2.6+	①粗砂、細礫、白色鉱物、石英　②還元焔 ③浅黄2.5Y7/3	内面体部に墨書「寺」か。 外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	体部下半1/2、底部3/4残。墨書。
8	須恵器 椀	竈＋30	口径　— 底径　7.2 器高　2.9+	①細砂、粗砂、石英 ②酸化焔気味 ③浅黄2.5Y7/3	外面　体部轆轤成形、底部右回転糸切り、高台両縁貼り付け時の回転撫で。 内面　轆轤整形、底部に墨書「上」。	体部下位～高台残。墨書。
9	須恵器 椀	＋11	口径(13.4) 底径　6.4 器高　5.5	①粗砂、細礫、白色鉱物、石英　②酸化焔気味　③灰7.5Y4/1	轆轤目顕著。外面　轆轤整形、底部右回転糸切り、高台両縁貼り付け時の回転撫で。 内面　右回転轆轤整形。	体部1/6、底部残。
10	須恵器 椀	＋6	口径(16.1) 底径　— 器高　4.9+	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰白2.5Y8/1	轆轤目顕著。体部中位で膨らみをもち、口縁部は外反。 外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り、高台両縁貼り付け時の回転撫で。内面　轆轤整形。	体部3/4、高台欠。
11	須恵器 椀	＋6～8	口径13.8 底径　6.2 器高　6.0	①細砂、粗砂、細礫、石英　②還元焔気味 ③灰黄2.5Y7/2	外面　体部右回転轆轤整形、底部回転糸切り（回転方向不明）、高台両縁貼り付け時の回転撫で。 内面　右回転轆轤整形。	体部1/2欠。
12	須恵器 椀	＋26	口径(14.0) 底径(6.6) 器高　5.3	①粗砂、細礫 ②酸化焔気味 ③鈍い橙7.5YR6/4	轆轤目顕著。外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り、高台貼り付け時の回転撫で。 内面　轆轤整形。	1/4残。
13	須恵器 椀	＋6	口径13.7 底径　7.2 器高　6.0	①細砂、粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰黄2.5Y7/2	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り、高台両縁貼り付け時の回転撫で。 内面　轆轤整形。	体部1/2欠。
14	土師器 小型壺	＋8	口径(12.0) 底径　— 器高　5.1+	①細砂、粗砂 ②普通 ③鈍い褐7.5YR5/4	器肉厚い。 外面　口縁部右方向横撫で、胴部横撫で。 内面　口縁部左方向横撫で、胴部横撫で。	口縁部～胴部最上位1/4残。
15	灰釉陶器 長頸瓶	＋1	口径　— 底径　— 器高　8.6+	①黒色粒 ② ③灰白5Y7/1	頸部片。口縁部内面と頸部下位外面に灰釉がかかる。 東濃。	頸部1/3残。
16	須恵器 羽釜	床面直上	口径 16.7 底径　8.3 器高 29.7	①細砂、細礫 ②還元焔気味 ③鈍い黄橙10YR6/4	鍔端部に凹凸がみられる。 外面　口縁部横撫で、胴部上方向篦削り、底部撫で。 内面　口縁部横撫で、胴部横方向篦撫で、底部撫で。	胴部～底部一部欠。
17	石製品 砥石	埋設土	長さ 9.9+ 重量 155	幅 3.4　厚さ 3.6 石材 砥沢石	適度な大きさに加工して使用。原面に縦方向の擦過痕。	
18	土製品 土錘	＋1	長さ 7.3+ 幅　2.1 孔径　0.6	①細砂、粗砂 ②普通 ③鈍い黄橙10YR7/4	棒状のものに粘土を巻き付けて焼成かか。 外面　撫で。 内面　全面吸炭。	一部欠。
19	鉄製品	＋11	長さ 9.3+ 重量 25.1	幅 0.8　厚さ 0.6	断面長方形の棒に不定形の鉄片が二枚付着。	端部の一方欠。分析。
20	鉄製品 釘	＋14	長さ 5.1+	重量 8.1	全体に弧を描く。錆化が顕著。	端部の一方欠。
21	鉄滓	－4	長さ 7.0 重量 63.7	幅 6.1　厚さ 1.2	板状を呈する。	端部欠。分析。
22	鉄滓状痒	－4	径 3.7+	厚さ 1.4　重量 18.2		破片。分析。
23	鉄椀形滓	－7	径 3.6+	厚さ 1.8　重量 14.4		一部欠。
24	鉄滓	－4	径 3.3	厚さ 2.3　重量 26.1		破片。

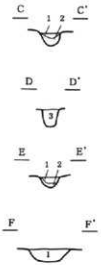
28号住居(PL.30・69)

位置　280—115，275～285—120　**重複**　なし。**形状**　隅丸台形。**規模**　4.70×3.90m　**面積**　18.3m²　**方位**　30°　**床面**　確認面から13cm下で床面となる。明確な貼床はないが6層を主として掘り方を整え、全体に平坦な床面とする。中央部が約5cm窪むが、これは床下土坑の範囲に一致し、埋め戻しが甘いために踏み込まれて陥没したと推測する。**壁溝**　東壁を除いて幅20～46cm、深さ4～13cmで巡る。**竈**　東壁南寄りに設置。円形の掘り方を設け、黄褐色土等で形状を整える。袖は右が22cm残存していたが、左は検出できなかった。燃焼部は長さ66cm、幅62cmで壁外に位置する。**貯蔵穴**　南東コーナーに設置。78×72×27cmの規模で、一部壁外に位置する。**柱穴**　ピットを4基検出した。全体に南に寄るが、位置から1・3・4号ピットが柱穴になると思われる。規模はP1　37×34×27cm　P2　35×29×32cm　P3　30×28×33cm　P4　40×32×17cm。**遺物**　須恵器杯・椀、灰釉陶器皿、刀子が出土。**掘り方**　床面から3～20cm下で掘り方面となる。中央に床下土坑1基、東壁沿いにピット2基を検出した。規模は土坑120×114×50cm　P5　37×32×15cm　P6　35×35×32cm。**所見**　出土遺物から9世紀前半と考えられる。





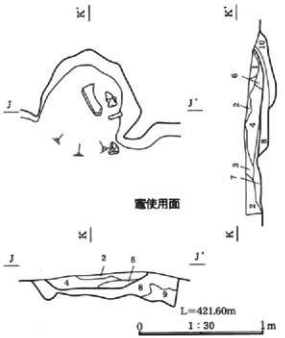




28号住居ピット
1．黒褐色土。ロームブロックをやや多量含む。
2．黒褐色土とロームブロックの混土。
3．黒色土。ロームブロックを少量含む。

28号住居貯蔵穴
1．黒色土。ロームブロック・焼土粒・炭粒をやや多量含む。

L=421.70m
0　1：60　2m

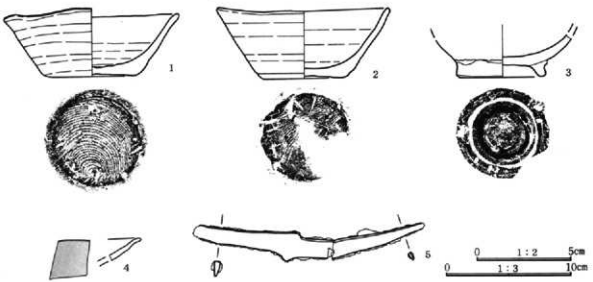


28号住居

1．黒色土。FP を少量含む。
2．黒褐色土。ロームブロック・粒をやや多量、焼土粒を微量含む。
3．黒色土。しまりがやや弱い。FP を少量含む。
4．黒色土。しまりがやや弱い。
5．黒色土。やや粘性。ローム粒を微量含む。P2。
6．褐灰色土。ロームブロックをやや多量含む。
7．黒褐色土。しまりが強い。ロームブロックを少量含む。
8．褐色土(ローム)。黒色土をやや多量含む。
9．黒色土。ロームブロックを多量含む。
10．黒色土。ロームブロックを少量含む。
11．褐灰色土。ロームブロックを多量含む。
12．黒色土。ロームブロックを多量含む。

28号住居竈

1．焼土。
2．オリーブ黒色土。FP を少量含む。
3．黄灰色土。竈材崩落ブロックを多量含む。
4．鈍い黄褐色土。ロームブロック・焼土粒・炭化物を少量含む。
5．黒褐色土。
6．暗褐色土。ロームブロック・焼土粒・炭化物を少量含む。
7．黒色土。ロームブロック・粒を微量含む。
8．黄褐色土。焼土粒・炭粒を微量含む。
9．黄褐色土。黒褐色土を微量含む。
10．暗褐色土。焼土粒を微量含む。



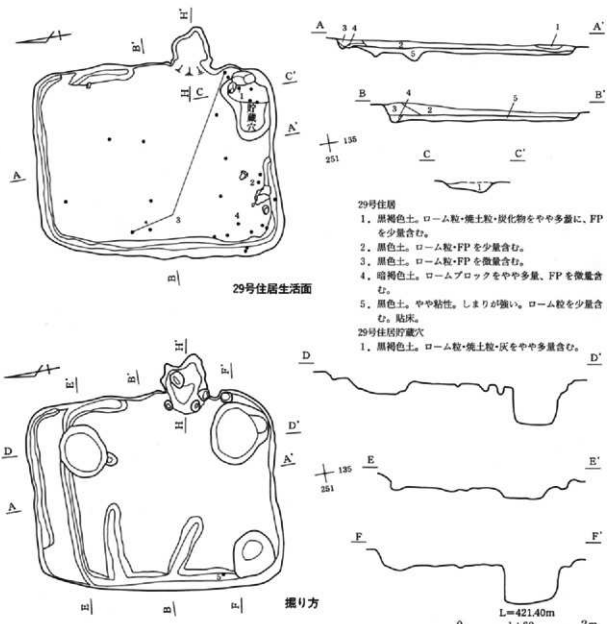
28号住居出土遺物

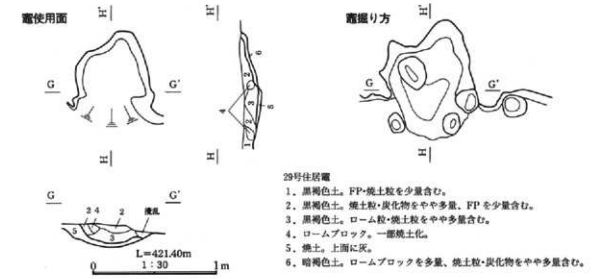
28号住居遺物観察表

番号	種類 器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 杯	＋3 貯蔵穴－2	口径 13.8 底径 6.8 器高 5.4	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③鈍い黄橙10YR7/3	外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整。 内面 轆轤整形。	体部一部欠。
2	須恵器 杯	＋1～2	口径 13.6 底径 6.8 器高 5.3	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③鈍い黄橙10YR7/3	体部が直線的に開く。 外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整。 内面 轆轤整形。	体部上半1/2欠。
3	須恵器 椀	＋9	口径 － 底径 7.0 器高 3.2+	①粗砂、石英 ②還元焔 ③灰白5Y8/1	外面 体部轆轤整形、底部糸切り・回転方向不明、高台両縁に貼り付け時の回転痕で。 内面 轆轤整形。	体部下位～高台残。
4	灰釉陶器 皿 ?	＋3	口径 － 底径 － 器高 －	①黒色粒 ② － ③灰白5Y7/2	口縁部小片。小片のため明瞭でないが、傾きから皿であろう。内外面薄く灰釉がかかる。	口縁部破片。
5	鉄製品 刀子	貯蔵穴 －16	長さ 12.1+ 0.2(峯) 重量 11.9	厚さ 0.4(刀身)	関区をもち、刀身断面三角形。峯が折り曲げられる。	切先・峯尻欠。

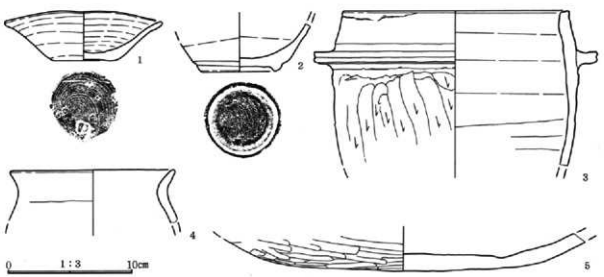
29号住居(PL.31・70)

位置　250・255—130・135　**重複**　なし。　**形状**　隅丸長方形。　**規模**　5.21×4.14m　**面積**　11.6㎡　**方位**　8°　**床面**　確認面から21cm下で床面となる。厚さ約10cmの貼床を施し、全体に平坦である。　**壁溝**　南壁西半から東壁電北側まで幅12～27cm、深さ4～10cmで巡る。東壁で一部途切れる。　**竈**　東壁南寄りに設置。不整な楕円形の掘り方を設け、埋め戻して形状を整える。袖は右袖の痕跡のみを検出した。燃焼部は35×46cmで壁外に位置し、底面が焼土化していた。掘り方には礫の抜き取り痕らしきピットが5基あり、補強として使用していた可能性がある。　**貯蔵穴**　南東コーナーに設置。規模は112×84×16cmで平面がL字形を呈し、段をもつ。　**柱穴**　確認できなかった。　**遺物**　土師器小型甕、須恵器杯・椀・甕・羽釜が出土した。　**掘り方**　床面から約10cm下で掘り方面となる。北東・南西コーナーを10cmほど円形に掘り窪めるとともに、東西方向に溝状の掘り込みを3条巡らす。　**所見**　出土遺物から9世紀後葉と考えられる。





29号住居竈
1．黒褐色土。FP・焼土粒を少量含む。
2．黒褐色土。焼土粒・炭化物をやや多量、FP を少量含む。
3．黒褐色土。ローム粒・焼土粒をやや多量含む。
4．ロームブロック。一部焼土化。
5．焼土。上面に灰。
6．暗褐色土。ロームブロックを多量、焼土粒・炭化物をやや多量含む。



29号住居出土遺物

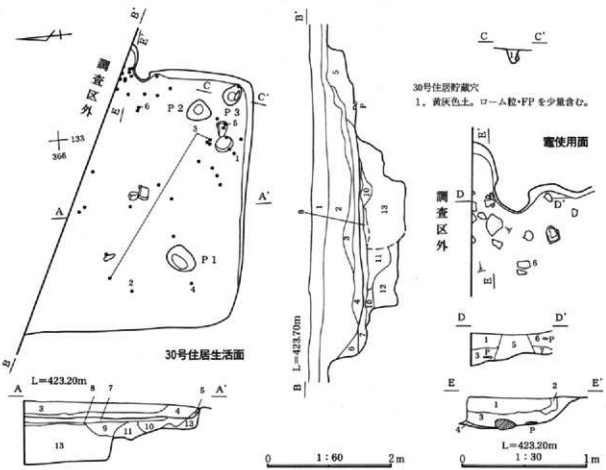
29号住居遺物観察表

番号	種別 器種	出土 レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 杯	貯蔵穴 －5	口径 12.3 底径 5.0 器高 3.9	①細砂 ②還元焔 ③褐灰10YR5/1	口縁部が歪んで楕円状を呈する。 外面 体部横位整形、底部右回転篦切り未調整。 内面 横位整形。	体部1/2欠。
2	須恵器 椀	床面直上	口径 — 底径 6.0 器高 3.7+	①細砂 ②還元焔 ③灰白2.5Y7/1	小型、低く幅広の高台。外面 横位整形、底部右回転糸切り、高台周縁に貼り付け時の回転撫で。 内面 横位整形。	体部下半～高台残。
3	須恵器 羽釜	＋6～11	口径(17.9) 底径 — 器高 12.2+	①粗砂、雲母、石英 ②還元焔 ③灰褐10YR5/1	鍔端部に面をもって細長く外へのびる。鍔形態・胴部削りの方向から脚付と予想する。外面 口縁部回転撫で、胴部下方向篦削り。内面 口縁部回転撫で、胴部撫で。	口縁部から胴部上位1/4残。 脚付。
4	土師器 小型甕	＋1	口径(12.7) 底径 — 器高 4.2+	①粗砂 ②普通 ③鈍い黄橙10YR7/4	器肉厚く、緩やかに括れて外反する。 外面 横撫で。 内面 横撫で。	口縁部1/4残。
5	須恵器 甕	－8	口径 — 底径(15.0) 器高 3.1+	①粗砂、雲母、石英 ②酸化焔 ③鈍い黄橙10YR7/4	外面 胴部左方向篦削り、底部篦削り。 内面 胴部撫で、底部回転撫で。	胴部最下位～底部1/4残。

30号住居(PL.32・70)

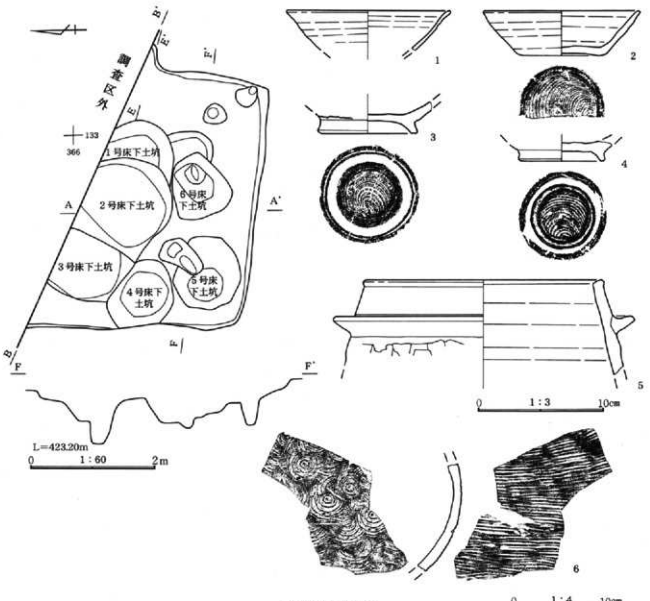
位置 360・365—130・135 **重複** なし。 **規模** 南壁3.74m、西壁は調査区内で3.22m。 **面積** 調査区内で11.9m²。 **方位** 5° **床面** 確認面から

19cm下で床面となる。調査区界の壁面で43cm確認した。厚さ約10cmの貼床を施し、西半が東半より低く凹凸が目立つ。　**壁溝**　確認できなかった。　**竈**　東壁に設置するが、北半は調査区外である。楕円状に掘り込んだ面をそのまま底面として使用する。袖は右袖が38cm残存していた。燃焼部は長さ56cmで壁付近に位置し、手前側に灰が堆積（4層）。　**貯蔵穴**　南東コーナーの3号ピットに貯蔵穴の可能性がある。規模は36×27×23cmである。　**柱穴**　2基検出した。規模はP1　48×33×74cm　P2　37×34×44cmで、2基を結んだ線は南壁に平行である。　**遺物**　須恵器杯・椀・羽釜などが出土した。　**掘り方**　床面より約20cm下で掘り方面となる。床下土坑を6基検出した。規模は1号土坑　径120cm以上×深さ42cm　2号土坑　径144cm以上×深さ78cm　3号土坑　径102cm以上×深さ50cm　4号土坑　124×88×53cm　5号土坑　120×103×40cm　6号土坑　104×94×46cmである。2号は3号を埋め戻した後に掘り込まれるが、1・2号は同様の土（13層）で埋め戻されていた。　**所見**　出土遺物から9世紀後葉から10世紀前葉と考えられる。　**備考**　石墨遺跡本線部分C区3号住居の南半にあたる。



30号住居
1．表土。
2．黒色土。FPをやや多量含む。
3．黒褐色土。ロームブロック・FP・焼土粒を微量含む。
4．黒色土。FPを微量、灰を少量含む。
5．鈍い黄褐色土。ローム粒・焼土粒・炭粒・灰を少量含む。竈に相当。
6．黒色土。
7．黒褐色土。しまりが強い。貼床。
8．黒褐色土。焼土粒をやや多量含む。
9．褐灰色土。ローム粒・炭粒を少量含む。
10．黒褐色土。ロームブロック・炭粒・焼土粒を少量含む。
11．鈍い黄褐色土（ローム）。黒褐色土を少量含む。
12．黒色土。しまりが弱い。ローム粒を微量含む。
13．黒色土。ロームブロックを多量含む。

30号住居竈
1．黒褐色土。ローム粒・FP・焼土粒を少量含む。
2．黄褐色土。竈材の崩落。
3．黒褐色土。焼土ブロック・焼土粒をやや多量含む。
4．黒褐色土。灰層。
5．黄褐色土。袖部。
6．黄褐色土。黒褐色土ブロックをやや多量含む。竈材の崩落。
7．黒褐色土。



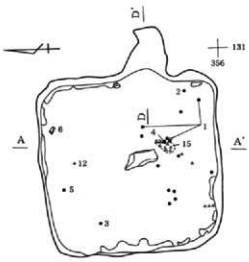
30号住居出土遺物

30号住居遺物観察表

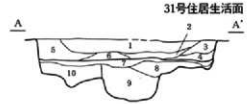
番号	種類 器種	出土 レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 杯？	床面直上	口径 13.0 底径 — 器高 3.1+	①細砂、粗砂 ②還元焔 ③灰白5Y7/1	器肉薄く、大きく外反して立ち上がる。 外面 轆轤整形。 内面 轆轤整形。	口縁部～体部上半残。
2	須恵器 杯	+14	口径 12.3 底径 6.9 器高 3.5	①細砂、粗砂 ②還元焔 ③灰白2.5Y8/2	外面 体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整。 内面 轆轤整形。	1/2残。
3	須恵器 椀	+12～20	口径 — 底径 8.0 器高 2.5+	①細砂、粗砂、白色鉱物、石英 ②酸化焔気味 ③灰白5Y8/1	外面 轆轤整形、底部右回転糸切り、高台両縁貼り付け時の回転撫で。 内面 轆轤整形。	体部最下位～高台残。
4	須恵器 椀	+9	口径 — 底径 6.8 器高 1.6+	①細砂、粗砂 ②還元焔気味 ③鈍い黄橙10YR6/4	外面 轆轤整形、底部右回転糸切り、高台両縁貼り付け時の回転撫で。 内面 轆轤整形。	底部～高台残。
5	須恵器 羽釜	+13	口径(19.0) 底径 — 器高 7.5+	①粗砂、石英 ②還元焔気味 ③浅黄2.5Y7/3	内傾して立ち上がり、口唇部外面が肥厚する。縦長い鍔は丁寧に付けられる。外面 口縁部回転撫で、胴部上方向篦削り。内面 鍔裏に指頭圧痕後回転撫で。	口縁部～胴部最上位1/4残。
6	須恵器 横瓶？	電+5	口径 — 底径 — 器高 —	①粗砂、礫 ②酸化焔気味 ③鈍い赤褐5YR5/3	外面 平行叩き。 内面 同心円状の当て具痕、右下付近に指頭圧痕。	胴部破片。

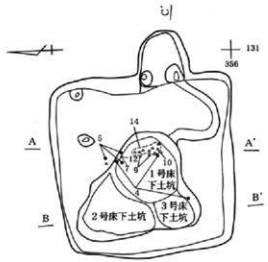
31号住居(PL.33・34・70・71)

位置　355−130　**重複**　なし。　**形状**　隅丸方形。
規模　2.84×2.80m　**面積**　7.9m²　**方位**　−2°
埋没土　竈構築土などが住居中央付近の床面直上に堆積(6層)。　**床面**　確認面より32cm下で床面となり、4〜14cmの貼床を施す。竈から離れるに従って扇状に低くなり、西壁付近での比高差は最大10cmである。　**壁溝**　南西コーナーから西壁と、北壁から東壁にかけて幅5〜20cmの浅い溝状の落ち込みが検出された。　**竈**　東壁南寄りに設置。台形状の掘り方を設け、灰黄褐色土などで形状を整える。袖は右のみが15cmほど残存していた。燃焼部は長さ41cm、幅50cmで壁付近に位置する。底面と内壁が部分的に焼土化していた。　**貯蔵穴**　確認できなかった。
柱穴　確認できなかった。　**遺物**　須恵器杯・椀・盤、砥石、羽口、鉄椀状滓が出土し、鍛冶関連の遺物が目立つ。その多くが1号床下土坑の床面下25cm以内から出土し、一部床面上の遺物と接合する。
掘り方　床面より10〜35cmで掘り方面となるが、北東半分を南西半分より10cmほど低く掘り込む。中央から西寄りに床下土坑を3基検出した。規模は1号120×112×54cm　2号　径118cm以上×深さ42cm　3号　径82cm以上×深さ50cmである。1号土坑は掘り方を貼床層下面まで埋め戻した後に掘削している。　**所見**　出土遺物から8世紀後半と考えられる。床下土坑のうち少なくとも1号は本来鍛冶炉としての機能を果たしていたが、機能停止後に破壊して埋め戻し、貼床を施したと想定する。遺物の科学分析により、鋼と鋼を用いた鉄製品を製造した可能性が高いが、炉壁は出土していない。

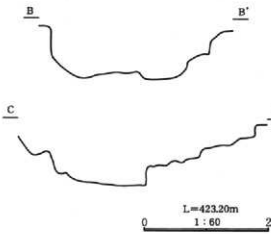


31号住居生活面





掘り方



31号住居
1. 黒褐色土。ロームブロックを少量、FPを微量含む。
2. 黒褐色土。ロームを少量含む。
3. 黒色土。FPを微量含む。
4. 黒褐色土。しまりがやや弱い。ロームブロックを多量含む。
5. 黒褐色土。しまりが弱い。
6. 黒褐色土。黄褐色土(竈材)・焼土粒・灰を多量含む。
7. 黒褐色土。しまりが強い。貼床。
8. 黒褐色土。ロームブロックを多量含む。
9. 黒褐色土。ロームブロックをやや多量含む。
10. ロームブロックを多量の黒褐色土で充填。

竈使用面

31号住居竈
1．灰褐色土。焼土粒を微量含む。
2．黒褐色土。焼土粒をやや多量含む。
3．黒褐色土と焼土粒の混土層。
4．褐灰色土。ロームブロックを多量、焼土粒・灰を少量含む。
5．灰黄褐色土。ロームブロック・FP・焼土粒を少量含む。
6．黒褐色土。ロームブロックを少量含む。

L=423.20m
0　1：30　1m

1

2

3

4

5

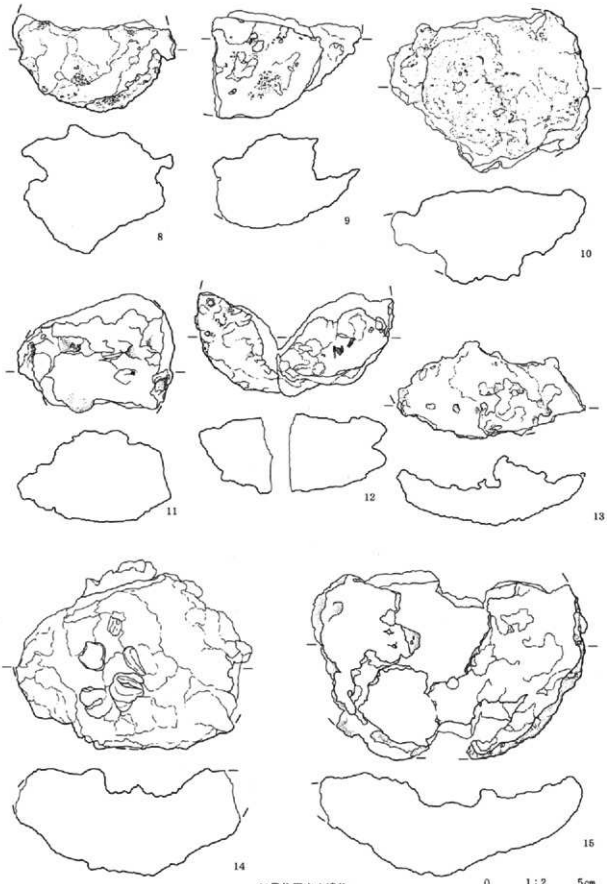
0　1：3　10cm

6

7

0　1：2　5cm

31号住居出土遺物



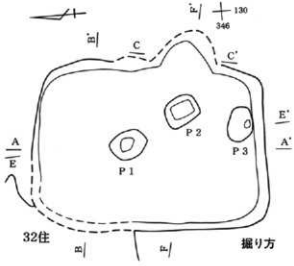
31号住居出土遺物

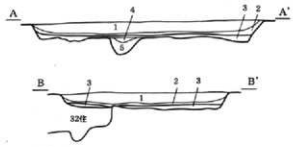
31号住居遺物観察表

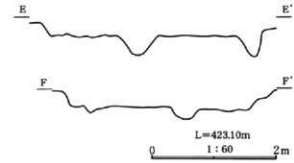
番号	種類器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態備考
1	須恵器 椀	−4〜+6	口径 12.6 底径 8.6 器高 4.7	①粗砂、白色鉱物 ②還元焔 ③灰白2.5Y8/2	小型。外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り、高台両縁貼り付け時の回転撫で。内面 轆轤整形。	体部1/4欠。
2	須恵器 杯	床面直上	口径 13.9 底径 8.5 器高 4.7	①細砂、粗砂 ②還元焔 ③灰白2.5Y8/1	底径大きく、体部は直線的に立ち上がる。外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り後、中心部を残して回転篦削り。内面 轆轤整形。	口縁部〜体部1/4欠。
3	須恵器 盤	床面直上	口径(21.3) 底径 16.8 器高 4.3	①細砂、粗砂、白色鉱物 ②還元焔 ③灰黄2.5Y6/2	口縁部で弱く屈曲して立ち上がる。底部丸く高台が浮く。外面 体部左回転轆轤整形、底部中央左回転篦削り。高台内縁回転撫で。内面 左回転轆轤整形。	口縁部3/4欠。
4	土製品 羽口	+1 1号床下土坑−19 2号床下土坑−25	長さ 16.4+ 径 8.3〜7.2 孔径 5.5〜2.1 重量 760		外面撫で。先端部は被熱で部分的にガラス化。	一部欠。分析。
5	土製品 羽口	1号床下土坑−12〜25	長さ 13.4+ 径 8.1〜7.7 孔径 3.8〜2.0 重量 655		外面撫で。先端部は被熱でガラス化。	両端欠。
6	石製品 砥石	床面直上	長さ 6.3+ 幅 2.8 厚さ 2.5 重量 48.8 石材 砥沢石		適度な大きさに加工して3面を使用。	一部欠。
7	鉄椀形滓	1号床下土坑−15	径 6.5+ 厚さ 5.7 重量 152.0	緻方向に薄く割れる。底面に砂礫・FP付着。		破片。分析。
8	鉄椀形滓	埋設土	径 8.7 厚さ 6.8 重量 279.3	底面に軽石付着。		端部欠。分析。
9	鉄椀形滓	1号床下土坑−17	径 7.9+ 厚さ 5.0 重量 254.7			1/4残。分析。
10	鉄椀形滓	1号床下土坑−13	径 10.7+ 厚さ 5.1 重量 405.7	上面・底面に微量の砂礫が付着。		一部欠。分析。
11	鉄椀形滓	床下土坑埋土	径 8.4 厚さ 6.3 重量 307.7			一部残。分析。
12	鉄椀形滓	+3 1号床下土坑−15	径 10.3 厚さ 4.1 重量 276.6	上面に微量の炭付着。		1/2残。分析。
13	鉄椀形滓	床下土坑埋土	径 9.9+ 厚さ 3.7 重量 149.8	底面に砂礫付着。		一部残。分析。
14	鉄椀形滓	1号床下土坑−12	径 12.5+ 厚さ 4.7 重量 625.9	上面中央部がくぼむ。		端部欠。分析。
15	鉄椀形滓	床面直上	径 14.6+ 厚さ 5.5 重量 730	底面に砂礫・FP付着。		一部欠。分析。

33号住居(PL.34・35・71)

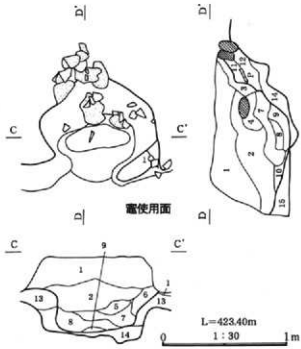
位置 345−130 **重複** 32号住居→33号住居 **形状** 隅丸長方形。北壁西側と掘り方の竈上端は確認できなかった。 **規模** 3.68×2.50m **面積** 8.8㎡ **方位** 8° **床面** 確認面から24cm下で床面となる。焼土と炭を混入した黒色土で5〜10cmの貼床を施し、全体に平坦である。 **壁溝** なし。 **竈** 半円状の掘り方をロームブロックを混入した暗褐色土で埋め戻して形状を整える。袖の遺存は悪く、右袖の痕跡が確認できたのみである。燃焼部は長さ52cm、幅58cm、深さ15cmの円形で、壁外に位置する。煙道は約50°で立ち上がる。立ち上がり上端及び埋没土から礫がまとまって出土した。板状のものも多く、被熱で赤化しているものもあることから、竈の天井など構築材として用いられたものが破壊により散在したと思われる。 **貯蔵穴** 確認できなかった。 **柱穴** 確認できなかった。 **遺物** 南壁付近と遺構外も含めた竈周囲に分布が集中する。土器は須恵器杯・椀が出土した。No.1の内面に付着する墨は字と認められず、筆馴らしの痕か何らかの絵の可能性が考えられるが判然としない。そのほか、「今」「十」「萬」の墨書土器がある。径20〜40cmほどの礫4点が、床面から2cmほどのレベルで出土した。竈の構築材と思われるが、礫の詳しい出土状態や被熱の有無は不明である。 **掘り方** 床面から5〜10cmで掘り方面となる。大きな床下土坑は設けずに比較的平坦に掘削し、南北にピットを3基穿つ。規模は1号 62×42×32cm 2号 57×42×32cm 3号 57×40×15cmである。ロームブロックを多く混入する黒色土で埋め戻し、1号ピット底面は白色粘土を薄く貼る。 **所見** 出土遺物から9世紀後半と考えられる。



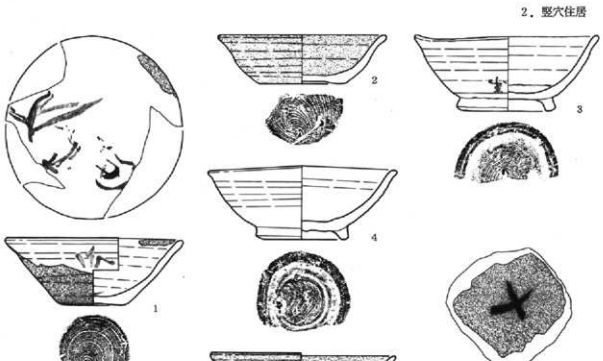




33号住居
1．黒色土。ロームブロック・FPを少量含む。
2．黒色土。ロームブロックを微量含む。
3．黒色土。焼土粒・炭粒を少量含む。貼床。
4．黒褐色土。ロームブロックを多量含む。
5．黒褐色土とロームブロックの混土。



33号住竈
1．黒褐色土。FPをやや多量含む。
2．黒褐色土。FPを少量含む。
3．褐色土。FPを少量含む。
4．暗褐色土。ロームブロック・焼土粒を少量含む。
5．白色粘土。黒褐色土を多量含む。
6．黒褐色土。ロームブロックを多量含む。
7．暗褐色土。白色粘土ブロックを多量含む。
8．黒褐色土。ロームブロック・白色粘土ブロック・焼土粒・灰をやや多量含む。
9．ローム粒・焼土粒・灰の混土。
10．暗褐色土。焼土・灰をやや多量含む。
11．明褐色土。しまりが強い。FPを少量含む。
12．褐色土。
13．暗褐色土。
14．暗褐色土。ロームブロックを多量含む。
15．暗褐色土。しまりが強い。ロームブロックをやや多量含む。



33号住居出土遺物

33号住居遺物観察表

番号	種類 器種	出土レベル	法量	①釉土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 杯	＋5～17	口径 14.2 底径 5.5 器高 5.3	①細砂、粗砂、緻密 ②還元焔 ③灰黄2.5Y7/2	外面に横位の墨書「今」、内面に墨書・判読不能。外面下半と内面口縁部に吸炭。外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り米調整。内面　轆轤整形。	口縁部～体部最上位1/4欠。墨書。
2	須恵器 杯	床面直上	口径(13.2) 底径 6.8 器高 3.7	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③黒2.5Y2/1	体部は丸みをもち、口縁部外反。全面に煤し状の吸炭。 外面　体部轆轤整形、口縁部右回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	体部1/4残。底部1/4欠。
3	須恵器 椀	床面直上 ～＋6	口径 14.5 底径 7.8 器高 6.0	①粗砂、細礫 ②酸化焔気味 ③浅黄2.5Y7/3	外面　轆轤整形、底部右回転糸切り、高台両縁貼り付け時の回転撫で、体部に側位の墨書「萬」。高台内側全面に重ね焼きによる吸炭。 内面　轆轤整形、底部に径7.5cmの重ね焼き痕。	1/2残。墨書。重ね焼き痕。
4	須恵器 椀	埋没土	口径 14.9 底径 6.5 器高 5.8	①粗砂、細礫 ②酸化焔 ③浅黄2.5Y7/3	外面　轆轤整形、底部右回転糸切り、高台両縁貼り付け時の回転撫で。 内面　轆轤整形。	1/2残。
5	須恵器 椀	＋5	口径 14.4 底径 6.5 器高 5.8	①粗砂、細礫、白色鉱物 ②還元焔 ③黒2.5Y2/1	外面　体部右回転轆轤整形、底部回転糸切り未調整、高台両縁貼り付け時の回転撫で。 内面　轆轤整形。	3/5残。
6	須恵器 椀	床面直上	口径 ― 底径 7.3 器高 2.3+	①粗砂、細礫、石英 ②還元焔 ③黒5Y2/1	全面に煤し状の吸炭。外面　轆轤整形、底部右回転糸切り、高台両縁貼り付け時の回転撫で。 内面　轆轤整形、底部に墨書「十」。	体部下位～高台残。墨書。

34号住居(PL,35･36･72)

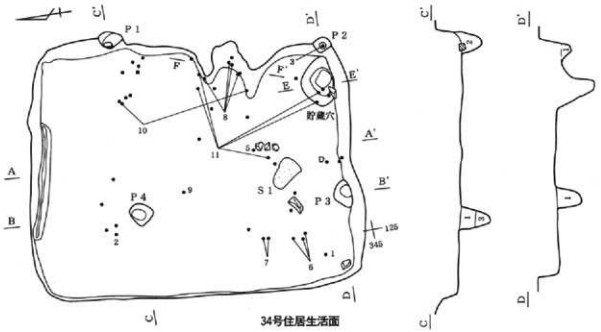
位置　345・350―120・125　**重複**　なし。　**形状**　隅丸長方形。　**規模**　5.10×4.12m　**面積**　19.4㎡

方位　7°　**床面**　確認面から35cmで床面となる。約5cmの貼床を施し、全体に平坦である。南側中央に扁平な円礫(S 1)が貼床層に埋め込まれていた。性

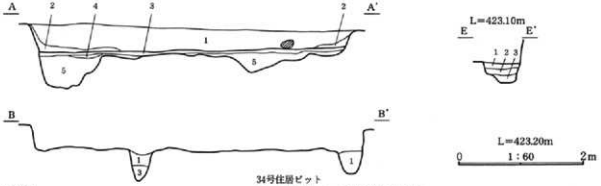
格は不明である。　**壁溝**　北壁中央に長さ182cm、幅15cm、深さ6cmの溝を検出した。　**竈**　東壁南寄りに設置。半円状の掘り方を埋め戻して形状を整える。袖は地山のロームと思われる黄褐色土で構築し、左41cm、右44cm残存していた。燃焼部は長さ、幅とも約40cmで壁内に位置し、煙道は45°で立ち上がる。

貯蔵穴　南東コーナーに設置。規模は78×52×62cmで中段をもつ。　**柱穴**　4基検出した。結んだラインは住居と相似だが全体に南東に寄っており、1・2号ピットは東半が壁外に位置する。規模はP1　39×26×33cm　P2　32×24×18cm　P3　44×28×36cm　P4　39×38×52cmで、2号ピットが他よりも小型である。　**遺物**　土師器甕、須恵器杯・椀・甕が出土した。　**掘り方**　南東コーナーを除いて周囲をテラス状に5～10cm掘り残す。床下土坑を4基、ピットを2基検出した。規模は1号土坑　124×105×59cm　2号土坑　138×120×51cm　3号土坑　148×112×48cm　4号土坑　92×88×56cm　P5　32×28×49cm　P6　42×36×20cmである。P5・6はそれぞれP3－P4・P2－P3のライン上に位置する。

所見　出土遺物から9世紀後半と考えられる。



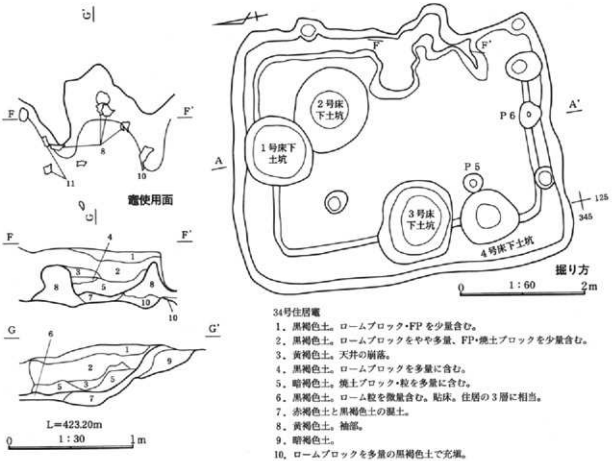
34号住居生活面



34号住居
1．黒褐色土。ロームブロック・FPを少量含む。
2．黒褐色土。ロームブロック・FPを微量含む。
3．黒褐色土。しまりが強い。ロームの間層を挟む。貼床。
4．黒褐色土。焼土粒・粘土粒をやや多量含む。
5．黒褐色土。ロームブロックを多量含む。

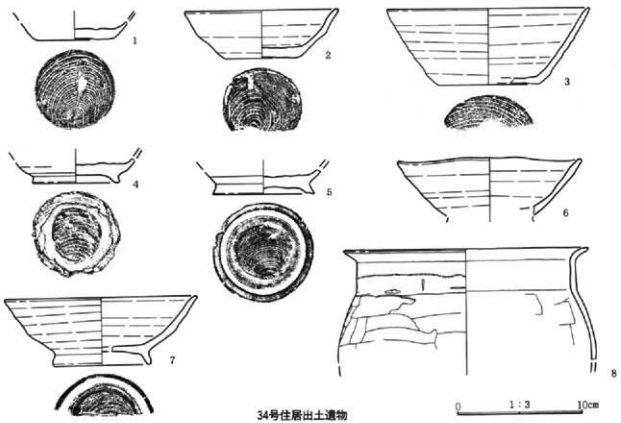
34号住居ピット
1．黒褐色土。ローム粒・FPを微量含む。
2．褐色土。ローム粒・FPを少量含む。
3．黄灰色土。やや粘性。

34号住居貯蔵穴
1．暗灰黄色土。焼土粒・灰を多量含む。
2．暗灰黄色土。ロームブロックを多量に含む。
3．ロームブロックを多量の黒色土で充填。

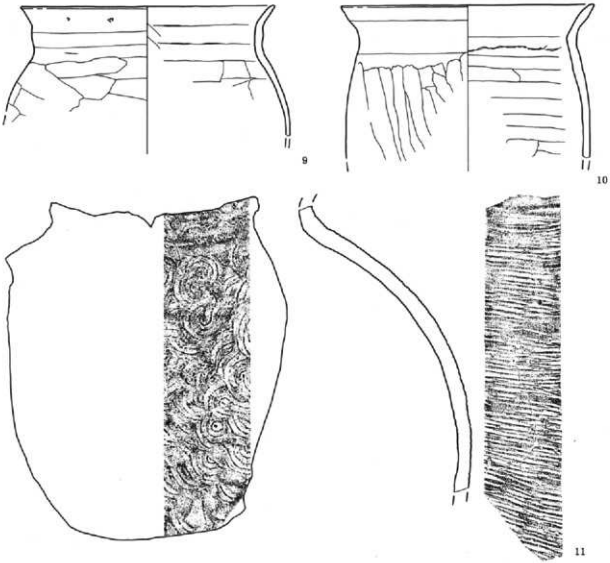


34号住居竈

1．黒褐色土。ロームブロック・FP を少量含む。
2．黒褐色土。ロームブロックをやや多量、FP・焼土ブロックを少量含む。
3．黄褐色土。天井の崩落。
4．黒褐色土。ロームブロックを多量に含む。
5．暗褐色土。焼土ブロック・粒を多量に含む。
6．黒褐色土。ローム粒を微量含む。貼床。住居の3層に相当。
7．赤褐色土と黒褐色土の混土。
8．黄褐色土。袖部。
9．暗褐色土。
10．ロームブロックを多量の黒褐色土で充填。



34号住居出土遺物



34号住居出土遺物

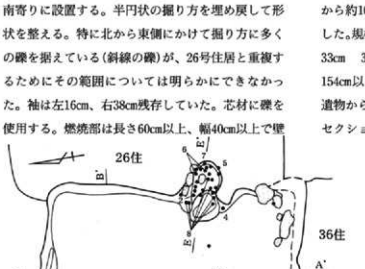
34号住居遺物観察表

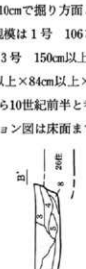
番号	種別器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 杯	床面直上	口径 — 底径 6.2 器高 1.4+	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰黄2.5Y6/2	外面　体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	体部殆下位～底部残。
2	須恵器 杯	+19	口径(12.2) 底径 6.1 器高 3.8	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③純い黄2.5Y6/4	体部中位に膨らみをもつ。 外面　体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	1/2残。
3	須恵器 杯	+15	口径(15.9) 底径 (8.0) 器高 6.0	①粗砂、細礫、石英 ②微化焔気味 ③明黄褐10YR7/6	器高が高く、内面底部から体部への変換点が明瞭。 外面　体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	体部1/2残。
4	須恵器 椀	埋没土	口径 — 底径 7.0 器高 1.7+	①粗砂、細礫 ②微化焔気味 ③純い褐7.5YR5/4	外面　体部轆轤整形、底部左回転糸切り、高台両縁貼り付け時の回転撫で。 内面　轆轤整形。	体部殆下位～高台残。
5	須恵器 椀	+29	口径 — 底径 8.1 器高 1.9+	①細砂、雲母砂 ②還元焔気味 ③灰白5Y8/2	高台端部が回転撫でで潰れ。外面　底部左回転糸切り、高台両縁貼り付け時の回転撫で。 内面　轆轤成形。	体部殆下位～高台残。
6	須恵器 椀？	床面直上～+4	口径(14.4) 底径 — 器高 4.6+	①細砂、粗砂 ②還元焔 ③灰白2.5Y7/1	外面　轆轤整形。 内面　轆轤整形。	体部1/2残。

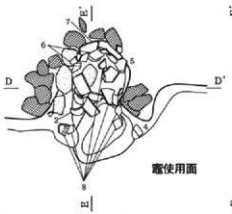
7	須恵器 椀	+16	口径(15.2) 底径 (7.8) 器高 5.3	①細砂、粗砂 ②還元焔 ③灰白2.5Y8/2	外面 体部離縁整形、底部右回転糸切り、高台両縁貼り付け時の回転撫で。 内面 輪縁整形。	1/2残。
8	土師器 甕	電使用面直上～+7	口径(19.2) 底径 — 器高 8.9+	①細砂、粗砂 ②普通 ③明赤褐5YR5/6	口縁崩れた「コ」の字状で端部が強く外反。 外面 口縁部横撫で、胴部左方向篦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部横方向篦撫で。	口縁部～胴部上位1/2残。
9	土師器 甕	+19	口径 20.1 底径 — 器高 10.3+	①細砂、粗砂 ②普通 ③橙2.5YR6/6	口縁弱い「コ」の字状、器肉厚い。外面 口縁部上下の屈曲部を特に強く横撫で。胴部左方向篦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部横方向横撫で。	口縁部～胴部上位残。
10	土師器 甕	+20～21	口径(20.0) 底径 — 器高 12.3+	①細砂、粗砂、細礫 ②酸化焔気味 ③純い黄橙10YR7/4	口唇部に面をもつ。 外面 口縁部回転撫で、胴部下方向篦削り。 内面 横方向撫で。	口縁部～体部上位1/4残。
11	須恵器 甕	床面直上～+28 貯蔵穴 —12～49	口径 — 底径 — 器高 —	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰 N4/0	外面 頸部横撫整形、胴部平行叩き。 内面 頸部横撫整形、胴部同心円状の当て具痕。	体部破片。

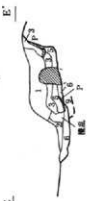
35号住居(PL.29・36・72)

位置 290—130・135 **重複** 26号住居→35号住居・36号住居→35号住居 **規模** 南北4.10m、東西2.78m以上 **面積** 11.3m² **方位** 15° **床面** 確認面から33cmで床面となる。3～10cmほどの貼床を施し全体に平坦だが、北壁西側など、掘削した地山ローム面が一部覗く箇所もある。 **壁溝** 北壁と東壁の竈北側を幅5～15cm、深さ2cmで巡る。東壁から北東コーナー付近は浅い緩傾斜面である。 **竈** 東壁南寄りに設置する。半円状の掘り方を埋め戻して形状を整える。特に北から東側にかけて掘り方に多くの礫を据えている(斜線の礫)が、26号住居と重複するためにその範囲については明らかにできなかった。袖は左16cm、右38cm残存していた。芯材に礫を使用する。燃焼部は長さ60cm以上、幅40cm以上で壁外に位置する。手前を深さ10cmほど楕円形に掘り窪め、中央奥壁寄りに角柱状の礫を縦に据えて支脚とする。内壁には扁平な礫を用いる。 **貯蔵穴** 確認できなかった。 **柱穴** 北壁調査区界側でピットを1基検出した。規模は26×20×40cmである。柱穴となるかは不明。 **遺物** 竈に分布が集中する。須恵器杯・羽釜、灰釉陶器椀などが出土した。南東コーナー付近からまとまって出土した礫は床面に食い込むものもあり、用途は不明である。 **掘り方** 床面から約10cmで掘り方面となる。床下土坑を4基検出した。規模は1号 106×97×30cm 2号 72×56×33cm 3号 150cm以上×102cm以上×54cm 4号 154cm以上×84cm以上×32cmである。 **所見** 出土遺物から10世紀前半と考えられる。 **備考** 住居のセクション図は床面までのものである。



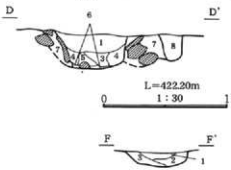






35号住居竈

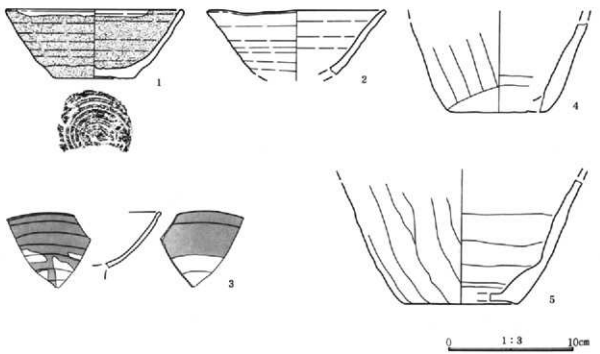
1．黒褐色土。焼土粒を微量含む。
2．暗褐色土。鈍い黄褐色土ブロックを少量、焼土粒を微量含む。
3．暗褐色土。焼土粒をやや多量含む。
4．暗褐色土。焼土ブロックをやや多量含む。
5．鈍い黄褐色土。竈材の崩落。
6．黒褐色土。焼土粒を少量含む。
7．暗褐色土。袖部。
8．暗褐色土。しまりが強い。鈍い黄褐色土粒・焼土粒を微量含む。
9．暗褐色土。焼土粒を多く含む。



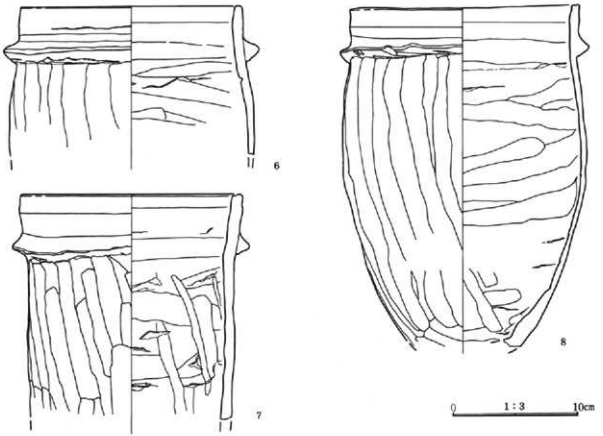
35号住居1号床下土坑

1．黒色土。FP・ローム粒を微量含む。
2．黒褐色土。FP・ローム粒・焼土粒を少量含む。
3．暗褐色土。ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。

掘り方



35号住居出土遺物



35号住居出土遺物

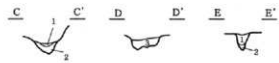
35号住居遺物観察表

番号	種類器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態備考
1	須恵器 杯	—12	口径(14.0) 底径(6.5) 器高 5.5	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③鈍い黄橙10YR5/3	外面 体部横軸整形、底部右回転糸切り未調整。 内面 横軸整形。	体部1/4、底部3/4残。
2	須恵器 杯？	竈＋1	口径(14.0) 底径 — 器高 5.0+	①粗砂、細礫、石英 ②還元焔 ③灰白10YR8/2	外面 横軸整形。 内面 横軸整形。	体部1/4残。
3	灰釉陶器 椀	貼り方堆土	口径 — 底径 — 器高 4.3+	① — ② — ③灰白5Y7/1	口縁部から体部片。口縁部内外面灰釉を薄く浸けがけ。口縁部内胥した後、端部は外方に小さく反る。東濃。	口縁部～体部1/8残。
4	須恵器 羽釜	竈＋4	口径 — 底径 8.0 器高 7.0+	①粗砂、細礫、石英 ②酸化焔 ③鈍い黄橙10YR7/3	外面 胴部上方向寛削り、胴部最下位横方向寛削り、底部撫で。 内面 胴部撫で、底部撫で。	胴部下位～底部1/2残。
5	須恵器 羽釜	竈＋17	口径 — 底径 (9.0) 器高 9.6+	①粗砂、細礫、石英 ②酸化焔 ③鈍い橙7.5YR6/4	外面 胴部上方向寛削り、底部撫で。 内面 胴部横方向強い撫で、底部撫で。	胴部下位～底部1/4残。
6	須恵器 羽釜	竈＋10～18	口径(17.4) 底径 — 器高 11.7+	①粗砂、細礫、石英 ②酸化焔気味 ③鈍い橙7.5YR6/4	鍔付近を境に口縁が立ち上がる。鍔上面を丁寧に撫でる。外面 口縁部回転撫で、胴部上方向寛削り。 内面 口縁部回転撫で、胴部横方向撫で。	口縁部～胴部上位1/4残。
7	須恵器 羽釜	竈＋5	口径(17.4) 底径 — 器高 17.5+	①細砂、粗砂、細礫 ②酸化焔気味 ③鈍い黄橙10YR7/4	胴部に張りみがなく、口縁が鍔付近から外反。外面 口縁部横撫で、胴部上方向寛削り。 内面 口縁部横撫で、胴部強い撫で。	口縁部～胴部上半1/4残。
8	須恵器 羽釜	竈使用面直上～＋8	口径 18.2 底径 — 器高 26.5+	①粗砂、細礫、石英 ②酸化焔気味 ③鈍い橙7.5YR6/4	小さい鍔付近を境に口縁が立ち上がる。外面 口縁部回転撫で、胴部上方向寛削り。 内面 口縁部回転撫で、胴部撫で。	口縁部～胴部1/4、底部欠。

36号住居(PL.29・37・73)

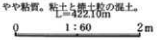
位置 285—130・135 **重複** 36号住居→35号住居 **規模** 調査区内で南壁2.92m、調査区界3.20m **面積** 調査区内で9.1㎡ **方位** 7° **床面** 確認面から27cm下で床面となる。地山のロームを平に掘削し、そのまま床面とする。 **壁溝** なし。 **竈** 東壁に

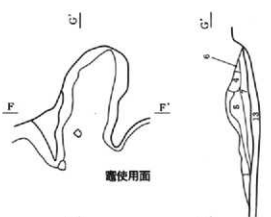
設置する。隅丸方形状の掘り方を埋め戻して形状を整えるが、主軸がやや南に振れる。袖は左34cm、右27cm残存している。掘り方において袖の内壁付近を楕円状に掘り窪めるが、礫などの芯材は検出していない。燃焼部は長さ70cm以上、幅30cmで壁外に設け、内壁が焼土化していた。　**貯蔵穴**　検出できなかった。　**柱穴**　ピットを3基検出した。1号ピットは後世のものであり、住居には伴わない。規模はP1 45×39×26cm　P2　46×41×28cm　P3　26×22×26cmである。　**遺物**　須恵器杯・長頸壺、灰釉陶器椀、こも編み石などが出土した。こも編み石は2号ピットと南壁の間のほぼ床面直上にまとまっていた。　**所見**　出土遺物から9世紀前葉と考えられる。

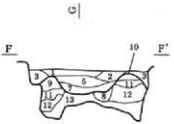


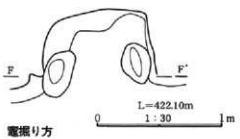
36号住居ピット
1．黒褐色土。ローム粒・FP を少量含む。
2．暗褐色土。ローム粒多量含む。
3．暗褐色土。ローム ブロックをやや多量含む。

36号住居
1．黒褐色土。ローム粒を少量含む。
2．黒褐色土。しまりが弱い。ローム粒を少量含む。
3．黒褐色土。しまりが弱い。ローム粒をやや多量含む。
4．黒褐色土。FP をやや多量、ローム粒を少量含む。
5．黒色土。しまりが弱い。
6．黒褐色土。ローム粒を少量含む。
7．黒褐色土。しまりが強い。ローム粒をやや多量含む。
8．黒褐色土。しまりが弱い。ローム粒をやや多量、FP を少量含む。
9．鈍い黄褐色土。やや粘質。粘土と焼土粒の混土。

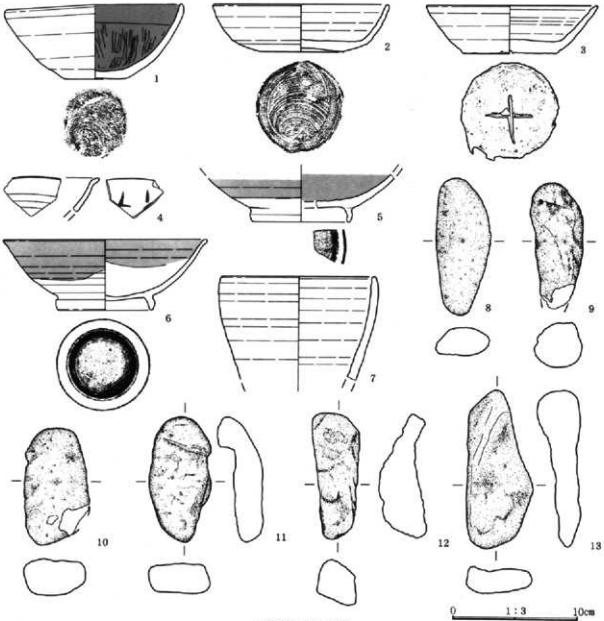








36号住居竈
1．黒褐色土。FP をやや多量、焼土粒・炭粒を少量含む。
2．黒色土。ロームブロック・焼土粒・粘土粒を少量含む。
3．暗褐色土。しまりが弱い。ローム粒・焼土粒を少量含む。
4．暗褐色粘土。焼土粒を少量含む。
5．明黄褐色粘土。焼土粒・黒褐色土粒・炭粒を少量含む。竈材の崩落。
6．焼土。
7．暗褐色土。焼土粒・粘土粒・炭粒を多量に含む。
8．黒褐色土。焼土粒を少量含む。
9．黒褐色土。ロームブロック・焼土ブロックをやや多量含む。
10．黒褐色土。FP・焼土ブロック・灰黄粘土ブロックを少量含む。
11．明黄褐色粘土。
12．褐色土。焼土粒を少量含む。
13．暗褐色土。焼土粒を多量に含む。



36号住居出土遺物

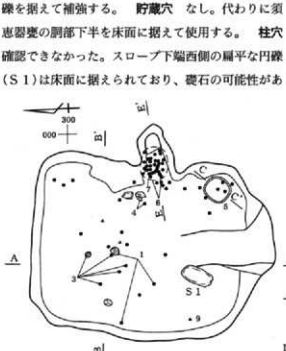
36号住居遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	法量	①釉土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 杯	埋没土	口径 13.9 底径 4.6 器高 5.9	①粗砂、細礫 ②酸化焔 ③外 橙7.5Y6/6 内 黒N2/0	内黒。外面 口縁部横撫で、体部横位整形、底部右回転糸切り未調整、摩滅で回転方向不明。 内面 口縁部横撫で、底部～体部縦方向荒磨き。	体部1/2欠。
2	須恵器 杯	＋2	口径 14.0 底径 6.8 器高 3.8	①細砂、粗砂 ②還元焔 ③黄灰2.5Y6/1	体部に丸みをもつ。外面 体部横位整形・最下位回転削り。底部右回転糸切り後周辺回転篦削り。 内面 横位整形。	体部1/2欠。
3	須恵器 杯	＋7～8	口径 13.5 底径 7.6 器高 3.9	①細砂、粗砂 ②還元焔、聚縮 ③灰7.5Y5/1	外面 体部横位整形、底部右回転糸切り後撫で、焼成前に刻書「十」。 内面 横位整形。	体部一部欠。 刻書。
4	須恵器 杯？	埋没土	口径 — 底径 — 器高 —	①細砂 ②還元焔 ③灰白5Y7/1	外面 横位整形。 内面 横位整形、墨書有るが判読不能。	体部破片。墨書。
5	灰釉陶器 椀	埋没土	口径 — 底径 (7.7) 器高 3.7+	① ② ③灰白7.5Y8/1	口縁部～体部中位まで施釉。底部内面も釉がかかるが体部との厚さの差が明瞭であり付着物があることから最上位で焼成された自然釉とみる。高台は三日月高台である。	体部～高台1/8残。

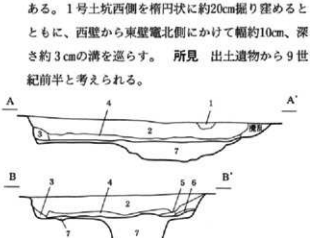
6	灰釉陶器 椀	埋没土	口径(16.1) 底径　7.3 器高　5.6	① ② ③灰白2.5Y7/1	体部は緩く内彎し、口縁部は小さく外反する。口縁部灰釉を薄く浸けがけ。高台はやや丸みを帯びた三日月高台。東濃。	体部1/2欠。
7	須恵器 長頸壺	＋6～8	口径(12.2) 底径　－ 器高　8.2+	①細砂、粗砂 ②還元焔、竪横 ③灰5Y6/1	外面　横撫整形。 内面　横撫整形。	頸部1/2残。
8	石　器 こも編み石	＋1	長さ 10.7　幅 4.3　厚さ 2.2 重量 127.7　石材 緑色凝灰岩	自然石を使用。全体に丸みをもつ。	自然石を使用。L字形に欠けている。	完形。
9	石　器 こも編み石	床面直上	長さ 9.9　幅 4.2　厚さ 3.5 重量 153.2　石材 デイサイト	自然石を使用。全体に丸みをもつ。端部が欠けているが、使用時の欠損かも不明。	自然石を使用。全体に丸みをもつ。端部が欠けているが、使用時の欠損かも不明。	端部欠。
10	石　器 こも編み石	床面直上	長さ 9.2　幅 5.2　厚さ 2.8 重量 164.2　石材 緑色凝灰岩	自然石を使用。全体に丸みをもつ。端部が欠けているが、使用時の欠損かも不明。	自然石を使用。L字形に欠けている。	端部欠。
11	石　器 こも編み石	＋2	長さ 9.8　幅 4.9　厚さ 3.6 重量 174.7　石材 砂岩	自然石を使用。L字形に欠けている。	自然石を使用。L字形に欠けている。	完形。
12	石　器 こも編み石	床面直上	長さ 9.9　幅 3.8　厚さ 3.5 重量 153.2　石材 緑色凝灰岩	自然石を使用。「く」の字状を呈する。	自然石を使用。「く」の字状を呈する。	完形。
13	石　器 こも編み石	＋1	長さ 12.5　幅 5.3　厚さ 3.3 重量 195.3　石材 粗粒輝石安山岩	自然石を使用。扁平だが一方の端部が膨らみをもつ。	自然石を使用。扁平だが一方の端部が膨らみをもつ。	完形。

37号住居(PL.37・38・73)

位置　295－995，295・300－000　**重複**　なし。**形状**　隅丸長方形で南壁が膨らむ。　**規模**　3.89×2.75m　**面積**　8.7m²　**方位**　7°　**床面**　確認面から39cm下で床面となる。明確な貼床層はないが全体に平坦である。南壁から約150cmのびるスロープを検出した。入り口施設に関する構造が考えられる。27号住居に同様の構造が認められる。　**壁溝**　なし。**竈**　東壁やや南寄りに設置。楕円状の掘り方を設け、ロームで形状を整える。袖はロームで構築し、左約30cm、右約20cm残存していた。燃焼部は長さ約50cm、幅約30cmで壁付近に位置し、内壁掘り方のピットに礫を据えて補強する。　**貯蔵穴**　なし。代わりに須恵器甕の胴部下半を床面に据えて使用する。　**柱穴**　確認できなかった。スロープ下端西側の扁平な円礫（S１）は床面に据えられており、礎石の可能性がある。　**遺物**　土器は竈燃焼部に分布が集中する。土師器甕、須恵器杯・高台付皿・甕、銅製鈴などのほか、図示していないが小型の鉄滓が床上３cmから出土した。スロープ上面からモミ属の板状炭化材、その西脇床面から樹種不明の網代状炭化材が出土し、周囲にケヤキ・ススキ・ウコギ属の炭化材が分布している。また、竈埋没土下層及び住居埋没土からイネ・コムギ・オオムギの炭化胚乳などを、貯蔵甕埋没土からアワの炭化胚乳などを検出した。　**掘り方**　床面から４cm下で掘り方面となる。床下土坑を２基、ピットを１基検出した。規模は１号土坑　102×84×53cm　２号土坑　126×115×52cm　ピット34×30×40cmである。１号土坑西側を楕円状に約20cm掘り窪めるとともに、西壁から東壁竈北側にかけて幅約10cm、深さ約３cmの溝を巡らす。　**所見**　出土遺物から９世紀前半と考えられる。

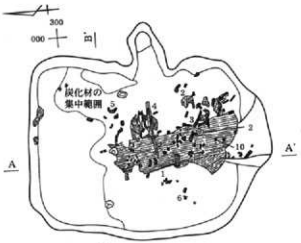


37号住居生活面

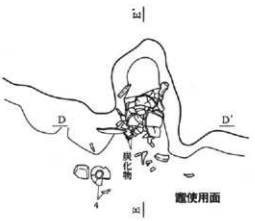


37号住居

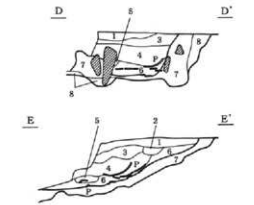
1．黒褐色土。FP・Kk を少量含む。
2．黒褐色土。ロームブロックを少量含む。
3．黒褐色土。ロームブロックを微量含む。
4．黒褐色土。炭化物を多量含む。
5．黒褐色土。やや粘質。灰白色粘土を微量含む。
6．黒褐色土。やや粘質。
7．黒褐色土。ロームブロックを少量含む。

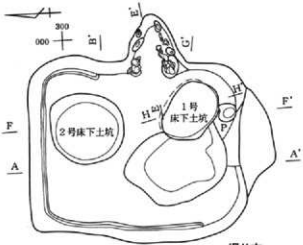


出土炭化材分布図



竈使用面

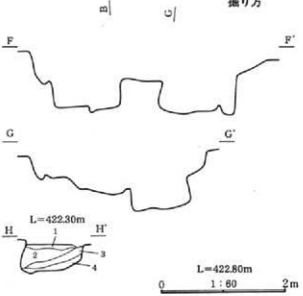




掘り方

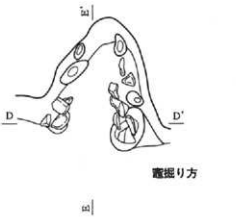
37号住居竈

1．黒褐色土。FPを少量含む。
2．褐色土。焼土粒をやや多量含む。
3．暗褐色土。ローム粒・焼土粒を少量含む。
4．黒褐色土。ローム粒・炭化物を少量含む。
5．暗褐色土。ロームブロック・粒を多量含む。
6．黒褐色土。焼土粒・炭化物をやや多量、ローム粒を少量含む。
7．鈍い黄褐色土(ローム)。袖部。
8．黄褐色土(ローム)。



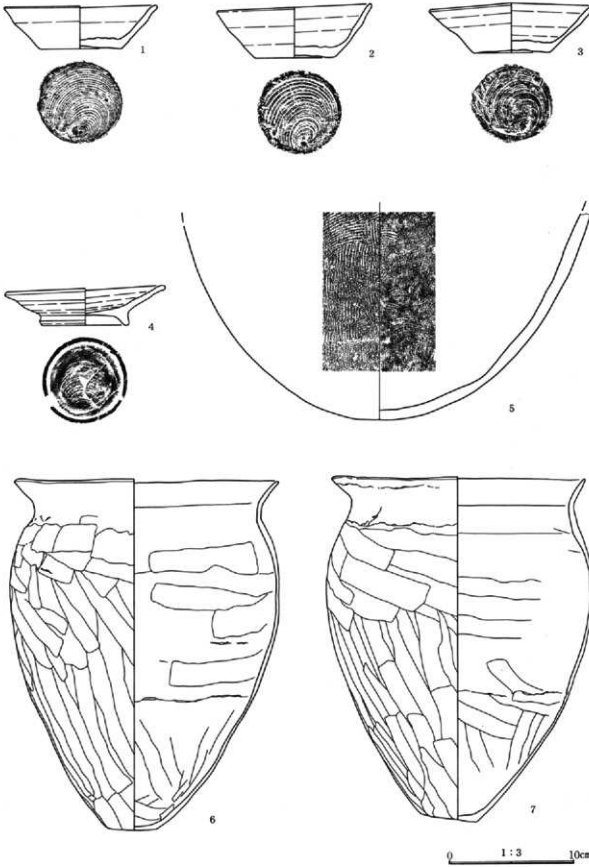
37号住居1号床下土坑

1．暗褐色土。焼土粒をやや多量含む。
2．暗褐色土。ロームブロックを多量含む。
3．黒褐色土。炭化物を少量含む。
4．黒褐色土。ロームブロック・FPを少量含む。



竈掘り方

L=422.80m
0
1:30
1m



37号住居出土遺物

37号住居出土遺物

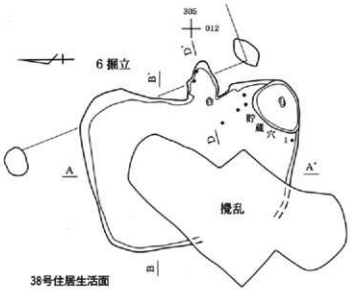
0　1:2　5cm

37号住居遺物観察表

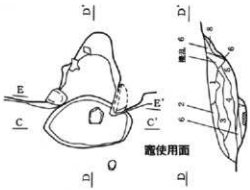
番号	種類器種	出土レベル	法量	①釉土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態備考
1	須恵器 杯	＋2～8	口径 12.1 底径 6.4 器高 3.4	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰黄2.5Y7/2	全体に淡く燻し状の吸炭。 外面　体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	完形。
2	須恵器 杯	＋2	口径 12.3 底径 6.4 器高 4.0	①粗砂、細礫 ②酸化焔気味 ③橙5YR6/6	底部を除き全体に淡く燻し状の吸炭。 外面　体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	体部1/4欠。
3	須恵器 杯	床面直上～＋5	口径 13.1 底径 6.0 器高 3.9	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰白2.5Y7/1	内面底部と体部の変換点が明瞭。斑に淡く燻し状の吸炭。 外面　体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	体部一部欠。 籾田製か。
4	須恵器 高台付皿	＋2	口径 12.7 底径 7.0 器高 2.9	①細砂、粗砂 ②酸化焔気味 ③明黄褐10YR7/6	口縁付近がやや絞られる。斑に淡く燻し状の吸炭。外面　轆轤整形、底部右回転糸切り、高台周縁貼り付け時の回転撫で。内面　轆轤整形。	ほぼ完形。
5	須恵器 甕	床面直上	口径 — 底径 — 器高 16.2+	①粗砂、細礫、中礫 ②還元焔、発色 ③暗灰 N3/0	外面　平行叩き。 内面　同心円状の当て具痕。	胴部下半残。
6	土師器 甕	竈使用面直上～＋5	口径 21.0 底径 4.0 器高 27.5	①粗砂 ②普通 ③純い橙7.5YR6/4	口縁弱い「コ」の字状。外面　口縁部横撫で、胴部上半左・左上方向箆削り、下半下方向箆削り、底部箆削り。 内面　口縁部横撫で、胴部箆撫で。	口縁部～胴部一部欠。
7	土師器 甕	竈＋3～5	口径 20.1 底径 4.3 器高 27.2	①粗砂 ②普通 ③純い橙7.5YR6/4	口縁弱い「コ」の字状。外面　口縁部横撫で、胴部上半左方向・下半下方向箆削り、底部箆削り。 内面　口縁部横撫で、胴部箆撫で。	体部1/2欠。
8	銅製品 鈴	埋投土	高さ 1.6+　幅 (2.6)　厚さ 0.06 重量 2.0		裏面に鉄の硝酸れ状のものが付着。	破片。
9	鉄製品	＋1	長さ 8.0+　幅 2.2～1.3 厚さ 0.1　重量 36.9		板状のものを丸めて端部を重ねる。木質と鉄片が付着。	一部欠。 分析。
10	鉄製品	＋10	長さ 9.1+　幅 1.8　厚さ 0.1 重量 40.8		板状のものを丸めて端部をわずかに重ねる。	両端欠。 分析。

38号住居(PL.39･74)

位置　300・305—010・015　**重複**　6号掘建柱建物と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状**　西壁が東壁より短い隅丸長方形。北西コーナーの上端が外側に丸く張り出すが、攪乱により削られたものである。西壁は確認面が低いために上端が甘く、南西コーナーは重複する複数の攪乱により確認できなかった。　**規模**　3.32×2.48m　**面積**　7.8m²(推定)　**方位**　—8°　**床面**　確認面より33cm下で床面となる。黒褐色土を用いて4～12cmの貼床を施し、全体に平坦である。　**壁溝**　なし。　**竈**　東壁やや南寄りに設置。楕円状の掘り方を設け、燃焼部奥の立ち上がり部分と内壁に黒褐色土を貼り、ほかは掘り方に造作を加えずそのまま使用する。袖は確認できなかったが、袖と住居壁の境付近にピットを設けて礫を据え、補強とする。燃焼部は長さ約60cm、幅約40cmで壁付近に位置する。手前の焚き口を70×40×5cmの楕円形に掘り窪めて中に盤状の礫を置き、支脚代わりにしたものと思われる。　**貯蔵穴**　南東コーナーに設置。規模は88×62×10cmである。　**柱穴**　確認できなかった。　**遺物**　竈付近に分布する。土師器小型甕などが出土した。また、住居埋設土からモモ・スモモの炭化核、コムギ・オオムギの炭化胚乳などを、竈埋没土からイネ・コムギの炭化胚乳、マメ科の炭化種子などを検出した。　**掘り方**　床面から約15cmで掘り方面となる。北西コーナーに133×102×30cmの床下土坑を設け、北壁沿いに幅約15cmの浅い溝を巡らす。　**所見**　出土遺物から9世紀後半と考えられる。



38号住居生活面



L=422.20m

0　1:30　m

38号住居

1．黒褐色土。ローム粒・FPを少量含む。
2．黒褐色土。しまりが強い。ロームを間層にはさむ。貼床。
3．黒褐色土。しまりが強い。FPを少量含む。貼床。
4．暗褐色土。ロームブロックを少量含む。
5．黒色土。ロームブロックを少量含む。
6．黒色土。ロームブロックを多量含む。

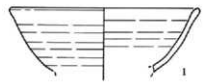
38号住居竈

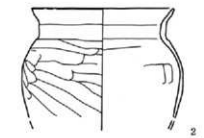
1．黄褐色土(ローム)。
2．暗褐色土。ローム粒を少量含む。
3．黒褐色土。ローム粒・焼土粒を少量含む。
4．黒褐色土。FPを少量含む。
5．黄褐色土(ローム)。焼土ブロックをやや多量含む。
6．黒褐色土。炭化物を少量含む。
7．黒褐色土。炭化物・灰をやや多量含む。
8．黒褐色土。

掘り方

L=422.10m

0　1:60　2m





0　1:3　10cm

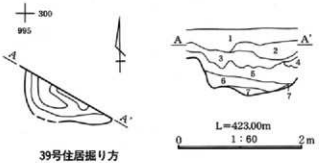
38号住居出土遺物

38号住居遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	法量	①軸土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 椀 ?	+12	口径(15.0) 底径 — 器高 5.0+	①粗砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③灰黄2.5Y7/2	外面 轆轤整形。 内面 轆轤整形。	体部1/4残。
2	土師器 小型壺	埋設土	口径(11.2) 底径 — 器高 8.7+	①粗砂 ②普通 ③純い赤褐5YR5/4	口縁弱い「コ」の字状。 外面 口縁部横撫で、胴部左方向篦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部篦撫で。	口縁部～胴部上半1/4残。

39号住居(PL.39)

位置 295—990 **重複** なし。 **規模** 調査区内で南壁1.24m 西壁0.70m。 **面積** 調査区内で0.6㎡。 **床面** 確認できなかった。 **壁溝** 確認できなかった。 **貯蔵穴** 確認できなかった。 **柱穴** 確認できなかった。 **遺物** 出土しなかった。 **掘り方** 確認面から38cm下で掘り方面となる。調査区界の壁で59cm確認した。西壁から南壁にかけてL字状に約15cm高く掘り残している。 **備考** 本線部分D区10号住居(9世紀後半)南東コーナーにあたる。



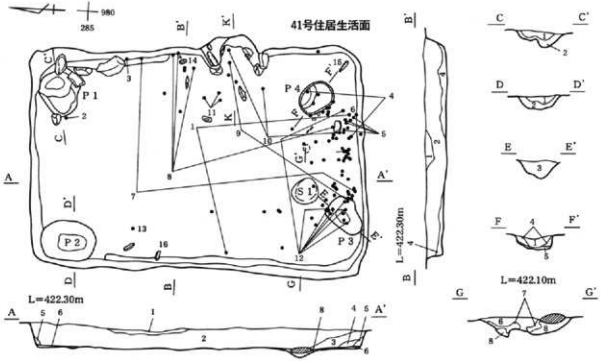
39号住居掘り方

39号住居
1．表土。
2．黒色土。FPを少量、ロームブロックを微量含む。
3．黒褐色土。ロームブロック・FPを少量含む。
4．黒色土。
5．黒褐色土。ロームブロックを少量、FPを微量含む。
6．黒褐色土。ロームブロック・FPを微量含む。
7．ロームブロックを多量の黒色土で充填。

41号住居(PL.39・40・74)

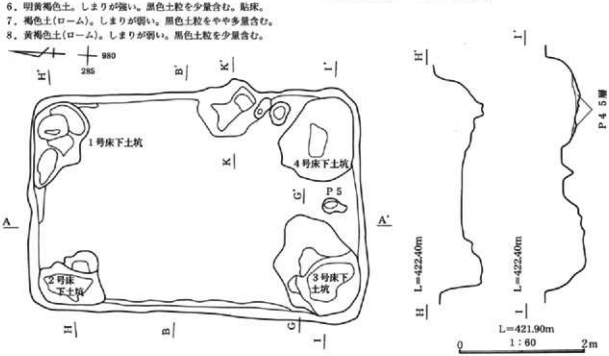
位置 280・285—980 **重複** なし。 **形状** 長方形。 **規模** 5.27×3.68m **面積** 18.6㎡ **方位** —5° **床面** 確認面から48cm下で床面となる。各コーナー以外は地山のロームを平に掘り込んでそのまま床面とする。 **壁溝** 東壁の竈北側及び西壁沿いに幅5～15cm、深さ1～5cmで巡る。 **竈** 東壁南寄りに設置する。住居側に弧を描く半円状の掘り方を埋めて形状を整える。袖は左右とも約30cm残存しており、掘り方のピットに礫を据えて芯材とする。燃焼部は壁内に位置し、長さ70cm、幅40cmで内壁には礫を用いる。底面に灰層が確認できる。燃焼部手前に炭が、両袖手前には竈構築土と思われる粘土が分布する。 **貯蔵穴** 確認できなかった。南東コーナーのピットは柱穴と思われる。 **柱穴** 各コーナー付近にピットを4基検出した。1・2号ピットはほぼコーナーに接するが3・4号ピットはやや離れた位置にあり、4基を結んだラインは台形となる。1・4号ピットは中段をもち、4号ピットの底面には粘土が貼られていた。規模はP1 70×62×31cm P2 86×62×26cm P3 66×46×22cm P4 56×45×24cmである。3号ピット北側の床面から扁平な円礫(S1)を検出した。半分床に埋め込まれており、頂部は滑らかであった。礎石あるいは出土した敲石に対応する敲台石のような作業台の可能性がある。 **遺物** 南壁付近に分布が集中するが、3層上面からの出土が多い。土師器甕、須恵器杯・蓋・壺、砥石、敲石などが出土した。また、北東コーナー付近の床面よりやや高い位置から用途不明の礫がまとまって出土し、竈埋没土からイネ・コムギ・オオムギ・アワの炭化胚乳、クリの炭化果実などを、竈埋没土・竈掘り方埋土からシロザ近似種・エノキグサ炭化種子を検出した。 **掘り方** 各コーナーに土坑を設けて柱穴の掘り方とする。いずれも壁面に接して掘り込まれるが、南西コーナーの土坑最深部とピットの位置は異なる。また、3・4号土坑の中間に5号ピットを検出した。規模は1号

土坑　140×76×31cm　2号土坑　110×90×26cm　3号土坑　166×126×34cm　4号土坑　136×118×24cm　P5　39×24×17cmである。　**所見**　出土遺物から9世紀前半と考えられる。

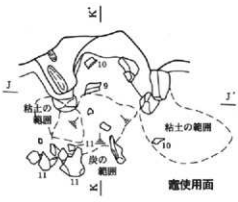


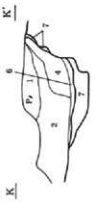
41号住居
1．黒色土。ローム粒を少量含む。
2．暗褐色土。ロームブロックをやや多量含む。
3．黒褐色土。焼土粒をやや多量、炭を少量含む。
4．黒色土。ローム粒を少量含む。
5．褐色土(ローム)。
6．明黄褐色土。しまりが強い。黒色土粒を少量含む。貼床。
7．褐色土(ローム)。しまりが弱い。黒色土粒をやや多量含む。
8．黄褐色土(ローム)。しまりが弱い。黒色土粒を少量含む。

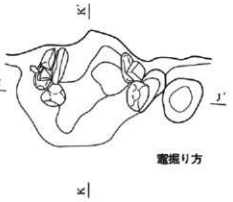
41号住居ピット
1．黒褐色土。ローム粒をやや多量含む。
2．暗褐色土(ローム)。黒色土ブロックをやや多量含む。
3．鈍い黄褐色土。黒色土ブロックを多量含む。
4．ロームブロックと灰白色粘土の混土。
5．黄褐色粘土。ローム粒を少量含む。

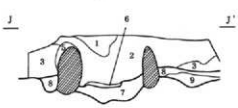


掘り方



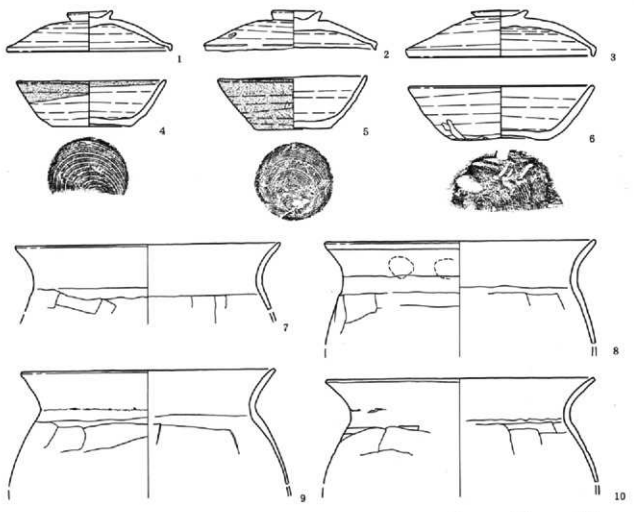




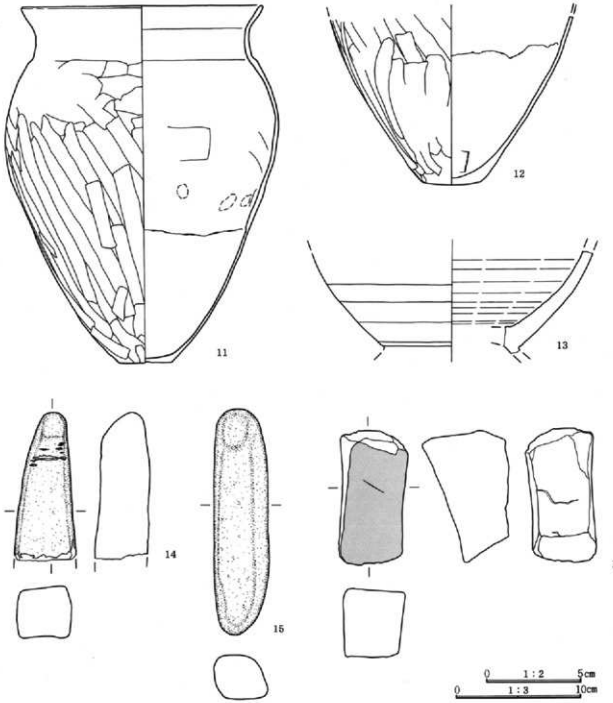


41号住居竈

1．褐色土(ローム)。黒色土粒を少量含む。
2．黒褐色土。ローム粒・焼土粒を少量含む。
3．暗褐色土。ローム粒をやや多量含む。
4．黒褐色土。焼土粒をやや多量、炭粒を少量含む。
5．褐色土。やや粘質。
6．黒褐色土。焼土粒・炭化物・灰を多量に含む。
7．黒褐色土。ローム粒を多量、焼土粒・炭粒を少量含む。
8．黒色土。ロームブロックを少量含む。
9．黒褐色土。ローム粒を少量含む。



41号住居出土遺物



41号住居出土遺物

41号住居遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 蓋	＋7～15	摘み径3.6 口径 13.2 器高 3.2	①細砂 ②還元焔 ③灰 N5/0	環状摘みの中央部やや盛り上がる。外面に自然釉付着。 外面　轆轤整形、天井部摘み付近右回転篦削り。 内面　右回転轆轤整形。	体部3/8欠。
2	須恵器 蓋	＋34	摘み径3.7 口径(13.6) 器高 3.1	①粗砂 ②還元焔 ③灰7.5Y6/1	環状摘みの中央部やや盛り上がる。口縁部外面沈線状に窪む。外面　轆轤整形後天井部右回転篦削り、天井部摘み付近貼り付け時の撫で。内面　轆轤整形。	1/2残。
3	須恵器 蓋	＋7	摘み径4.0 口径(14.4) 器高 3.7	①粗砂、雲母 ②還元焔 ③灰 N5/0	環状摘み。内面に自然釉付着。 外面　轆轤整形後天井部右回転篦削り。 内面　轆轤整形。	口縁部3/4欠。 内面に重ね焼き痕径8.6。

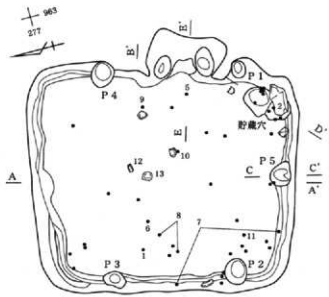
4	須恵器 杯	＋5～6	口径(11.8) 底径 6.4 器高 3.7	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰白2.5Y8/2	体部最下位が絞られる。口縁部内外面淡く吸炭。 外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整。 内面 轆轤整形。	1/2欠。
5	須恵器 杯	＋11～14	口径 11.8 底径 6.2 器高 4.2	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③外 黒5Y2/1 内 鈍い黄橙10YR7/4	外面のみ体部吸炭。 外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整。 内面 轆轤整形。	体部一部欠。
6	須恵器 杯	＋7	口径(14.6) 底径 (7.6) 器高 4.3	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰10Y5/1	外面 体部右回転轆轤整形、底部回転糸切り後周辺を不定方向に雑な手持ち篦削り・凹凸が激しい。 内面 轆轤整形。	1/2残。
7	土師器 甕	＋5～14	口径(21.0) 底径 — 器高 5.2+	①粗砂 ②普通 ③鈍い赤褐5YR5/4	口縁部「く」の字状で緩やかに括れる。 外面 口縁部横撫で、胴部左方向篦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部横方向篦撫で。	口縁部～胴部最上位1/4残。
8	土師器 甕	＋1～11	口径(21.2) 底径 — 器高 8.1+	①粗砂 ②普通 ③鈍い赤褐5YR5/4	口縁弱いコ字状。口縁端部が内側に屈曲。 外面 口縁部横撫で、胴部左方向篦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部横方向篦撫で。	口縁部～胴部上位1/2残。
9	土師器 甕	電＋6＋26	口径(20.0) 底径 — 器高 9.0+	①粗砂 ②普通 ③明赤褐5YR5/6	口縁「く」の字状。 外面 口縁部横撫で、胴部左方向篦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部篦撫で。	口縁部～胴部上位1/4残。
10	土師器 甕	電使用面 直上＋14	口径(20.9) 底径 — 器高 8.2+	①粗砂 ②普通 ③鈍い橙7.5YR6/4	口縁「く」の字状。口縁部外面が肥厚。 外面 口縁部横撫で、胴部左方向篦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部篦撫で。	口縁部～胴部上位1/4残。
11	土師器 甕	＋4	口径(19.2) 底径 4.2 器高 28.0	①粗砂 ②普通 ③明赤褐5YR5/6	口縁弱いコ字状。外面 口縁部横撫で、胴部上位左方向・以下右下方向篦削り。内面 口縁部横撫で、胴部横方向篦撫で、指頭圧痕・紐作り痕有り。	口縁部～胴部上位7/8欠。
12	土師器 甕	＋13～25	口径 — 底径 (4.6) 器高 13.2+	①細砂、粗砂 ②普通 ③鈍い褐7.5YR5/3	外面 胴部縦方向篦削り、底部篦削り。 内面 篦撫で、紐作り痕有り。	胴部下半～底部残。
13	須恵器 壺	＋25	口径 — 底径 — 器高 7.8+	①粗砂 ②酸化焔気味 ③灰白2.5Y7/1	外面 左方向回転篦削り。 内面 轆轤成形。	胴部下位1/4残。高台欠。
14	石器 敲石	＋4	長さ 11.7 幅 4.9 厚さ 4.1 重量 398 石材 細粒輝石安山岩		自然礫を使用。横方向の凹みをもち、先端に打痕。もう一方の端部の欠けは人為であるか不明。	
15	石器 敲石	＋1	長さ 17.8 幅 4.3 厚さ 3.5 重量 462 石材 細粒輝石安山岩		自然礫を使用。両端に打痕。	完形。
16	石製品 砥石	床面直上	長さ 7.0 幅 3.6 厚さ 4.4～2.7 重量 132 石材 砥沢石		1面を使用。端部が欠ける。	一部欠。

42号住居(PL.41・74・75)

位置 270・275—960・965 **重複** なし。 **形状** 隅丸方形。 **規模** 4.40×3.56m **面積** 13.8㎡ **方位** 16° **床面** 確認面から46cm下で床面となる。地山のロームを平に掘削してそのまま床面とし、特に深く掘り込んだ箇所には5～15cmの貼床を施す。

壁溝 竈付近を除き幅10～20cm、深さ1～8cmで巡る。北西コーナーでは壁と壁溝の間に幅10cmほどの平坦面がある。 **竈** 東壁南寄りに設置。南北に長い楕円状の掘り方を設ける。袖は残存していなかったが地山を一部掘り残して壁付近が高まりとなっており、位置が確認できる。燃焼部は壁付近から壁外に位置する。内壁あるいは袖の芯に利用した礫の抜き取り痕とみられるピットが検出され、この上端間の距離は約30cmである。 **貯蔵穴** 南東コーナーに設置。規模は104×60×32cmだが、南北に2基が並んでいる。堆積土層の切り合い関係から南→北と作り直した可能性がある。堆積土上面から竈天井の構築材と思われる板状の礫が出土した。 **柱穴** 東西各壁沿いに2基、南壁沿いに1基のピットを検出。全体に位置が南に寄る。主柱穴は1～4号ピットと考えられるが、5号ピットの性格は不明である。粘土を含む土で柱を押さえる。規模は P1 30×22×41cm P2 40×32×53cm P3 33×22×47cm P4 41×37×50cm P5 40×32×12cm。 **遺物** 土師器甕・小型甕、須恵器杯・蓋・長頸壺、敲石・敲台石が出土した。また、1号床下土坑埋土からイネ・コムギ・アワ・キビの炭化胚乳などを、貯蔵穴周辺の埋没土からイネ・オオムギ・アワ・キビの炭化胚乳などを検出した。

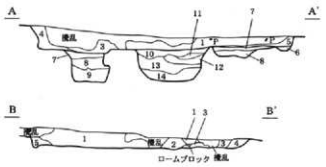
掘り方 中央及びその北側に床下土坑を3基検出した。3号土坑は2号土坑を埋め戻した後に掘削して埋め戻す。規模は1号土坑 136×116×49cm 2号土坑 136×110×47cm 3号土坑 116以上×90×48cmである。1号土坑の南側も不整形に約30cm掘り窪める。 **所見** 出土遺物から9世紀中葉と考えられる。



42号住居生活面

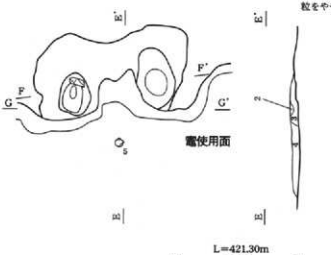
42号住居

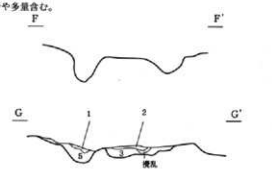
1. 黒褐色土。ローム粒を少量、FP・焼土粒を微量含む。
2. 黒褐色土。ロームブロック・黄褐色粘土ブロックをやや多量、FP を微量含む。
3. 暗褐色土。ローム粒をやや多量含む。
4. 暗褐色土。しまりが弱い。ローム粒をやや多量、焼土粒を少量含む。
5. 黒褐色土。しまりが弱い。ローム粒を少量含む。
6. 暗褐色土。ローム粒を少量含む。pit5埋戻土。
7. 暗褐色土。しまりが強い。ロームブロックを多量、焼土粒・黄褐色粘土粒を微量含む。貼床。
8. 暗褐色土。ロームブロックをやや多量、焼土粒・黄褐色粘土粒を微量含む。
9. 暗褐色土。ロームブロックを多量、焼土粒・黄褐色粘土粒を微量含む。
10. 暗褐色土。ロームブロック・褐色粘土ブロック・焼土ブロック・炭化物を少量含む。貼床。
11. 褐色粘土。
12. ロームブロックをやや多量の暗褐色土で充填。
13. ロームブロックを多量の暗褐色土で充填。
14. 褐色土(ローム)。
15. 暗褐色土。粘土ブロック・焼土ブロックをやや多量含む。
16. 暗褐色土。ローム粒をやや多量含む。
17. 暗褐色土。ローム粒を多量含む。
18. 黄褐色土(ローム)。
19. 暗褐色土。しまりが強い。ローム粒を多量含む。
20. 暗褐色土。ロームブロック・粘土ブロックを多量含む。
21. 暗褐色土。粘土ブロックを少量、ロームブロックを微量含む。
22. 黄褐色土(ローム)。暗褐色土ブロックをやや多量含む。
23. 粘土。ロームブロックを少量含む。
24. 黄褐色土(ローム)。暗褐色土ブロックを少量含む。
25. 暗褐色土。ロームブロック・粘土ブロックをやや多量含む。
26. ロームブロック・粘土ブロック・黒色土の混土。しまりが強い。



42号住居貯蔵穴

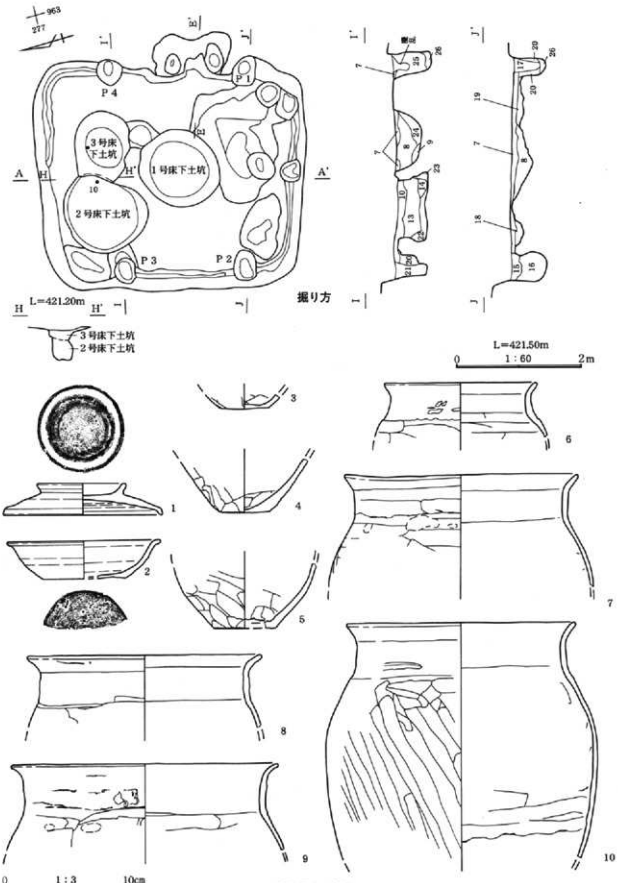
1. 暗褐色土。しまりが強い。焼土粒・炭化物を少量含む。
2. 暗褐色土。ロームブロックをやや多量、焼土粒を微量含む。
3. 暗褐色土。しまりが弱い。ローム粒をやや多量含む。



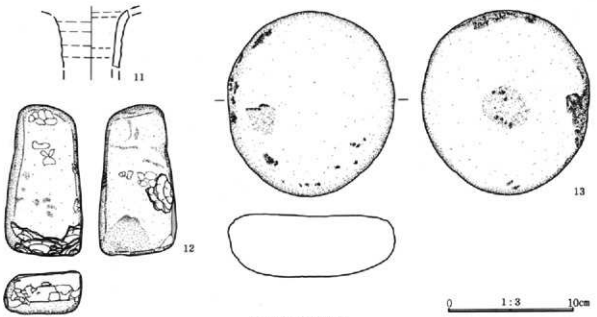


42号住居竈

1. 黒褐色土。ロームブロックを少量含む。
2. 焼土。
3. 暗赤褐色土。焼土粒をやや多量、炭化物を少量含む。
4. 黒褐色土。しまりが強い。FP・焼土粒を少量含む。
5. 黒褐色土。


963
277
P 4
P 1
3号床下土坑
1号床下土坑
2号床下土坑
P 3
P 2
A
A'
H
H'
L=421.20m
3号床下土坑
2号床下土坑
掘り方
L=421.50m
0
1:60
2m
1:3
10cm

42号住居出土遺物



42号住居出土遺物

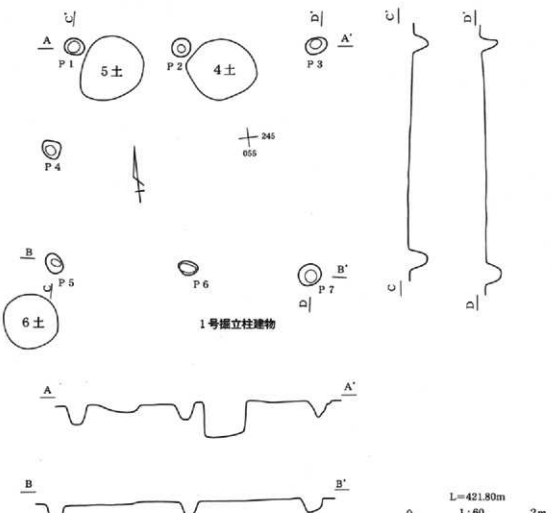
42号住居遺物観察表

番号	種別器種	出土レベル	法量	①軸土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態備考
1	須恵器 置	＋13	胴径7.0 口径 12.6 器高 2.6	①粗砂 ②還元焔 ③灰白5Y7/1	摘み径が大きい。外面　体部轆轤整形、天井部右回転糸切り・切り直し板あり、摘み両縁貼り付け時の回転痕で。内面　轆轤整形。	外面炭に覆し状の吸炭。体部1/4欠。
2	須恵器 杯	貯蔵穴 －23	口径(12.2) 底径(6.4) 器高 3.1	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰10Y4/1	口縁部外反。外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整・切り直し板あり。 内面　轆轤整形。	1/2残。
3	土師器 甕	堆積土	口径 － 底径 3.9 器高 1.2+	①粗砂 ②普通 ③純い褐7.5YR5/3	外面　胴部下方向篦削り、底部篦削り。 内面　篦撫で。	胴部最下位～底部1/2残。
4	土師器 甕	堆積土	口径 － 底径(4.0) 器高 4.2+	①粗砂 ②普通 ③純い赤褐5YR5/4	外面　篦削り。 内面　篦撫で。	胴部下位～底部1/4残。
5	土師器 甕	竈＋2	口径 － 底径 4.9 器高 5.1+	①粗砂、細礫 ②普通 ③純い黄橙10YR7/4	外面　胴部下位左方向篦削り、最下位右下・右方向篦削り、底部篦削り。 内面　横方向篦撫で。	胴部下位～底部3/4残。
6	土師器 小型甕	＋13	口径(12.0) 底径 － 器高 4.7+	①粗砂 ②普通 ③純い黄褐10YR5/4	口縁弱いコの字状。 外面　口縁部横撫で、胴部左方向篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部撫で。	口縁部～胴部最上位1/4残。
7	土師器 甕	＋7～29	口径(18.3) 底径 － 器高 8.8+	①粗砂 ②普通 ③橙7.5YR6/6	口縁「コ」の字状、口縁端部に面をもつ。 外面　口縁部横撫で、胴部左方向篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横方向篦撫で。	口縁部～胴部上位1/2残。
8	土師器 甕	＋3～9	口径 18.5 底径 － 器高 5.7+	①粗砂 ②普通 ③明赤褐5YR5/6	口縁弱いコの字状。 外面　口縁部横撫で、胴部左方向篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部撫で。	口縁部～胴部最上位1/4残。
9	土師器 甕	＋6	口径(21.0) 底径 － 器高 6.8+	①粗砂 ②普通 ③橙5YR6/6	口縁崩れた「コ」の字状。 外面　口縁部横撫で、胴部左方向篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横方向篦撫で。	口縁部～胴部最上位1/4残。
10	土師器 甕	＋5　2 母床下土 坑底面	口径(18.0) 底径 － 器高 16.6+	①粗砂、細礫 ②普通 ③明赤褐5YR5/6	口縁弱いコの字状。外面　口縁部横撫で、胴部最上位左方向・以下右下方向篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横方向篦撫で。	口縁部1/8、胴部上位1/2残。
11	須恵器 長頸壺	床面直上	口径 1.4 底径 － 器高 4.6+	①粗砂 ②還元焔、竪撫 ③N5Y4/1	外面　轆轤整形、轆轤目顕著。 内面　轆轤整形、外反部に淡く自然釉が付着。	頸部1/2残。
12	石器 敲石	床面直上	長さ 11.9　幅 6.2　厚さ 3.3 重量 430　石材 文象斑岩		両端に打痕。一方の端部が欠ける。	
13	石器 敲台石	＋7	長さ 14.5　幅 13.2　厚さ 5.0 重量 1375　石材 凝灰質砂岩		両面を使用。端部に打痕。	完形。

3．掘立柱建物

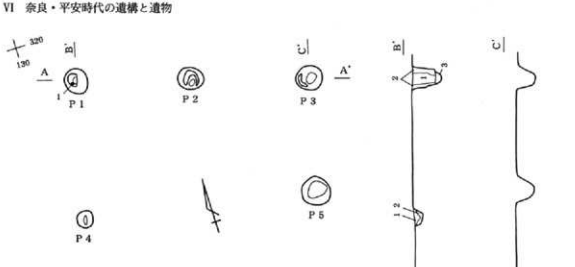
1号掘立柱建物(PL.42)

位置 240・245—050・055 **重複** 4・5号土坑→1号掘立柱建物 **形状** 柱間は1間×2間で比較的整った長方形である。P6はP1～5間よりやや外側に位置する。P3～7間に柱穴は確認できなかった。 **方位** —80° **規模** 4.03×3.70m P1 33×26×32cm P2 30×28×26cm P3 35×24×30cm P4 32×30×26cm P5 32×24×26cm P6 31×22×26cm P7 38×33×23cm **埋没土** FP・Kkを含む黒色土を主体とする。 **遺物** なし。 **所見** 埋没土から平安時代のものと考えられる。



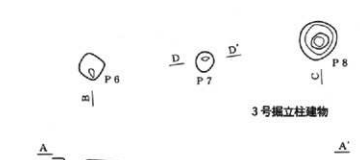
3号掘立柱建物(PL.42・75)

位置 310・315—125・130 **重複** なし。 **形状** 柱間は2間×2間で西辺より東辺がやや短い台形である。 **方位** 14° **規模** 4.40×3.78m P1 41×33×42cm P2 42×36×31cm P3 42×39×28cm P4 31×26×19cm P5 46×43×28cm P6 42×40×45cm P7 32×28×45cm P8 61×56×34cm **埋没土** 掘り方底面に黒褐色土を貼り、根固めにFP・Kkを含む。 **遺物** P1埋没土中より奈良時代の杯が出土した。 **所見** 埋没土から平安時代以降と考えられる。



3号掘立柱建物

3号掘立柱建物
1．暗褐色土。ロームブロックを多量含む。
2．黒褐色土。FP・Kk を少量含む。
3．黒褐色土。ロームブロックを多量含む。

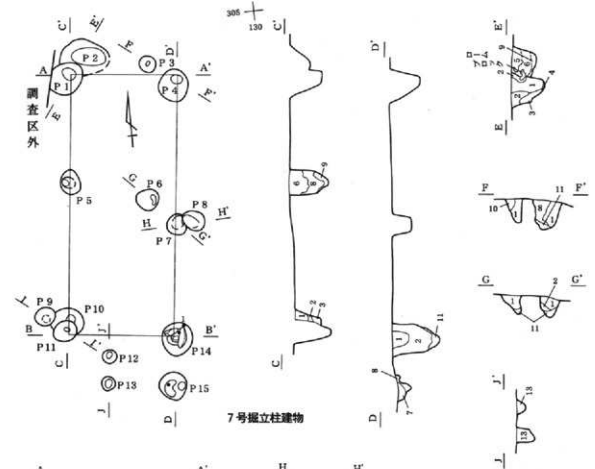


3号掘立柱建物出土遺物

7号掘立柱建物(PL.43・75)

位置　295・300－130　**重複**　なし。東隣に8号掘立柱建物が位置する。　**形状**　1間×2間の南北に長い長方形である。南北に長い掘立柱建物は本遺構のみである。　**方位**　7°　**規模**　4.05×1.75m　P1 60×48×52cm　P2　77×58×43cm　P3　28×26×35cm　P4　52×47×48cm　P5　39×31×56cm　P6　36×33×31cm　P7　径 約33×32cm　P8 37×32×42cm　P9　32×30×20cm　P10　約50×約40×34cm　P11　38×32×60cm　P12　24×22×17cm　P13　23×21×24cm　P14　53×48×76cm　P15　45×42×47cm　**埋没土**　全体に FP・Kk を含む。根固めはロームを含む黒色土、黒褐色土を主体とし、底面付近はロームを多く含む。P14では礫を用いる。P1・10・11・14には、底面に褐色または白色粘土を一部貼っている。P5・14・15は2段に掘り込まれる。　**遺物**　P14埋没土中から平安時代の須恵器蓋・高台が出土した。　**所見**　切り合いを持つピットがあり、建て直しが推測される。周辺のピットは、掘立柱建物を構成するピットの埋没土と同様

の傾向を持つが、性格は不明である。　　出土遺物から平安時代以降のものと考えられる。



7号掘立柱建物

7号掘立柱建物出土遺物

7号掘立柱建物

1．黒色土。ロームブロック・FP・Kkを含む。
2．黒褐色土。FP・Kkを含む。
3．黒褐色土。ロームブロックを含む。
4．鈍い褐色粘土。しまりが強い。
5．暗褐色土。ロームブロックを含む。
6．黒色土。FP・Kkを含む。
7．黒褐色土。ロームブロック・粒を含む。
8．黒色土。ロームブロックを含む。
9．褐色土(ローム)。黒色土ブロックを含む。
10．黒褐色土。FP・Kk・ロームブロック・粒を含む。
11．黒褐色土。ロームを多量、FP・Kkを少量含む。
12．黒色土。ロームブロック・Kkを含む。
13．黒色土。ローム粒・FPを含む。

掘立柱建物出土遺物観察表

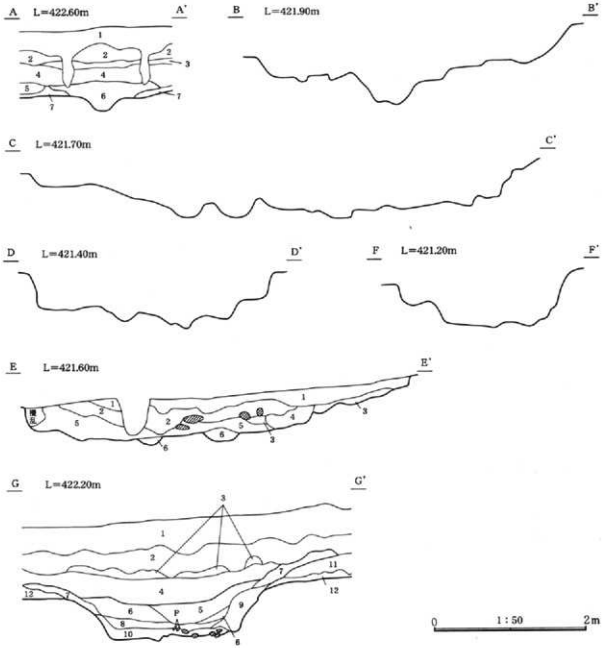
番号	種類 器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
3掘 1	須恵器 杯	埋没土	口径(14.3) 底径(10.0) 器高 4.0	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③黄灰2.5Y5/1	外面 体部轆轤整形、底部右回転篦切り未調整。 内面 轆轤整形。	1/4残。
7掘 1	須恵器 蓋	埋没土	摘み径 — 口径(18.0) 器高 2.6+	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰5Y6/1	外面 轆轤整形、天井部摘み寄り右回転篦削り。 内面 轆轤整形。	天井部～口縁部1/4残

4．溝

2号溝

2号溝(PL.44・75)

位置　390・395—205・210，385・390—215～225　**重複**　なし。　**形状・規模**　北北東から南南西に向かってやや蛇行しながらのびる。谷地に位置し、地形を利用して掘削・拡張を繰り返し行ったものと思われる。北調査区界側は浅く、395—210G付近はテラス状の広がりをもつ。長さ22m、幅0.5～6.4m、深さ10～90cm確認した。　**埋没土**　砂礫・FPを含む黒褐色土を主体とし、上層にはKkを含む。　**遺物**　樽式土器壺・甕・台付甕、土師器甕、須恵器杯・甕・高盤が出土した。いずれも底面から出土するものを含むが、全体量としては須恵器・土師器が多くを占める。古墳時代の土器は破片で僅かに認められる程度である。　**所見**　出土遺物から平安時代のものと考えられる。弥生土器は溝の東に位置する住居等からの流れ込みと思われる。



SPA-A'

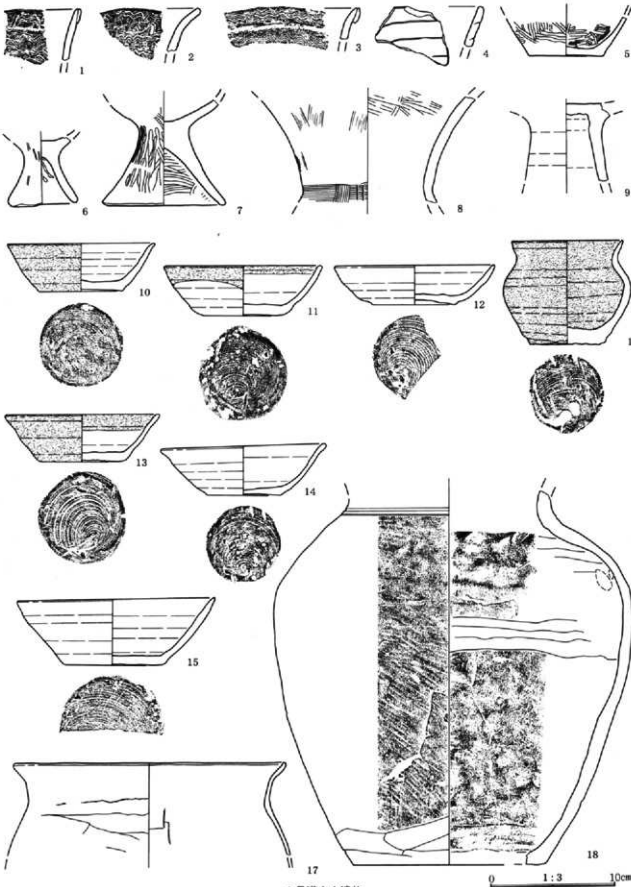
1．表土。
2．黒色土。しまりがやや弱い。Kk を多量、FP を微量含む。
3．Kk の２次堆積層。
4．黒褐色土。しまりがやや弱い。FP を多量、Kk を微量含む。
5．黒色土。しまりが強い。
6．黒褐色土。他層のものよりローリングを受けた FP を少量含む。２号溝の埋没土。
7．黒褐色土。ローム漸移層。

SPE-E'

1．黒褐色土。FP・Kk を少量含む。
2．黒褐色土。しまりがやや弱い。FP を少量含む。
3．暗褐色土。FP を微量含む。
4．黒褐色土。FP を微量含む。
5．暗褐色土。ロームブロックを多量、FP を微量含む。
6．黒褐色土。砂質。FP を多量含む。

SPG-G'

1．表土。
2．黒褐色土。Kk を多量、FP を微量含む。
3．Kk の２次堆積層。
4．黒色土。やや砂質。FP を多量、Kk を少量含む。
5．黒褐色土。砂質。FP を少量含む。
6．黒色土。砂質。FP を多量含む。
7．黒色土。ロームブロック・FP を少量含む。
8．黒褐色土。しまりがやや弱い。FP を多量、細礫を少量含む。
9．黒色土。ロームブロックを多量、FP・細礫を微量含む。
10．黒色土。細礫・中礫を多量、FP を微量含む。
11．黒褐色土。ローム漸移層。
12．明黄褐色土（ローム）。



2号溝出土遺物

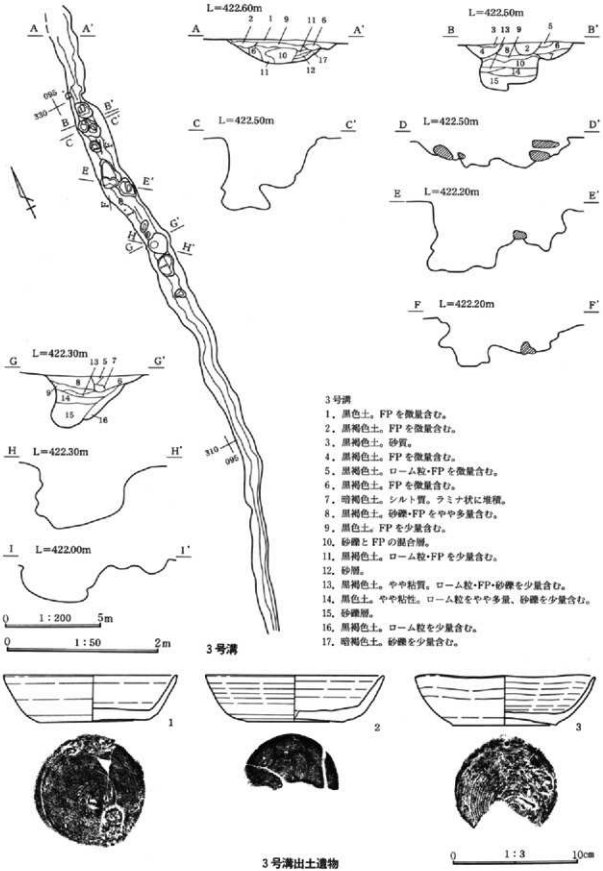
2号溝遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	弥生土器 甕	埋没土	口径 — 底径 — 器高 —	①粗砂 ②普通 ③鈍い黄褐10YR5/3	1段の複合口縁。外面 口縁端部横撫で・口縁部縦方向刷毛後5本単位以上の波状文。 内面 横方向荒磨き。	口縁部破片。
2	弥生土器 甕	埋没土	口径 — 底径 — 器高 —	①粗砂 ②普通 ③鈍い褐7.5YR5/4	外面 口縁端部横撫で・口縁部縦方向刷毛後5本単位以上の波状文。 内面 横方向荒磨き。	口縁部破片。
3	弥生土器 甕	埋没土	口径 — 底径 — 器高 —	①粗砂 ②普通 ③鈍い黄橙10YR6/4	1段の複合口縁。外面 口縁端部7本単位の波状文、口縁部縦方向刷毛後6本単位以上の波状文。 内面 横方向荒磨き。	口縁部破片。
4	弥生土器 甕	埋没土	口径 — 底径 — 器高 —	①粗砂 ②普通 ③明赤褐2.5YR5/6	器表の摩滅が顕著。 外面 4段の輪積み痕を残す。	口縁部破片。
5	弥生土器 甕	+16	口径 — 底径 6.0 器高 2.9+	①粗砂 ②普通 ③鈍い黄橙10YR6/3	外面 胴部縦方向・底下位横方向荒磨き、底部荒磨き。 内面 おもに横方向荒磨き。	胴部下位～底部残。
6	弥生土器 台付甕	+12	口径 — 底径 (5.5) 器高 5.3+	①粗砂、白色鉱物 ②普通 ③鈍い黄橙10YR4/3	器表の摩滅が顕著。 外面 縦方向荒磨き。 内面 台部撫で。	台部1/2残。
7	弥生土器 台付甕	+2	口径 — 底径 9.3 器高 7.9+	①粗砂、細礫 ②普通 ③明赤褐5YR5/6	外面 縦方向荒磨き。 内面 おもに横方向荒磨き、台部横方向粗い荒磨き。	胴部下位1/4、台部1/2残。
8	弥生土器 壺	+2	口径 — 底径 — 器高 8.0+	①粗砂、白色鉱物 ②普通 ③鈍い橙7.5YR6/4	器表の摩滅が顕著。外面 口縁部縦方向刷毛、頸部9本単位以上2連止め櫛状文、7本単位以上梯状下字文。 内面 口縁部上半横方向荒磨き。	口縁部～頸部1/2残。
9	須恵器 高盤	埋没土	口径 — 底径 — 器高 6.2+	①細砂 ②酸化焔気味 ③5Y6/1	外面 横撫整形。 内面 杯部底部右回転横撫整形、脚部横撫整形。	脚部上半残。
10	須恵器 杯	+6	口径(11.7) 底径 6.5 器高 3.8	①粗砂、細礫、白色鉱物、石英 ②還元焔 ③外 黒N2/0 内 灰オリーブ5Y6/2	外面横しぼの吸収。 外面 体部横撫整形、底部右回転糸切り未調整。 内面 横撫整形。	体部3/4欠。
11	須恵器 杯	+6	口径 12.5 底径 6.2 器高 4.0	①細砂、粗砂 ②還元焔 ③灰黄2.5Y7/2	外面体部及び内面口縁部横しぼの吸収。 外面 体部横撫整形、底部左回転糸切り未調整。 内面 横撫整形。	口縁部一部欠。
12	須恵器 杯	+16	口径(12.7) 底径 (6.6) 器高 3.1	①細砂 ②還元焔 ③灰10Y5/1	内面の底径が大きく、横撫目顕著。 外面 体部横撫整形、底部右回転糸切り未調整。 内面 横撫整形。	体部1/4、底部1/2残。
13	須恵器 杯	+9	口径(12.3) 底径 6.5 器高 3.7	①粗砂 ②還元焔気味 ③5Y6/1	外面及び内面口縁部横しぼの吸収。 外面 体部横撫整形、底部右回転糸切り未調整。 内面 横撫整形。	体部7/8欠。
14	須恵器 杯	+39	口径 13.1 底径 5.8 器高 4.0	①細砂、粗砂、白色鉱物 ②還元焔 ③灰黄2.5Y7/2	体部は丸みをもち口縁端部外反。内面体部・底部の変換点がなだらか。内外面斑に横しぼ状の吸収。外面 横撫整形、底部右回転糸切り未調整。内面 横撫整形。	ほぼ完形。
15	須恵器 杯	+7	口径 15.8 底径 7.6 器高 5.3	①細砂、粗砂、白色鉱物 ②還元焔気味 ③鈍い黄橙10YR6/4	大形で体部が直線的に開く。内外面斑に横しぼの吸収。 外面 体部横撫整形、底部左回転糸切り未調整。 内面 横撫整形。	1/2残。
16	須恵器 小型壺	+38	口径 (8.7) 底径 5.6 器高 8.2	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③黒褐色2.5Y3/1	横しぼ成。頸部緩やかに括れ口縁部が直に立ち上がる。 外面 口縁～胴部横撫整形、底部左回転糸切り・指頭圧痕有り。内面 横撫成形。	口縁部～胴部上半3/4欠。
17	土師器 甕	+17	口径(21.6) 底径 — 器高 7.2+	①細砂、粗砂 ②普通 ③鈍い褐7.5YR5/4	口縁弱い「コ」の字。口縁端部を摘み上げる。 外面 口縁部右方向横撫で、胴部左方向荒磨り。 内面 口縁部横撫で、胴部横方向荒撫で。	口縁部～胴部上位1/4残。
18	須恵器 甕	+4～61	口径 — 底径(15.2) 器高 29.3+	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③灰N5/0	外面 頸部横撫整形、肩部～胴部平行叩き、胴部最下位横方向撫で・指頭圧痕有り、胴部撫で、胴部最下位横方向撫で。 内面 頸部横撫整形、肩部横方向撫で・指頭圧痕有り、胴部撫で。	頸部下半～胴部1/2残。

3号溝(PL.45・76)

位置 305～330－090，300・305－095 **重複** なし。 **形状・規模** ほぼ北から南にのび、310G付近で南南西に走向を変える。長さ35m、幅0.6～1.6m、深さ10～35cm確認した。南にいくに従って浅くなる傾向がある。320～330Gにかけて瓶穴状のピットをもち、大きいもので径1m、深さ40cm確認した。20～30cm大の礫が多く認められるが、人為的な掘り込みであるかは不明である。 **埋没土** FPを含む黒褐色土が主体であり、ピット下層には砂礫が堆積する。土層断面から2層、3・4層、5～7層と3回の掘り直しが考えられる。 **遺物** 埋没土から須恵器

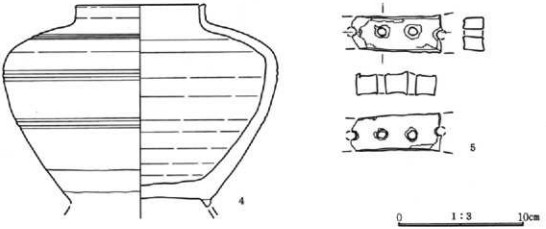
短頸壺・杯、用途不明の土製品が出土した。　　**所見**　出土遺物から平安時代のものと考えられる。



3号溝

1．黒色土。FPを微量含む。
2．黒褐色土。FPを微量含む。
3．黒褐色土。砂質。
4．黒褐色土。FPを微量含む。
5．黒褐色土。ローム粒・FPを微量含む。
6．黒褐色土。FPを微量含む。
7．暗褐色土。シルト質。ラミナ状に堆積。
8．黒褐色土。砂礫・FPをやや多量含む。
9．黒色土。FPを少量含む。
10．砂礫とFPの混合層。
11．黒褐色土。ローム粒・FPを少量含む。
12．砂層。
13．黒褐色土。やや粘質。ローム粒・FP・砂礫を少量含む。
14．黒色土。やや粘性。ローム粒をやや多量、砂礫を少量含む。
15．砂礫層。
16．黒褐色土。ローム粒を少量含む。
17．暗褐色土。砂礫を少量含む。

3号溝出土遺物



3号溝出土遺物

3号溝出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土レベル	法量	①釉土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 杯	埋没土	口径 13.7 底径 8.3 器高 3.8	①細砂、粗砂 ②還元焔、堅緻 ③5Y6/1	外面底部・体部に部分的に自然釉が濃く付着。外面　体部横轆整形後最下位回転篦削り、底部右回転篦切り後周辺回転篦削り。内面　轆轤整形。	体部1/2欠。
2	須恵器 杯	埋没土	口径(14.1) 底径 (7.5) 器高 3.7	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③5Y黄2.5Y6/2	外面　体部横轆整形後最下位回転篦削り、底部右回転未切り後周辺回転篦削り。 内面　轆轤整形。	口縁部～胴部上位1/2残。
3	須恵器 杯	埋没土	口径(14.1) 底径 8.2 器高 4.0	①粗砂、細礫 ②還元焔、堅緻 ③5Y6/1	外面底部・体部に自然釉が濃く付着。 外面　体部横轆整形、底部左回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	体部1/4、底部3/4残。
4	須恵器 短頸壺	埋没土	口径 10.3 底径 — 器高 15.6+	①粗砂、細礫 ②還元焔、堅緻 ③5Y N5/0	肩部・胴部に2条1組の沈線が3組巡る。外面　口縁部～胴部横轆整形、胴部最下位左方向回転篦削り、底部撫で、高台両縁貼り付け時の回転撫で。内面　轆轤整形。	口縁部～胴部1/4、底部残。
5	土製品	埋没土	長さ 7.1+ 幅 3.0 厚さ 1.6	①細砂、粗砂 ②還元焔 ③5Y白5Y7/1	篦削りと撫でで直方体状に整えた後、棒状工具で径約7mmの円孔を穿つ。	両端欠。

5．土　坑

11号土坑(PL.45)

位置　230—055　**重複**　なし。　**形状**　円形。　**規模**　32×30×22cm　**埋没土**　黒色土にFP・Kkを含む。　**遺物**　なし。　**所見**　埋没土から平安時代のものと考えられる。

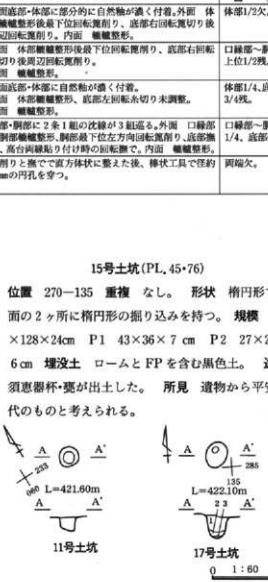
17号土坑

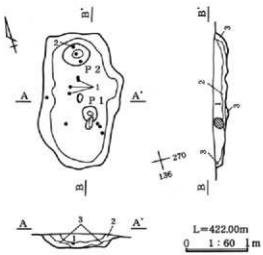
位置　285—135　**重複**　なし。　**形状**　円形。　**規模**　42×33×36cm　**埋没土**　ローム・FP・Kkを含む黒色土を主体とする。　**遺物**　なし。　**所見**　埋没土から平安時代のもと考えられる。

17号土坑
1．黒色土。ロームブロック・FPを少量、Kkを微量含む。
2．黒褐色土とロームブロックの混土。
3．褐色土(ローム)。しまりが弱い。

15号土坑(PL.45・76)

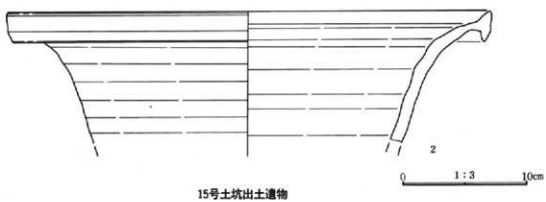
位置　270—135　**重複**　なし。　**形状**　楕円形で底面の2ヶ所に楕円形の掘り込みを持つ。　**規模**　226×128×24cm　P1　43×36×7 cm　P2　27×25×6 cm　**埋没土**　ロームとFPを含む黒色土。　**遺物**　須恵器杯・甕が出土した。　**所見**　遺物から平安時代のものと考えられる。





15号土坑

15号土坑
1．黒色土。FP・淡黄色パミスを微量含む。
2．黒色土。ロームブロック・FP・淡黄色パミスを微量含む。
3．黒色土。やや粘質。ロームブロック・FP・淡黄色パミスを微量含む。



15号土坑出土遺物

土坑出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ②色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 杯	埋投土	口径(13.8) 底径 6.9 器高 4.5	①粗砂、白色鉱物 ②還元焔 ③灰白5Y7/2	口縁部外反。内面底部・体部の境目がなだらか。内外面に黒斑。外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整。内面 轆轤整形。	体部1/8、底部残。
2	須恵器 甕	埋投土	口径(38.0) 底径 — 器高 10.3+	①粗砂、細礫、石英 ②酸化焔気味 ③暗灰黄2.5Y4/2	外面 轆轤整形。 内面 轆轤整形。	口縁部～頸部1/4残。

6．鍛冶炉

東側尾根が発掘区中央谷地部分へ、ゆるく西向きに傾斜する斜面で、鍛冶炉２基が近接して見つかった。耕作土の除去作業中から、鍛冶炉の周辺では熱を受けた痕跡のある円礫や、スラグなどが見つかっていた。このため、鍛冶に関連する遺構があることを想定して慎重に表土除去作業を進めていたが、桑の根による攪乱が広く、深く及んでいたために、遺構確認面は予想外に深い位置になってしまった。FPを混入した黒褐色土を除去した、黒色土中で２基の鍛冶遺構を確認することができた。

２基ともに、耕作及び桑の根によって著しく攪乱されていて、１号鍛冶炉は炉の底面の一部が認められたのみであり、２号鍛冶炉は土坑状の落ち込みをのぞいては、炉底面も痕跡的にしか捉えることができなかった。さらに、大型のスラグやふいご羽口などの遺物はあったものの、土器など、これらの鍛冶

炉の年代を直接知ることができるような遺物は全く見つからなかった。こうしたことから、遺構の構造や形状の調査のみによっては、年代はもちろん、ここで行われた鍛冶作業の具体的な有り様を知ることが難しいものと判断された。

このため、遺構内とその周辺の埋没土壌について、水洗選別を行って、炭化物を抽出すること及び、磁石によって鍛造剥片や微細な球状滓などの抽出を行って、さらに詳細な情報を得ることができるデータを採取することとし、あわせて、遺跡内の住居から見つかった鉄滓や鉄製品をも対比データとして、専門分析機関に金属考古学的な分析を委託することとした。

炭化物の同定は、燃料として用いられた材の特定を意図したものであったが、多量のコメ、ムギなど穀類の出土を見るという予想外の結果も得られている。スラグ及び鉄製品についての金属考古学的分析からは、原料の供給から製品製造にいたるまでの工程や、それぞれの鍛冶炉の年代を推し量るための鍵となる情報が得られたものと考えている。

抽出された炭化物の詳細については「Ⅷ－２」を、金属考古学的分析の詳細については「Ⅷ－５」を参照されたい。

１号鍛冶炉(PL.45･46･76)

東尾根が中央谷地部に落ち込む傾斜変換線近くに立地している。単独の浅い落ち込みで、これと組み合って一体の構造をなすような遺構は見つからなかった。東側半分ほどを、深い耕作溝によって大きく切られているため、全体の規模や形状を確実に知ることはできなかった。平面的な形状は南北方向に長軸を持つ楕円形であったものと思われる。長軸長86cm、東西方向の短軸は残存部分で40cmほどの大きさであった。地面を浅くすり鉢状に掘りくぼめたような状態で見いだされており、深さは、最も深いところでも５cmほどにすぎない。上面は耕作によって大きく削平されているため、鍛冶炉の本体を含めて、上部構造がさらに高い位置にあったことは疑いない。

確認面での遺構覆土最上層は、ふいご羽口、塊状滓、小型の流動滓が含まれる黒色土で、FP の軽石が熱を受けた状態のものや鍛造剥片も多く含まれている。その下位は、鍛造剥片とやや小さい塊状滓の集中層で、黒褐色土を少量含む。堅く締まった層で、この上面が炉床に当たるのではないかと考えられた。以下、鍛造剥片や小型の塊状滓を少量含むしまりの強い黒色土層、暗褐色土とロームの混土層が続くが、粘土層や炭の層などの施設は見られなかった。

鉄関連の出土遺物としては、ふいご羽口片、碗状滓、塊状滓、多量の小型の塊状滓、鍛造剥片、球状滓がある。

また、燃料炭の残滓とみられる炭化材が多量に出土している。樹種同定の結果、その大部分はクリと同定されており、他に少量のコナラ節、ヤマグワが検出された。その他、イネ320粒、コムギ３粒、オオムギ３粒、アワ1141粒など、穀類の種実を中心とする炭化物も抽出されている。

２号鍛冶炉(PL.46･47･76･77)

１号鍛冶炉の西に隣接して見つかったものである。１号鍛冶炉より、中央谷地によった部分で、地山の傾斜も１号炉よりややきつい位置に当たる。スラグ、鍛造剥片、炭などが、隣り合った４ケ所で、若干様相を異にしながら見いだされたものである。１号ピットから３号ピットが南北方向に並び、２号ピットの西側に４号ピットが並ぶ。１号鍛冶炉と同じく、耕作や桑根によって著しく乱されているため、確実に形状や構造を捉えることはできなかったが、４つの部分が一連の構造として構築されたものであった可能性が感じられた。

１号ピットは、直径65cmほどの、北西方向がやや突出した、ゆがんだ隅丸三角形状の平面形で、FP の軽石が混入した黒色土中に、多量の鍛造剥片、小型塊状滓が混じている。立ち上がりが不明瞭な、皿状のごく浅いくぼみとして捉えられた。炭化物も多く含まれているが、強い火熱を受けた痕跡は認められ

ない。

2号ピットは、南北方向に長軸を持ち、長径84cm、短径65cmほどの大きさで、やはり、Hr-FPの軽石が混入した黒色土中に、多量の鍛造剝片、小型塊状滓が混じている。明確な掘り込みはない。北端近くに、熱を受けた長円形の礫がL字状に配置されている。

3号ピットは、長軸80cm、短軸55cmほどの大きさで、北西一南東方向に軸を持つゆがんだ長円形の平面形である。FPの軽石が混入した黒色土中に、多量の鍛造剝片、小型塊状滓が混じている点では1号及び2号ピットと同様であるが、炉の残滓かと思われる粘土が部分的に認められ、ふいご羽口の破片がこれと接して見つかっている。掘り込みは認められず、地山上に直接粘土が貼られて、炉が築かれていたものではないかと思われた。

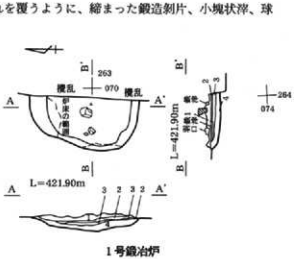
4号ピットは、確認面では、細かい炭化物の集中層が楕円形に広がっている部分として捉えられたが、発掘調査により、長軸107cm、短軸70cm、深さ30cmほどの規模で、東西方向に長軸を持つ、楕円形の平面形を呈する土坑状の遺構であることがわかった。

この土坑は、底面に2ケ所のくぼみを持つが、これを覆うように、締まった鍛造剝片、小塊状滓、球状滓などが板状、塊状に積層する層がある。その上位には塊状滓と焼土が集中し、その上に中型の塊状滓とFPの軽石が集中する層があり、大型の塊状滓の集中層がさらに上位にある。表層はFPの軽石が混入した黒色土中に炭化物を含む層であるが、攪乱を受けている。

鉄関連の出土遺物としては、ふいご羽口片、碗状滓、塊状滓、多量の小型の塊状滓、鍛造剝片、球状滓がある。

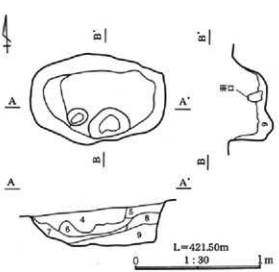
また、燃料炭の残滓とみられる炭化材が多量に出土している。樹種同定の結果、その大部分はクリと同定されており、他に少量のオニグルミ、コナラ節、ケヤキ、クスノキ科、サクラ属などが検出された。また、イネ13粒、コムギ197粒、オオムギ82粒、アワ16粒など穀類の種実を中心とする炭化物も抽出されている。

1、2号炉共に、原料を銅として精錬し、これを加熱し、鍛打して製品を作っていたことが想定される。また、8世紀後半代と想定される31号住居出土鉄滓と1号鍛冶炉出土鉄滓との鉱物組成が一致すること、また、これが同時期の住居出土鉄製品の成分分析結果とも矛盾しないことなどから、8世紀後半代の稼働が想定されている。

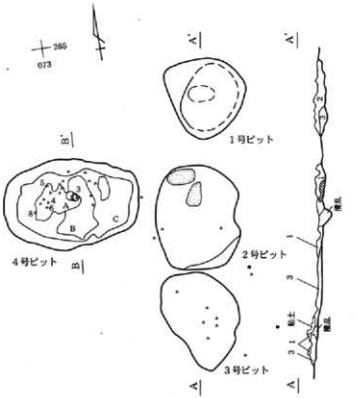


1号鍛冶炉

1号鍛冶炉
1．黒色土。FP・焼けたFP・小型滓状滓・塊状滓・鍛造剝片を多く含む。
2．鉄滓・鍛造剝片の集中層。しまりが強い。黒褐色土を少量含む。上面が炉床。
3．黒色土。しまりが強い。鉄滓・鍛造剝片を少量含む。
4．暗褐色土とロームの混土。しまりが強い。



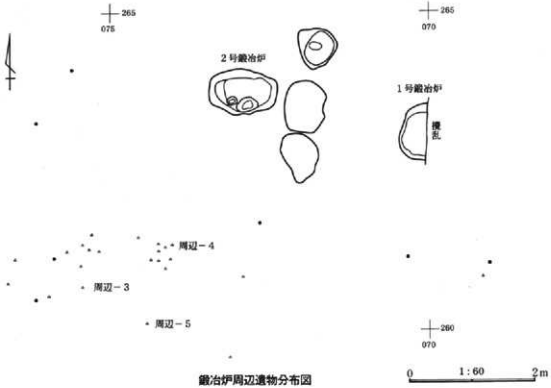
2号鍛冶炉4号ピット掘方



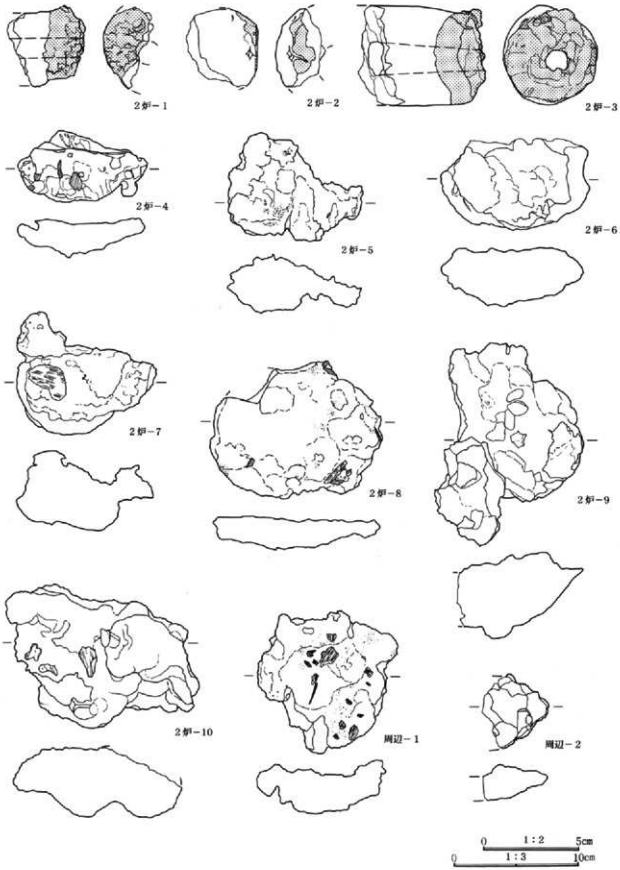
2号鍛冶炉

2号鍛冶炉
1．黒色土。FP・鉄滓・鍛造剥片を多量含む。
2．黒色土。1層よりFPを多量含む。
3．暗褐色土。鉄滓・鍛造剥片を少量含む。地山中に攪乱により混入。
4．攪乱。黒褐色土。FP・鉄滓・炭粒を少量含む。
5．黒褐色土。鉄滓をやや多量、FPを少量含む。
6．黒褐色土。鉄滓を少量含む。
7．暗褐色土。鉄滓をやや多量含む。
8．暗褐色土。鉄滓を多量含む。
9．鉄滓・鉄凝集の枝状・塊状集合。

A．大型鉄滓の集中範囲。
B．中型鉄滓とFPの集中範囲。
C．鉄滓と焼土範囲。
AはBの上に、BはCの上に乗る。



鍛冶炉周辺遺物分布図



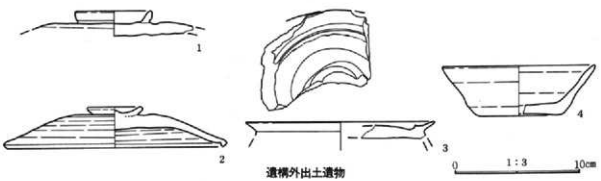
2号鍛冶炉・鍛冶炉周辺出土遺物

鍛冶炉周辺出土遺物

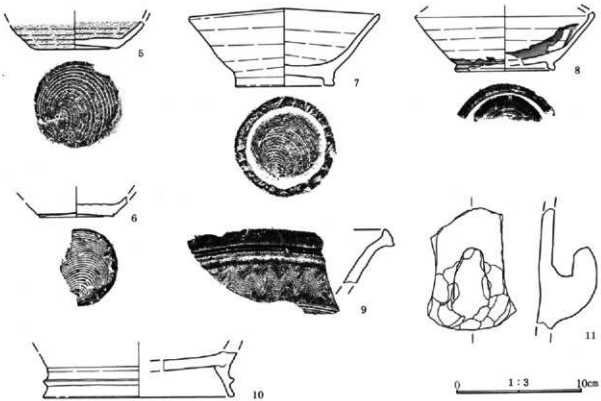
鍛冶炉出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	法量	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
2号炉 1	土製品 羽口	2号ピット ＋1	長さ 6.2+ 径 (8.5) 孔径 (2.0) 重量 87.3	外面撫で。先端部は被熱で部分的にガラス化。	先端部一部残。
2号炉 2	土製品 羽口	2号炉内	長さ 6.2+ 径 (7.4) 孔径 (1.6) 重量 93.9	外面撫で。先端部は被熱で部分的にガラス化し、泡立つ。	先端部一部残。
2号炉 3	土製品 羽口	4号ピット ＋6	長さ 10.0+ 径7.1～7.8 孔径 1.6～2.7 重量 464.0	外面撫で。先端部は被熱で部分的にガラス化。	末端部欠。分析。
2号炉 4	鉄椀形滓	4号ピット ＋7	径 6.8+ 厚さ 2.1 重量 47.7	上面に炭付着。	1/4残。
2号炉 5	鉄椀形滓	4号ピット ＋8	径 6.9 厚さ 3.1 重量 102.8	上面一部欠ける。	1/4欠。
2号炉 6	鉄椀形滓	4号ピット ＋8	径 7.6 厚さ 3.1 重量 162.4		1/2残。
2号炉 7	鉄椀形滓	4号ピット 内	径 7.2 厚さ 4.2 重量 101.8	上面に炭付着。	1/4欠。
2号炉 8	鉄椀形滓	4号ピット ＋9	径 8.8 厚さ 1.8 重量 189.1	上面に炭付着。	一部欠。
2号炉 9	鉄椀形滓	4号ピット 内	径 10.5 厚さ 4.5 重量 300.0		1/4欠。
2号炉 10	鉄椀形滓	3号ピット 内	径 9.1 厚さ 3.7 重量 214.7	上面に炭付着。上面一部欠ける。	
周辺 1	鉄椀形滓		径 7.5 厚さ 2.8 重量 138.2	上面に炭付着。	一部欠。
周辺 2	鉄椀形滓		径 3.9+ 厚さ 1.7 重量 23.5	底面に軽石付着。	一部残。
周辺 3	鉄椀形滓		径 4.8+ 厚さ 1.8+ 重量 41.5	底面に軽石付着。	一部残。
周辺 4	鉄椀形滓		径 5.8+ 厚さ 1.9 重量 68.1		1/4残。
周辺 5	鉄椀形滓		径 5.8+ 厚さ 1.3 重量 40.0		1/2残。

7．遺構外出土遺物(PL.77)



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物

遺構外出土遺物観察表

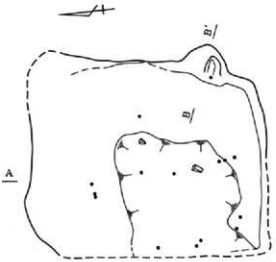
番号	種器種	出土レベル	法量	①釉土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 蓋		摘み径6.0 口径　— 器高　2.0+	①粗砂、細礫 ②酸化焔 ③純い橙7.5YR6/4	環状摘み径が大きい。 外面　轆轤整形、天井部右回転篦削り、摘み周縁貼り付け時の回転撫で。内面　轆轤整形。	口縁部欠。
2	須恵器 蓋		摘み径4.4 口径(17.7) 器高　3.3	①粗砂 ②還元焔 ③灰黄2.5Y7/2	環状摘みの中央部盛り上がる。口縁の折り曲げが低い。 外面　天井部轆轤整形・水平部分の外側を回転篦削り・内側に左回転糸切り痕を残す。 内面　轆轤整形。	天井部～口縁部1/2欠。内面に重ね焼き痕径9.2。
3	須恵器 蓋		摘み径　— 口径　— 器高　1.3+	①粗砂、細礫 ②還元焔、堅緻 ③灰5Y6/1	外面　轆轤整形、摘み外縁回転篦削り。 内面　轆轤整形。	天井部1/4残。
4	須恵器 杯		口径(12.0) 底径(6.8) 器高　3.9	①粗砂、細礫、白色鉱物 ②還元焔 ③純い橙7.5YR7/4	外面　体部轆轤整形、底部回転糸切り・摩滅で回転方向不明。 内面　轆轤整形。	1/2残。
5	須恵器 杯		口径　— 底径　6.6 器高　2.0+	①粗砂、石英 ②還元焔 ③オリーブ黒7.5Y3/1	爆し焼成。 外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	体部上半欠。
6	須恵器 杯		口径　— 底径(6.0) 器高　1.7+	①粗砂、細礫 ②還元焔 ③黒10YR2/1	外面体部最下位に中途の糸切り痕。 外面　体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整。 内面　轆轤整形。	体部下位～底部残。
7	須恵器 椀		口径(15.1) 底径　7.9 器高　6.2	①粗砂、細礫、石英 ②還元焔 ③灰5Y4/1	全体に淡く焼成。 外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り、高台周縁貼り付け時の回転撫で。内面　轆轤整形。	体部1/2欠。
8	灰釉陶器 平瓶		口径　— 底径(7.9) 器高　4.6+	① ② ③灰N6/0	高台端部は平坦。内面には口縁部から入った灰が自然釉となっている。	体部下半～高台残。
9	須恵器 甕		口径　— 底径　— 器高　—	①粗砂 ②還元焔、堅緻 ③黒7.5YR1.7/1	外面頸部に櫛描き波状文が巡る。 外面　轆轤整形。 内面　轆轤整形。	口縁部～頸部破片。
10	須恵器 壺？		口径　— 底径(15.0) 器高　3.4+	①粗砂、細礫 ②還元焔、堅緻 ③灰7.5Y5/1	内面底部中央窪りに自然釉付着。 外面　底部回転撫で、高台部轆轤整形・回転撫でによる雑な貼り付け。内面　回転撫で。	底部～高台部1/6残。
11	須恵器 甑		口径　— 底径　— 器高　9.5+	①粗砂 ②酸化焔気味 ③純い黄橙10YR6/4	外面　轆轤整形、把手は撫でによる貼り付け。 内面　轆轤整形、把手部分に指頭圧痕。	把手部破片。

Ⅶ　その他の遺構と遺物

1．竪穴住居

24号住居(PL.47・77)

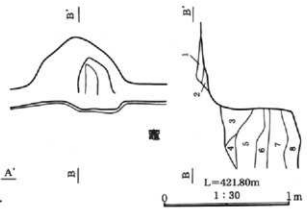
位置　295・300—105・110　**重複**　なし。　**形状**　隅丸長方形。　**規模**　3.74×3.08m(推定)　**面積**　11.9m²(推定)　**方位**　15°　**床面**　確認面から37cm下で床面となる。約10cmの貼床(6層)を施すが、攪乱が激しく、検出できたのは僅かである。　**壁溝**　確認できなかった。　**竈**　東壁南寄りに設置。壁外に半円状の掘り方を設けるが、壁内は攪乱により確認できなかった。　**貯蔵穴**　確認できなかった。　**柱穴**　確認できなかった。　**遺物**　図示した土師器杯のほか、樽式土器甕、羽釜などが出土した。　**掘り方**　床面から約32cm下で掘り方面となる。検出できたのは僅か(9層下面)で、他は攪乱の底面となる。　**所見**　竈など一部を除いて攪乱で乱されているものの、床面レベルである2層下面で大きく分層できることから、住居廃絶後時間をおかずに複数の土坑が掘削された後、埋め戻されたと想定する。遺物には時間幅があり、出土レベルからも層位的把握ができなかった。竈をもつことから古墳時代後期以降の住居であるが、詳細な時期は不明である。

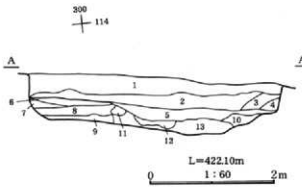


24号住居生活面

24号住居

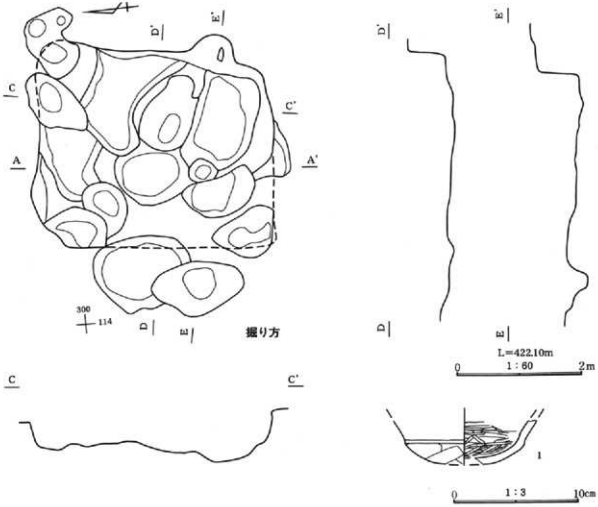
1．黒色土。FPをやや多量、ロームブロック・焼土粒を微量含む。
2．黒褐色土。ロームブロック・FPを少量含む。
3．黒色土。ロームブロック・FPを少量含む。
4．黒褐色土。ロームブロックを多量含む。
5．黒色土。地山に近い。
6．灰黄褐色粘土。貼床。
7．黒色土。FPをやや多量含む。
8．鈍い黄褐色土。
9．鈍い黄褐色土。白色粘土・褐灰色土をやや多量含む。
10．黒褐色土。ロームブロックをやや多量含む。
11．褐灰色土。やや粘性。ロームブロックをやや多量含む。
12．黒色土と褐灰色土の混土。
13．黒褐色土。ロームブロックをやや多量含む。





24号住居竈

1．黒褐色土。FP・焼土・灰を微量含む。
2．暗黄褐色土。ローム粒を多量含む。
3．黒褐色土。
4．黒褐色土。ローム粒を少量含む。
5．黒褐色土とロームブロックの混土層。
6．褐色土(ローム)。
7．黒色土。ロームブロックをやや多量含む。
8．黒色土。ロームブロックを多量含む。



24号住居出土遺物

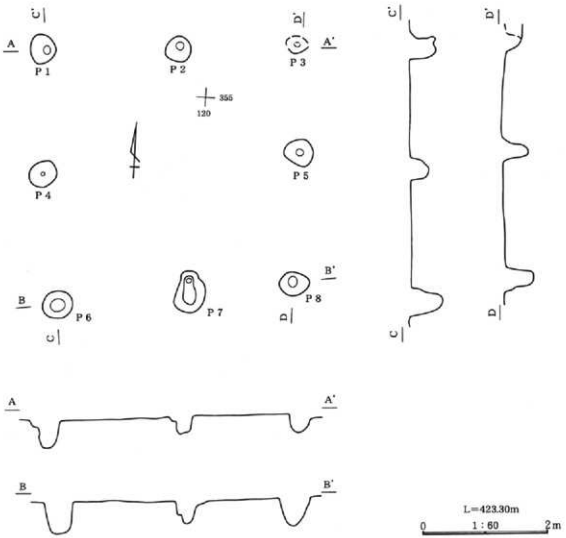
24号住居遺物観察表

番号	種類器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	＋3	口径 — 底径 — 器高 3.5	①細砂、粗砂 ②普通 ③純い黄褐10YR5/4	浅い体部から大きく外傾する口縁部に至る。 外面　口縁部右方向横撫で、体部篦削り。 内面　篦磨き。	口縁部下半～体部1/4残。

2．掘立柱建物

2号掘立柱建物(PL.47)

位置　350・355—115・120　**重複**　なし。　**形状**　柱間は2間×2間で、西辺より東辺がやや短いものの正方形に近い。　**方位**　86°　**規模**　4.04×4.00m　P1　46×41×42cm　P2　42×38×29cm　P3　径28cm以上×24cm　P4　46×40×30cm　P5　48×44×42cm　P6　50×43×50cm　P7　66×48×47cm　P8　50×40×46cm　3号ピットは北半が攪乱を受けており、正確な形状・規模は不明である。7号ピットは平面形が南北に長く、最深部がEラインよりもやや北側にずれる。　**埋没土**　1・8号ピットはロームブロックを少量、FPを微量含む、やや粘質の黒褐色土を主体とする。柱痕・根固めなどは検出できなかった。その他のピットは不明である。　**遺物**　なし。　**所見**　埋没土から古墳時代後期以降のものと思われるが、詳細な時期は不明である。



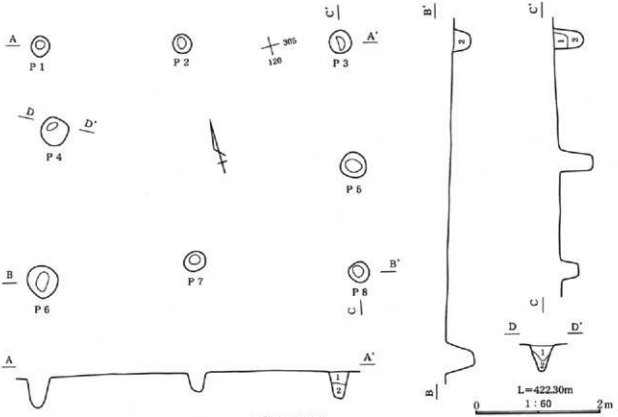
2号掘立柱建物

4号掘立柱建物(PL.47)

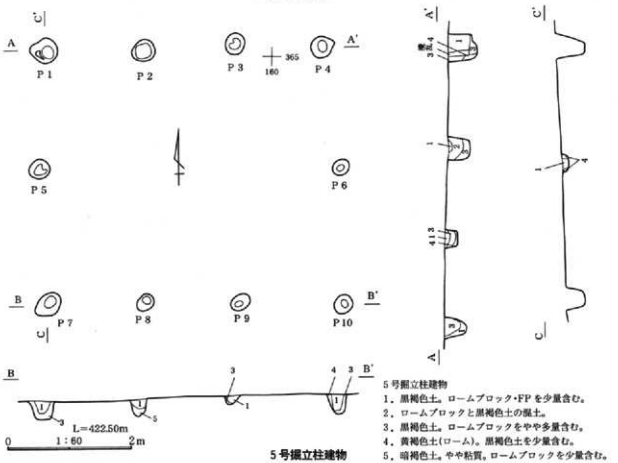
位置 300・305−115・120 **重複** なし。8号掘立柱建物に隣接する。 **形状** 柱間は2間×2間で比較的整った長方形である。4・7号ピットがやや内側に位置する。 **方位** −75° **規模** 5.03×3.74m P1 33×30×42cm P2 30×28×30cm P3 径33×47cm P4 46×44×30cm P5 42×39×28cm P6 径50×50cm P7 36×30×28cm P8 32×31×25cm **埋没土** 1層はFPを少量含む黒褐色土、2層はロームブロックをやや多量、FPを微量含む黒褐色土。 **遺物** なし。 **所見** 埋没土から古墳時代後期以降と思われるが、詳細な時期は不明である。

5号掘立柱建物(PL.48)

位置 360・365−155・160 **重複** なし。 **形状** 柱間は2間×3間で、北辺が南辺よりやや短いものの比較的整った長方形である。 **方位** 88° **規模** 4.38×3.84m P1 44×41×59cm P2 37×34×44cm P3 33×31×20cm P4 38×34×35cm P5 34×32×12cm P6 27×24×18cm P7 46×31×28cm P8 29×23×27cm P9 31×23×13cm P10 32×26×34cm **埋没土** 根固めはロームと黒褐色土を主体とし、柱痕埋没土にFPを含む。 **遺物** なし。 **所見** 埋没土から古墳時代後期以降と思われるが、詳細は不明である。



4号掘立柱建物



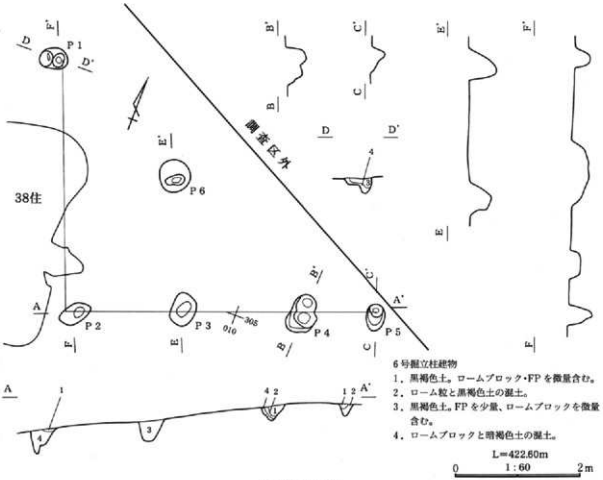
5号掘立柱建物

5号掘立柱建物

1．黒褐色土。ロームブロック・FP を少量含む。
2．ロームブロックと黒褐色土の混土。
3．黒褐色土。ロームブロックをやや多量含む。
4．黄褐色土(ローム)。黒褐色土を少量含む。
5．暗褐色土。やや粘質。ロームブロックを少量含む。

6号掘立柱建物(PL.48・49)

位置 305—005，300・305—010 **重複** 38号住居と重複するが、新旧関係は不明である。38号住居北東コーナーには住居より新しい土坑が存在する。本遺構と同一かは分からないが、この位置にピットが存在した可能性もある。 **形状** 北半が調査区外であるが、調査区内では1間×3間の比較的整った長方形である。全域を調査できないためにP6が掘立柱建物を構成するピットか不明だが、埋没土は他のピットと同様である。 **方位** 69° **規模** 4.74×3.98m P1 46×34×25cm P2 54×28×41cm P3 53×37×34cm P4 62×43×26cm P5 42×30×20cm P6 52×47×42cm **埋没土** 上層にFPを含む。 **遺物** なし。 **所見** 埋没土から古墳時代後期以降と思われるが、詳細は不明である。

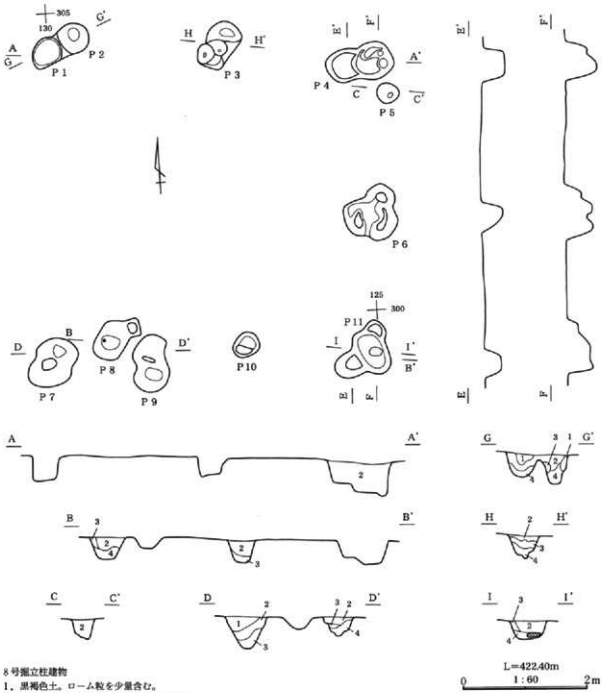


6号掘立柱建物

8号掘立柱建物(PL.49)

位置 295・300—120・130 **重複** なし。西に7号掘立柱建物が、東に4号掘立柱建物が隣接する。 **形状** 北・東辺で2間、西辺で1間、南辺で2間以上の西辺がやや広がる長方形である。 **方位** —83° **規模** 5.15×4.90m P1 54×43×41cm P2 48×46×54cm P3 78×52×49cm P4 107×59×55cm P5 35×31×39cm P6 90×86×54cm P7 90×63×55cm P8 85×50×33cm P9 89×58×47cm P10 42×35×34cm P11 105×78×36cm **埋没土** 根固めには黒褐色土とロームの混土を用いる。P11底面付近には礫を敷くが、礫と4層の上面レベルが一致していることから底面を4層で整えたと推測できる。土層断面写真では全体にFP混土のようにも見える。 **遺物** P11より須恵器蓋、図化していないが土師器甕が出土した。 **所**

見　ピットの平面形及び土層断面から数回の掘り直しが推測されるが、新旧関係などを把握できなかった。特に南辺においてピット間の距離にばらつきが目立ち、東辺では各ピットにおいて二つのピットが東西に揃うように見受けられる。時期については不明である。　**備考**　ピット番号及び各ピットの規模は、平面形から複数の存在が予想できても土層断面で確認できないものは一括して扱った。



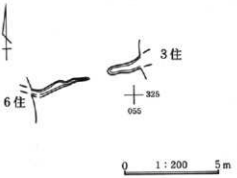
8号掘立柱建物
1．黒褐色土。ローム粒を少量含む。
2．黒褐色土。ローム粒・褐灰色土を微量含む。
3．黒褐色土とロームブロックの混土。
4．黒褐色土。ロームブロックをやや多量含む。

8号掘立柱建物

3．溝

1号溝(PL.50)

位置　320～325—050・055　**重複**　1号溝→3号・6号住居　**形状・規模**　北北東から南南西にのび、6号住居の東で北北西に走向を変える。長さ6.0m、幅30～40cm、深さ12cmを確認した。確認面が浅いために中央で途切れるが、一体のものと推測する。　**埋没土**　FPを含む黒褐色土。　**遺物**　なし。　**所見**　埋没土及び重複関係から古墳時代後期以降9世紀前半までと思われるが、詳細な時期は不明である。



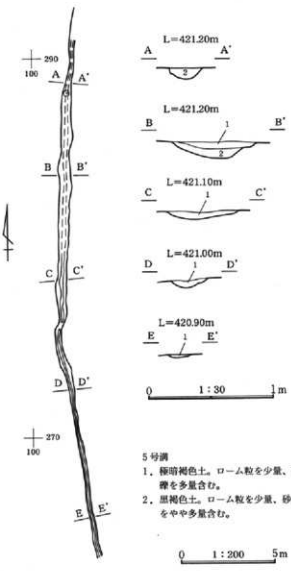
1号溝

5号溝(PL.50)

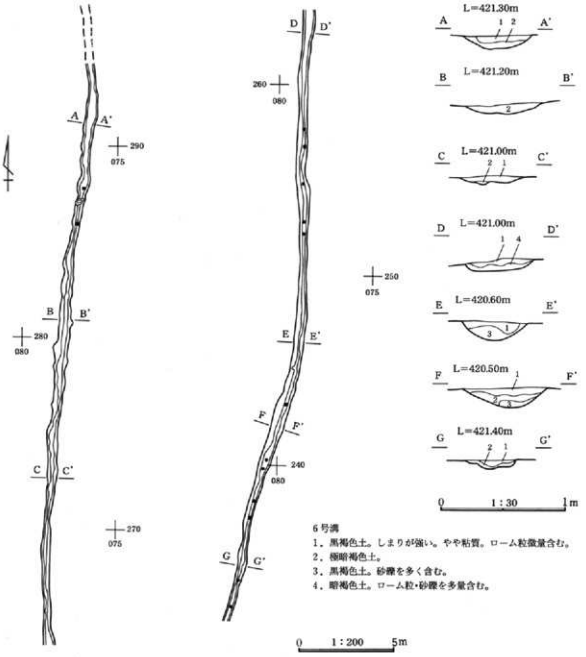
位置　260～290—095　中央谷地内西側に位置する。　**重複**　なし。　**形状・規模**　ほぼ北から南にのび、275G付近で南南東に走向を変える。長さ29m、幅20～50cm、深さ3～14cm確認した。　**埋没土**　ローム・砂礫を含む黒褐色土を主体とする。FPは含まない。　**遺物**　なし。　**所見**　水田確認面(FP混層)より下層から確認できたもので、古墳時代後期以前のものと思われるが詳細な時期は不明である。本溝の西側では水田が検出されず、検出された水田に先行する時期の水田と関係することも考えられる。

6号溝(PL.50)

位置　240～295—075，230～240—080　中央谷地内東側に位置する。　**重複**　6号溝→4号溝　**形状・規模**　ほぼ北から南にのび、250G付近で南南西に走向を変える。長さ63m、幅20～70cm、深さ2～20cm確認した。　**埋没土**　ローム・砂礫を含む暗褐色土を主体とする。　**遺物**　図化していないが樽式土器・土師器小破片などが出土した。いずれも摩滅が顕著である。　**所見**　水田確認面(FP混層)より下層から確認できたもので、古墳時代後期以前のものと思われるが詳細は不明である。本溝の東では水田が検出されず、4号溝とほぼ同位置であることから検出された水田に先行する時期の水田と関係することも考えられる。



5号溝



6号溝

7号溝(PL.50)

位置　290・295—075，295—080　**重複**　なし。

形状・規模　北北西から南南東にのびる。長さ2.6m、幅30～50cm、深さ3～7cm確認した。　**埋没土**　砂礫を含む黒褐色土を主体とする。　**遺物**　なし。

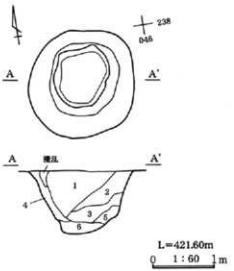
所見　水田面(FP混層)より下層から確認できたもので、古墳時代後期以前のものと思われるが詳細は不明である。

7号溝

4．土　坑

16号土坑(PL.50)

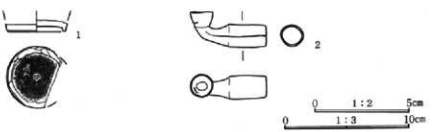
位置　235−045　**重複**　なし。　**形状**　円形で弱い中段をもつ。　**規模**　183×168×100cm　**埋没土**　ロームとFPを含む黒褐色土を主体とする。　**遺物**　なし。　**所見**　埋没土から古墳時代後期以降と思われるが、詳細は不明である。



16号土坑

16号土坑
1．黒褐色土。FPを少量含む。
2．黒褐色土。しまりが弱い。FPをやや多量含む。
3．黒褐色土。ローム粒・FPを少量含む。
4．黒褐色土。しまりが弱い。FPを微量含む。
5．黒褐色土。しまりがやや強い。やや粘質。ローム粒・FPを微量含む。
6．黒色土。FPをやや多量含む。

5．遺構外出土遺物(PL.77)



遺構外出土遺物

遺構外出土遺物

番号	種別 器種	出土レベル	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	陶器		口径 — 底径 4.6 器高 0.9+	① ② ③灰白2.5Y8/2	底部外面に焼成前刻書「松久」。	底部・高台部3/4残。刻書。
2	金属器 煙管		長さ 4.1　火皿径 1.2　首径 0.9 重量 7.7		火皿、首があり脂返しは緩く彎曲する。肩の意識はあるが、甘い。	雁首残。

Ⅷ　自然科学分析

1．炭化材の樹種同定

株式会社　パレオ・ラボ

1）はじめに

10・13号住居(弥生時代)と1・27・37・42号住居(平安時代)から出土した炭化材、1・2号鍛冶炉(奈良時代)の堆積物から洗い出しにより採取した破片、時期不明の1・2号立木と1・2号倒木の樹種同定を報告する。この分析は、各時代の遺構における検出樹種の特徴や遺跡の周囲に生育していた樹種を明らかにすることにより使用目的による樹種(木材)選択性や周辺の自然環境を把握するとともに、異なる時期の試料を検討することにより当地域の集落で利用されてきた木材利用の歴史性を理解する一資料とすることを目的とする。

2）炭化材樹種同定の方法

炭化材の3方向断面(横断面・接線断面・放射断面)の組織を走査電子顕微鏡で拡大して行った。まず、横断面(木口)を手で割って実体顕微鏡下で特徴を捉え、針葉樹か広葉樹か、広葉樹では更に散孔材か環孔材かなどおおよその目安をつける。アカガシ亜属・コナラ節・クヌギ節・クリ・シイノキ属などは、横断面の管孔配列が特徴的なので実体顕微鏡下の観察で同定可能であるが、それ以外の分類群については3方向の破断面を走査電子顕微鏡で観察し同定を決定した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5㎜角以下の大きさに整え、直径1㎝の真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子㈱製　JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

3）結　果

弥生時代～平安時代の遺構出土炭化材と時期不明の立木・倒木の同定結果と遺構出土炭化材の同定結果を表1に示した。表2では、検出された樹種の特徴を比較するために、住居建築材と燃料材を時期別に比較し、また立木と倒木の樹種も加えた。

［住居建築材］

弥生時代の10号・13号住居は各25試料を同定した。どちらも炭化材は全体に散在して出土し、柱材・垂木・板状などであったと推測される炭化材もあり、比較的保存が良いほうである。同定試料は、炭化材の軸方向などを目安に識別して、住居全体から採取されたものである(47・50頁　出土炭化材分布図参照)。10号住居からは、クリ18点、コナラ節5点、ニレ属2点が検出された。13号住居からは、クリ17点、クヌギ節とカエデ属が各2点、ヤナギ属・コナラ節・ヤマグワ・ススキ属が各1点ずつ検出された。なおカエデ属の№15と№18は、産状から連続している一本の材と見られたが、樹種同定の結果でも同一樹種である事が確認できた。表2ではカエデ属はまとめて1点と表示した。試料№19は、草本性イネ科の複数の稈がまとまって出土した試料であり、外観からは同一種類と見られ、状態の良い稈の断面組織の観察からはススキ属と同定された。平安時代の37号住居から採取された6試料は、大きな板状の炭化材が中央部から出土し、その上面や周囲からも散在して出土したものである(139頁　出土炭化材分布図参照)。そのほかケヤキ3点、モミ属・ウコギ属が各1点、そしてススキ属が検出された。1号・27号住居は、埋没土や埋土の洗い出しにより得られた炭化材であるが、住居建築材の一部と仮定して検討した。1号住居埋没土及び床下土坑埋土から出土した炭化材は、いずれもクリであった。27号住居床下土坑埋土からは、クリとクヌギ節が検出された。42号住居1号床下土坑底面から出土した炭化材はクリであった。

[燃料材]

弥生時代の10号住居炉(№52)から出土した現地取り上げの炭化材は、クリであった。平安時代の1号住居竈灰層の洗い出しにより取り上げられた炭化材からは、サクラ属・カエデ属・広葉樹・ススキ属の4分類群が検出された。サクラ属は年輪が不明瞭な小破片で、その材構造からモモまたはウメの晩材部である可能性が高いと思われる。広葉樹は非常に細い当年枝で、分類群は不明である。1号鍛冶炉の埋没土と2～3層の土から洗い出しにより採取された多数の炭化材片はクリが圧倒的に多く、このほかにコナラ節とヤマグワが少量検出された。2号鍛冶炉の埋没土と9層からもクリが圧倒的に多く検出され、このほかにオニグルミ・コナラ節・ケヤキ・クスノキ科・サクラ属・広葉樹細枝が少量ずつ検出された。

[立木・倒木]

1号立木はクヌギ節、2号立木はコナラ節であった。1号倒木はクヌギ節、1号倒木覆土の材はコナラ節、2号倒木はコナラ節であった。いずれも生育時期の認定は困難で不明である。

以下に材組織の観察結果を分類順に記載する。

(1) モミ属 *Abies* マツ科 図版4 11a-11c (37号住居№1)

仮道管と放射柔細胞からなり、樹脂細胞はない針葉樹材。放射柔細胞の壁は厚く放射断面において接線壁に数珠状肥厚が見られる。放射柔細胞の上下端は、山形になることが多い。分野壁孔は小型、1分野に1～4個、炭化材では孔口の大きさは不揃いである。放射組織の細胞高は比較的高いものが多い。

モミ属は常緑高木で、暖帯から温帯下部の山地に普通のモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベなどがある。材質はやや軽軟で加工は容易だが保存性は低い。

(2) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) kitamura クルミ科 図版5 14a-14c (2号鍛冶炉1号ピット埋没土)

単独あるいは2～3個が複合した中型で孔口は楕円形の管孔からなる散孔材。孔口の径は年輪界に向かい徐々に減少し、接線状の柔組織が見られる。道管の穿孔は単一、内腔には膜状のチロースが発達している。放射組織はおもに3細胞幅の同性である。

オニグルミは、暖帯から温帯の湿った所に生育する落葉高木である。材は加工しやすく狂いが少ない。

(3) ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 図版1 1a-1c (13号住居№16)

小型で孔口が丸い管孔が、単独または2～4個が複合して分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一。放射組織は単列異性、道管との壁孔は交互状に密在し孔口は大きく開いている。ヤナギ属は暖帯から温帯の水湿地や丘陵地の日当りのよい所に生育する落葉高木または低木で多くの種類がある。材質は軽軟で切削は容易だが耐朽性は低い。

(4) コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus*. subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版1 2a-2c (10号住居№9)

年輪の始めに大型の管孔が1～2層配列し、晩材部は薄壁・角形の小型の管孔が火炎状や放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に泡状のチロースがある。放射組織は単列のものと広放射組織とがある。コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。人里に普通で入手容易な材であるが、乾燥すると割れや狂いが出やすい欠点がある。

(5) コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Q.* subgen. *Quercus* sect. *Cerris* ブナ科 図版1 3a-3c (13号住居№11)

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、晩材部は厚壁・円形の管孔が単独で放射方向に配列する環孔材。そ

のほかの形質はコナラ節の材と同様である。クヌギ節は落葉高木でクヌギとアベマキが属する。いずれの種も暖帯の山林や二次林に普通の高木である。材は重厚で割裂性が強い。

(6) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版2 4a-4c (10号住居№6)

年輪の始めに大型の管孔が隣接して配列し、晩材部は非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性のみである。クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。材は加工はやや困難であるが狂いは少なく粘りがあり耐朽性にすぐれている。

(7) ニレ属 *Ulmus* ニレ科 図版2 5a-5c (10号住居№18)

年輪の始めに大型の管孔が1～2層配列し、晩材部は小型や非常に小型の管孔が多数集合し放射組織間を埋め尽くすように塊状・接線状・斜状に配列している環孔材。道管の穿孔は単一、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は同性、8細胞幅の紡錘形である。ケヤキの組織と似るが、放射組織に結晶細胞がみられず、放射組織も同性であることからニレ属と判断した。ニレ属は北地の温帯に多いハルニレ・オヒョウ、暖帯の荒地や川岸に普通に見られるアキニレがあり、いずれも落葉高木である。材の用途は多い有用材である。

(8) ケヤキ Zelkova serrata (Thunb.) Makino ニレ科 図版4 12a-12c (37号住居№5)

3方向の材構造は、前述のニレ属に類似しているが、放射組織の上下端や縁に大型の結晶細胞が顕著である。また放射断面では、結晶細胞が水平方向に連続して配列している。

ケヤキは本州以南の暖帯下部から温帯の丘陵から山地や川岸に生育する落葉高木である。材質は堅く丈夫である。

(9) ヤマグワ *Morus austoralis* Poiret クワ科 図版2 6a-6c (13号住居№25)

年輪の始めに中型の管孔が配列し除々に径を減じて行き、晩材部では小型の管孔が集合し斜状・波状に配列する環孔材。道管の壁孔はやや大きく、交互状、穿孔は単一、小道管にらせん肥厚があり、内腔にはチロースが発達する。放射組織は異性、1～3細胞幅の紡錘形で上下端に方形細胞があり、道管との壁孔も大きく、交互状に配列している。ヤマグワは落葉高木または低木で、温帯から亜熱帯の山中に広く分布する。材は重硬・強靭で心材は特に保存性が高い。

(10) クスノキ科 Lauraceae 図版5 15a-15c (2号鍛冶炉3号ピット埋没土)

小型の管孔が単独あるいは2～3個が複合して分布する散孔材。管孔の孔口は丸く厚壁である。道管の穿孔は単一である。放射組織は主に2細胞幅、上下端の細胞は大型で、道管との壁孔はやや大きい。当遺跡の炭化材は、管孔が大型で単独の油細胞も多く分布するクスノキやタブノキ以外のクスノキ科の材である。

クスノキ科は主に暖帯に生育する常緑高木であるが、温帯下部には落葉性低木のアブラチャンやクロモジなどもある。

(11) サクラ属 *Prunus* バラ科 図版4 13a-13c (1号住居竈灰層)

あまり保存の良くない小破片であった。非常に小型の管孔が単独または2～3個が複合して散在しており、一部で接線状に配列する傷害樹脂腔が見られた。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、主に6細胞幅、太く細胞高も高い紡錘形が密在し、垂直方向に連結する大型の結晶細胞が見られる。モモまたはウメの晩材部である可能性が高い。サクラ属は暖帯から温帯の丘陵や山地に普通の落葉広葉樹で多くの種類を含む。モモ、ウメ、スモモなどの栽培種も含む。材は粘り気があり保存性も高い。

(12) カエデ属 *Acer* カエデ科 図版3 7a-7c (13号住居№15)

小型の管孔が単独または2～3個が複合して均一に分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内

腔に細くシャープならせん肥厚がある。放射組織は同性、1～2細胞幅、道管との壁孔は交互状、孔口はやや大きい。カエデ属は日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育し、落葉広葉樹林の主要構成樹で約26種と多くの変種がある。材は堅く緻密で割れにくく保存性は中程度である。

(13) ウコギ属 *Acannthopanax* ウコギ科 図版6 18a-18c (37号住居№4)

多数のやや小型の管孔が接線状・斜状・波状に複合して配列する紋様孔材。年輪始めの管孔はやや大きく分布数も多く、年輪界の管孔は非常に小型となる。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は異性、主に5細胞幅、細胞高は高い、縁辺部や上下端に直立細胞が目立つ。なお、ウコギ属のコシアブラの材は、年輪始めに中型の管孔が単独で間隔を開けて配置している特徴からほかのウコギ属の材と区別できるが、当試料はコシアブラのような特徴は見られない。ウコギ属は、暖帯から温帯の山野に生育する主に落葉低木である。材はあまり丈夫ではない。

(14) ススキ属 *Miscanthus* イネ科 図版3 8 (13号住居№19)

直径4～8㎜の草本性の稈で、節部では節を取り巻く葉鞘の跡が見られた。稈の外周には厚い厚壁細胞層にかこまれた小さな維管束が1～2層並んでいる。内部に散在する維管束は大きくその周囲の厚壁細胞層は薄い。組織の比較のため、写真9にススキ属と写真10にヨシ属の稈の横断面を示した。ヨシ属の稈の外周には通気孔が配列しており、通気孔の間に張り出して厚壁細胞に囲まれた維管束が配列しており、外周部分の維管束の配置がススキ属とは異なる。ススキ属は大型になる多年草で一般にはカヤ(茅)と呼ばれ、約7種ある。日本全土の平地から山地の陽地に普通に見られるススキ、北海道から九州の湿地に生育するオギ、東北南部から近畿北部の山中の陽地に生育するカリヤス、関東南部以西の堤防の草地に生育するトキワススキなどがある。

(15) 広葉樹 broad-leaved tree 図版5 16 (2号鍛冶炉1号ピット埋没土) 17a-17b (2号鍛冶炉4号ピット埋没土)

直径約5㎜、中心部の髄は円形の散孔材で、当年または2年生の細い枝材であった。若齢の材部であり種類の特徴的な形質が発現されていないこともあり、樹種は特定できない。しかし、写真16と17の試料は管孔の大きさや配列に違いがあり、異なる分類群であることが判る。写真18の炭化材では、道管の穿孔は単一、内腔にらせん肥厚が観察された。鍛冶炉から多産したクリ材の髄は五角形の星型であることから、クリ以外の広葉樹材である。

4）まとめ

弥生時代の10号・13号住居から検出された樹種は、すべて落葉広葉樹であった。10号住居からはクリ・コナラ節・ニレ属の3分類群が、13号住居からはクリ・クヌギ節・カエデ属・コナラ節・ヤナギ属・ヤマグワ・カエデ属・ススキ属の7分類群が検出された。2つの住居からクリとコナラ節が共通して検出され、特にクリ材の出土数が多いのが特徴的であった。クリ材は、垂木？、横木、柱材？と思われる産状で出土したものが多く、ほぞ穴が開いていた材も見つかっていることから、主要な構築部位には丈夫で耐久性にも優れたクリ材を選択使用していたと考えられる。また、このほかにも多種多様な広葉樹材を使用していた事が、検出樹種数の多さから伺える。当地域一帯では弥生時代の住居建築材に関する情報はまだ少ないが、沼田市町田小沢Ⅱ遺跡の住居からもクリが多く検出され、その他にケンポナシ属・コナラ節・クヌギ節など多種類の広葉樹材とマツ属単維管束亜属・カヤの針葉樹材が検出されていている。当遺跡の結果は、町田小沢Ⅱ遺跡とほぼ同様な樹種利用の傾向であることが判った。平安時代の住居に関しては検討できた試料が少ないが、弥生時代と同様にクリとクヌギ節が検出され、この2分類群の建築材としての有用性が継続されていたことが判る。平安時代の37号住居から出土した板状の炭化材は、針葉樹のモミ属であった。モミ属の材は耐久性が劣るため住居構築材の主要部に使われる

ことは少ないが、割裂性がよいので板材として利用されることが多い。当遺跡からもモミ属の材質の特徴をうまく利用していた様子が判った。

弥生時代の住居炉や奈良時代の鍛冶炉から出土した燃料材と推定される炭化材からもクリが検出された。クリは建築材ばかりではなく、燃料材としても多く使用されていたようである。平安時代の１号住居竈の灰層からクリは検出されなかったが、サクラ属・カエデ属・広葉樹の当年枝・ススキ属が検出され、遺跡周辺で入手しやすい雑木類を日常生活の燃料材に使っていた様子が感じられた。

奈良時代の１号・２号鍛冶炉から出土した鍛冶炭の残渣からは、クリが圧倒的に多く検出された。クリ以外ではコナラ節・ケヤキ・ヤマグワなどの落葉広葉樹も検出されたが、ごく僅かな量であった。当遺跡から出土した立木や倒木はコナラ節とクヌギ節であり、これらは鍛冶炭に有用な樹種であるにもかかわらず、なぜ実際の鍛冶炭はクリに限定されていたのか、周辺遺跡の事例の蓄積が待たれる。

表１　出土炭化材樹種一覧

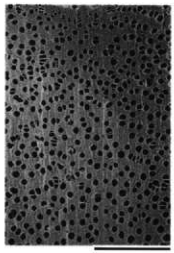
遺　構	時　期	番号・位置	層位など	採取方法	樹　種	備　考
10号住居	弥生時代	№1		現地取上げ	クリ	乗木？
10号住居	弥生時代	№2		現地取上げ	クリ	板状
10号住居	弥生時代	№3		現地取上げ	クリ	柱材？
10号住居	弥生時代	№4		現地取上げ	コナラ節	
10号住居	弥生時代	№5		現地取上げ	ニレ属	柱材？
10号住居	弥生時代	№6		現地取上げ	クリ	柱材？
10号住居	弥生時代	№7		現地取上げ	クリ	乗木？
10号住居	弥生時代	№8		現地取上げ	クリ	ほぞ穴有り
10号住居	弥生時代	№9		現地取上げ	コナラ節	
10号住居	弥生時代	№10		現地取上げ	クリ	乗木 or 横木
10号住居	弥生時代	№11		現地取上げ	クリ	乗木？
10号住居	弥生時代	№12		現地取上げ	クリ	乗木？
10号住居	弥生時代	№13		現地取上げ	クリ	丸木状
10号住居	弥生時代	№14		現地取上げ	コナラ節	板状
10号住居	弥生時代	№15		現地取上げ	クリ	棒状
10号住居	弥生時代	№16		現地取上げ	クリ	
10号住居	弥生時代	№17		現地取上げ	クリ	乗木？
10号住居	弥生時代	№18		現地取上げ	ニレ属	
10号住居	弥生時代	№19		現地取上げ	クリ	
10号住居	弥生時代	№20		現地取上げ	コナラ節	
10号住居	弥生時代	№21		現地取上げ	クリ	
10号住居	弥生時代	№22		現地取上げ	コナラ節	
10号住居	弥生時代	№23		現地取上げ	クリ	
10号住居	弥生時代	№47		現地取上げ	クリ	
10号住居	弥生時代	№52		現地取上げ	クリ	
13号住居	弥生時代	№2		現地取上げ	クリ	乗木？
13号住居	弥生時代	№3		現地取上げ	クリ	
13号住居	弥生時代	№4		現地取上げ	クリ	
13号住居	弥生時代	№5		現地取上げ	クリ	
13号住居	弥生時代	№6		現地取上げ	クリ	
13号住居	弥生時代	№7		現地取上げ	クリ	
13号住居	弥生時代	№8		現地取上げ	クリ	
13号住居	弥生時代	№9		現地取上げ	クリ	
13号住居	弥生時代	№10		現地取上げ	クリ	
13号住居	弥生時代	№11		現地取上げ	クヌギ節	
13号住居	弥生時代	№12		現地取上げ	クヌギ節	
13号住居	弥生時代	№13		現地取上げ	クリ	
13号住居	弥生時代	№14		現地取上げ	クリ	長い丸木、樹皮付き
13号住居	弥生時代	№15		現地取上げ	カエデ属	
13号住居	弥生時代	№16		現地取上げ	ヤナギ属	
13号住居	弥生時代	№17		現地取上げ	クリ	
13号住居	弥生時代	№18		現地取上げ	カエデ属	15の続き
13号住居	弥生時代	№19		現地取上げ	ススキ属	
13号住居	弥生時代	№20		現地取上げ	クリ	
13号住居	弥生時代	№21		現地取上げ	クリ	
13号住居	弥生時代	№22		現地取上げ	クリ	
13号住居	弥生時代	№23		現地取上げ	クリ	

遺　構	時　期	番号・位置	層位など	採取方法	樹　種	備　考
13 号 住 居	弥生時代	№24		現地取上げ	クリ	
13 号 住 居	弥生時代	№25		現地取上げ	ヤマグワ	丸木
13 号 住 居	弥生時代	№26		現地取上げ	コナラ節	
1 号 住 居	平安時代		埋役土	洗い出し	クリ	
1 号 住 居	平安時代	電	灰層	洗い出し	サクラ属	モモの晩材部？
1 号 住 居	平安時代	電	灰層	洗い出し	カエデ属	
1 号 住 居	平安時代	電	灰層	洗い出し	広葉樹	当年枝
1 号 住 居	平安時代	電	灰層	洗い出し	ススキ属	直径 4 mm
1 号 住 居	平安時代	1 号床下土坑	埋土	洗い出し	クリ	
27 号 住 居	平安時代	床下土坑	埋土	洗い出し	クリ	
27 号 住 居	平安時代	床下土坑	埋土	洗い出し	クヌギ節	
37 号 住 居	平安時代	№ 1		現地取上げ	モミ属	
37 号 住 居	平安時代	№ 2		現地取上げ	ケヤキ	
37 号 住 居	平安時代	№ 3		現地取上げ	ケヤキ	
37 号 住 居	平安時代	№ 4		現地取上げ	ウコギ属	
37 号 住 居	平安時代	№ 5		現地取上げ	ケヤキ	
37 号 住 居	平安時代	№ 6		現地取上げ	ススキ属	直径 8 mm
42 号 住 居	平安時代	1 号床下土坑	埋土		クリ	
1 号鍛冶炉	奈良時代		2～3 層	洗い出し	クリ	小破片多数
1 号鍛冶炉	奈良時代		2～3 層	洗い出し	コナラ節	
1 号鍛冶炉	奈良時代		埋役土	洗い出し	クリ	
1 号鍛冶炉	奈良時代		2～3 層	洗い出し	クリ	小破片多数
1 号鍛冶炉	奈良時代		2～3 層	洗い出し	ヤマグワ	
2 号鍛冶炉	奈良時代	1 号ピット	埋役土	洗い出し	クリ	小破片多数
2 号鍛冶炉	奈良時代	1 号ピット	埋役土	洗い出し	コナラ節	
2 号鍛冶炉	奈良時代	1 号ピット	埋役土	洗い出し	オニグルミ	
2 号鍛冶炉	奈良時代	1 号ピット	埋役土	洗い出し	広葉樹細枝 a	
2 号鍛冶炉	奈良時代	2 号ピット	埋役土	洗い出し	クリ	小破片多数
2 号鍛冶炉	奈良時代	3 号ピット	埋役土	洗い出し	クリ	小破片多数
2 号鍛冶炉	奈良時代	3 号ピット	埋役土	洗い出し	クスノキ科	
2 号鍛冶炉	奈良時代	3 号ピット	埋役土	洗い出し	サクラ属	
2 号鍛冶炉	奈良時代	4 号ピット	埋役土	洗い出し	クリ	小破片多数
2 号鍛冶炉	奈良時代	4 号ピット	埋役土	洗い出し	コナラ節	
2 号鍛冶炉	奈良時代	4 号ピット	埋役土	洗い出し	ケヤキ	
2 号鍛冶炉	奈良時代	4 号ピット	埋役土	洗い出し	ヤマグワ	
2 号鍛冶炉	奈良時代	4 号ピット	埋役土	洗い出し	広葉樹細枝 b	
2 号鍛冶炉	奈良時代	4 号ピット	9 層	洗い出し	クリ	
1 号 立 木	不　明	№ 1			クヌギ節	
2 号 立 木	不　明	№ 2			コナラ節	
1 号 倒 木	不　明	W11			クヌギ節	
1 号 倒 木	不　明		覆土		コナラ節	
2 号 倒 木	不　明	W12			コナラ節	

表 2　出土炭化材の時期・用途別の検出樹種比較

樹　種	住居建築材						燃料材					
	弥生時代		平安時代				弥生	奈良・平安時代			不明	
	住居						住居炉	住居	鍛冶炉		立木	倒木
	10号	13号	1 号	27号	37号	42号	10号	1 号	1 号	2 号	1号・2号	1号・2号
モ ミ 属					1							
ヤナギ属	5	1										
オニグルミ										+		
コナラ節	5	1							+	+	1	2
クヌギ節		2		1							1	1
ク　リ	17	17	2	1		1	1		多量	多量		
ニ レ 属	2											
ケ ヤ キ					3					+		
ヤマグワ		1							+			
クスノキ科										+		
サクラ属								1		+		
カエデ属		1						1				
ウコギ属					1							
広 葉 樹								1		+		
ススキ属		1			1			1				

図版１　住居出土炭化材樹種



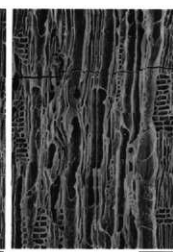
１ａ　ヤナギ属（横断面）
13号住居№16　bar：0.5mm

１ｂ　ヤナギ属（接線断面）
bar：0.1mm

１ｃ　ヤナギ属（放射断面）
bar：0.1mm

２ａ　コナラ節（横断面）
10号住居№９　bar：0.5mm

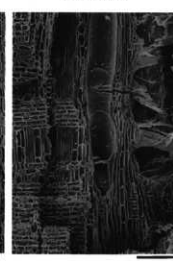
２ｂ　コナラ節（接線断面）
bar：0.1mm



２ｃ　コナラ節（放射断面）
bar：0.1mm

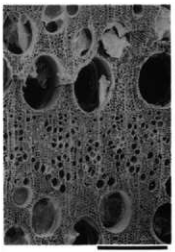
３ａ　クヌギ節（横断面）
13号住居№11　bar：0.5mm

３ｂ　クヌギ節（接線断面）
bar：0.1mm



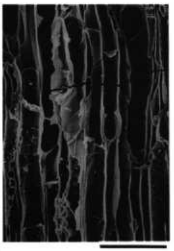
３ｃ　クヌギ節（放射断面）
bar：0.1mm

図版２　住居出土炭化材樹種

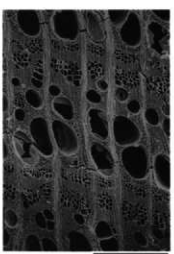


４ａ　クリ（横断面）
10号住居№６　bar：0.5mm

４ｂ　クリ（接線断面）
bar：0.1mm



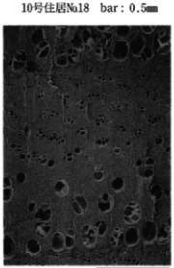
４ｃ　クリ（放射断面）
bar：0.1mm



５ａ　ニレ属（横断面）
10号住居№18　bar：0.5mm

５ｂ　ニレ属（接線断面）
bar：0.1mm

５ｃ　ニレ属（放射断面）
bar：0.1mm

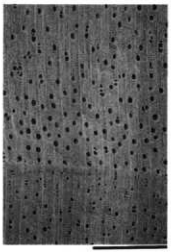


６ａ　ヤマグワ（横断面）
13号住居№25　bar：0.5mm

６ｂ　ヤマグワ（接線断面）
bar：0.1mm

６ｃ　ヤマグワ（放射断面）
bar：0.1mm

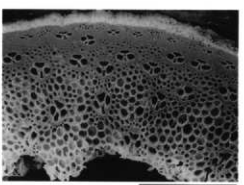
図版3　住居出土炭化材樹種



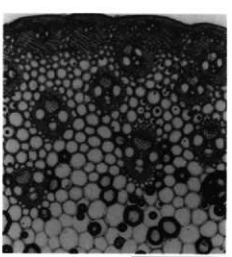
7 a　カエデ属（横断面）
13号住居№15　bar：0.5mm

7 b　カエデ属（接線断面）
bar：0.1mm

7 c　カエデ属（放射断面）
bar：0.1mm



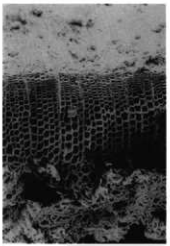
8　ススキ属（横断面）
13号住居№19　bar：0.5mm



9　ススキ属の一種（横断面）
原生標本　bar：0.5mm

10　ヨシ属の一種（横断面）
原生標本　bar：0.5mm

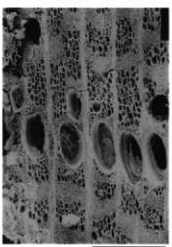
図版 4　住居出土炭化材樹種



11 a　モミ属（横断面）
37号住居№ 1　bar：0.5mm

11 b　モミ属（接線断面）
bar：0.1mm

11 c　モミ属（放射断面）
bar：0.05mm



12 a　ケヤキ（横断面）
37号住居№ 5　bar：0.5mm

12 b　ケヤキ（接線断面）
bar：0.1mm

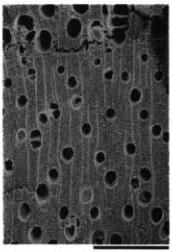
12 c　ケヤキ（放射断面）
bar：0.1mm

13 a　サクラ属（横断面）
1 号住居竈灰層　bar：0.5mm

13 b　サクラ属（接線断面）
bar：0.1mm

13 c　サクラ属（放射断面）
bar：0.1mm

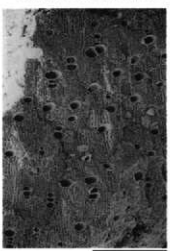
図版5　鍛冶炉出土炭化材樹種



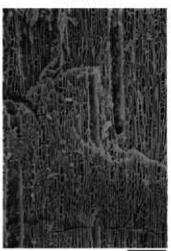
14a　オニグルミ（横断面）
2号鍛冶炉1号ピット埋没土　bar: 0.5mm

14b　オニグルミ（接線断面）
bar: 0.1mm

14c　オニグルミ（放射断面）
bar: 0.1mm

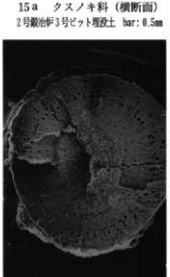


15a　クスノキ科（横断面）
2号鍛冶炉3号ピット埋没土　bar: 0.5mm

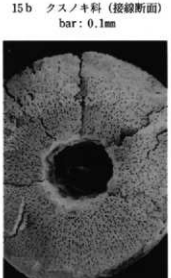


15b　クスノキ科（接線断面）
bar: 0.1mm

15c　クスノキ科（放射断面）
bar: 0.1mm



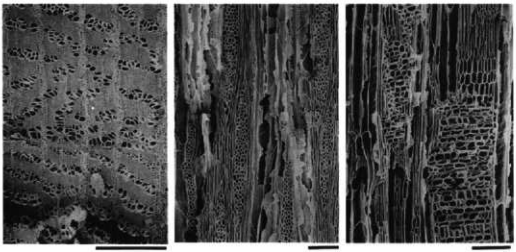
16　広葉樹細枝a（横断面）
2号鍛冶炉1号ピット埋没土　bar: 1.0mm



17a　広葉樹細枝b（接線断面）
2号鍛冶炉4号ピット埋没土　bar: 1.0mm

17b　広葉樹細枝b（放射断面）
bar: 0.1mm

図版6　住居出土炭化材樹種



18a　ウコギ属（横断面）
37号住居№4　bar：0.5mm

18b　ウコギ属（接線断面）
bar：0.1mm

18c　ウコギ属（放射断面）
bar：0.1mm

2．炭化種実の検討

株式会社　パレオ・ラボ

1）試　料

S－1～18の20資料(表1)、1～70(注記番号S2000-)の70資料(表2)および1～36(注記番号W2000-)の36資料（表3）の合計126資料について検討した。また、それら炭化種実に対応する植物体の他の部位が含まれているかどうかの確認も行った。

2）出土した炭化種実

出土した炭化種実の一覧をS-1～18は表4に、1～70(注記番号S2000-)は表5に、1～36(注記番号W2000-)は表6にそれぞれ示した。ただし、炭化材など種実として同定し得ないものは一覧表から省略し、種実が全く含まれていない資料は空欄となっている。

本本は、草本に比べて分類群数・個数共に少ない。オニグルミ炭化核がS-4、S-6、クリ炭化果実が38(S2000-19-5)、41(S2000-22-1)、スモモ炭化核がS-10、モモ炭化核がS-8-2、12(S2000-07-5)など、トチノキ炭化子葉が19(S2000-10-1)、23(S2000-12-1)、ブドウ属炭化種子がS-8-1、11(S2000-07-4)、カキノキ炭化種子がS-8-1、12(S2000-07-5)などから出土した。草本は、イネ炭化胚乳、コムギ炭化胚乳、オオムギ炭化胚乳、アワ炭化胚乳、マメ科炭化種子が比較的多くの資料から得られ、イネはS-5、9(S2000-07-2)、65(S2000-33-1)など、コムギはS-8-1、63(S2000-31)など、オオムギはS-17など、アワは26(S2000-12-4)、30(W2000-130)など、マメ科は8(S2000-07-1)などで非常に多産した。その他、ヒエ(ヒエ近似種)炭化胚乳、キビ(キビ近似種)炭化胚乳、シソ近似種炭化果実、エゴマ近似種炭化果実などが数資料から出土した。

3）考　察

本本のスモモ、モモ、カキノキ、草本のイネ、コムギ、オオムギ、ムギ類、ヒエ(ヒエ近似種)、アワ、キビ(キビ近似種)、ササゲ属、マメ科、シソ近似種、エゴマ近似種は栽培植物と考えられる。オニグルミ、クリ、トチノキ、ブドウ属は、食用となる利用植物であり、シロザ近似種、カタバミ属、エノキグサは、おそらく畑

地のような乾き気味の場所の雑草と考えられる。主な分類群の産状をみると、イネ、コムギ、オオムギ、アワ、マメ科は多くの遺構から出土しており、平安時代に普通に利用されていたことが予想される。コムギとオオムギに関しては、多くの遺構でコムギの方が多産する傾向があり、コムギの利用の方がより一般的であった可能性が考えられる。アワは、ヒエ、キビといった他のキビ族との区別が困難なものもみられたが、42号住居の資料で顕著なようにアワが多産する傾向がみられ、ヒエ、キビよりも一般的であった可能性が考えられる。マメ科は発泡が著しいなどで状態が悪く、同定には至らなかったが、S-8-1、10(S2000-07-3)、20(S2000-10-2)、24(S2000-12-2)からササゲ属が出土している。

鍛冶炉からもイネ、コムギ、オオムギ、ヒエ、アワ、キビ、マメ科、エゴマ近似種といった栽培植物が出土している。何故、このような栽培植物が鍛冶炉から出土するのか手掛かりを得る目的で1～36(注記番号W2000-)を検討したが、種実以外の他の部位は確認されなかった。多産したイネ、アワは大半が胚乳のみであり、脱穀された状態であった。このことから、これら栽培植物は燃料として使用されていた可能性は低いと思われ、供物など燃料以外の可能性が高いのではないだろうか。

4）主な炭化種実の形態記載

スモモ　*Prunus salicina* Lindl.　核

表面はややざらつく程度で明瞭な穴のような窪みはない。長さ約13㎜、幅約10㎜。

モモ　*Prunus persica* Batsch　核

表面には不規則な流れるような溝と穴がある。出土したものは破片であるが、S-11出土の核のみ完形であった。状態が悪く、正確な大きさは不明であるが、およそ長さ20㎜前後、幅18㎜前後、厚さ12～13㎜であり、やや小さく丸こい。また、S-12出土の核は破片であるが、縫合線部が出土し、推定の大きさは少なくとも22㎜以上あると思われる。

イネ　*Oryza sativa* Linn.　炭化胚乳

扁平な楕円形。出土したものの一部には、穎が張り付いていたものもあった。穎の表面には、規則的に配列する独特の顆粒状突起がある。

コムギ　*Triticum aestivum* Linn.　炭化胚乳

丸こく、楕円形ないしほぼ円形。厚みがあり、断面も楕円形ないしほぼ円形。

オオムギ　*Hordeum vulgare* Linn.　炭化胚乳

コムギに比べて細長く、菱形に近い楕円形。長さの割に厚さが薄く、下端が尖り気味となるものがしばしばみられた。なお、ムギ類としたものは、発泡が著しいものや破片であるためコムギともオオムギとも区別し得なかったものである。

ヒエ　*Echinochloa crus-galli* P.Beauv. var. *fumentacea* Trin.　炭化胚乳

胚乳は、長さ約1.6㎜、幅約1.1～1.3㎜。胚の長さは果長の2/3程度で臍はうちわ型。ヒエ近似種は、胚の長さは果長の2/3程度であるが、うちわ型の臍が不明瞭なもの。ヒエ―アワは、胚部分の長さは果長の2/3程度あるが、状態が悪く臍の形態がまったく不明なもの。ヒエ―キビは、胚部分の長さが不明であり、臍はうちわ型。

アワ　*Setaria italica* Beauv.　炭化胚乳

長さ約1.0～1.3㎜、幅約0.8～1.4㎜。長さと幅がほぼ同程度で、幅の方がやや大きいものもみられた。また、長さがやや短い割に厚みがあり、全体的に丸こい。先端部はやや平らな円形で中央部がへこむものがしばしばみられた。胚部分の長さは果長の2/3程度。臍は幅が狭く細長い楕円形。焼け爛れて塊状になったものもしば

しばあり、S-8-3では10個前後～100数十個の塊が約50個、S-9では10個前後の塊が1個、26(S2000-12-4)では10～50個前後の塊が36個、27(S2000-12-5)では10～20個前後の塊が6個出土した。

キビ　*Panicum miliaceum* Linn.　炭化胚乳

ヒエ、アワに比べて大きく、先端は尖り気味となる。胚部分の長さは果長の約1/2程度。なお、キビ近似種としたものは、外形はキビに似るが胚部分や臍の形態が確認できず、ヒエやアワの可能性も否定できない。

タデ属　*Polygonum*　炭化果実

かなり丸みを帯びた二面の果実。このタデ属は、イネなどの穀類と共に炭化して遺跡からしばしば出土する分類群であり、栽培されていた可能性がある。

ササゲ属　*Vigna*　炭化種子

子葉内面の形態からササゲ属と同定した。状態が悪く、マメ科としか同定できなかったものもおそらくササゲ属であろう。ササゲ属には、アズキ、リョクトウ、ササゲなどが含まれる。

エゴマ近似種　*Perilla frutescens* (L.) Britt. cf. var. *japonica* Hara　果実

大きさ2.0mm以上の約2.2～2.8mmをエゴマ近似種とした。

シソ近似種　*Perilla frutescens* (L.) Britt. cf. var. *crispa* (Thunb.) Benth.　果実

大きさ2.0mm未満の約1.9mmをシソ近似種とした。なお、約1.6mmのものはイヌコウジュ属―シソ属とした。

【参考文献】

吉崎昌一（1990）「北海道恵庭市柏木川11遺跡の植物遺体」『北海道恵庭市発掘調査報告書』pp.104-113

表1　分析資料一覧

記号	番　号	遺構名	出土位置	層 位 等	採取方法
S	1	1号住居	1号床下土坑	埋土	洗い出し
S	2	1号住居	竈	灰層	洗い出し
S	3	17号住居	竈	埋没土下層	洗い出し
S	4	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
S	5	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
S	6	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
S	7	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
S	8	37号住居		埋没土	洗い出し
S	9	37号住居	竈	埋没土下層	洗い出し
S	10	38号住居		埋没土	洗い出し
S	11	38号住居		埋没土下層	現地取り上げ
S	12	38号住居	竈	埋没土下層	洗い出し
S	13	1号鍛冶炉		埋没土	洗い出し
S	14	1号鍛冶炉		2～3層	洗い出し
S	15	1号鍛冶炉		2～3層	洗い出し
S	16	1号鍛冶炉		2～3層	洗い出し
S	17	1号鍛冶炉		2～3層	洗い出し
S	18	2号鍛冶炉	4号ピット	9層	洗い出し

表2　分析資料一覧

番号	注記番号	遺構名	出土位置	層 位 等	採取方法
1	S2000-01	1号住居	竈	埋没土	洗い出し
2	S2000-02	10号住居	炉	埋没土	洗い出し
3	S2000-03	13号住居	土器№1	土器内埋没土	洗い出し
4	S2000-04	13号住居	炉	埋没土	洗い出し
5	S2000-05	17号住居	竈	埋没土	洗い出し

番号	注記番号	遺構名	出土位置	層 位 等	採取方法
6	S2000-06-1	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
7	S2000-06-2	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
8	S2000-07-1	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
9	S2000-07-2	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
10	S2000-07-3	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
11	S2000-07-4	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
12	S2000-07-5	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
13	S2000-08	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
14	S2000-09-1	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
15	S2000-09-2	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
16	S2000-09-3	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
17	S2000-09-4	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
18	S2000-09-5	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
19	S2000-10-1	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
20	S2000-10-2	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
21	S2000-10-3	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
22	S2000-11	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
23	S2000-12-1	37号住居	住居南半	埋没土	洗い出し
24	S2000-12-2	37号住居	住居南半	埋没土	洗い出し
25	S2000-12-3	37号住居	住居南半	埋没土	洗い出し
26	S2000-12-4	37号住居	住居南半	埋没土	洗い出し
27	S2000-12-5	37号住居	住居南半	埋没土	洗い出し
28	S2000-13	37号住居	竈	埋没土	洗い出し
29	S2000-14	37号住居	貯蔵甕	土器内埋没土	洗い出し
30	S2000-15	37号住居	1号床下土坑	埋土上層	洗い出し
31	S2000-16	37号住居	1号床下土坑	埋土下層	洗い出し
32	S2000-17	38号住居		埋没土	洗い出し
33	S2000-18	38号住居	竈	埋没土	洗い出し
34	S2000-19-1	41号住居	竈	埋没土上層	洗い出し
35	S2000-19-2	41号住居	竈	埋没土上層	洗い出し
36	S2000-19-3	41号住居	竈	埋没土上層	洗い出し
37	S2000-19-4	41号住居	竈	埋没土上層	洗い出し
38	S2000-19-5	41号住居	竈	埋没土上層	現地取り上げ
39	S2000-20	41号住居	竈	埋没土	洗い出し
40	S2000-21	41号住居	竈	粘土	洗い出し
41	S2000-22-1	41号住居	竈	埋没土	洗い出し
42	S2000-22-2	41号住居	竈	埋没土	洗い出し
43	S2000-22-3	41号住居	竈	埋没土	洗い出し
44	S2000-22-4	41号住居	竈	埋没土	洗い出し
45	S2000-22-5	41号住居	竈	埋没土	洗い出し
46	S2000-22-6	41号住居	竈	埋没土	洗い出し
47	S2000-23-1	41号住居	竈	埋没土	洗い出し
48	S2000-23-2	41号住居	竈	埋没土	洗い出し
49	S2000-23-3	41号住居	竈	掘り方埋土	洗い出し
50	S2000-24-1	41号住居	竈	掘り方埋土	洗い出し
51	S2000-24-2	41号住居	竈	掘り方埋土	洗い出し
52	S2000-24-3	41号住居	竈	掘り方埋土	洗い出し
53	S2000-24-4	41号住居	竈	掘り方埋土	洗い出し
54	S2000-25-1	42号住居	貯蔵穴周辺	埋没土	洗い出し
55	S2000-25-2	42号住居	貯蔵穴周辺	埋没土	洗い出し
56	S2000-25-3	42号住居	貯蔵穴周辺	埋没土	洗い出し
57	S2000-25-4	42号住居	貯蔵穴周辺	埋没土	洗い出し
58	S2000-26	42号住居	1号床下土坑	埋土表層	洗い出し
59	S2000-27	1号鍛冶炉		埋没土	洗い出し

番号	注記番号	遺構名	出土位置	層 位 等	採取方法
60	S2000-28	1号鍛冶炉		埋没土	洗い出し
61	S2000-29	1号鍛冶炉		埋没土	洗い出し
62	S2000-30	1号鍛冶炉		4層	洗い出し
63	S2000-31	1号鍛冶炉		2～3層	洗い出し
64	S2000-32	1号鍛冶炉		2～3層	洗い出し
65	S2000-33-1	2号鍛冶炉	1号ピット	埋没土	洗い出し
66	S2000-33-2	2号鍛冶炉	1号ピット	埋没土	洗い出し
67	S2000-34	2号鍛冶炉	2号ピット	埋没土	洗い出し
68	S2000-35	2号鍛冶炉	3号ピット	埋没土	洗い出し
69	S2000-36-1	2号鍛冶炉	4号ピット	埋没土	洗い出し
70	S2000-36-2	2号鍛冶炉	4号ピット	埋没土	洗い出し

表3　分析資料一覧

番号	注記番号	遺構名	出土位置	層 位 等	採取方法
1	W2000-101	2号住居	竈	埋没土	洗い出し
2	W2000-102	5号住居	竈	灰層	洗い出し
3	W2000-103	6号住居		埋没土	洗い出し
4	W2000-104	13号住居	貯蔵穴	埋没土	洗い出し
5	W2000-105	17号住居	竈	埋没土	洗い出し
6	W2000-106	19号住居		埋没土	現地取り上げ
7	W2000-107	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
8	W2000-108	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
9	W2000-109	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
10	W2000-110	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
11	W2000-111	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
12	W2000-112	27号住居	床下土坑	埋土	洗い出し
13	W2000-113	37号住居	竈	埋没土	洗い出し
14	W2000-114	37号住居	貯蔵甕	土器内埋没土	洗い出し
15	W2000-115	37号住居	1号床下土坑	埋土上層	洗い出し
16	W2000-116	37号住居	1号床下土坑	埋土下層	洗い出し
17	W2000-117	38号住居	竈	埋没土	洗い出し
18	W2000-118	40号住居	土器No.8	土器内埋没土	洗い出し
19	W2000-119	41号住居		埋没土	現地取り上げ
20	W2000-120	41号住居	竈	掘り方埋土	洗い出し
21	W2000-121	41号住居	竈	掘り方埋土	洗い出し
22	W2000-122	41号住居		掘り方埋土	現地取り上げ
23	W2000-123	42号住居		床面直上	現地取り上げ
24	W2000-124	42号住居	貯蔵穴	埋没土上層	洗い出し
25	W2000-125	42号住居	1号床下土坑	埋土表層	洗い出し
26	W2000-126	42号住居	1号床下土坑	底面	現地取り上げ
27	W2000-127	1号鍛冶炉		4層	洗い出し
28	W2000-128	1号鍛冶炉		2～3層	洗い出し
29	W2000-129	1号鍛冶炉		2～3層	洗い出し
30	W2000-130	2号鍛冶炉	1号ピット	埋没土	洗い出し
31	W2000-131	2号鍛冶炉	2号ピット	埋没土	洗い出し
32	W2000-132	2号鍛冶炉	3号ピット	埋没土	洗い出し
33	W2000-133	2号鍛冶炉	4号ピット	埋没土	洗い出し
34	W2000-134	6号土坑		埋没土	現地取り上げ
35	W2000-135	3号溝		埋没土	洗い出し
36	W2000-136	1号倒木		埋没土	現地取り上げ

表4　炭化種実一覧表（数字は個数、( )内は半分ないし破片の数を示す）

分類群名	部位	S-1	S-2	S-3	S-4	S-5	S-6	S-7	S-8-1	S-8-2	S-8-3	S-9	S-10	S-11	S-12	S-13	S-14	S-15	S-16	S-17	S-18
オニグルミ	炭化核				(1)		(1)														
スモモ	炭化核												1								
モモ	炭化核									(2)				1	(2)						
ブドウ属	炭化種子								1				1								
カキノキ近似種	炭化種子								1												
イネ	炭化胚乳		13(10)	5	4	88(3)	123(2)	1	39(1)			2			1					1	26(8)
コムギ	炭化胚乳					9	6	2	124			2	8		17	38	1		47	57	
オオムギ	炭化胚乳			1		8	11		58			1	2			6	2		5	46	
ムギ類	炭化胚乳					(2)	1(3)		12(4)							(1)		2	1(1)	(2)	
ヒエ近似種	炭化胚乳		2																		
アワ	炭化胚乳				2															1	99
ヒエ－アワ	炭化胚乳		2			1			4												
	炭化胚乳塊										約50	1									
キビ	炭化胚乳								1												
キビ近似種	炭化胚乳		1			1															
シロザ近似種	炭化種子		1																		
エノキグサ	炭化種子		2												1						
ササゲ属	炭化種子								(1)												
マメ科	炭化種子		4(2)			2	1		10(1)		2	2(1)									

表5（その1）　炭化種実一覧表（数字は個数、( )内は半分ないし破片の数を示す）

分類群名	部位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
モモ	炭化核												(1)						
ブドウ属	炭化種子											1							
カキノキ	炭化種子						1		1				1						
イネ	炭化胚乳		(1)			2		2	13(5)	72(1)	8	(1)		7(1)		30(8)	7		6(6)
コムギ	炭化胚乳		2			1		1			3			1					6(1)
オオムギ	炭化胚乳	1												(2)				2(1)	
ヒエ	炭化胚乳								1			1		3					
アワ	炭化胚乳											1		6					
ササゲ属	炭化種子										(1)								
マメ科	炭化種子							5(1)	79(17)		8(2)				6(4)	(1)			1(1)
エノキグサ	炭化種子													1					
エゴマ近似種	炭化果実								1			4(1)							

表5（その2） 炭化種実一覧表（数字は個数、( )内は半分ないし破片の数を示す）

分類群名	部位	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
モモ	炭化核															(1)			
トチノキ	炭化子葉	(3)				(2)													
イネ	炭化胚乳			42(7)	3		2(1)	3		1	1(2)							1	
コムギ	炭化胚乳			1	1		13	1		1	1				3			2	
オオムギ	炭化胚乳			9(4)				8			1				2			1	
ムギ類	炭化胚乳				(1)														
ヒエーキビ	炭化胚乳			(1)															
アワ	炭化胚乳				1					47		5							
	炭化胚乳塊								36	6									
チンツキ属	炭化果実									1									
タデ属	炭化果実									3	1	2							
シロザ近似種	炭化種子									13		4							
ササゲ属	炭化種子		1(2)				(1)												
マメ科	炭化種子		6(2)	2(3)	(1)		3(6)	1(1)		1(1)			4						
カタバミ属	炭化種子									1									
エノキグサ	炭化種子									4									
シソ近似種	炭化果実									1									
オナモミ	炭化果実						(1)												
虫えい														5					
菌核														15					

分類群名	部位	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54
クリ	炭化果実		3(3)			約3													
イネ	炭化胚乳			1	1(1)				1										1
アワ	炭化胚乳	5			3						2								
ホタルイ属	炭化果実										(1)								
シロザ近似種	炭化種子				4									6					
エノキグサ	炭化種子	2									1			2					
虫えい		6									4							1	
菌核		3									9		2	2				7	

表5（その3） 炭化種実一覧表（数字は個数、( )内は半分ないし破片の数を示す）

分類群名	部位	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70
イネ	炭化胚乳	10(1)	(2)	(1)	3(1)	(1)				1		194(35)	5(10)			70	3(4)
コムギ	炭化胚乳				1	8(2)	1			30	15			1	1		1
オオムギ	炭化胚乳	(1)		(1)		(5)		2	1(2)	6(5)	13(9)					2	
ムギ類	炭化胚乳					(2)				(4)	(14)				(1)		
ヒエ	炭化胚乳					1							1				1
アワ	炭化胚乳		576		173					4	11		560	1		1	113
キビ	炭化胚乳		8		3								3				
ホタルイ属	炭化果実												1				1
シロザ近似種	炭化種子									1							
マメ科	炭化種子													(3)		(2)	
エノキグサ	炭化種子		17(1)		1	1(1)			1								1
エゴマ近似種	炭化果実												1				
イヌコウジュ属-シソ属	炭化果実		1														
菌核			5		3	3							1				

表6 炭化種実一覧表（数字は個数、( )内は半分ないし破片の数を示す）

分類群名	部位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
イネ	炭化胚乳							3(2)	4(5)			18(5)							
オオムギ	炭化胚乳											1							
ムギ類	炭化胚乳																	2	
アワ	炭化胚乳								1	2									

分類群名	部位	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
イネ	炭化胚乳							(1)					21(48)						
イネ	炭化籾基部												1						
オオムギ	炭化胚乳											1				1			
アワ	炭化胚乳							3					365	1		1			